

富
岡
清
水
城
遺
跡

（主）前橋安中富岡線事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
（社会資本整備総合交付金事業（活力創出基盤整備））

二〇一二年

群馬県富岡土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



富岡清水遺跡 富岡城跡

社会資本整備総合交付金事業（活力創出基盤整備）
（主）前橋安中富岡線事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

群馬県富岡土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

富岡清水遺跡 富岡城跡

社会資本整備総合交付金事業(活力創出基盤整備)
(主)前橋安中富岡線事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

群馬県富岡土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

富岡清水遺跡および富岡城跡は、わが国最初の官営富岡製糸場のある富岡市内にあります。また、富岡市内を流れる鑛川一帯は、戦国時代の城館が多いことでも知られている地域でもあります。この地に西毛広域幹線道路として主要地方道前橋安中富岡線が整備されるにあたり、この事業地内に所在する埋蔵文化財について関係各機関の調整を受け、発掘調査を行いその記録を残すこととなり、当事業団がその実施にあたることとなりました。

発掘調査は平成19年度から平成23年度にかけて断続的に実施し、富岡清水遺跡では縄文時代後期の住居や土坑、奈良時代から平安時代にかけての集落、水路や水田・畠、近世の大型建物といった各時代の多くの遺構や遺物が発見されました。富岡城跡では弥生時代後期の住居、古墳時代の古墳、そして戦国時代の城の各郭や堀といった遺構や遺物が発見されました。この発掘調査によって、高田川右岸に広がる縄文時代集落の一端や古代水路の発見からこの地域の土地利用の変遷、高田川左岸丘陵上の弥生時代集落や古墳、さらに富岡城跡について明らかにすることができました。

発掘調査を実施するにあたり、多大なご理解とご協力をいただいた群馬県富岡土木事務所、群馬県教育委員会、富岡市教育委員会、ならびに地元の方々にご心より感謝を申し上げますとともに、本報告書が地域の歴史解明のため多くの人々に活用されますことを願い、序といたします。

平成24年12月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 須田 榮 一

例 言

1. 本書は、主要地方道前橋安中富岡線地方道路交付金事業に伴い、平成19年度から平成23年度にかけて断続的に発掘調査された富岡清水遺跡および富岡城跡の調査成果を、平成24年度社会資本整備総合交付金事業(活力創出基盤整備)(主)前橋安中富岡線に伴う富岡清水遺跡、富岡城跡の埋蔵文化財発掘調査報告書として刊行したものである。

2. 富岡清水遺跡は富岡市富岡字北島1895-4、1896-1、1897-3、富岡市富岡字清水2291-1、2291-3、2292-1、2293-1、2297-1、246-1、2246-2、2249-1、2253-1、2254-1、2256-1、2257-1、2258-1、2258-4番地に所在する。

富岡城跡は富岡市上高尾字城山1280-2、1412-5、1895-4、1896-1、1897-3番地に所在する。

3. 事業主体 群馬県西部県民局富岡土木事務所

4. 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(平成24年4月に公益財団法人に組織改定)

5. 整理主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(平成24年4月に公益財団法人に組織改定)

6. 富岡清水遺跡及び富岡城跡の発掘調査期間と体制は次の通りである。

平成19年度 富岡清水遺跡B・C・D区(平成19年度 主要地方道前橋安中富岡線地方道路交付金事業)

履行期間 平成19年5月29日～平成19年10月31日 調査期間 平成19年6月1日～平成19年8月31日

調査面積 3,591.83㎡ 調査担当 唐澤至朗(主席専門員) 坂口 一(主任専門員 総括)

遺跡掘削請負工事 (有)毛野考古学研究所

委託 地上測量・航空測量 技研測量設計株式会社 自然科学分析 株式会社火山灰考古学研究所

平成21年度 富岡清水遺跡E区(平成21年度 主要地方道前橋安中富岡線地域活力基盤創造交付金事業)

履行期間 平成22年1月12日から平成22年3月31日 調査期間 平成22年2月1日から平成22年3月31日

調査面積 2,198㎡ 調査担当 飯田陽一(主席専門員)須田正久(主任調査研究員)

遺跡掘削請負工事 株式会社塚塚組 委託 地上測量 アコン測量設計株式会社

自然科学分析 株式会社火山灰考古学研究所

平成22年度 富岡清水遺跡A・F区 富岡城跡(平成22年度 社会資本整備総合交付金事業(活力創出基盤整備)(主)前橋安中富岡線)

履行期間 平成22年6月21日から平成22年11月30日 調査期間 平成22年7月1日から平成22年9月30日

調査面積 富岡清水遺跡1,141㎡ 富岡城跡2,091㎡ 調査担当 谷藤保彦(主席専門員) 古口晃敬(調査研究員)

遺跡掘削請負工事 山下工業株式会社 委託 地上測量 技研測量設計株式会社

平成23年度 富岡城跡(平成23年度 社会資本整備総合交付金事業(活力創出基盤整備)(主)前橋安中富岡線)

履行期間 平成23年6月1日から平成23年11月30日 調査期間 平成23年7月1日から平成23年9月30日

調査面積 700㎡ 調査担当 関 晴彦(主席専門員)友廣哲也(主席専門員)

遺跡掘削請負工事 株式会社シン技術コンサル 委託 地上測量 株式会社シン技術コンサル

7. 富岡清水遺跡 富岡城跡の整理事業の期間と体制は次の通りである。

平成23年度

履行期間 平成23年12月1日から平成24年3月31日 整理期間 平成23年12月1日から平成24年3月31日

整理担当 麻生敏隆(主席専門員) 宮下 寛(主任調査研究員)

平成24年度

履行期間 平成24年8月1日から平成24年12月31日 整理期間 平成24年8月1日から平成24年10月31日

整理担当 大西雅広(主席専門員)

8. 本書作成の担当者は次の通りである。

編集 大西雅広(主席専門員) 谷藤保彦(主席専門員)

本文執筆 唐澤至朗(事業局長 第1章1節) 坂口一(調査2課長総括 第3章3節7・8、第5章第2節)

神谷佳明(資料2課長 第5章1節) 飯田陽一(主席専門員 第2章、第3章3節1-E区以外)

飯森康広(専門員総括 第5章第3節) 須田正久(主任調査研究員 第1章3節、第3章3節1-E区)

それ以外を谷藤保彦(主席専門員)

デジタル編集 齊田智彦(主任調査研究員)

遺物写真撮影 佐藤元彦(補佐総括)

遺物観察 石器・石製品 岩崎泰一(主席専門員)、縄文・弥生土器 谷藤保彦(主席専門員)橋本淳(主任調査研究員)、

土師器・須恵器・埴輪 神谷佳明(資料2課長)桜岡正信(資料統括)、陶磁器・鉄製品 大西雅広(主席専門員)

9. 発掘調査及び報告書作成に際しては、群馬県西部県民局富岡土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、富岡市教育委員会をはじめ、関係機関ならびに多くの方々からご協力・ご指導をいただいた。感謝いたします。

10. 発掘調査諸資料及び出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

凡 例

1. 本書の遺構図中にある+印は、国家座標値(世界測地系)を表す。また、グリッド名称は、国家座標値の下3桁のみを用いて

表記した。

2. 遺構図中で使用した北方位は座標北を示す。(真北方向角偏差 $0^{\circ} 33' 01.51''$)

3. 遺構の方位は、座標北を基準とし、住居の場合はカマド主軸を基軸とし角度等の傾きを計測した。カマドを持たないものについては長辺を基軸とした。

4. 遺構図については、各挿図中にスケールを添付したが、原則下記の縮尺で掲載した。

時代別遺構配置図1/400・1/800 竪穴住居1/60 掘立柱建物1/60 炉1/20 竈1/30 土坑1/20・1/40 溝1/80
水田・畠1/100 1/400 城郭1/200

5. 遺構計測値において全容が計測できない遺構については残存値()で表記してある。

6. 遺物図及び遺物写真の縮尺以下の通りである。

石器・石製品 1:2 1:3. 縄文土器 1:2 1:3 土師器 1:3 1:4 陶磁器 1:3 鉄製品 1:2

7. 遺物の計測値は、欠損品の数値には残存値に()を付して完形品と区別した。

8. 本書で使用したテフラの名称は以下の通りである。

As-A・浅間A 軽石 As-B・浅間B 軽石 As-C・浅間C 軽石 As-YP・浅間板鼻黄色軽石 As-OK・浅間大窪沢

9. 本文中に使用した「As-B混土」、「As-C混土」はそれぞれの軽石を混入した土層を表している。

9. 遺物観察表(土器)の色調は、農林水産省農林水産技術会議 監修、財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版標準土色帖』1996版の色名を使用した。

10. 本書に掲載した土器の図版上や観察表での表現は以下の通りである。

- ・弥生土器と土師器についての明確な区分はしていない。
- ・胎土の砂細粒と粗細粒は直径2mmほどで区別した。
- ・成・整形の特徴の項目にあるハケ目本数は1cmあたりの本数を数えている。
- ・土器計測位置の表現は口径：口、底径：底、器高：高、高台径：台、稜径：稜、甕・壺などの最大径：胴、内湾する杯などの最大径：最、蓋の摘み最大径：摘で略記した。

11. 本書で使用した地形図は下記の通りである。

国土地理院地勢図 1:200,000「宇都宮」(平成18年4月1日発行)

国土地理院地勢図 1:200,000「長野」(平成10年4月1日発行)

国土地理院地形図 1:50,000「富岡」(平成7年2月1日発行)

富岡市現況図 1:2,500 No.27,28,37,38 (平成21年3月測量 経年変化修正)

目 次

序

例言

凡例

目次

挿図目次・表目次・写真目次

第1章 調査の経緯・経過と方法	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	3
1 調査の方法	3
富岡清水遺跡	
富岡城	
2 調査の経過	4
富岡清水遺跡	
富岡城	
第3節 基本土層	9
富岡清水遺跡	
富岡城	
第2章 遺跡の立地と周辺の遺跡	11
第1節 遺跡の立地	11
第2節 周辺の遺跡	12
第3章 富岡清水遺跡の調査	17
第1節 遺跡の概要	17
第2節 縄文・弥生時代の遺構と遺物	17
1 竪穴および敷石住居	17
2 土坑	30
3 ビット	35
4 遺構外出土遺物	36
第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物	48
1 竪穴住居	48
2 掘立柱建物	87
3 土坑	87
4 ビット	88
5 溝	88
6 用水路	93
7 水田・畠	107・108
第4節 中世以降の遺構と遺物	111
1 建物	111

2	遺状遺構溝	112
3	土坑	112
4	溝	112
5	畚	112
6	遺構外出土遺物	113
第5節	自然科学分析	126
Ⅰ	富岡清水遺跡の土層とテフラ	126
Ⅱ	富岡清水遺跡における植物珪酸体(プラント・オパール)分析	130
第4章	富岡城跡の調査	134
第1節	遺跡の概要	134
第2節	城郭南西部における縄文～平安時代の遺構と遺物	134
1	竪穴住居	134
2	土坑	135
3	古墳	136
4	遺構外出土遺物	136
第3節	城郭北東部における縄文～古墳時代の遺構と遺物	151
1	竪穴住居	151
2	土坑	152
3	古墳	152
4	遺構外出土遺物	152
第4節	中世城郭	161
1	城郭南西部の調査	161
2	城郭北東部の調査	179
第5章	調査の成果(総括)	186
第1節	富岡清水遺跡の朱について	186
第2節	富岡清水遺跡周辺の古代水田と用水系統について	189
第3節	富岡城の縄張りについて	195
第4節	総括	197

写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	1	第67図	C区7号水路	99
第2図	調査範囲位置図	2	第68図	D区1・2・3・4a・4b号水路	100
第3図	富岡清水遺跡 調査区・グリッド設定図	7	第69図	E区1～2号溝、3～11号溝断面図	101
第4図	富岡城跡 調査区・グリッド設定図	8	第70図	E区12～20号溝断面図、1～3号河道、10号溝出土遺物	102
第5図	富岡清水遺跡 基本土層図	9	第71図	F区1・2・4・5溝	104
第6図	富岡城跡 基本土層図	10	第72図	F区3号溝、出土遺物	105
第7図	富岡市の地形区分	11	第73図	B区1号溝・水田	109
第8図	周辺遺跡位置図	13	第74図	E区1・2号高	110
第9図	縄文・弥生時代遺構配置図	18	第75図	A・近世遺構配置図	114
第10図	B区4号住居平面図・断面	19	第76図	A区1号建物・1号道状遺構	115-116
第11図	E区12号住居・炉、出土遺物	20	第77図	A区1号建物断面図	117-118
第12図	E区13号住居・炉	21	第78図	A区2号建物平面図・断面図	119
第13図	E区13号住居出土遺物(1)	23	第79図	B区6号・C区1～3号土坑	120
第14図	E区13号住居出土遺物(2)	24	第80図	C区8・11・12号、E区1～3号土坑	121
第15図	E区14号住居平面図、出土遺物(1)	25	第81図	A区1号溝、出土遺物	122
第16図	E区14号住居出土遺物(2)	26	第82図	E区3・4号高	123
第17図	E区15号住居平面図、出土遺物	28	第83図	遺構外出土遺物	124
第18図	C区15号土坑、E区4号土坑	30	第84図	14号トレンチ上層柱状図	129
第19図	E区7～11号土坑	31	第85図	基本土層セクション2の上層柱状図	129
第20図	出土遺物(1)	32	第86図	7号用水路脇上層断面図の上層柱状図	129
第21図	出土遺物(2)	33	第87図	富岡清水遺跡における植物柱体体分析結果	132
第22図	遺構外出土縄文土器(1)	37	第88図	富岡清水遺跡における植物柱体体分析結果	132
第23図	遺構外出土縄文土器(2)	38	第89図	城郭西部縄文・弥生時代遺構配置図	137
第24図	遺構外出土縄文土器(3)	39	第90図	城郭西部1号住居平面図	138
第25図	遺構外出土縄文土器(4)	40	第91図	城郭西部1号住居出土遺物	139
第26図	遺構外出土弥生土器(5)	26	第92図	城郭西部2号住居平面図、出土遺物	140
第27図	遺構外出土縄文・弥生土器(6)	27	第93図	城郭西部3号住居平面図、出土遺物	141
第28図	遺構外出土縄文・弥生土器(7)	27	第94図	城郭西部1・2号土坑平面図、1号土坑出土遺物	142
第29図	奈良・平安時代遺構配置図	49	第95図	城郭西部1号古墳平面図	143
第30図	A区1・3号住居、1号住居カマド平面図	50	第96図	城郭西部1号古墳周溝出土遺物(1)	144
第31図	A区1号住居出土遺物(1)	51	第97図	城郭西部1号古墳周溝出土遺物(2)	145
第32図	A区1号住居出土遺物(2)	52	第98図	城郭西部1号古墳周溝出土遺物(3)	146
第33図	A区2号住居・カマド平面図	53	第99図	城郭西部遺構外出土遺物(1)	148
第34図	A区2号住居出土遺物	54	第100図	城郭西部遺構外出土遺物(2)	149
第35図	B区1号住居・カマド平面図・掘り方平面図、出土遺物	57	第101図	城郭北東部縄文・弥生時代遺構配置図	153
第36図	B区2号住居平面図・掘り方平面図、出土遺物	58	第102図	城郭北東部3区1号住居平面図、出土遺物	154
第37図	B区3号住居・カマド平面図・掘り方平面図、出土遺物	59	第103図	城郭北東部3区2号住居平面図、出土遺物	155
第38図	C区1号住居・カマド平面図、出土遺物	62	第104図	城郭北東部4区1・2号住居平面図、1号住居出土遺物	156
第39図	C区2号住居・カマド平面図、出土遺物	63	第105図	城郭北東部3区1号土坑、1号古墳平面図	157
第40図	C区3・4・5号住居・3号住居カマド平面図、出土遺物	64	第106図	城郭北東部1号古墳出土遺物	158
第41図	C区6号住居・カマド平面図、出土遺物	65	第107図	城郭北東部遺構外出土遺物	159
第42図	C区7号住居・カマド平面図	66	第108図	富岡城遺構調査区全体	163-164
第43図	C区7号住居掘り方平面図、出土遺物	67	第109図	2部平面図	165
第44図	D区1号住居・カマド平面図、出土遺物	68	第110図	2部断面図-1	166
第45図	D区2号住居平面図、出土遺物	69	第111図	2部断面図-2	167-168
第46図	D区3号住居平面図、出土遺物	70	第112図	2部断面図-3	169-170
第47図	D区4号住居平面図、出土遺物	71	第113図	4部平面図	171
第48図	E区1号住居・1・2号カマド平面図	72	第114図	4部断面図-1	172
第49図	E区1号住居出土遺物	73	第115図	4部断面図-2	173-174
第50図	E区2号住居・カマド平面図、出土遺物	74	第116図	城郭外平面断面図	175
第51図	E区3号住居・カマド平面図、出土遺物	79	第117図	城郭外平面断面図	177-178
第52図	E区4号住居・1号2号カマド平面図、出土遺物	80	第118図	城郭北東部1～4区平面図	179
第53図	E区5号住居・カマド平面図、出土遺物	81	第119図	城郭北東部5区、6～9号トレンチ平面図	180
第54図	E区6号住居・カマド平面図、出土遺物	82	第120図	城郭北東部A～1ライン上層断面図	181
第55図	E区7・8号住居平面図、8号住居出土遺物	83	第121図	城郭北東部1～5ライン上層断面図	182
第56図	E区9号住居平面図、出土遺物	84	第122図	城郭西部中・近世遺構外出土遺物	184
第57図	E区10号住居・カマド平面図、出土遺物	85	第123図	城郭北東部中・近世遺構外出土遺物	185
第58図	E区11号住居・カマド平面図、出土遺物	85	第124図	富岡清水遺跡跡上の朱漆痕が残る区輪陶器	186
第59図	F区1号住居・カマド平面図、出土遺物	86	第125図	群馬県内出土の朱漆・朱紅色土器	187
第60図	A区1号独立柱建物、C区5号土坑出土遺物	89	第126図	基本土層柱状図	189
第61図	A区1～3号、B区1～5号、C区5号土坑	90	第127図	富岡清水遺跡跡周辺の用水系統図	191
第62図	C区4・13・6・7号土坑	91	第128図	富岡清水遺跡跡周辺の桑畑地割想定図	193
第63図	C区9・10・14、D区1～3、F区1号土坑	92	第129図	高田の政略変遷(江戸～明治時代)	194
第64図	富岡清水遺跡A～D区の地形概略図	93	第130図	富岡城縄張り	195
第65図	B区1号、C区1号水路	96	第131図	丹生東城跡全体図・模式断面図	198
第66図	C区2～6号水路、出土遺物	97	第132図	富岡粗小堀城縄張り	198

目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	14	第35表	E区6号住居出土遺物観察表	82
第2表	E区12号住居出土遺物観察表	20	第36表	E区8号住居出土遺物観察表	83
第3表	E区13号住居出土遺物観察表	22	第37表	E区9号住居出土遺物観察表	84
第4表	E区14号住居出土遺物観察表	27	第38表	E区10号住居出土遺物観察表	84
第5表	E区15号住居出土遺物観察表	29	第39表	E区11号住居出土遺物観察表	85
第6表	C区15号土坑出土遺物観察表	34	第40表	F区1号住居出土遺物観察表	86
第7表	E区4号土坑出土遺物観察表	34	第41表	C区5号土坑出土遺物観察表	89
第8表	E区7号土坑出土遺物観察表	34	第42表	C区2号用水路出土遺物観察表	98
第9表	E区8号土坑出土遺物観察表	34	第43表	E区10号溝出土遺物観察表	102
第10表	E区9号土坑出土遺物観察表	34	第44表	F区3号溝出土遺物観察表	105
第11表	E区10号土坑出土遺物観察表	34	第45表	奈良・平安時代土坑一覧表	106
第12表	E区11号土坑出土遺物観察表	35	第46表	奈良・平安時代溝一覧表	106
第13表	遺構外出土縄文時代土器遺物観察表	40	第47表	古代水田一覧表	107
第14表	遺構外出土弥生時代土器遺物観察表	45	第48表	A区1号溝出土遺物観察表	122
第15表	遺構外出土縄文・弥生時代石器遺物観察表	47	第49表	中世以降遺構外出土遺物観察表	124
第16表	A区1号住居出土遺物観察表	52	第50表	中世以降土坑一覧表	125
第17表	A区2号住居出土遺物観察表	55	第51表	中世以降溝一覧表	125
第18表	B区1号住居出土遺物観察表	57	第52表	テララ検出分析結果	129
第19表	B区2号住居出土遺物観察表	58	第53表	屈折率測定結果	129
第20表	B区3号住居出土遺物観察表	58	第54表	富岡清水遺跡における植物性液体分析結果	132
第21表	C区1号住居出土遺物観察表	62	第55表	城郭南西部1号住居出土遺物観察表	138
第22表	C区2号住居出土遺物観察表	64	第56表	城郭南西部2号住居出土遺物観察表	141
第23表	C区3号住居出土遺物観察表	64	第57表	城郭南西部3号住居出土遺物観察表	142
第24表	C区6号住居出土遺物観察表	66	第58表	城郭南西部1号土坑出土遺物観察表	142
第25表	C区7号住居出土遺物観察表	68	第59表	城郭南西部1号古墳出土遺物観察表	147
第26表	D区1号住居出土遺物観察表	69	第60表	城郭南西部縄文～古墳時代遺構外出土遺物観察表	150
第27表	D区2号住居出土遺物観察表	69	第61表	城郭北東部3区1号住居出土遺物観察表	155
第28表	D区3号住居出土遺物観察表	70	第62表	城郭北東部3区2号住居出土遺物観察表	157
第29表	D区4号住居出土遺物観察表	71	第63表	城郭北東部4区1号住居出土遺物観察表	157
第30表	E区1号住居出土遺物観察表	73	第64表	城郭北東部古墳出土遺物観察表	158
第31表	E区2号住居出土遺物観察表	75	第65表	城郭北東部縄文～古墳時代遺構外出土遺物観察表	160
第32表	E区3号住居出土遺物観察表	79	第66表	城郭南西部中世以降遺構外出土遺物観察表	184
第33表	E区4号住居出土遺物観察表	81	第67表	城郭北東部中世以降遺構外出土遺物観察表	185
第34表	E区5号住居出土遺物観察表	82			

写真図版目次

PL. 1	富岡清水遺跡全景 空中写真 南から	A区1号願立建物 全景 西から	
	富岡清水遺跡全景 空中写真 北から	A区1号土坑 西から	
PL. 2	平成22年度調査 A区 全景 空中写真 上から	A区2号土坑 西から	
	A区第1面(近世) 全景 南から	A区3号土坑 西から	
PL. 3	A区1号建物 全景 西から	PL. 6	平成19年度調査 B区 全景 北から
	A区2号建物 全景 南から		B区1号住居 全景 西から
	A区2号建物西半 南から		B区1号住居 カマド 西から
	A区2号建物東半 南から		B区1号住居 遺物出土状況 南から
	A区1号道路状遺構 南東から		B区2号住居 全景 北西から
	A区1号道路状遺構 南西から	PL. 7	B区3号住居 全景 北西から
	A区1号道路状遺構 西から		B区3号住居 カマド 北から
	A区1号道路状遺構 東から		B区3号住居 貯蔵穴 西から
PL. 4	A区2号道路状遺構 西から		B区4号住居 全景 東から
	A区2号道路状遺構 南から		B区1号土坑 南から
	A区1号溝南側 南から		B区2・3号土坑 南から
	A区11～14号溝 北から		B区4号土坑 南から
	A区1・3号住居 全景 西から		B区5号土坑 南から
	A区1・3号住居 全景 南西から		B区6号土坑 南から
	A区1号住居 カマド 南西から		B区6号土坑 炭化物出土状況
	A区2号住居 全景 南から	PL. 8	B区1号溝 北西から
PL. 5	A区2号住居 遺物出土状況 北から		B区1号用水路 西から
	A区2号住居 カマド周辺遺物出土状況 南から		B区古代水田 全景 南から
	A区2号住居 カマド 南から		B区古代水田南半 西から
	A区2号住居 遺物(西編み石)出土状況		B区古代水田 全景 北から

- PL 9 平成19年度調査 C区 全景 南から
 C区1号住居 全景 西から
 C区1号住居 カマド 西から
 C区1号住居 遺物出土状況 西から
 C区2号住居 全景 西から
- PL 10 C区2号住居 カマド 北西から
 C区2号住居 遺物出土状況 西から
 C区3・4・5号住居 全景 西から
 C区3号住居 カマド 北西から
 C区6号住居 全景 西から
 C区6号住居 カマド 西から
 C区7号住居 全景 上から
 C区7号住居 カマド 西から
- PL 11 C区1号土坑 南東から
 C区2号土坑 東から
 C区3号土坑 東から
 C区4号土坑 東から
 C区5号土坑 東から
 C区6号土坑 北東から
 C区7号土坑 東から
 C区8号土坑 西から
 C区9号土坑 東から
 C区10号土坑 東から
 C区11号土坑 東から
 C区12号土坑 東から
 C区13号土坑 東から
 C区14号土坑 西から
 C区15号土坑 遺物出土状況 南東から
- PL 12 C区1号用水路 東から
 C区2～6号用水路 東から
 C区2号用水路 1号集水堰 南から
 C区7号用水路 北西から
- PL 13 平成19年度調査 D区 全景 西から
 D区1号住居 全景 西から
 D区1号住居 カマド 西から
 D区2号住居 全景 南から
 D区3号住居 全景 西から
 D区4号住居 全景 南から
 D区4号住居 全景 西から
 D区1号土坑 北から
 D区2号土坑 南東から
 D区3号土坑 南東から
- PL 14 平成21年度調査 E区(第1・2面) 全景 北から
 平成21年度調査 E区(第3面) 全景 北東から
- PL 15 E区1号住居 全景 北西から
 E区1号住居 カマド1 北西から
 E区1号住居 カマド2 北西から
 E区2号住居 全景 西から
 E区2号住居 カマド 西から
 E区3号住居 遺物出土状況 西から
 E区3号住居 カマド 北西から
 E区3号住居 北東角木炭材出土状況 北東から
- PL 16 E区4号住居 全景 西から
 E区4号住居 カマド1 南西から
 E区5号住居 全景 西から
 E区6号住居 全景 西から
 E区7号住居 全景 南東から
 E区7号住居 カマド 北西から
 E区8号住居 全景 東から
 E区8号住居 カマド 西から
- PL 17 E区9号住居 全景 東から
 E区10号住居 全景 西から
 E区11号住居 全景 西から
 E区12号住居 全景 東から
 E区12号住居 埋燐炉土器出土状況 南東から
 E区13号住居 全景 北から
- E区13号住居 遺物出土状況 西から
 E区13号住居 埋燐炉土器出土状況 西から
 E区13号住居 埋燐炉西の方 西から
 E区14号住居 斬部配石状況 南西から
 E区14号住居 北西部敷石残存状況 西から
 E区1号土坑 南東から
 E区2号土坑 南から
 E区3号土坑 北から
 E区4号土坑 東から
 E区7号土坑 東から
 E区8号土坑 南から
 E区9号土坑 南東から
 E区10号土坑 北から
 E区10号土坑 埋燐出土状況 南西から
 E区10号土坑 埋燐出土状況 南西から
 E区11号土坑 西から
 E区1・2号墓 東から
 E区3号墓 北東から
 E区4号墓 西から
 E区4号墓 墓上面に堆積するAs-A 西壁土層断面
- PL 19 F区南 1・2面全景 北から
 F区1号土坑 北から
 F区3号溝 北から
 F区北 1・2面全景(1・2号溝) 南から
 F区北 北壁土層断面 南から
 F区1号住居 全景 東から
 F区1号住居 カマド 西から
 F区4・5号溝 南東から
- PL 20 F区12・13号住居出土遺物
 F区14・15号住居出土遺物
 C区15号、E区4・7・8・10号土坑出土遺物
 E区10号土坑、遺構外出土遺物
 遺構外、A区1号住居出土遺物
 A区1・2号住居出土遺物
 A区2号、B区1～3号住居出土遺物
 C区1～3・6号住居出土遺物
 C区6・7号、D区1～3号、E区1号住居出土遺物
 E区1～4号住居出土遺物
 E区5・6・9・11号、F区1号住居、C区5号土坑出土遺物
- PL 21 富岡城全景 空中写真 南から
 富岡城全景 空中写真 北から
- PL 22 平成22年度調査 城郭南西部 弥生・古墳時代面全景 空中写真 上から
 平成22年度調査 城郭南西部 弥生・古墳時代面全景 空中写真 西から
- PL 23 城郭南西部 1号住居 全景 南から
 城郭南西部 1号住居 遺物出土状況
 城郭南西部 1号住居 遺物出土状況
 城郭南西部 1号住居 遺物出土状況
 城郭南西部 2号住居 全景 南から
 城郭南西部 2号住居 炉 南から
 城郭南西部 3号住居 全景 南から
 城郭南西部 3号住居 炉 南から
- PL 24 城郭南西部 1号古墳周堀 全景 北西から
 城郭南西部 1号古墳周堀 全景 北から
 城郭南西部 1号古墳周堀 全景 南西から
 城郭南西部 1号古墳周堀 遺物出土状況 南から
 城郭南西部 1号古墳周堀 遺物出土状況 西から
- PL 25 城郭北東部 3区1号住居 北平床面 北から
 城郭北東部 3区1号住居 南平ビット検出状況 北東から
 城郭北東部 3区2号住居 南平床面 南から
 城郭北東部 3区2号住居 北平床面 北から
 城郭北東部 4区1号住居 床面全景 北から
 城郭北東部 4区2号住居 全景 南から
 城郭北東部 3区1号土坑 全景 南から

- 城郭北東部 10号トレンチ古墳周縁 遺物出土状況 南から
- PL. 37 富岡城 城郭全景 北東から(富岡市街地・一ノ宮方面を望む)
- 富岡城 城郭全景 北西から(甘栗町・旧吉井町方面を望む)
- PL. 38 富岡城 城郭全景 南東から(高田川と城郭の西側を望む)
- 富岡城 城郭全景 南から(富岡清水遺跡から城郭を望む)
- PL. 39 城郭西側(2・4郭) 全景 空中写真
- 城郭西側(2・4郭) 全景 空中写真 南西から
- PL. 40 城郭西側(2・4郭) 空中写真 西から
- 城郭西側(2・4郭) 全景 西から
- PL. 41 2郭 全景 空中写真
- 2郭 南半 東から
- 2郭 北半 東から
- 2郭 上塁直跡南側 北から
- 2郭 上塁直跡北側 西から
- PL. 42 1号堀と2郭西側面 全景 南から
- 1号堀 南から
- 1号堀 北から
- 1号堀 盛り上がる中央部底面 南から
- 1号堀 土層断面 南から
- PL. 43 2号堀と2郭北側面 全景 西から
- 2号堀 改修後の底面 西から
- 1号堀と2号堀の交点 南から
- 2号堀 西半と端部 東から
- 2号堀 土層断面 東から
- PL. 44 2郭 北側面にある盛り上の状況 北西から
- 2郭北縁 築城時の盛り上状況(Aライン) 東から
- 2郭南半 築城時の盛り上状況(Eライン) 北東から
- 2郭北半 築城時の盛り上状況(Eライン) 南東から
- 2郭北縁 築城時の盛り上状況(Dライン) 南西から
- PL. 45 2郭南縁 築城時の盛り上状況(Eライン) 東から
- 2郭北縁 築城時の盛り上状況(Aライン) 東から
- 2号堀北壁上端 築城時の盛り上(Aライン) 東から
- 2号堀北壁上端 築城時の盛り上(Aライン) 南東から
- 2号堀北壁上端 築城時の盛り上(Dライン) 北西から
- PL. 46 4郭 南側に残る高まり 東から
- 4郭 南側に残る高まり 西から
- 4郭北縁 西から
- 3号堀 全景 北東から
- 4郭南縁 築城時の盛り上状況(Kライン) 南から
- 4郭北縁 築城時の盛り上状況(Kライン) 南東から
- 4郭北縁 築城時の盛り上状況(Jライン) 南東から
- 4郭 築城時の盛り上状況(Fライン西側) 南東から
- PL. 47 4郭 築城時の盛り上状況(Fライン西端) 東から
- 4郭北縁 築城時の盛り上状況(Gライン) 南東から
- 城郭外平地面 全景 東(4郭)から
- 城郭外平地面 土塁の残存部 東から
- 城郭外平地面 土塁の土層断面 北西から
- PL. 48 城郭北東部 1区南側 全景 北から
- 城郭北東部 1区北側 全景 北から
- 城郭北東部 2区 全景 南から
- 城郭北東部 2区 区画 東から
- 城郭北東部 2区 区画断面(南壁) 北から
- 城郭北東部 2区 3郭南西角盛り上上面 西から
- 城郭北東部 2区 3郭南西角盛り上断面 西から
- 城郭北東部 2区 盛り上下面(築城前表上面) 南西から
- PL. 49 城郭北東部 3区 全景 南から
- 城郭北東部 3区 全景 北から
- 城郭北東部 3区 盛り上下面(築城前表上面) 北から
- 城郭北東部 3区 盛り上土層断面(東壁) 南西から
- 城郭北東部 3区 盛り上土層断面(3号トレンチ) 北西から
- 城郭北東部 3区 盛り上土層断面(確認1号f1) 北から
- 城郭北東部 4区 全景 南から
- 城郭北東部 4区 全景 北から
- PL. 50 城郭北東部 5区 全景 南から
- 城郭北東部 5区 全景 北から
- 城郭北東部 5区 3郭北西角 南から
- 城郭北東部 5区 段差部分 北西から
- 城郭北東部 5区 6号トレンチ付近 西から
- 城郭北東部 5区 1・2号土坑 北から
- 城郭北東部 7号トレンチ 全景 南西から
- 城郭北東部 9号トレンチ 全景 南西から
- PL. 51 1号住居出土遺物
- PL. 52 2・3号住居、1号古墳出土遺物
- PL. 53 1号古墳出土遺物
- PL. 54 1号古墳、3区1・2号住居、4区1号住居出土遺物

第1章 調査の経緯・経過と方法

第1節 調査に至る経緯

西毛広域幹線道路は、中毛と西毛を直結する新たな動脈として期待され、先に着工・供用が進められている東毛広域幹線道路とともに、「はばたけ群馬・県土整備プラン」の中の主要な事業として推進がはかられてきた。

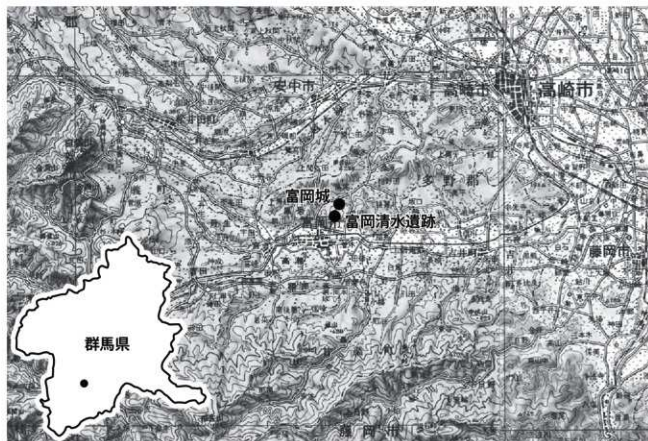
この西毛広域幹線道路は、前橋市の国道17号千代田町三丁目交差点を起点とし、高崎市の旧群馬町・旧榛名町、安中市を經由して、富岡市の国道254号バイパスしのみめ跨線橋北交差点に至る総延長27.9kmの広規格道路として設計され、県道127号の連結も含めつつ、主要地方道前橋安中富岡線のバイパスとの位置づけにより、部分的に工事施工と供用がはかられてきた。

西端部にあたる富岡市の富岡工区においては、富岡市上高尾から国道254号バイパスまでの間が、平成14年度から平成24年度に施工されることが計画された。この区

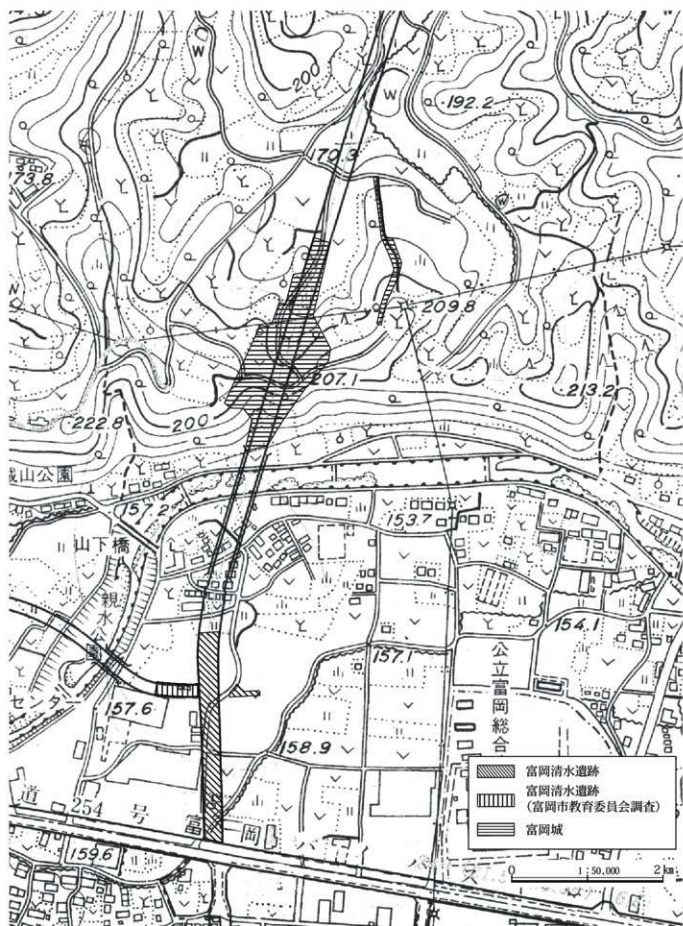
間における着工に先立ち、平成18年11月9日付けで工事を監理する群馬県富岡土木事務所から、当該区間における埋蔵文化財の有無と取扱について、群馬県教育委員会に協議がなされた。

これを受けた群馬県教育委員会文化財保護課では、当該区間における試掘調査を行い、富岡清水遺跡の存在を平成19年3月9日に通知し、協議の結果工事の変更が不可能なことから、発掘調査による記録保存の措置が講じられることとなった。また、高田川左岸の山上には富岡城跡があり、この遺構の一部が工事範囲となり、さらに工事によって遮断される機能保証道路にかかることから、当該範囲についても、別途調査を実施することとなった。

発掘調査は、群馬県教育委員会の指導のもと、群馬県富岡土木事務所を委託者、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団を受託者として委託契約を締結し、発掘調査事業と整理事業をおこなうところとなった。



第1図 遺跡位置図



第2図 調査範囲位置図

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

〈富岡清水遺跡〉

富岡清水遺跡における今回の調査地は、南端が国道254号と接し、北端が高田川手前までの延長約260mにおよぶ間である。調査地内は現道で分割されているため、調査地内をA区からF区に分けて調査を行うこととし、南端をA区、その北側へB・C区と設定し、D区はC区の北東側で現道拡幅部分、E区はC区の北側、F区はC区の西側と設定した。

調査に用いたグリッドは、5m×5mを基本とした。グリッドの呼称は、本遺跡特有の名称を設定せずに、国家座標IX系(世界測地系)を用い、X・Y座標の下3桁をそれに当てて表記することとし(X=29,250、Y=-83,620の場合、250-620)、その南東隅のポイント座標をグリッド名とした。さらに、地点を細かく表示する場合は、この下3桁の数字をそのまま用いた(例:5mないし10mにこだわらず、1m単位で、251-621と表している)。

予想される遺構が、住居や土坑・水田等であったため、調査方法に特殊なものではなく、時代による面的な調査とし、ごく標準的な方法を用いた。その概略は以下の通りである。

表土除去は、基本的に重機を用いた。表土除去終了後は、ジョレンを用いて遺構確認作業を行い、確認できた遺構について調査を行った。各調査区での状況は異なるが、基本的に第1面として近世、第2面として古代、第3面として縄文時代を対象として各面ごとに遺構確認作業を行った。遺構の種類には、住居、掘立柱建物のほか、土坑、溝、ピットであり、住居は土層観察のための十字のベルトを設定し、土坑は半裁して土層観察を、水田および畠についても必要に応じてベルトを設定して土層観察を行う等、それぞれに適した方法を用いた。数の多いピットについては、先ず半裁し、遺構と判断されたものに限って記録することとし、土層も類別して注記した。遺構名は、A～F区の各調査区ごとに、遺構の種類毎に通し番号で表した。遺構の測量は、土層断面図を作業員

による手実測とし、平面図を測量業者に委託して調査期間の短縮を図った。縮尺は、1/10、1/20、1/40を基本とし、それぞれの遺構の性格に合わせて適宜使用した。写真撮影は、6×7白黒、35mmデジタル写真の2種類を基本とした。調査区の全景写真は、調査の進展にあわせて各調査区ごとに行い、高所作業車ないしラジコンヘリによる空中写真撮影を必要に応じて行った。

また、調査地はローム台地上であることから、旧石器時代の遺構・遺物の有無を確認するべく試掘調査を行った。調査は、2×2mの試掘坑を各調査区に応じて設定した。その結果、遺構・遺物は検出されなかった。

〈富岡城跡〉

富岡城跡の調査地は、西毛広域幹線道路の路線となる城郭南西部と、工事によって遮断される機能保証道路に関わる城郭北東部の2箇所が対象となった。両調査箇所の間には、城郭の主郭が位置し、主郭は調査には含まれていない。

城郭南西部の調査に当たっては、『群馬県古城址の研究』(山崎一 1972)に掲載された富岡城の縄張り図を参考に、調査地の東端となる平坦部(主郭の西隣に位置する)を1区、堀を挟んだ西側の斜面部を2区、1区の北側に一段低い帯状のテラス部分を3区、さらに調査区の西端となる平坦部を4区として設定した。

調査に用いたグリッドは、5m×5mを基本とした。グリッドの呼称は、国家座標IX系(世界測地系)を用い、X・Y座標の下3桁をそれに当てて表記することとし(X=29,850、Y=-83,500の場合、850-500)、その南東隅のポイント座標をグリッド名とした。さらに、地点を細かく表示する場合は、この下3桁の数字をそのまま用いた(例:5mないし10mにこだわらず、1m単位で851-501と表している)。

中世城郭の調査であることから、城郭面の調査および築城状況の調査を主眼に、城郭以前の表土が残存している場合はそれ以前の遺構調査をも想定した調査に努めた。その概略は以下の通りである。

表土除去は基本的に重機を用い、表土除去終了後はジョレンを用いて遺構確認作業を行った。調査は廃土処理の関係から1区から開始し、続いて3区、2区、4区へと進行させていった。各区(郭)および堀については、

必要に応じてベルトを設定し、土層の観察を行った。城郭面の調査終了後、築城時の盛り土状況をトレンチにより確認し、併せて築城前の旧表土の残存状況を確認した。その結果、古墳と弥生時代の住居の存在が明らかとなったため、築城時の盛り土調査の後にローム漸移層を遺構確認面として遺構確認作業を行った。古墳および住居はベルトを設定し、土坑は半裁して土層観察を行う等、それぞれに適した方法を用いた。遺構名は、城郭南西部を通じて遺構の種類毎に通し番号で表した。遺構の測量は、全て測量業者に委託して調査期間の短縮を図った。縮尺は、1/20、1/40を基本とし、それぞれの遺構の性格に合わせて適宜使用した。写真撮影は、6×7白黒、35mmデジタル写真の2種類を基本とした。調査区的全景写真は、調査の進展にあわせて各調査区ごとに行い、城郭および古墳・弥生時代面についてはラジコンヘリによる空中写真撮影を業者に委託して行った。

城郭北東部の調査に当たっては、調査地の幅が狭く、城郭の斜面部に位置することから、調査地全体に10箇所のトレンチを設定し、南側から1・2・3・・・号トレンチと呼称した。調査は1号トレンチから開始し、全て人力で掘削を行った。各トレンチでの土層確認の結果、城郭に関わる遺構の確認と城郭築城以前の弥生時代の遺構が予測されたため、各トレンチ間を拡張する形で1区から5区までを設定した。

調査地が狭いことから調査ではグリッドを用いず、国家座標IX系(世界測地系)のX・Y座標の下3桁をそれに当てて表記することとした(X=29,930、Y=-83,400の場合、930-400)。

調査は2区から開始し、表土除去を含め全て人力での遺構確認作業を行った。城郭面の調査終了後、築城時の盛り土下面を検出し、その後ローム漸移層を遺構確認面として弥生時代の住居の遺構確認作業を行った。住居等の土層確認は、ベルトを設定せずに調査区の壁面を利用した。遺構名は、各区ごとで遺構の種類毎に通し番号で表した。遺構の測量は、全て測量業者に委託して調査期間の短縮を図った。縮尺は、1/20、1/40を基本とし、それぞれの遺構の性格に合わせて適宜使用した。写真撮影は、6×7白黒、35mmデジタル写真の2種類を基本とした。調査区的全景写真は、調査の進展にあわせて各調査区ごとに行った。

2 調査の経過

〈富岡清水遺跡〉

平成19年度調査は、B・C・D区の3区画を対象地とし、平成19年6月1日から8月31日までの3ヶ月間を発掘調査期間とし、調査を実施した。このうち、B区については①平安時代、②平安～縄文時代、③旧石器時代の3面を、C・D区については①と②の2面の調査を行った。6月4日より調査区周辺の環境整備や機材運搬、駐車場整備、事務所を設置等の発掘調査準備を行い、11日よりB区から重機による表土掘削を開始した。As-B混土下面を1面とし鋤簾、移植ゴテで精査を行い、水田面、用水路1条を検出した。21日に全景写真撮影、航空測量を実施し、1面調査を終了した。25日より2面ローム上面の遺構確認及び検出作業を開始した。調査区南側で竪穴住居4軒(縄文1、平安3)、北側で用水路1条を検出した。1号住居から調査を開始し29日に2面全景写真撮影を実施し、2面調査を終了した。7月3日から3面旧石器面の調査を開始し、8日に3面調査を終了した。

18日からC区の表土掘削を開始した。並行して1面遺構確認作業を行い、竪穴住居6軒、土坑13基、用水路7条、取水堰2箇所を検出した。23日より個々の遺構精査を開始した。8月1日よりD区の表土掘削を開始した。2日よりD区の1面遺構検出作業を開始し、竪穴住居3軒、土坑1基、用水路5条を検出した。6日にC区1面全景写真撮影を実施し、C区1面調査を終了した。7日からC区2面調査を開始し、竪穴住居1軒、土坑2基を検出した。16日にD区1面全景写真撮影を実施し、D区1面調査を終了した。17日よりD区2面調査を開始し、竪穴住居1軒、土坑2基を検出した。22日にC区、D区2面全景写真撮影を実施し、2面調査を終了した。23日より3面トレンチ調査を行った。24日より埋め戻しを開始した。30日に調査区周辺の環境整備、清掃を行い、現場撤収作業を終了した。31日に最終現場安全点検を行い、平成19年度富岡清水遺跡発掘調査を終了した。

平成21年度調査は、平成19年度調査区北側E区を調査対象地とし、平成22年2月1日から3月31日までの2ヶ月間を発掘調査期間とし、調査を実施した。調査区南側半分は建物基礎やコンクリートなどが残存する状態であったため、一段低い南側から調査を開始することと

なった。2月3日より、調査区環境整備及び発掘調査準備を開始し、重機による西側壁際にトレンチを入れ遺構面の確認を行った。その結果、表土下にAs-A混土層やAs-A純層が残存していたためAs-A混土層下面を遺構確認面とした。調査区北側壁から南へ15mの範囲は上面からの攪乱の影響を受けており、また、下面部は河川氾濫による礫層が堆積しているため遺構が存在する可能性はないと判断し、その範囲を廃土置き場とすることとした。4日から重機による表土掘削を開始した。並行して遺構確認作業を行った。結果、北西部でAs-A下の水田、As-B下の畠(2区画)とAs-A混土、As-A純層、As-B混土で埋没した溝5条を検出した。また、南側上段部と北側下段部の西側境付近でAs-Aを掻き出したと考えられる堆積層とその下からAs-Aで埋もれた畑を検出した。12日に全景写真撮影を実施し、下段部の調査を終了した。北東部側にトレンチを入れ、段面調査を行った。段面から1面下は泥炭層や礫層が主体であり、遺構は存在しないと考えられたため、下段の調査は1面だけとなった。

15日より南側上段部の表土掘削を開始した。廃土場所を調査終了の下段部に設定し、南側から調査を開始した。1面からは竪穴住居11軒、土坑4基、溝12条を検出した。3月5日に全景写真撮影を実施した。南側では住居精査中に縄文土器が出土しており、下面に縄文遺構の存在が想定された。また、西側に隣接する富岡市調査範囲からも縄文遺構が検出されており、2面を縄文面とし調査を開始した。遺構は竪穴住居4軒、土坑7基などを検出した。3月29日に縄文遺構写真撮影、測量を実施した。30日に機材等の撤収や環境整備を行い、平成21年度富岡清水遺跡調査を終了した。

平成22年度の調査は、富岡城跡の調査を含め平成22年7月1日から平成22年9月30日までの3ヶ月間を発掘調査期間とし、調査を実施した。対象地はA区、F区である。A区、F区とも調査区内にアスファルトなどが残存する現状であったため、8月24日よりA区、F区の、周辺環境整備及び調査区内のアスファルト除去作業から実施した。30日より重機による表土掘削を開始し、9月1日より遺構確認作業を始め、A区から建物跡や溝を検出し、F区からは竪穴住居や溝を検出した。9日に写真撮影、測量を実施し、A区、F区の1面調査を終了した。A区では1面調査時に平安時代の竪穴住居が確認された

ため、2面は近世遺構下面の調査を行い、竪穴住居と土坑を検出した。住居調査と並行しながら、縄文面の調査を行った。しかし、A区、F区とも縄文土器・石器などの出土は見られなかったが、縄文時代の遺構は確認できなかった。29日に遺構全景写真撮影を実施し、30日に機材等の撤収や環境整備を行い、平成22年度富岡清水遺跡調査を終了した。

〈富岡城跡〉

平成22年度調査は、城郭南西部を調査地として平成22年7月1日から9月30日までの3ヶ月間を発掘調査期間とし、調査場所の現地確認や調査事務所の設置、調査計画の策定、現地までの中継地および通路確保等といった調査準備の後、現地における発掘調査を開始したのは7月9日からである。

調査地内を1区から4区に分け、廃土処理の関係から調査地の最奥となる東端の1区から調査を開始し、続いて3区、1区と2区との間の堀切、そして2区へと調査を進める計画を立て、調査を始めた。4区については、当初、調査対象とするか不確定要素をもっていたため、トレンチにより遺構の有無を確認することが要とされていた。1～3区までの城郭面調査終了後、4区のトレンチ確認の結果、城郭に伴う城郭外の整地面であることや、弥生時代の住居の存在を確認したことから、4区についても調査対象とした。

以下、調査の進行状況を順を追って、各区ごとに記述する。

調査を開始したのは1区からで、7月9日から開始した。1区は城郭の主郭西隣に位置する郭で、今回の調査地の最奥となる東端に位置する。表土掘削後の遺構確認作業は、As-A混土層下面を遺構確認面とした。遺物の出土は極めて少なく、検出された遺構は掘立柱建物1棟とピットのみで、城郭に伴う建物等の遺構は検出されなかった。しかし、郭の整地面の状況は、西縁中央の一部が壊されているものの、全体に郭の周縁部が僅かに高くあり、しかも礫・粘質土混じりの土であることから、土塁の痕跡の様相を呈していた。7月16～21日にかけて、1・3区の横断トレンチの掘削を行い、1区の北斜面および3区の土層確認を行った。

続いて、3区の調査へと進行させた。3区は1区の北

側に位置し、一段低い幅狭な平坦面である。『群馬県古城址の研究』(山崎一 1972)に掲載された縄張り図には示されておらず、この平坦面が東側の調査地外へと延びている状況等から、城郭の一部となる腰郭の可能性を想定していた。しかし、トレンチによる確認の結果、断面が築形となる堀であることが明らかとなった。7月22日より、重機による表土および堀の掘削を開始した。併せて、1区の北斜面の検出作業も同時に行った。この3区の堀は、2号堀とした。

続いて、1区と2区間の堀切の調査へと進み、8月2日より重機による掘削を開始した。この堀切は、『群馬県古城址の研究』での縄張り図にも示されている堀で、主郭の西隣の郭(1区)とその西側の郭とを区画する堀であり、調査では1号堀とした。掘削は、堀の中央に通路兼土層確認用のベルトを境に、北側からはじめ、南側、中央ベルトの順で行った。併せて、1区西斜面および2区東斜面の検出作業を行った。

1号堀の調査に併行して、2区の調査を開始したのは8月4日からである。2区は1区の西側に位置し、やや幅狭な、南側が馬の背状に高く西へ傾斜し、北側へは緩斜面となっている。このため、トレンチによる土層確認を先行させ、8月11日から人力による表土掘削を堆積土の薄い箇所へ行い、堆積土の厚い箇所へは8月24日から重機による掘削を行った。

そして、8月31日に1～3区までの城郭面の調査を終了させ、翌9月1日に城郭南西部(1～3区)の空中写真撮影を行った。

9月2日からは、不確定要素をもっていた4区へのトレンチによる遺構確認を開始し、その結果を受けて9月6日から重機による表土掘削を開始し、遺構確認作業を行った。

また、4区と併行しながら、9月9日から築城状況の調査として、1区の盛り土状況を確認するためのトレンチ掘削を始めた。その結果、築城に関わる盛り土がかなり大規模に行われたことと、築城前の旧表土の残存および古墳・弥生時代の遺構が予測されたため、盛り土の除去を行う必要が生じた。このため、9月13日からは重機による盛り土除去を行った。同様に、2・3区においても、築城に関わる盛り土調査を行った。

さらに、9月15日より、遺構確認の終了した古墳お

よび住居・土坑の調査を開始し、9月29日に現地調査を終了させ、翌30日に全体の空中写真撮影を行い、同日午後には富岡土木への現地引き渡しを済ませて、全ての調査を終了した。

なお、調査途中において、作業体日中にバイクの進入痕跡があったため、危険防止策として進入防止用バリケードの設置等、安全対策を講じて調査を進めた。

9月5日には、地元向け現地説明会を開催したところ、県外研究者も含め、46人の見学参加者があった。

平成23年度調査は、城郭北東部を調査地として平成23年7月1日から9月30日までの3ヶ月間を発掘調査期間とし、調査場所の現地確認や調査事務所の設置、調査計画の策定、現地までの通路確保等といった調査準備の後、現地における発掘調査を開始したのは7月11日からである。

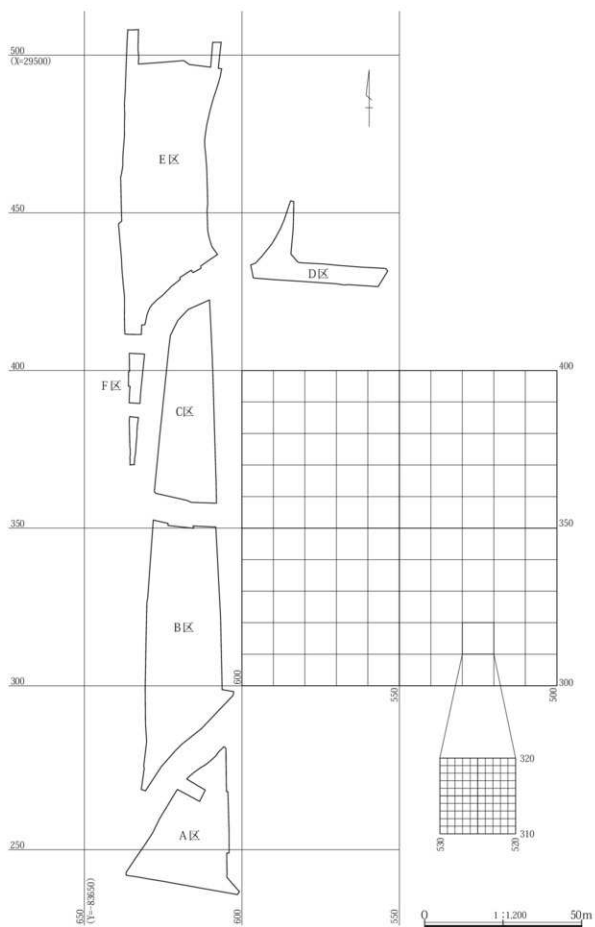
城郭の状況を確認するため、細長い調査地全体に10箇所のトレンチを設定し、1号トレンチから調査を開始した。3号トレンチまでの確認を終えた段階で、城郭に関わる遺構(整地盛り土)の確認と、城郭築城以前の弥生時代の遺構が予測されたため、各トレンチ間を拡張する形で1区から5区までを設定し、調査を進めた。

以下、調査の進行状況を順を追って記述する。

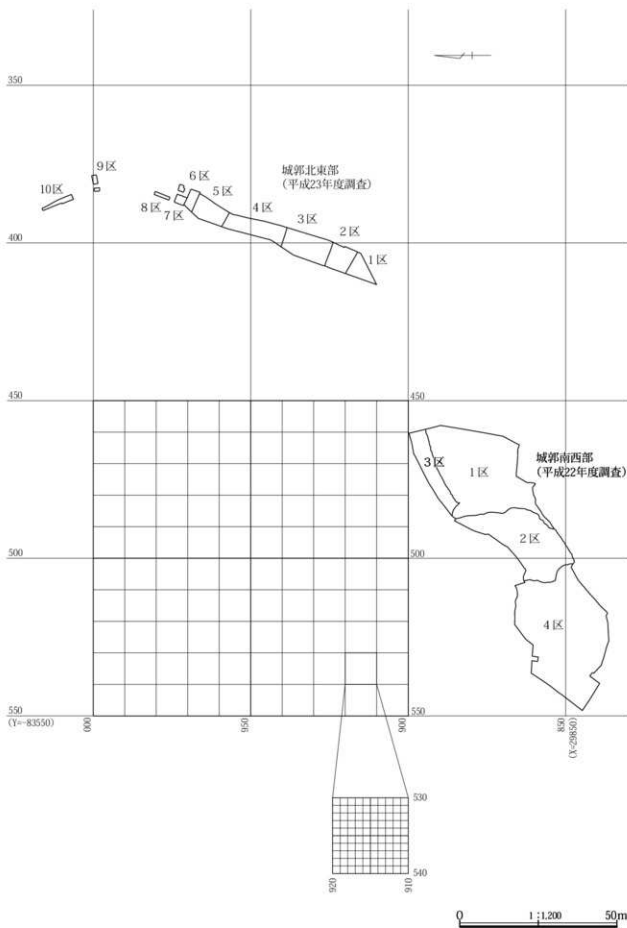
調査を開始したのは1トレンチからで、7月11日から開始した。1・2トレンチは城郭の主郭と主郭東隣の郭を画する堀の北縁に位置し、3～5トレンチは主郭東隣郭の北縁に位置することから、城郭の一部を検出できるものと予測されていた。翌12日には2トレンチ、同月22日には3トレンチの掘削を開始した。7月25日の段階で、1～3トレンチの確認を受けて、1トレンチと2トレンチの間を1区、2トレンチと3トレンチの間を2区、3トレンチと4トレンチの間を3区、4トレンチと5トレンチの間を4区、5トレンチと6トレンチの間を5区と各調査区を再設定し、2区の掘削から開始した。

8月3日からは3区の掘削を開始し、併せて、4～6トレンチの掘削をも併行して行った。同月24日には、再度の廃土置き場を確保し、29日に5区の掘削を開始した。

9月6日から1区および4区の掘削を開始し、同月12日には2区の築城時盛り土の除去へと作業を移行した。併せて、7・8トレンチの掘削を開始した。翌13日には



第3図 富岡清水道跡 調査区・グリッド設定図



第4図 富岡城跡 調査区・グリッド設定図

3区の築城時盛り土の除去へと作業を移行し、併せて、9・10トレンチの掘削を開始した。

9月15日に5区および7～9トレンチへの埋め戻しまでを終え、併せて1区の築城時盛り土の除去を開始し、2・3区での弥生時代の遺構確認の作業を行った。

翌16日には10トレンチの埋め戻しを終え、4区の住居調査を始めた。同月22日に2・3区での住居調査を開始し、30日までに5・6トレンチおよび1～4区の埋め戻しを順次行い、現地調査を終了した。

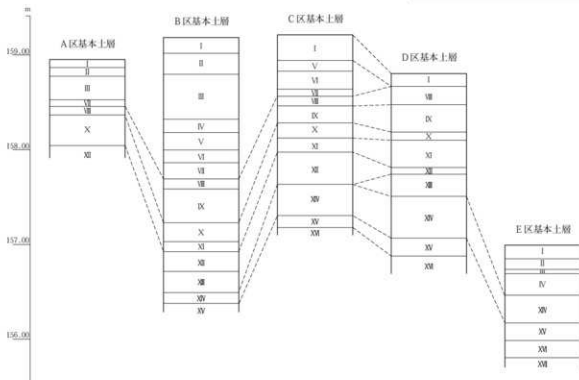
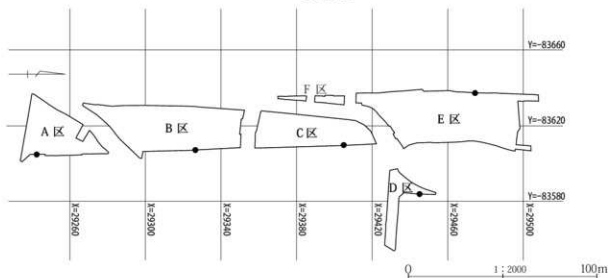
第3節 基本土層

〈富岡清水遺跡〉

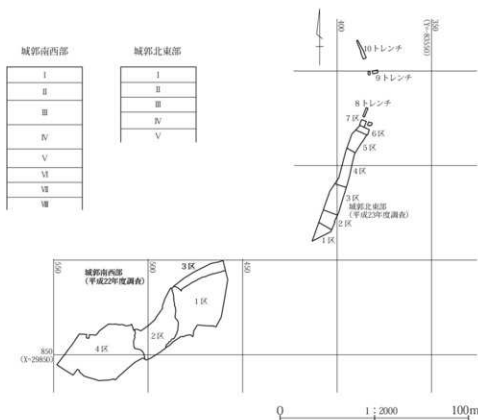
本遺跡は高田川の右岸の微高地上に立地し、高田川に向かい緩やかに傾斜し、E区北側から一段低くなる。このため基本層序は調査区によって多少の相違が見られる。なお、分層については、株式会社火山灰考古研究所の分析結果を参考に分層を行った。

I層 黒褐色土 表土。現代耕作土

II層 褐色土 現代耕作土下に堆積する上でAs-Aを多く含むやや締まりある粘質土。



第5図 富岡清水遺跡 基本土層図



第6図 富岡城跡 基本土層図

- III層 暗褐色土 白色軽石(As-AとAs-B)を少量含む。
- IV層 黒褐色土 As-B混土。水田耕作土。
- V層 黒褐色土 細粒白色軽石を僅かに含む粘質性の強い。水田耕作土。As-B混土上下の水田基盤層。
- VI層 灰黄褐色土 白色軽石を少量含む洪水起滞の水田耕作土。粘質土。
- VII層 褐色土 白色軽石、黄褐色軽石を少量含む粘質性の強い水田耕作土。
- VIII層 黒褐色土 白色軽石(As-C)、黄褐色軽石を少量含む。
- IX層 黒褐色土 白色軽石、黄褐色軽石を含む。
- X層 暗褐色土 白色軽石、黄褐色軽石を少量含む。
- XI層 黒褐色土褐色軽石を少量含む。
- XII層 黄褐色土 鈍いローム土。As-Bを多量に含む。粘質性やや強い。
- XIII層 黄褐色土に鈍い黄褐色ローム。小礫を少量含む。白色軽石(As-Ok)を僅かに含む。粘質土。
- XIV層 黄褐色土 小礫を少量含む。粘質土。
- XV層 黄褐色土 鈍い黄褐色ローム。小礫を上層より多く含む。粘質土。
- XVI層 礫層。鉄分が付着する河床礫主体。
- XVII層 砂質層。用砂主体の層。

〈富岡城跡〉

富岡城跡は高田川の左岸の丘陵頂部に立地し、頂部は馬の背状に狭く、丘陵の南側となる高田川側は勾配のきつい急斜面となり、北側は谷に向かって急斜面となる。城郭の主郭は丘陵の最も高い位置にあり、主郭を頂部に南西方向および北東方向のへと傾斜をもちつつ低くなる。また、頂部付近の一部には、丘陵の基盤となる凝

灰岩の岩盤層が露出している箇所も見受けられる状況であった。

調査した2地点の基本土層は、以下の通りである。

城郭南西部

- I層 黒褐色土 表土 As-Aを多く含む現代耕作土。
- II層 鈍い黄褐色土 As-A軽石を多く含む。傾斜部付近は2次堆積のAs-Aが多量に堆積する。
- III層 鈍い黄褐色土 凝灰岩礫をまばらに含む。
- IV層 黒褐色土 凝灰岩礫を混在させる城郭の盛り土。
- V層 黒色土 やや砂質で、As-Bが混じる城郭築城以前の旧地表上。
- VI層 黒褐色土 ややロームが混じる。
- VII層 黄色ローム土
- VIII層 凝灰岩岩盤層

城郭北東部

- I層 灰黄褐色土 表土。
- II層 灰黄褐色土 As-Aを含む。
- III層 浅黄褐色土 凝灰岩礫と鈍い黄褐色粘質土が混在する城郭の盛り土上。
- IV層 黒褐色土 白色軽石、黄褐色軽石を含む城郭築城以前の旧地表上。
- V層 明黄褐色ローム土

第2章 遺跡の立地と周辺の遺跡

第1節 遺跡の立地(第7図)

富岡清水遺跡のある群馬県富岡市は、関東平野の北西隅・群馬県西部に位置する。北側を安中市、東南側を甘楽町、西側を下仁田町と接している。市のほぼ中央部に下仁田町と長野県佐久市の境界付近にある物見山を源とする延長58.8km、流域面積632km²の利根川水系一級河川の鑓川が西から東へと流れ、高崎市内で利根川一次支流の烏川に合流している。遺跡の北側を東へ向かって流れる高田川は妙義山中腹を源とする延長21.6kmの一級河川で遺跡付近から約1.7km下流の富岡市内で利根川支流の鑓川と合流している。

鑓川流域は古くから「甘楽の谷」「鑓の谷」と称されてきた地域である。流域を西側に進めば内山峠を経て長野県佐久市に至る中部地方と関東地方を結ぶ重要な交通路であった。現在は鑓川に沿って上信電鉄が高崎—下仁田間を結び、東京文京区と長野県松本市を結ぶ国道254号線も甘楽の谷では鑓川に沿っている。上信越自動車道は鑓川南の丘陵北側に作られている。明治期に入って官営富岡製糸場がこの地に造られるのは、信州・横浜両方面への交通の便の良さによる。

富岡清水遺跡付近は富岡層群と呼ばれる第三紀中新世の海成層を基盤としている。遺跡のある富岡市街地とその周辺は北側にある丘陵地から続く富岡層群中の福島層

と呼ばれる泥岩層を主体とする面にある。

北側にある東西に繋がる平坦な丘陵地は安中市では横野台地・岩野谷丘陵と呼ばれる碓氷川右岸の上位段丘面であり、西側の高崎周辺では観音山丘陵と呼ばれ親しまれている。この丘陵上南側に安中・富岡市の境界がある。丘陵地南縁は複雑に発達した樹皮状を呈した狭い谷地形が入り組み、富岡城はこの谷に囲まれた丘陵南側に位置している。標高は210m前後で南側に広がる下位段丘面から約55mの比高である。調査前は畑地および山林であった。

富岡市街地周辺では南側には鑓川上位段丘および丘陵地形が広がり、さらに南側は関東山地北隅、多野山地へ繋がっている。鑓川は南北の丘陵地形に挟まれた沖積地にあり、富岡市街地は北側に形成された広い下位段丘(富岡段丘)上にあり、富岡清水遺跡はこの段丘面の北隅に位置している。高田川は富岡市街地周辺では丘陵地形直下の下位段丘面との境界付近を東流しているが、富岡清水遺跡は高田川右岸の標高157～158mの微高地上にある。調査区北隅では高田川へ向かって北側へ傾斜しているが、中央から南側は細かく波打つような起伏があり、現在の平坦な地形と異なっている。調査前の遺跡地は畑地および商業地・住宅地が入り組んでいるが、数十年前までは桑園を中心とする畑地であった。



第7図 富岡市域の地形区分

第2節 周辺の遺跡(第8図、第1表)

ここでは富岡清水遺跡・富岡城遺跡で調査された縄文時代から平安時代にかけての集落および中世城館を理解するために、この時代を中心とした周辺の歴史的環境について述べてみたい。表中遺跡番号の1～31は鎌川下位段丘上の遺跡、31～45は鎌川上位段丘上や丘陵上の遺跡、46～53は安中市側横野台地上である。また61以降は中世以降の城館他の遺跡、アルファベットで示したのは古墳群の範囲である。引用・参考文献は16頁に記した。

【縄文時代】富岡清水遺跡では縄文時代後期の集落を調査しているが、周辺で該期の集落は多くない。前期から中期にかけては南北両側の丘陵地で多数の集落が分布する。後期には鎌川右岸の丘陵上の白倉下原遺跡(33)・内匠上之宿遺跡(39)などで柄鏡形の住居が見られる。

【弥生時代】弥生時代になると遺跡の分布はより濃密である。横野台地上の注連引原遺跡(47)は、前期末から始まり中期中心に広がる西毛地区を代表する該期集落である。

後期集落は鎌川流域では右岸の上位段丘上にある中高瀬観音山遺跡(43)が著名であるが、上信越自動車道の調査で鎌川南側の上位段丘・丘陵上には白倉下原遺跡(33)・内匠上之宿遺跡(39)をはじめとする集落が連続と確認された。また田塚塚原遺跡(17)など下位段丘面でも調査例は多い。

【古墳時代】墳墓は前期古墳から鎌川右岸丘陵上で見られ、三角縁神獣鏡を出土したことで知られる北山茶白山古墳に近接する北山茶白山古墳(38)からは仿製方格規短鏡等を出土している。前方後円墳の多くは下位段丘上にあり、笹森稲荷山古墳は周辺の鎌川流域最大の規模を持つ。後期古墳群は鎌川に接した下位段丘の広範囲に分布し、芝宮古墳群(D)のような100基を超える流域最大の古墳群が見られる他、清水入り古墳群(K)のような丘陵部の山寄せ古墳も見られる。

集落も古墳時代を通して広く分布しているが、拠点的な集落である阿曾岡・権現堂遺跡(5)、本宿・郷土遺跡(8)は下位段丘上に見られる。

【奈良・平安時代】律令期の町域は後名類聚抄記載の甘楽郡にあたる地域である。甘楽は「から」を語源とする半島

からの解化人の多い地域と古くから指摘されている。周辺の郡を割譲し多胡郡建郡を記した日本三古碑の一つ多胡碑は本遺跡東約8kmの鎌川右岸にある。なお、富岡清水遺跡周辺は富岡市街地中心にある瀬下の地名から瑞下郷に比定する考えもある(文献5)。

上野国一宮である貫前神社(4)が置かれていることより、古代のこの地域の特徴が窺える。

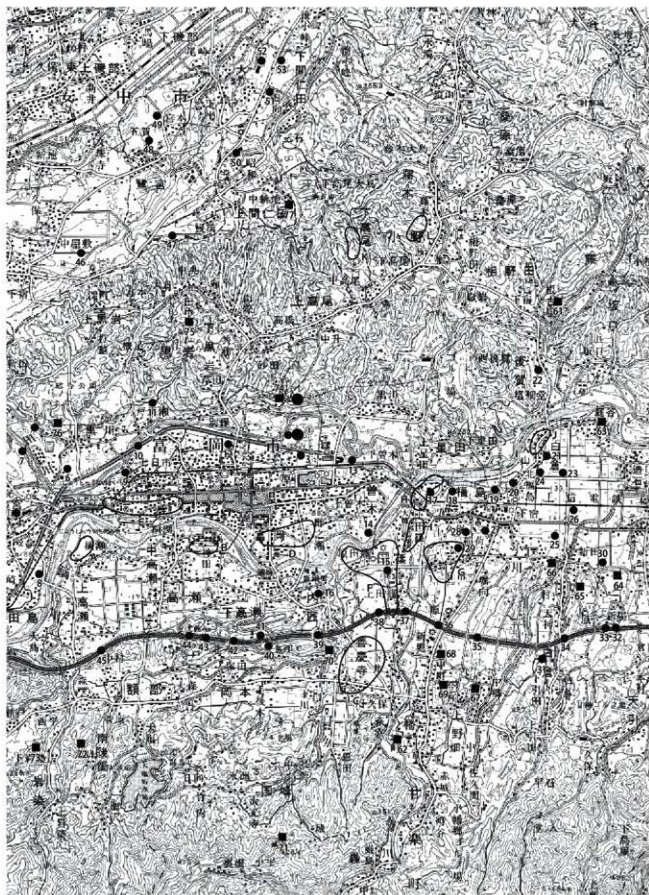
甘楽町南部では古代仁井屋牧の比定地があるが、近年横野台地上で牧と伝路と推定される両側溝を持つ道跡(46他)が大規模に調査されている。富岡方面へ続くと思定されている。

水田は甘楽糸里遺跡(23～36)は古くから知られる西毛地域を代表する条里跡でAs-B下の畦畔が広範に調査されている。As-B下では本遺跡の他、七日市六反田遺跡(10)などで水田が、下高瀬寺山遺跡(43)などで畑を調査している。

集落は下位段丘面での調査例が近年増加している。高田川右岸では七日市観音前遺跡(9)・七日市小沢西遺跡(12)などが調査され集落が多いことが知られていた。富岡小舟遺跡(3)は本遺跡南東側に広がる奈良・平安時代の集落で、本遺跡もこの集落の平安時代北西隅部分と考えられる。従来発見例の少ない11世紀台の住居跡が富岡清水遺跡で多数見られるが、集落が平安時代に台地縁辺や川縁などに移動する傾向がこの地区で確かめられる。本宿・郷土遺跡(8)は一宮神社南側に近接する古墳時代以降の伝統的な集落である。

【中世の城館】戦国時代の西上州は北条氏・上杉氏・武田氏の勢力が拮抗する地であった。甘楽の谷は長く小幡氏の支配下であり、その居城の国峰城(7)は北側に広がる鎌川流域を見下ろし、富岡城は鎌川対岸にあたる。国峰城は鎌川流域を代表する城址であり、鎌川を挟んだ南北の丘陵を中心に周辺に広がる城址群の多くは小幡氏に繋がる城館である。

【江戸時代】信州との国境へ向かう中山道は横野台地北側の安中市周辺を横断しているが、鎌川沿いには中山道の脇往還が通っていた。信州街道・富岡街道・下仁田街道または比較的起伏が少ないことから姫街道と呼ばれ、富岡市街は宿場町であった。天明3年の浅間山噴火の際の降下軽石を畑の一隅に集めた痕跡がE区で見られるが、同様の復旧痕が天引向原遺跡(32)で調査されている。



第8図 周辺遺跡位置図

第2章 遺跡の立地と周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	項目 遺跡名	縄文				古墳				弥生		その他	中世	遺跡の概要 その他の遺構・遺物	参考文献		
		集落				墓				生産	生産						
		前	中	後	晩	中	後	前	中							後	周
①	富岡清水遺跡		●	○											本報告の遺跡		
1	富岡清水遺跡(富岡市調査)			○											本報告富岡清水遺跡西側に隣接する同一の遺跡。	24	
②	富岡城													○	本報告の遺跡		
3	富岡小舟遺跡														● 本遺跡に最も近接した平安時代の大集落。	23	
4	貫前神社													※	上野国一ノ宮。		
5	阿曾岡・権現堂遺跡		●												高田川流域の弥生時代後期～古墳時代前期および古墳時代後期拠点集落。	12	
6	黒川小塚遺跡														前方後方墳ほか。	16・21	
7	東八木遺跡		●													12	
8	一ノ宮本宮・郷上遺跡Ⅱ														古墳時代居館。古墳時代から平安時代にかけての鍋川流域一宮地区の拠点集落幸玉造り工房跡。	6・17・18	
9	七日市観音前遺跡		○			●									弥生時代中期前半の上層部。	10	
10	七日市六反田遺跡						▲							※	As-B下水田。	22	
11	黒川御堂遺跡															14	
12	七日市小沢西遺跡		●	●												20	
13	曾木森原遺跡		○	●											●	11	
14	久保遺跡									※						5	
15	原田線遺跡														古墳時代祭祀遺跡。滑石模造品ほか遺物多量。滑石工房跡。	8・13	
16	内匠遺跡															7	
17	田塚塚原遺跡															47	
18	福島駒形遺跡															47	
19	福島鹿島下遺跡			●										※	縄文後期の敷石住居の可能性。滑石工房跡。	47	
20	福島橋森遺跡		▲												▲	47・48	
21	大山鬼塚古墳															3	
22	後賀上橋遺跡															3	
23	甘葉条里遺跡(庭谷深明地区)															49	
24	甘葉条里遺跡(大山前地区)													▲	※	48	
25	甘葉条里遺跡(第19地点)													※	As-B下水田。	25	
26	甘葉条里遺跡(第6～18地点)													※	As-B下水田。	25	
27	天王塚古墳															3	
28	稲荷北遺跡															3	
29	笹森稲荷塚古墳															3	
30	笹遺跡														※	周辺集落の囃矢の調査遺跡。滑石工房跡。	4・50
31	白倉遺跡		○	●												26	
32	天引向原遺跡															42	
33	白倉下原遺跡															42	
34	天神Ⅰ・Ⅱ遺跡															27	
35	松葉慈学寺遺跡															27	
36	西原遺跡														○	隣接する長谷物に関連すると思われる堀調査。	27
37	田塚中原遺跡															39	
38	善慶寺早道場遺跡			●												43	
39	内匠上之宮遺跡															41	
40	内匠白影岡地遺跡														○	中世城郭内匠の堀・土塁等を調査。	41
41	内匠日向岡地遺跡														※	● As-B下水田と畑。	46
42	下高瀬上之原遺跡					●	●								※	非墳輪塚。	44
43	下高瀬寺山遺跡														※	As-B下畑。	46
44	中高瀬観音山遺跡															弥生時代後期の拠点集落。	45
45	北山茶臼山西古墳														※	※ 前方後方墳。仿製方格規矩鏡、仿製四照鏡出土。	3・38
46	中原遺跡					●									※	古代牧に伴う溝と土籠。	
47	注連引原・Ⅱ遺跡															弥生時代前期未から続く代表的な弥生中期集落。	28
48	上ノ久保遺跡																31
49	荒神平・吹上遺跡																30
50	道前久保遺跡																32・37
51	蔵畑遺跡																33・36
52	蔵訪ノ木遺跡																35
53	下原・賽神遺跡																34

No.	遺跡名・城館名	概要 その他	参考文献
61	旗城	新屋城・麻場城と同型で堀に根小屋の地名をもつ。	1
62	小幡城	陣屋造り。藤田信雄による庭園築山園が残る。	1
63	庭谷城	鍋川下位段丘で同川が屈曲して作る右岸崖線上に古地。	1
64	新屋城(仁井屋城)	中世白倉氏の城郭と伝えられる。新屋城と別城一郭の城で両者を併せて白倉城と呼ぶ。下位段丘を北側に眺める丘陵上にあり、本丸の南北に曲輪を持つ。	1
65	麻場城	新屋城から低地を隔てた西500mにある。本丸前の濠に土橋があり二の丸へ続く。	1
66	大畑屋敷	尾根を下った小河川小野瀬川と庭谷川に挟まれた平地の屋敷跡。	2
67	上野城	一辺70mの方形城址で四圍に濠と土塁を持ち、土橋がある。江戸時代も代官・熊本知行所として残る。	1
68	下城(長瀬の砦)	方60mの小堡。小幡城の外堡。	1
69	上城(八幡山の砦)	下城の北700mにある。小幡城の外堡。	1
70	内江城	因幡城の外堡。崖端城。	1・41
71	因幡城	中世小幡氏の居城と伝えられる広大な規模を持つ鍋川流域の代表的城址。平城部・丘城部・山城部からなる特異な構造の大城郭。天正18年武田氏の侵攻により落城。	1
72	浅香入城	峰上に築かれた簡素な山城。	1
73	岩染城	尾根上に3条の堀切で囲った山城。	1
74	十王山の砦	富岡城の西700mにある同城の物見台。	1
75	高林城	丘陵頂部に築かれた戦国末期の単峰式山城。	1
76	黒川城	小尾根先端に築かれた小城だが全面に濠を廻らせ物見台状の高台をもつ。	1
77	天王山の砦	丘陵縁部にあり。北西250mに別の濠・土居あり。	1

No.	古墳群名	概要 その他	参考文献
A	横瀬古墳群	鍋川右岸の7世紀22基の古墳。削平されたものが多く、当初は30基前後の古墳群か。	5
B	桐瀬古墳群	鍋川右岸で双子塚・行人塚・粘土山の前方後円墳3基を含む。6世紀前半から7世紀末までに形成。桐瀬10・16号墳など調査例が多い。	5・15
C	善慶寺古墳群	鍋川と鍋川に挟まれた台地上の50基以上の古墳群。	3
D	芝宮古墳群	鍋川左岸の105基の古墳。削平されたものが多く不明瞭だが6世紀から7世紀に形成。鍋川流域で最大規模。富岡8・98号墳など調査例が多い。	5・9・19
E	七日市古墳群	鍋川左岸の26基の古墳で前方後円墳・三社古墳を含む。富岡5号墳は墳丘径30mの内墳で形象埴輪のほか豊富な遺物出土。6世紀後半から7世紀に形成。当初は30基以上か。	5
F	上田籬古墳群	鍋川右岸の上田籬・原田籬・布和田の3支群からなる。6世紀後半から7世紀に形成。上田籬1・2・4号墳などが調査される。	5
G	二日市古墳群	鍋川から南に離れた雄川右岸の古墳群。	3
H	塚原古墳群	高田川が鍋川に合流する付近の右岸にある33基の密集した7世紀中心の古墳群。	5・47
I	下田籬古墳群	上田籬古墳群と塚原古墳群の間にある。	3
J	大山古墳群	鍋川右岸。奇形石棺を持つ大山古墳他。	3
K	清水入古墳群	山高寺式小円墳からなる。8期が顕在。	3
L	瀬谷古墳群	清水入古墳群の東側丘陵上の3基の古墳。	5

遺跡の項で●は整穴住居の確認はないが、土坑等の確認や多量の遺物出土のあるものを表す。○は大規模な遺構な確認のあったことを示し、集落であれば整穴住居では大よそ30軒以上の調査である。☆は備考欄に説明を加えている。▲はその他若干の痕跡が見られたことを表す。参考文献は16頁に記した。

第2章 遺跡の立地と周辺の遺跡

引用・参考文献一覧

- 市史等
- 1 山崎一『群馬県古城址の研究 下巻』1978
 - 2 山崎一『群馬県古城址の研究 補遺上巻』1979
 - 3 甘楽町史編さん委員会『甘楽町史』1979
 - 4 群馬県史編さん委員会『群馬県史』資料編2 1986
 - 5 富岡市編さん委員会『富岡市史 自然編、原始・古代・中世編』1988
- 群馬県内発掘調査報告書
- 6 富岡市教育委員会『本宿・郷上遺跡』1981
 - 7 富岡市教育委員会『内匠遺跡発掘調査報告書』1982
 - 8 富岡市教育委員会『上田織古墳群・原田織遺跡発掘調査報告書』1984
 - 9 富岡市教育委員会『芝宮古墳群』1990・1991・1998他
 - 10 富岡市教育委員会『七日市観音前遺跡』1994
 - 11 富岡市教育委員会『曾木森裏遺跡』1996
 - 12 富岡市教育委員会『東八木遺跡、阿曾岡・権現堂遺跡』1997
 - 13 富岡市教育委員会『原田織遺跡Ⅲ』1998
 - 14 富岡市教育委員会『黒川伽藍堂遺跡』1999
 - 15 富岡市教育委員会『高瀬24号墳(桐調古墳群)』2000
 - 16 富岡市教育委員会『黒川小塚遺跡Ⅲ』2001
 - 17 富岡市教育委員会『一ノ宮本宿・郷上遺跡Ⅱ、一ノ宮古墳群』2001
 - 18 富岡市教育委員会『一ノ宮本宿・郷上遺跡Ⅲ』2003
 - 19 富岡市教育委員会『芝宮古墳群(富岡68号墳)』2006
 - 20 富岡市教育委員会『七日市小沢西遺跡Ⅱ』2007
 - 21 富岡市教育委員会『黒川小塚遺跡Ⅳ』2008
 - 22 富岡市教育委員会『七日市六反田遺跡Ⅱ』2008
 - 23 富岡市教育委員会『富岡小舟遺跡』2008
 - 24 富岡市教育委員会『富岡清水遺跡』2010
 - 25 甘楽町教育委員会『甘楽条里遺跡』1984～1987・1989・1998
 - 26 甘楽町教育委員会『白倉遺跡』2003
 - 27 甘楽町教育委員会『天神Ⅰ遺跡、天神Ⅱ遺跡、西原遺跡、松葉懸寺寺遺跡』1994
 - 28 安中市教育委員会『注連引原遺跡』1987
 - 29 安中市教育委員会『注連引原(Ⅱ)遺跡』1988
 - 30 安中市教育委員会『筑神平・吹上遺跡』1995
 - 31 安中市教育委員会『上ノ久保・桜林・五ヶ遺跡』1998
 - 32 安中市教育委員会『道前久保遺跡』2001
 - 33 安中市教育委員会『蔵畑遺跡』2005
 - 34 安中市教育委員会『下原・教神遺跡』2005
 - 35 安中市教育委員会『諏訪ノ木遺跡』2005
 - 36 安中市教育委員会『蔵畑Ⅱ遺跡』2006
 - 37 安中市教育委員会『道前久保Ⅱ遺跡』2009
 - 38 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『大島上城遺跡・北山茶臼山西古墳』1988
 - 39 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『田輪中原遺跡』1988
 - 40 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『内匠諏訪前・内匠日影岡地遺跡』1992
 - 41 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『内匠上之宿遺跡』1993
 - 42 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『白倉下原・天引向原遺跡Ⅱ～Ⅴ』1994～
 - 43 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『善慶寺早道場遺跡』1994
 - 44 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『下高瀬上之原遺跡』1994
 - 45 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『中高瀬観音山遺跡』1995
 - 46 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『内匠日向岡地、下高瀬寺山遺跡』1995
 - 47 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『田輪塚原遺跡、福島駒形遺跡、福島鹿島下遺跡、福島椿森遺跡』1998
 - 48 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『甘楽条里遺跡(大山前地区)、福島椿森遺跡』2000
 - 49 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『甘楽条里遺跡(庭谷深町地区)、甘楽条里遺跡(石大町地区)、塚田遺跡・田島遺跡』2009
 - 50 群馬県立博物館『舊遺跡』1964

第3章 富岡清水遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

本調査で検出された遺構には、縄文・弥生時代のものとして、縄文時代後期前葉の竪穴住居および敷石住居が3棟、縄文ないし弥生時代の竪穴住居1棟、土坑7基、ピット28基がある。また、奈良・平安時代の遺構として、竪穴住居が29棟、掘立柱建物1棟、土坑20基、溝(用水路含む)40条、As-B下水田、As-B下畠、高田川の氾濫によると考えられる洪水層、中世以降の掘立柱建物2棟、道路状遺構、溝1条、畠といった各時代の様々な遺構がある。出土した遺物は、遺構および遺物包含層から縄文時代後期および弥生時代中期の土器・石器を多く出土し、さらに奈良・平安時代の住居からも多くの土器が出土している。

一方、本調査地の西側隣接地において、同じ富岡清水遺跡として平成6年に店舗拡張工事に伴う発掘調査が、平成21年に(主)前橋安中富岡線地域活力基盤創造交付金事業に伴う発掘調査が富岡市教育委員会によって行われており、その際に縄文時代後期の竪穴住居および土坑、平安時代の竪穴住居、土坑、溝等の遺構が検出され、自然科学分析からAs-B直下層での稲作の可能性が指摘されていた。

こうした各調査の状況を踏まえると、本遺跡における縄文時代の遺構は、大きく蛇行する高田川右岸の台地端部に営まれた後期初頭から前葉にかけての集落であることが推測できる。また、弥生時代中期の土器の存在から、近接地に同時期の遺構が点在する可能性が極めて高い。古墳時代については不明であるが、奈良・平安時代になると集落が営まると共に、水田や畠といった生産遺構の存在が明確となる。さらに、用水路と考えられる大溝や用水堰跡が検出されていることから、この地域では古代段階で用水路を含めた水利が進んでいたことを窺い知る良例といえよう。

第2節 縄文・弥生時代の遺構と遺物

本調査で検出された縄文時代の遺構は、その多くがE区に集中し、遺物包含層ならびに散布範囲は全体に広がるものの、その出土量はE区に多くが偏る。弥生時代の遺構は検出されていないが、遺物の散布は広く、D区に最も出土量が多い。

平成21年に富岡市教育委員会が発掘調査した地点は、本調査地E区の西側隣接地であり、縄文時代後期初頭の住居が検出されたのは、最もE区に寄った位置からである。この調査での弥生時代の遺構・遺物の報告はない。

周辺の遺跡をみると、本遺跡が位置する高田川右岸の七日市から曾木に至る地域では、七日市観音前遺跡で縄文時代中期中葉から後半にかけての竪穴住居や土坑、弥生時代中期の再産器が調査されている。七日市六反田遺跡では、弥生時代中期の包含層と弥生時代後期の土坑。七日市小沢西遺跡では、縄文時代中期後半から後期初頭にかけての竪穴住居と土坑。曾木森裏遺跡では、縄文時代前・中・晩期の竪穴住居と土坑、埋め巻が調査されている。さらに、高田川左岸の黒川伽藍堂遺跡で弥生時代後期の竪穴住居が調査されている。

1 竪穴および敷石住居

本調査で検出された縄文・弥生時代の住居は計5軒で、縄文時代後期前葉期の竪穴住居2軒と敷石住居2軒、時期不明な竪穴住居1軒がある。これらの住居が検出された調査区は、E区に4軒、B区に1軒である。

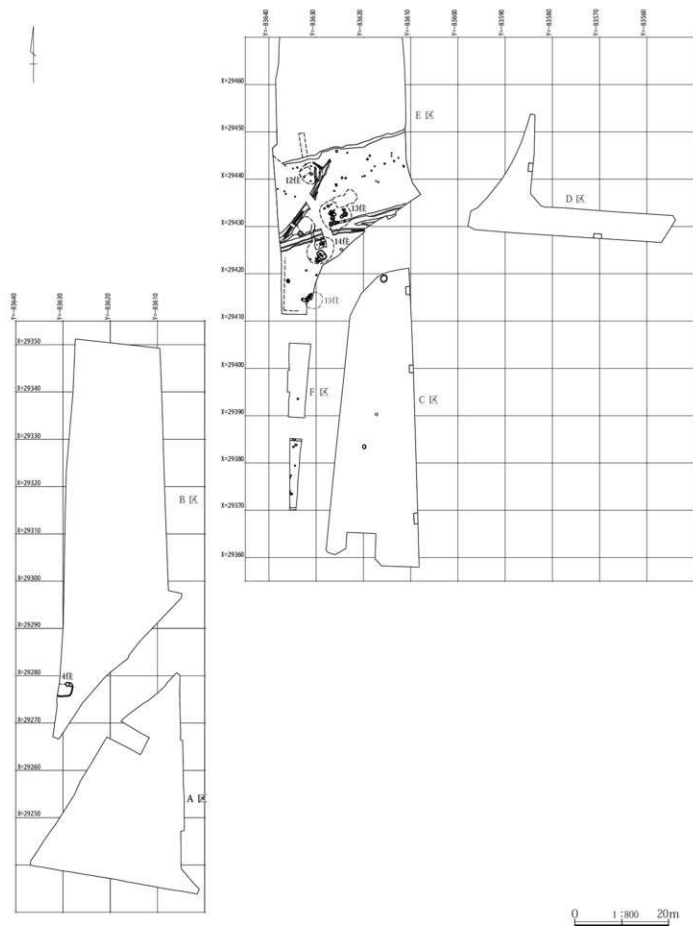
以下、各遺構ごとに記載する。

B区4号住居 (第10図、PL7)

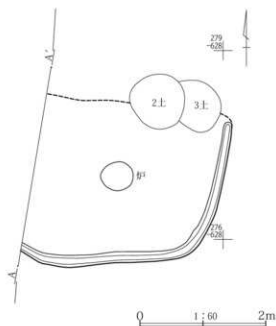
位置：B区南側の西壁際に位置する。

(座標) X軸=29,275 ~ 29,278 Y軸=-83,627 ~ 83,631

重複：B区2・3号土坑と重複するが、本住居はB区2面調査時に検出されたことから、本住居の方が古い。



第9図 縄文・弥生時代遺構配置図



第10図 B区4号住居平面図・炉

形状：住居の西側は調査区外となり、北側は不明。不整形な円形ないし隅丸方形と考えられる。

規模：径4m前後 壁高17cm

床面：床面はほぼ平坦。東側から南側にかけて幅15cm、深さ7cmの壁溝が巡る。

炉：住居中央の南寄りに被熱した焼土を確認した。径50cmほどの円形。

所見：出土遺物がなく根拠に欠けるが、検出状況や炉の存在等から縄文時代の住居である可能性が高い。

E区12号住居（第11図、第2表、PL.17・18・21）

位置：E区南側の西寄りに位置し、南東5mにE区13号住居、南13mに14号住居がある。

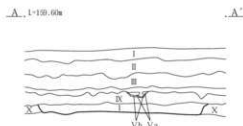
（座標）X軸=29,439～29,443 Y軸=83,629～83,633

重複：本住居の南西部をE区2号河道と重複する。新旧は不明な点もあるが、E区2号河道からは弥生時代の土器が出土していることから、本住居の方が古いと考えられる。

形状：住居形状は不明であるが、柱穴の配置から円形を呈すると考えられる。

規模：径5.0m前後と推定

炉：調査時にはE区6号土坑として調査を行った。無文の胴下半を用いた土器埋設炉で、径55cm、深さ25cmの掘り方をもち、壁の上部は焼土化している。その埋土には、暗褐色土とロームや焼土塊を多く含む鈍い黄褐色土が主体となっている。



B区4号住居

I 黒褐色土 As-A含む。（泥礫混作土）

II 褐色土 As-Aを多量に含む。

III 暗褐色土 As-AとAs-Aを微量含む。

Va 黄灰色土 As-B一次堆積。

Vb 灰色土 As-B一次堆積。灰色細粒火山灰。

IX 黒褐色土 As-Cと思われる白色軽石を少量、黄褐色軽石を微量含む。

X 黒褐色土 白色軽石・黄褐色軽石を中量含む。

I 黒褐色土 ロームブロック、白色軽石を少量含む。

柱穴：P1～5までを検出したが、6本柱であることが想定される。柱穴内の埋没土は、暗褐色土ないし鈍い黄褐色土である。

遺物：炉内の埋設土器1点と剥片1点のみである。

所見：埋設土器から縄文時代後期前葉期の住居と考えられる。

E区13号住居（第12～14図、第3表、PL.17・21）

位置：E区南側に位置し、北西5mにE区12号住居、南西2mに14号住居がある。

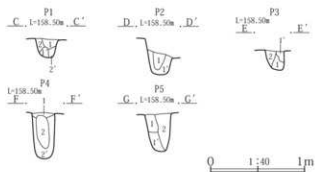
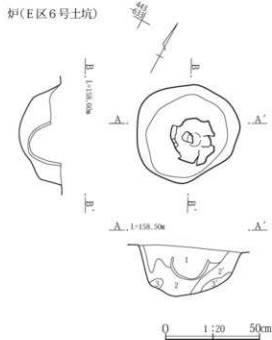
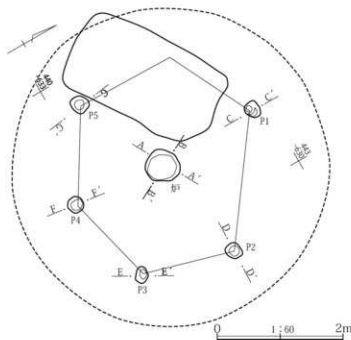
（座標）X軸=29,430～29,435 Y軸=83,624～83,629

重複：本住居の南側をE区1号河道と重複する。新旧は不明な点もあるが、E区2号河道からは弥生時代の土器が出土していることから、本住居の方が古いと考えられる。また、土器埋設炉と考えられるE区10号土坑の存在から、本住居は複数軒の重複である可能性をもつ。

形状：住居形状は不明であるが、円形を呈するものと考えられる。

規模：径6.0m前後と推定

炉：調査時にはE区5号土坑として調査を行った。2個体の胴下半を用いた土器埋設炉で、径85cm、深さ36cmの掘り方をもち、壁の上部は焼土化している。その埋土には、焼土粒を多く含む暗赤褐色土や暗褐色土が主体となっている。なお、北隣にはE区10号土坑があり、壁が焼土化し、完形土器を埋設していることから重複する住居の炉である可能性をもつ。

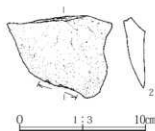
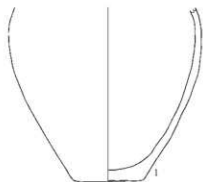


E区12号住居 炉(E区6号土坑)

- 1 暗褐色土 焼土・炭化物粒を少量含む。締り強い粘質土。
- 2 鈍い黄褐色土 ローム・焼土塊を多く含む。締り強い。
- 2' 鈍い黄褐色土 2層よりロームの混入少なく、焼土粒を多く含む。
- 3 赤褐色土焼土 焼土塊が主体。
- 3' 赤褐色土 被熱したロームが主体。

E区12号住居 P1~5

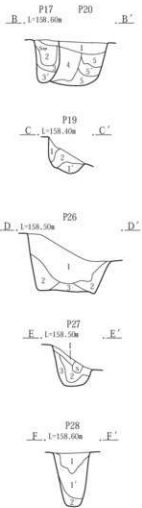
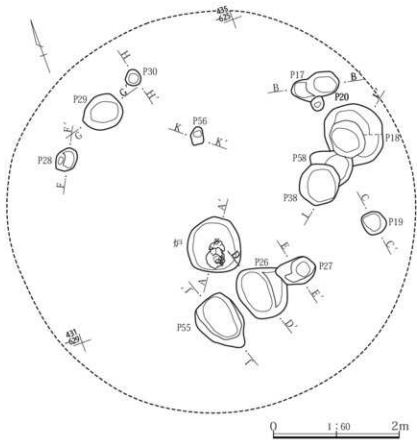
- 1 暗褐色土 炭化物粒を含む。やや締りの強い粘質土。
- 1' 暗褐色土 1層よりローム塊・粒を多く含む。
- 2 鈍い黄褐色土 ローム塊を多量に含む。
- 2' 鈍い黄褐色土 ローム塊が主体。



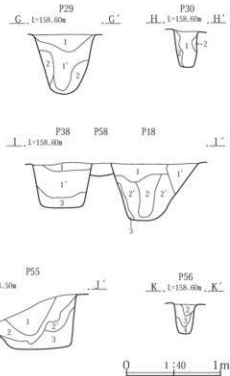
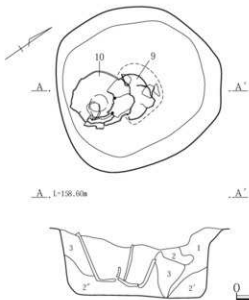
第11図 E区12号住居・炉、出土遺物

第2表 E区12号住居出土遺物観察表

土器類		出土位置				胎土/焼成/色調		文様の特徴等		備 考	
種別番号 図版番号	No.	器形	部位	出土位置	胎土/焼成/色調						
第11図 Pl.21	1	深鉢	胴中位~ 底部1/2	炉 (6号土坑)	粗砂、 細礫、 黒色粒/粗 良好	胴中位で内湾する。無文。底径7.3cm。				後期前葉	
石器		器種 形態・素材		出土位置		長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第11図 Pl.-	2	使用痕ある剥 片幅広刮片		埋土		6.5	8.3	1.7	61.6	左辺側エッジが使用され、これにより生じた小剥離面がある。	珉質頁岩



炉(E区5号土坑)



E区13号住居 炉(E区5号土坑)

- 1 暗褐色土 焼土粒を不均等を含む。粘質土で締りあり。
- 2 暗赤褐色土 焼土粒を多く含む。1層に比べて締りが弱い。
- 2' 暗赤褐色土 焼土や灰の混入が多く、最も赤く締り強い。
- 2'' 暗赤褐色土 焼土粒を多量を含む。締り弱い。
- 3 暗褐色土 1層に類似するが、焼土がやや多い。粘質土。

第12図 E区13号住居・炉

第3章 富岡清水道跡の調査

E区13号住居 P17・20 B-B'

- 1 暗褐色土 焼土粒、白色軽石を含む。締り強い粘質土。
- 2 暗褐色土 黒色土、ローム塊を多量に含む。
- 3 黄褐色土 ローム塊を多量に含む。締り強い。
- 3' 黄褐色土 黒色土を主に、ローム小塊を混入。
- 4 暗褐色土 1層に類似し、焼土粒、白色軽石を多量に含む。
- 5 鈍い黄褐色土 ローム小塊を少量含む。
- 5' 鈍い黄褐色土 ローム塊を多量に含む。

E区13号住居 P28 F-F'

- 1 暗褐色土 白色軽石、炭化粒を含む。小塊が混在。
- 1' 暗褐色土 やや大粒の炭化粒を含む。
- 2 鈍い黄褐色土 多量のローム塊を含む。

E区13号住居 P29 G-G'

- 1 暗褐色土 ローム・炭化粒を含む。締り強い。傘大の礫が混在。
- 1' 暗褐色土 1層より混入物を含む。
- 2 鈍い黄褐色土 ロームと暗褐色粘質土の混合土。

E区13号住居 P18 I-I'

- 1 に近い黄褐色土 ローム塊を主体に、黒色土を混入。
- 2 暗褐色土 白色軽石、焼土、炭化物粒を含む。締り強い。
- 2' 暗褐色土 ローム塊を多量に含む。
- 3 黄褐色土 ローム主体で、黒色土を少量含む。締り強い。

E区13号住居 P30 H-H'

- 1 暗褐色土 白色軽石、焼土・炭化粒を含む。締りある粘質土。
- 2 鈍い黄褐色土 ローム主体。

E区13号住居 P19 C-C'

- 1 暗褐色土 白色軽石を多量に含む。締り強い。
- 1' 暗褐色土 1層よりローム塊を多く含む。
- 2 黄褐色土 ローム塊を含む。締り強い粘質土。

E区13号住居 P38 I-I'

- 1 鈍い黄褐色土 ローム塊をやや多く含む。粘質土。
- 1' 鈍い黄褐色土 白色軽石、焼土粒を少量、ローム塊を多量含む。
- 1'' 暗褐色土 ローム少なく、焼土・炭化粒を含む。硬く締まる。
- 2 暗褐色土 ローム小塊を少量混入する。

E区13号住居 P26 D-D'

- 1 暗褐色土 白色軽石、ローム塊、焼土・炭化粒を含む。締り強い。
- 2 褐色土 ローム塊を多量、炭化物を少量含む。
- 3 暗褐色土 1層と類似するが、ローム塊を少量含むのみ。

E区13号住居 P55 J-J'

- 1 暗褐色土 白色軽石、ローム塊を多量に含む。粘質土。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが、ローム塊を少量含む。
- 2' 暗褐色土 白色軽石を少量含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒、炭が礫が混入する。締り弱い。

E区13号住居 P27 E-E'

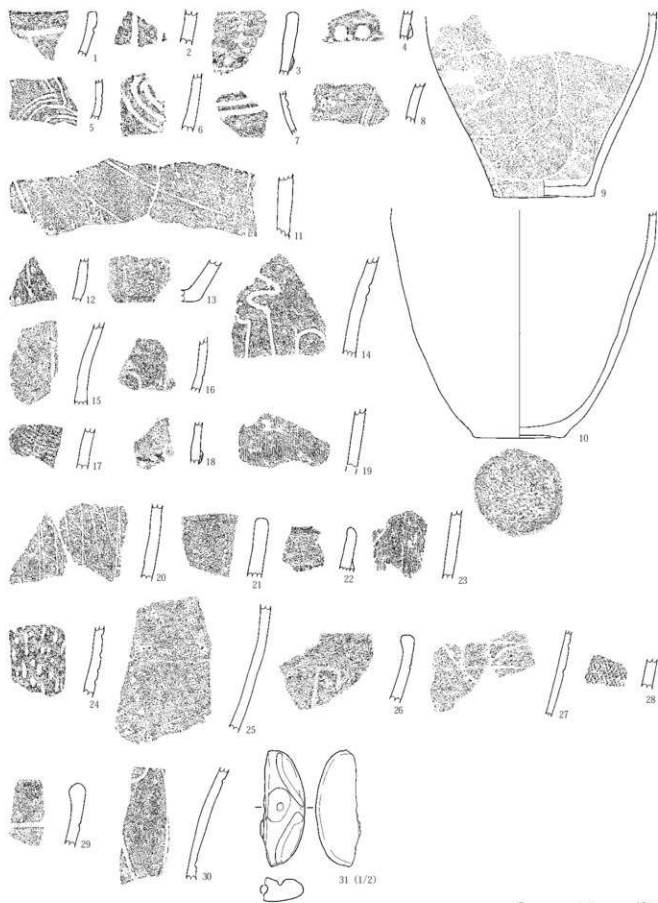
- 1 暗褐色土 白色軽石、焼土粒を少量含む。締り強い。
- 2 鈍い黄褐色土 白色軽石、焼土粒を少量、ローム塊を多量含む。
- 3 暗褐色土 炭化物粒、焼土粒を少量含む。粘質土。

E区13号住居 P56 K-K'

- 1 暗褐色土 焼土とロームの混合土。粘質土。
- 2 暗褐色土 白色軽石、ローム粒を含む。締り強い。
- 3 暗褐色土 2層より黒味、粘質が強い。白色軽石を少量含む。
- 4 鈍い黄褐色土 ローム塊を多く含む。粘質土。

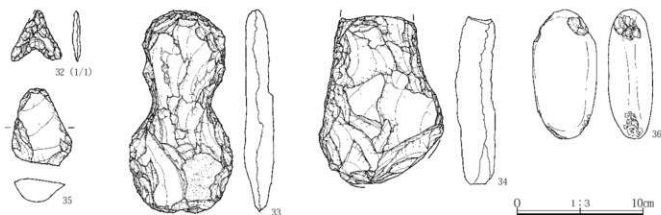
第3表 E区13号住居出土遺物観察表

調査番号 採取番号	No.	器形	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備 考
第139号 PL-21	1	深鉢	口縁部破片	埋土	粗砂/橙/良好	帯状沈線によるモチーフを描く。	称名寺式
第139号 PL-21	2	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、黒色粒/橙/良好	縦位帯状沈線を施す。	称名寺式
第139号 PL-21	3	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、細礫/橙/良好	口縁下に押捺を施した隆帯をめぐらす。	称名寺式
第139号 PL-21	4	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂/灰黄濁/ふつう	口縁下に押捺を施した隆帯をめぐらす。	称名寺式
第139号 PL-21	5	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、チャート/橙/良好	集合沈線による弧状懸垂文を描く。	堀之内1式
第139号 PL-21	6	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂/橙/ふつう	3条沈線による弧状懸垂文を施す。	堀之内1式
第139号 PL-21	7	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、チャート/橙/良好	屈曲部に横位2条の沈線をめぐらす。	堀之内1式
第139号 PL-21	8	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、黒色粒/黒濁/ふつう	斜位の条線を施す。	後期前葉
第139号 PL-21	9	深鉢	胴下位～ 底部/3	5 ^号 (5号上坑)	粗砂、チャート/橙/良好	無文。縦位の調整痕が見られる。底径10.0cm。	後期前葉
第139号 PL-21	10	深鉢	胴中位～ 底部/2	5 ^号 (5号上坑)	粗砂、チャート/橙/良好	無文。底面に副代痕。底径9.5cm。	後期前葉
第139号 PL-21	11	深鉢	胴部破片	5 ^号 (5号上坑)	粗砂、チャート/橙/良好	縦位、斜位の沈線を施す。	堀之内1式
第139号 PL-21	12	深鉢	胴部破片	29号ピット	粗砂、黒色粒/橙/ふつう	縦位沈線を施す。	称名寺式
第139号 PL-21	13	深鉢	底部破片	29号ピット	粗砂、黒色粒/橙/ふつう	残存部は無文。	後期前葉
第139号 PL-21	14	深鉢	胴部破片	17号ピット	粗砂、チャート細礫/ 赤濁/ふつう	帯状沈線によるモチーフを描く。	称名寺式
第139号 PL-21	15	深鉢	胴部破片	17号ピット	粗砂、細礫、黒色粒/明 赤濁/ふつう	縦位沈線を施す。	称名寺式
第139号 PL-21	16	深鉢	胴部破片	17号ピット	粗砂、チャート/橙/良好	帯状沈線によるモチーフを描く。	称名寺式
第139号 PL-21	17	深鉢	胴部破片	17号ピット	粗砂、黒色粒/灰黄濁/ふ つう	帯状沈線によるモチーフを描き、L・Rを充填施文する。	称名寺式
第139号 PL-21	18	深鉢	胴部破片	17号ピット	粗砂、黒色粒/黒濁/ふつ う	刺突を施した隆帯をめぐらす。	称名寺式
第139号 PL-21	19	深鉢	胴部破片	17号ピット	粗砂、黒色粒/ふい/橙/ 良好	縦位条線を施す。	称名寺式
第139号 PL-21	20	深鉢	胴部破片	19号ピット	粗砂、細礫、チャート/ ふい/橙/良好	縦位、斜位の沈線を施す。	堀之内1式



第13図 E区13号住居出土遺物(1) 9~11 E区5号土坑

第3章 富岡清水遺跡の調査

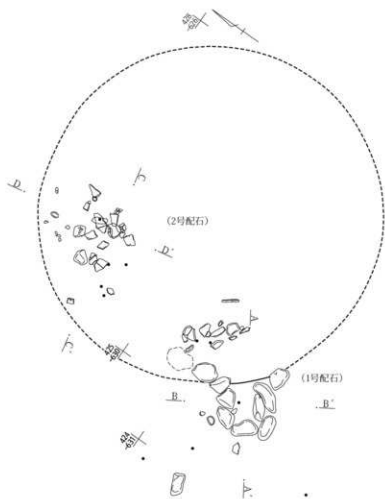


第14図 E区13号住居出土遺物(2)

種別番号 図版番号	No.	器形	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	摘要
第13図 PL.21	21	深鉢	口縁部破片	26号ピット	粗砂、黒色粒/橙/ふつう	無文。	後期前葉
第13図 PL.21	22	深鉢	口縁部破片	26号ピット	粗砂、黒色粒/橙/ふつう	口縁下に隆線をめぐらす。	称名寺式
第13図 PL.21	23	深鉢	胴部破片	26号ピット	粗砂、細礫、黒色粒/橙/ふつう	斜位の沈線を施す。	称名寺式
第13図 PL.21	24	深鉢	胴部破片	26号ピット	粗砂/橙/ふつう	列点を密に施文する。	堀之内1式
第13図 PL.21	25	深鉢	胴部破片	27号ピット	粗砂、黒色粒、チャート/黒地/ふつう	無文。	後期前葉
第13図 PL.21	26	深鉢	口縁部破片	28号ピット	粗砂、黒色粒/橙/良好	口縁内面肥厚。縦帯状沈線を施す。	称名寺式
第13図 PL.21	27	深鉢	胴部破片	38号ピット	粗砂/にぶい/橙/良好	斜行する帯状沈線を施す。	称名寺式
第13図 PL.21	28	深鉢	胴部破片	38号ピット	粗砂、黒色粒/橙/良好	帯系文1を縦帯施文する。	晩期後半
第13図 PL.21	29	深鉢	口縁部破片	56号ピット	粗砂、チャート細礫/橙/ふつう	口縁内面肥厚。横位沈線をめぐらす。	称名寺式
第13図 PL.21	30	深鉢	胴部破片	56号ピット	粗砂、チャート細礫/橙/ふつう	29と同一個体。帯状沈線によるモチーフを描く。	称名寺式
第13図 PL.21	31	土製品	1/2	56号ピット	粗砂、黒色粒/橙/良好	楕円形を呈し、表面には刺突をもつボタン状貼付が配され、縦位の太い沈線と弧線を描く。裏面は無文。側面の上下方向に孔が貫通。長さ6.1cm、幅(2.3)cm、厚さ1.1cm。	後期前葉

種別番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第14図 PL.21	32	石鍋 凹形基座	埋土	1.3	1.3	0.2	0.3	完成状態。先端部左辺部を破損する。衝撃的離か。	チャート
第14図 PL.21	33	打製石斧 分銅型	埋土	15.9	8.1	2.3	326.3	完成状態。エッジ・側面の縁はシャープで、摩耗面等は見られない。未使用。	珪質頁岩
第14図 PL.21	34	打製石斧 石鏃	埋土	(13.2)	9.8	3.2	430.6	未製品？両側縁のエッジはシャープ。種の摩耗等は見られない。上端側部・下端側部を欠損する。	粗粒輝石安山岩
第14図 PL.21	35	加工面ある薄片 幅広薄片	埋土	6	4.7	1.9	51.3	加工意図：削器	硬質泥岩
第14図 PL.21	36	巖石 楕円形	埋土	10.2	5.1	3.5	226.3	上下内端の小口部に近い側縁に打痕が残る。裏面側には縦糸痕が残る。砥石として再利用されたものだろう。	デイサイト

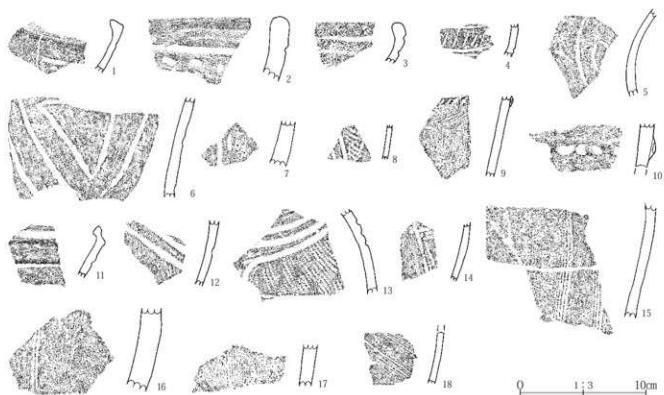
第2節 縄文・弥生時代の遺構と遺物



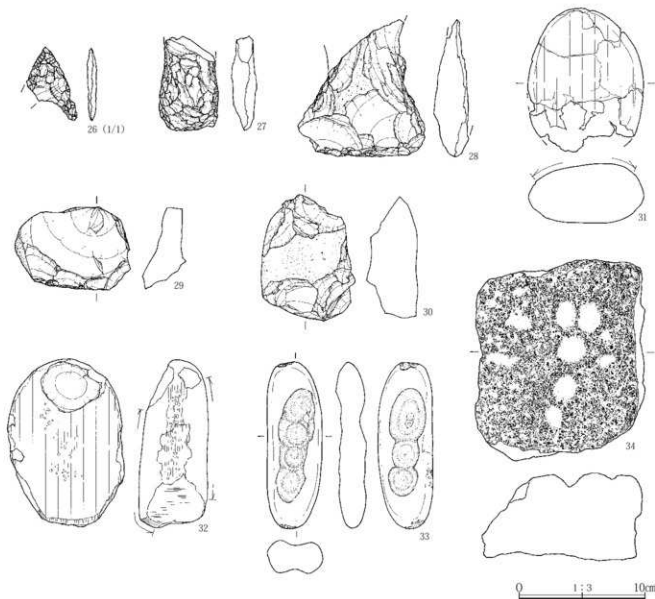
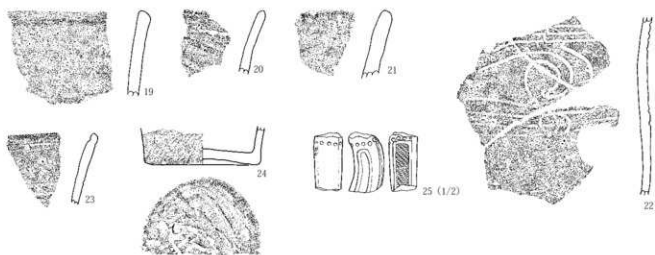
E区14号住居(E区1・2号配石)

- 1 暗褐色：白色軽石を全体に含む。締まり強い。
2 暗褐色：1層と類似するが、褐色土塊を少量含む。

0 1:60 2m



第15図 E区14号住居平面図、出土遺物(1)

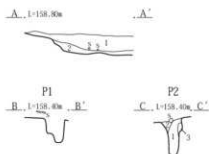
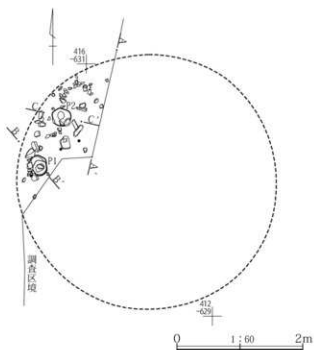


第16図 E区14号住居出土遺物(2)

第4表 E区14号住居出土遺物観察表

種類 土器類	No.	器形	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	摘要
第15図 PL.22	1	深鉢	口縁部破片	(2配石)	粗砂、黒色粒/明赤褐/ふつつ	波状口縁。帯状沈線によるモチーフを描き、列点を充填施文する。	称名寺式
第15図 PL.22	2	深鉢	口縁部破片	(2配石)	粗砂、細礫、黒色粒/粗/良好	横位帯状沈線を施し、列点を充填施文する。	称名寺式
第15図 PL.22	3	深鉢	口縁部破片	(1配石)	粗砂、細礫/明褐/ふつつ	横位帯状沈線を施す。	称名寺式
第15図 PL.22	4	深鉢	胴部破片	(1配石)	粗砂/明赤褐/ふつつ	弧状の帯状沈線を施し、斜位の短沈線を充填施文する。	称名寺式
第15図 PL.22	5	深鉢	胴部破片	(2配石)	粗砂、黒色粒、石莖/粗/ふつつ	帯状沈線による弧状モチーフを描く。	称名寺式
第15図 PL.22	6	深鉢	胴部破片	(2配石)	粗砂、黒色粒/黒褐/良好	帯状沈線による三角形モチーフを描く。	称名寺式
第15図 PL.22	7	深鉢	胴部破片	(2配石)	粗砂、細礫/粗/ふつつ	斜位の帯状沈線を施し、列点を充填施文する。	称名寺式
第15図 PL.22	8	深鉢	胴部破片	(1配石)	粗砂、チャート/にぶい赤褐/良好	縦位沈線を施し、LRを充填施文する。	称名寺式
第15図 PL.22	9	深鉢	胴部破片	(1配石)	粗砂、黒色粒/明赤褐/良好	斜位の刻みを付した隆帯をめぐらす。	称名寺式
第15図 PL.22	10	深鉢	胴部破片	(2配石)	粗砂、チャート/にぶい赤褐/ふつつ	隆帯を短く内折。内折部、屈曲部下に沈線をめぐらす。	堀之内1式
第15図 PL.22	11	深鉢	口縁部破片	(1配石)	粗砂、黒色粒/粗/良好	口縁が短く内折。内折部、屈曲部下に沈線をめぐらす。	堀之内1式
第15図 PL.22	12	深鉢	胴部破片	(2配石)	粗砂、細礫/にぶい赤褐/ふつつ	斜行する沈線を施す。	堀之内1式
第15図 PL.22	13	深鉢	胴部破片	(2配石)	粗砂、黒色粒/にぶい赤褐/良好	沈線による横位、曲線モチーフを描き、LRを充填施文する。	堀之内1式
第15図 PL.22	14	深鉢	胴部破片	(1配石)	粗砂、黒色粒/粗/良好	斜行する沈線を施す。	堀之内1式
第15図 PL.22	15	深鉢	胴部破片	(1配石)	粗砂、チャート細礫/粗/ふつつ	条線を縦位帯状施文する。	後期前葉
第15図 PL.22	16	深鉢	胴部破片	(2配石)	粗砂、黒色粒/粗/良好	縦位、斜位の条線を施す。	後期前葉
第15図 PL.22	17	深鉢	胴部破片	(2配石)	粗砂/粗/ふつつ	条線を縦位帯状施文する。	後期前葉
第15図 PL.22	18	深鉢	胴部破片	(2配石)	粗砂、黒色粒、チャート/明赤褐/良好	集合沈線を斜位に帯状施文する。	後期前葉
第16図 PL.22	19	深鉢	口縁部破片	(1配石)	粗砂、チャート細礫/浅黄褐/ふつつ	無文。	後期前葉
第16図 PL.22	20	深鉢	口縁部破片	(1配石)	粗砂、黒色粒/にぶい赤褐/ふつつ	無文。横位の器面調整による凹凸目立つ。	後期前葉
第16図 PL.22	21	深鉢	口縁部破片	(1配石)	粗砂、黒色粒/粗/ふつつ	無文。横位の器面調整による凹凸目立つ。	後期前葉
第16図 PL.22	22	深鉢	胴部破片	(1配石)	粗砂、チャート、片岩/粗/良好	3条沈線をめぐらして区画。区内に帯状沈線によるワラビ文を描く。上位の区画帯に切り履線、下位の区画帯にの字文を施す。	堀之内2式
第16図 PL.22	23	深鉢	口縁部破片	(1配石)	粗砂/粗/良好	横位沈線をめぐらす。器面磨減。	堀之内2式
第16図 PL.22	24	深鉢	底部破片	(1配石)	粗砂、黒色粒、細・中礫/粗/ふつつ	LRを横位施文する。底面はナゾリ状の調整による凹凸顕著。底径8.5cm。	晚期後半か
第16図 PL.22	25	土製品	破片	(1配石)	粗砂、黒色粒/粗/ふつつ	正面に長方形、左側面に長楕円形のモチーフを描き、正面のみLRを充填施文する。割欠を埋めさせるが、右側面のみ施文されない。	後期前葉

種類 石器	No.	器種・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第16図 PL.22	26	石錘 凹基無茎錘	(1配石)	(2.0)	1.4	0.3	0.5	完成状態。左辺側の返し部を欠損する。	黒曜石
第16図 PL.22	27	打製石斧 短型型	(1配石)	(7.3)	4.7	2.0	78.1	完成状態。対部摩耗が部分的に残る。上半部を欠損。	硬質泥岩
第16図 PL.22	28	打製石斧 分銅型?	(1配石)	(10.9)	10.1	(2.6)	202.2	未製品?右辺側縁の加工は裏面側加工に切られ、石斧が製作上にて破損したことを示している。	硬質泥岩
第16図 PL.22	29	磨製 幅広剥片	(1配石)	6.5	9.1	3.4	207.7	裏面側・剥片端部を加工して直線的対部を作出する。	硬質泥岩
第16図 PL.22	30	石核 扁平錘	(2配石)	9.9	7.4	4.0	339.5	表裏面で幅広剥片を剥離する。	硬質泥岩
第16図 PL.22	31	磨石 楕円錘	(2配石)	(11.4)	9.2	4.9	621.0	焼熟してヒビ割れ、下端部を欠く。背面側のみ部分的に摩耗面が残る。	粗粒輝石安山岩
第16図 PL.22	32	磨石 楕円錘	(2配石)	13.2	9.1	5.5	947.5	表裏面とも摩耗が著しい。左側縁に最打痕。上端側欠損痕も磨石として使用されているが、裏面側には摩耗面を切る蒸熱差融痕がある。	粗粒輝石安山岩
第16図 PL.22	33	石製品 棒状石	(2配石)	13.1	4.3	2.7	250.9	表裏面とも面状を呈する孔を連結する。孔内面は平滑に整形されているが、回転穿孔によるものではない。小1部の上端に最打痕が残る。	緑色片岩
第16図 PL.22	34	多孔石 垂向棒?	(2配石)	15.8	13.3	7.1	1587.7	背面側・左辺側に孔を穿つ。裏面側は蒸熱破損。	凝灰質砂岩

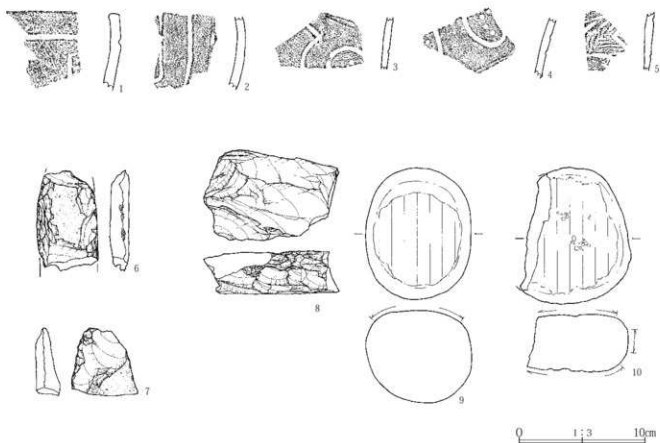


E区15号住居(E区3号配石)

- 1 暗褐色土 白色輝石を多量に含む。締まり強い。
- 2 褐色土 黄褐色土粒を含む。やや粘質。

E区15号住居 P2 C-C'

- 1 暗褐色土 黄褐色土粒を少量含む。粘性強く、締まりあり。
- 2 黄褐色土 黄褐色土塊を多量に含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色土粒を含む。粘性強い。



第17図 E区15号住居平面図、出土遺物

第5表 E区15号住居出土遺物観察表

種別	No.	器形	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	摘要
第177図 PL.22	1	深鉢	口縁部破片	(3配石)	粗砂/ぶい赤褐/良好	帯状沈線によるモチーフを描き、L・Rを充填施文する。	称名寺式
第177図 PL.22	2	深鉢	胴部破片	(3配石)	細砂、黒色粒/粗/ふつつ	帯状沈線によるモチーフを描き、L・Rを充填施文する。	称名寺式
第177図 PL.22	3	深鉢	胴部破片	(3配石)	粗砂、黒色粒/灰黄褐/ふつつ	帯状沈線によるモチーフを描き、L・R、列点を充填施文する。	称名寺式
第177図 PL.22	4	深鉢	胴部破片	(3配石)		3と同一個体。	称名寺式
第177図 PL.22	5	深鉢	胴部破片	(3配石)	粗砂、黒色粒/ぶい粗/良好	帯状沈線によるモチーフを描き、L・Rを充填施文する。	堀之内2式

種別	No.	器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第177図 PL.23	6	打製石斧 初期型	(3配石)	(7.9)	4.9	1.6	91.5	完成状態。両側縁とも敲打・摩耗痕あり。上下両端を欠損。	変玄武岩
第177図 PL.23	7	削器 横長割片	(3配石)	(5.3)	5.3	1.9	46.6	左辺側縁縁に浅い割離を施し、直線対角部を作出する。	硬質泥岩
第177図 PL.23	8	石核 板状割片	(3配石)	7.1	10.6	3.4	305.7	小口部で幅広い割片を剥離する。	粗粒輝石安山岩
第177図 PL.23	9	磨石 球形磨	(3配石)	10.3	8.2	7.3	738.9	背面側は激しく使い込まれ、平坦面が形成されている。礫面は風化が著しい。	粗粒輝石安山岩
第177図 PL.23	10	磨石 楕円磨	(3配石)	10.7	(8.8)	4.5	527.3	表面側とも弱く摩耗する。被熱して破損。	粗粒輝石安山岩

柱穴：本住居を推定した範囲内からは、13基のピットが検出されているが、本住居に伴う柱穴は確定し難い。

遺物：炉内の埋設土器2点と炉周辺から土器片および土製品が出土し、石器には石鏃や打製石斧、敲石および割片等がある。

所見：埋設土器から縄文時代後期前葉期の住居と考えられる。

E区14号住居 (第15図、第4表、PL.18・22)

調査時はE区1・2号配石として調査を行ったが、整理作業の段階で敷石住居とした。

位置：E区南端付近に位置し、北東2mにE区13号住居、南7mにE区15号住居がある。

(座標)X軸=29,421～29,427 Y軸=83,625～83,630

重複：本住居の南西部をE区9号土坑と重複する。本住居の敷石の一部がE区9号土坑の上に検出されていることから、本住居の方が新しいと考えられる。

形状：住居形状は柄鏡形敷石住居であり、入り口となる柄部は南西側につく。しかし、敷石の大半は失われ、残存する敷石は南西部から西側に欠けての一部で、住居の東半は不明。

規模：径5.0m前後と推定

床面(敷石)：調査時にE区2号配石とした西側に残存する敷石には板状の石が多く用いられ、E区1号配石とした南西側の柄部では大型の扁平楕円礫が用いられている。

遺物：敷石の周辺から縄文時代後期の土器片および土

製品が出土し、石器には石鏃や打製石斧、磨り石、凹石、多孔石および割片等がある。

所見：出土した土器から縄文時代後期前葉期の住居と考えられる。

E区15号住居 (第17・20図、第5表、PL.22)

調査時はE区3号配石として調査を行ったが、整理作業の段階で敷石住居とした。

位置：E区南端の壁際に位置し、北7mにE区14号住居がある。

(座標)X軸=29,412～29,416 Y軸=83,627～83,632

形状：住居の大半は調査区外となり、調査できたのは住居北西部の一部のみである。住居形状は敷石住居で、柄鏡形となるかは不明。敷石の大半は失われ、残存する敷石は僅かである。

規模：径4.0m前後と推定 壁高16cm

埋設土：暗褐色土と黄褐色土粒を含む褐色土であることから、人為的堆積の可能性がある。

床面(敷石)・壁：残存する敷石には大振りの扁平楕円礫が用いられ、他に小振りの扁平楕円礫や小礫が散乱する。壁は傾斜をもって立ち上がる。

柱穴：壁に沿うように2基のピットを検出した。

遺物：埋土中から縄文時代後期の土器片が出土し、石器には打製石斧、磨り石および割片等がある。

所見：出土した土器から縄文時代後期前葉期の住居と考えられる。

2 土坑

検出された縄文時代の土坑は、C区で1基、E区で8基ある。分布の傾向は住居と同様に、台地の北端部となるE区に点在する。なお、E区の調査の際、住居の跡をも土坑として扱ったため、4～11号までの番号を付した。

以下、各土坑ごとに記載する。

C区15号土坑 (第18・20図、第6表、PL.11)

位置(座標)：X軸=29,419、Y軸=-83,616

C区唯一の縄文時代の遺構であり、2面調査時に検出された。E区と接するC区北端に位置し、径1.6m、深さ52cmを測り、円形を呈する。埋土には黒褐色土と鈍い黄褐色土が主となり、ロームブロックを多量に含むことから、人為的堆積と考えられる。底面は平坦で、埋土中からは遺物を多く出土させている。出土した主な遺物には、1の口縁部を欠く頸部下の個体や、8の楕円形の土製品があり、1～8の8点を図示した。出土土器から縄文時代後期前葉期の土坑と考えられる。

E区4号土坑 (第18・20図、第7表、PL.18)

位置(座標)：X軸=29,428、Y軸=-83,633

E区3面調査時に検出された。E区南側の西寄りに位置し、径1.05m、深さ35cmを測り、円形を呈する。埋土には焼土を主体とする赤褐色土と黒褐色土とが主となっていることから、人為的堆積と考えられる。底面は比較的平坦である。出土した遺物は、土器片が数点あるのみで、9を図示した。出土土器から縄文時代後期の土坑と考えられる。

E区5号土坑 (第12・13図)

E区13号住居の跡として扱った。

E区6号土坑 (第11図)

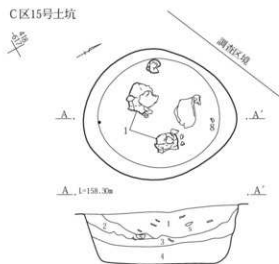
E区12号住居の跡として扱った。

E区7号土坑 (第19・20図、第8表、PL.18)

位置(座標)：X軸=29,419、Y軸=-83,636

E区3面調査時に検出された。E区南端付近の西壁寄りに位置し、長軸0.85m、短軸0.68m、深さ22cmを測り、楕円形を呈する。埋土は暗褐色土が主となり、埋土中に大型礫を出土させていることから、人為的堆積と考えられる。底面は比較的平坦である。出土した遺物はあま

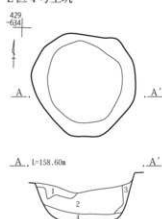
C区15号土坑



C区15号土坑

- 1 黒褐色土 白色軽石、炭化粒少量、焼土小ブロック微量含む。
- 2 黒褐色土 白色軽石、化粒少量含む。
- 3 黒褐色土 ロームブロック多量、炭化粒少量含む。
- 4 鈍い黄褐色土 黒褐色土小ブロック中量含む。しまり強い。

E区4号土坑



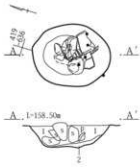
E区4号土坑

- 1 暗褐色土 焼土塊、焼土粒を多く、白色軽石を少量含む。細りなし。
- 2 赤褐色土 焼土が主体。空隙は柔らかい焼土。炭化物の混入少。
- 3 暗褐色土 やや大粒の焼土、炭化物粒を少量含む。粘質で細り強い。
- 4 黒褐色土 炭化物粒を多量に含む。シルト塊をブロック状に含む。



第18図 C区15号土坑、E区4号土坑

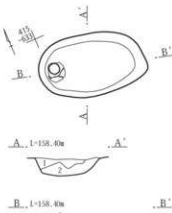
E区7号土坑



E区7号土坑

- 1 暗褐色土 白色軽石を含む。粘質土。
- 2 暗褐色土 1層にローム塊を混入。締りあり。

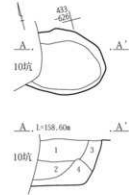
E区8号土坑



E区8号土坑

- 1 暗褐色土 ローム粒、白色軽石、炭化物を含む。締り強い粘質土。
- 2 暗褐色土 1層よりローム粒を多く含む。

E区11号土坑



E区11号土坑

- 1 黄褐色土 焼土やや多く、ローム粒を含む。締り強い。
- 2 暗褐色土 ローム小塊、焼土塊をやや多く含む。締り強い。
- 3 暗褐色土 黒色土塊が混入する。
- 4 暗褐色土 ローム塊・ローム粒を多く含む。

0 1:40 1m

E区9号土坑

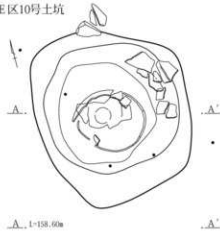


0 1:40 1m

E区9号土坑

- 1 暗褐色土 焼土、ローム小塊を含む。黄色味を帯びた粘質土。焼土粒、炭化物粒を少量含む。
- 2 黄褐色土 ローム塊を多量に含む。
- 3 暗褐色土 1層よりやや暗い。粘質土。
- 4 黒褐色土 やや締りない粘質土。
- 5 暗褐色土 ローム塊を少量混入する。粘質土。

E区10号土坑

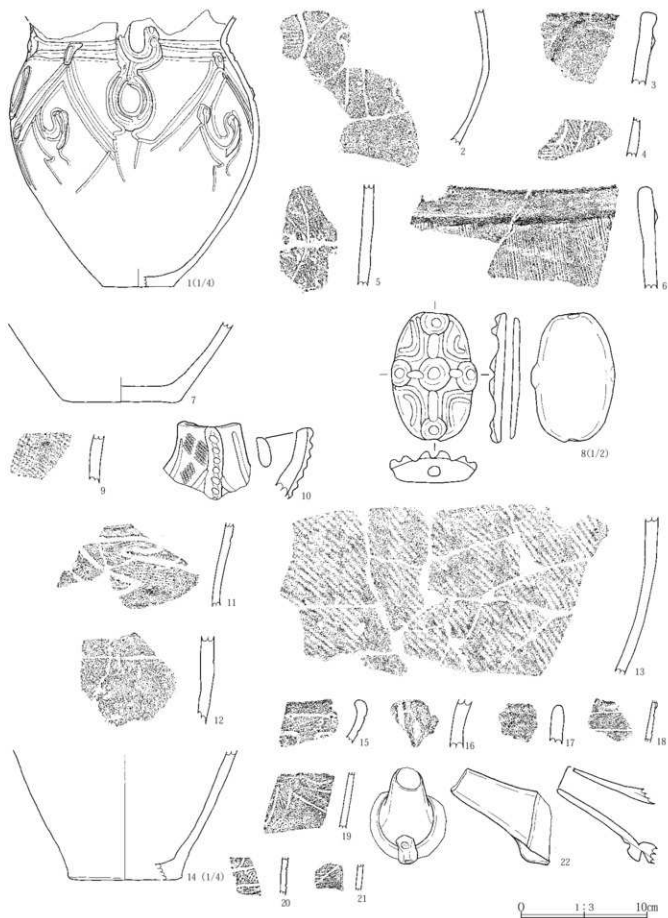


E区10号土坑

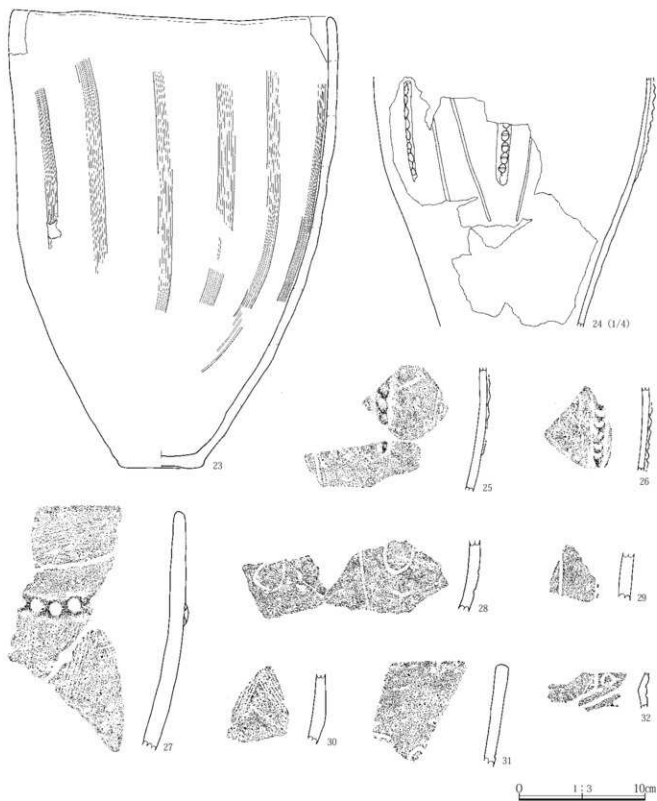
- 1 暗褐色土 細粒軽石を少量含む。粘質土。
- 2 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を多く含む。
- 3 黒色土 ローム粒を多量に含む。
- 4 黒褐色土 1層に類似する。締りあり。
- 5 黒色土 下半に焼土塊、炭化物を多量に含む。

0 1:20 50cm

第19図 E区7～11号土坑



第20図 土坑出土遺物(1) 1~8 C区15号土坑、9 E区4号土坑、10~13 E区7号土坑14 E区8号土坑、15~22 E区9号土坑



第21図 土坑出土遺物(2) 23～30E区10号土坑、31・32E区11号土坑

第3章 富岡清水道跡の調査

第6表 E区15号住居出土遺物観察表

土器類							
種別番号 図版番号	No.	器形	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	摘要
第20図 PL.23	1	深鉢	頸部~底部 3/4	埋土	粗砂、黒色粒、チャート 細礫/橙/ふつう	頸部に高文連繋文を伴う逆J字状隆帯を貼付、さらにその下にO字隆帯を連続させ、胴部におけながら沈線による懸文を施す。この単位文は2母形らしく、その一方の単位文は頸部の8字状付文から得られる逆J字状隆帯となる。単位文間は逆V字状に3条沈線を施し、中央に逆J字文を配す。逆J字文の端部には隆帯を貼付する。胴部にも3条沈線をめぐらす。底径3.0cm。	堀之内1式
第20図 PL.-	2	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、黒色粒/明赤濁/ふつう	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺式
第20図 PL.-	3	深鉢	口縁部破片	埋土	粗砂/橙/ふつう	口縁に接するように逆U字状の隆帯を垂下させる。	称名寺式
第20図 PL.-	4	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、黒色粒、チャート にふい/橙/ふつう	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺式
第20図 PL.-	5	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、チャート細礫/に ふい/橙/ふつう	弧状の沈線を施す。	称名寺式
第20図 PL.-	6	深鉢	口縁部破片	埋土	粗砂、黒色粒/橙/良好	口縁下に隆帯をめぐらし、隆帯下に縦位条線を充填施文する。	称名寺式
第20図 PL.-	7	深鉢	底部破片	埋土	粗砂、黒色粒、チャート 細礫/橙/ふつう	残存部は無文。器面調整による縦位の掘直目立つ。底径9.0cm。	後期前葉
第20図 PL.-	8	土製品	完形	埋土	粗砂、黒色粒/橙/良好	楕円形を呈し、表面には、中央と縦線に刺突をもつボタン状貼付が配され、貼付をつなぐ太い沈線、さらに二重の弧線が描く。裏面は無文。前面の上下方向に径5mmほどの孔が貫通。長さ6.6cm、幅4.4cm、厚さ1.5cm、重さ47.1g。	後期前葉

第7表 E区4号土坑出土遺物観察表

土器類							
種別番号 図版番号	No.	器形	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	摘要
第20図 PL.23	9	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、黒色粒、チャート 明赤濁/良好	RLを縦位施文する。	後期前葉

第8表 E区7号土坑出土遺物観察表

土器類							
種別番号 図版番号	No.	器形	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	摘要
第20図 PL.23	10	深鉢	口縁部破片	埋土	粗砂/橙/良好	胴中で内湾する。無文。底径7.3cm。	後期前葉
第20図 PL.23	11	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、黒色粒/にふい/橙/ ふつう	沈線で曲線的な文様を施す。	称名寺式
第20図 PL.23	12	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、黒色粒/橙/良好	横位部状沈線を施し、列点を充填施文する。	称名寺式
第20図 PL.23	13	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、細礫、黒色粒/浅 黄橙/ふつう	RLを縦位施文する。	後期前葉

第9表 E区8号土坑出土遺物観察表

土器類							
種別番号 図版番号	No.	器形	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	摘要
第20図 PL.23	14	深鉢	胴下半	底面	粗砂、細礫、黒色粒/浅 黄橙/ふつう	胴部下半が無文の底面。底径12.0cm。	後期前葉

第10表 E区9号土坑出土遺物観察表

土器類							
種別番号 図版番号	No.	器形	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	摘要
第20図 PL.-	15	深鉢	口縁部破片	埋土	粗砂/にふい/赤濁/良好	口縁内湾。帯状沈線によるモチーフを描く。	称名寺式
第20図 PL.-	16	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、黒色粒/にふい/橙/ ふつう	縦位の沈線と、雨垂れ様の刺突を施す。	称名寺式
第20図 PL.-	17	浅鉢	口縁部破片	埋土	粗砂、チャート細礫/橙/ 良好	無文。	後期前葉
第20図 PL.-	18	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、細礫、黒色粒/に ふい/橙/ふつう	口縁下に縦位隆帯を巡らせ、沈線で横位帯を区画し、区画内にLRの縄文を充填する。	堀之内2式
第20図 PL.-	19	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、黒色粒/明赤濁/ふ つう	沈線で幾何学的な文様を区画し、区画内にLRの縄文を充填する。	堀之内2式
第20図 PL.-	20	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂/橙/良好	横位、弧状の帯状沈線を施し、LRを充填施文する。	堀之内2式
第20図 PL.-	21	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、黒色粒/明赤濁/ふ つう	沈線で幾何学的な文様を区画し、区画内にLRの縄文を充填する。	堀之内2式
第20図 PL.-	22	注口土器	注口部破片	埋土	粗砂、細礫/橙/ふつう	根本に粘土帯を貼付して段部部を作出、下部に8字状付文を付す。	堀之内2式

第11表 E区10号住居出土遺物観察表

土器類							
種別番号 図版番号	No.	器形	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	摘要
第21図 PL.23	23	深鉢	ほぼ完形	埋土	粗砂/橙/ふつう	口縁部に幅5cm程度の無文帯を空け、条線を縦位部状施文する。胴下部は無文で縦ケズリ様の器面調整を施す。口径33.6cm、底径8.5cm、器高48.1cm。	称名寺式
第21図 PL.23	24	深鉢	胴下半	埋土	粗砂、黒色粒/灰黄濁/ふ つう	25・26と同一個体。胴部に押捺・刺突をもつ隆帯を縦位に懸垂させ、沈線を施す。	称名寺式
第21図 PL.24	25	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、黒色粒/灰黄濁/ふ つう	24・26と同一個体。胴部に押捺・刺突をもつ隆帯を縦位に懸垂させる。	称名寺式

神岡番号 図版番号	No.	器形	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	摘要
第21図 PL.24	26	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、黒色粒/灰黄濁/ふつつ	24・25と同一個体。胴部に押捺・刺突をもつ隆帯を縦位に懸垂させる。	称名寺式
第21図 PL.24	27	深鉢	口縁部破片	埋土	粗砂、細礫、黒色粒/ふいね/ふつつ	押捺を施した隆帯をめぐらし、隆帯下に逆V字状の条線を施す。	称名寺式
第21図 PL.24	28	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、チャート細礫/明礫/ふつつ	帯状沈線による曲線モチーフを描く。	称名寺式
第21図 PL.24	29	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、細礫、黒色粒/ふいね/ふつつ	斜位の帯状沈線を施す。	称名寺式
第21図 PL.24	30	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、細礫/粗/良好	斜位の条線を施す。	称名寺式

第12表 E区11号住居出土遺物観察表

土器類

神岡番号 図版番号	No.	器形	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	摘要
第21図 PL.24	31	深鉢	口縁部破片	埋土	粗砂、黒色粒、チャート細礫/粗/ふつつ	帯状沈線によるモチーフを描く。	称名寺式
第21図 PL.24	32	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、黒色粒/粗/良好	斜行、円状の沈線を施す。	堀之内1式

り多くはないが、10～13の4点を図示した。出土土器から縄文時代後期前葉期の土坑と考えられる。

E区8号土坑（第19・20図、第9表、PL.18・23）

位置(座標)：X軸=29,415、Y軸=-83,633

E区3面調査時に検出された。E区南端付近に位置し、E区15号住居の西側に接するようにある。長軸1.15m、短軸0.67m、深さ18cmを測り、楕円形を呈する。埋土は暗褐色土を主とし、ローム粒を多く含むことから、人為的堆積の可能性が高い。底面は西側がやや高く、東側で平坦な。この底面がやや高くなる西側で、図示した14の無文の底部が逆位に出土している。出土土器から縄文時代後期前葉期の土坑と考えられる。

E区9号土坑（第19・20図、第10表、PL.19）

位置(座標)：X軸=29,424、Y軸=-83,629

E区3面調査時に検出された。E区南端付近に位置し、E区14号住居と重複する。本土坑の上面にE区14号住居の敷石が検出されていることから、本土坑の方が古い。長軸2.1m、短軸1.5m、深さ35cmを測り、長方形を呈する。埋土には暗褐色土と黄褐色土が主となり、ローム塊を多量に含むことから、人為的堆積と考えられる。底面は北側が低く、南側がやや高くなり、南隅に径32cm、深さ20cmの円形のピットを確認した。出土遺物は埋土中に多く、15～22の8点を図示した。出土土器から縄文時代後期前葉期の土坑と考えられる。

E区10号土坑（第19図、第11表、PL.19・23・24）

位置(座標)：X軸=29,433、Y軸=-83,627

E区3面調査時に検出された。E区南側のE区13号住居と重複し、住居の外の北側に位置する。先述したよう

に、E区13号住居が複数の住居の重複と考えれば、本土坑はE区13号住居に重複する住居の炉である可能性が高い。長軸0.93m、短軸0.80m、深さ92cmを測り、楕円形を呈する。壁の上部は焼土化している。埋土には、暗褐色土とローム粒や焼土塊を多量に含む黒色土が主体となっていることから、人為的堆積と考えられる。また、中央には正位に完形の埋設土器を有し、埋土中からも多くの土器を出土させている。23～30の8点を図示したが、23は埋設土器である。出土土器から縄文時代後期前葉期の土坑と考えられる。

E区11号土坑（第19・20図、第12表、PL.19・24）

位置(座標)：X軸=29,433、Y軸=-83,626

E区3面調査時に検出された。E区南側に位置し、E区10号土坑の東側に重複する。土層断面の観察から、本土坑の方が古い。長軸は不明だが、短軸0.7m、深さ55cmを測り、楕円形を呈する。埋土には黄褐色土と暗褐色土が主となり、ローム塊や焼土塊を多く含むことから、人為的堆積と考えられる。底面はほぼ平坦。出土遺物は少ないが、31・32の2点を図示した。出土土器から縄文時代後期前葉期の土坑と考えられる。

3 ピット

E区3面調査時に、E区南側の東寄りに21基、E区12号住居の西側に7基を検出した。個別に図示していないが、大半が径30cm前後の円形を呈しており、深さは10～40cm前後とまちまちである。埋土は暗褐色土とするものが多い。

4 遺構外出土遺物

A～F区の各調査区からは、遺構に伴わない縄文時代および弥生時代の遺物が出土している。縄文時代の遺物は、住居等の遺構が多く検出されたE区に最も多く出土している状況がある。また、弥生時代の遺構は検出されていないもの、遺物は各区から出土し、D区に最も多い。以下、各時代・種別ごとに記載する。

1. 縄文時代の遺構外出土土器・土製品

(第22～25図、第13表、PL.24)

土器

出土した縄文時代の土器は、前期中葉の有尾式土器が最も古く、前期後葉の諸磯a式土器、中期末葉の加曾利E4式土器、後期の称名寺式・堀之内1・2式土器で、称名寺式土器が最も多く出土している。

1～3はA区の2面調査時に出土した土器で、1は前期諸磯a式土器、2・3は後期堀之内1式土器である。

4～36はC区の2面調査時に出土した土器で、4・5は前期諸磯a式土器、6は中期加曾利E式土器、7～23・26は後期称名寺式土器、24・25・27・28・31・32は後期堀之内1式土器、29・30・33～36は後期前葉の土器である。なお、24は胴部下半を欠く半完形品で、C区の中央やや南寄りに正位に出土した土器であるが、掘り方等の遺構は検出されていない。

37～106はE区の3面調査時に出土した土器で、37は前期有尾式土器、38～45は前期諸磯a式土器、46～48は中期加曾利E4式土器、49～76は後期称名寺式土器、77～93は後期堀之内1式土器、94～99・105・106は後期前葉の土器、100～104は後期堀之内2式土器である。

107～121はF区の2面調査時に出土した土器で、107・108は中期加曾利E4式土器、109～114は後期称名寺式土器、115～118は後期堀之内1式土器、119は後期前葉の土器、120・121は後期堀之内2式土器である。
土製品

122は楕円形を呈する板状の土製品で、側縁に沿って孔が穿かれている。C区から出土。

123は土製の耳飾りで、長さ3.8cm、上面径2.9cmのスタンプ状を呈し、上下両面に刺突を充填している。E区から出土。

2. 弥生時代の遺構外出土土器

(第26図、第14表、PL.24・25)

出土した弥生時代の土器は、全て中期の土器である。小破片が多い中であって、唯一復元できたのは壺形器形を呈する1点のみであった。

1はA区の2面調査時に出土した土器である。

2～15はC区の2面調査時に出土した土器で、14の底面には網代痕が、15の底面には木葉痕がつく。

16～18・22～24・26～31はD区の2面調査時に出土した土器である。16は大型の壺形土器で、胴部上半は横位の条痕、下半は斜位の条痕が施されている。

19～21・25・32。33はE区の3面調査時に出土した土器である。

3. 遺構外出土石器 (第27・28図、第15表、PL.25)

出土した石器は、剥片も含め全体で263点であった。使用石材をみると、硬質泥岩が125点と最も使用頻度が高く、次いで凝灰質シルト砂岩が23点、黒曜石が23点、さらに黒色安山岩、珩質頁岩、黒色頁岩、細粒輝石安山岩、粗粒輝石安山岩、そして頁岩、チャート、赤碧玉、流紋岩、デイサイト、変玄武岩、変はんれい岩、変質安山岩、緑色片岩、雲母石英片岩、砂岩、凝灰質砂岩、珩化凝灰質砂岩の順となる。

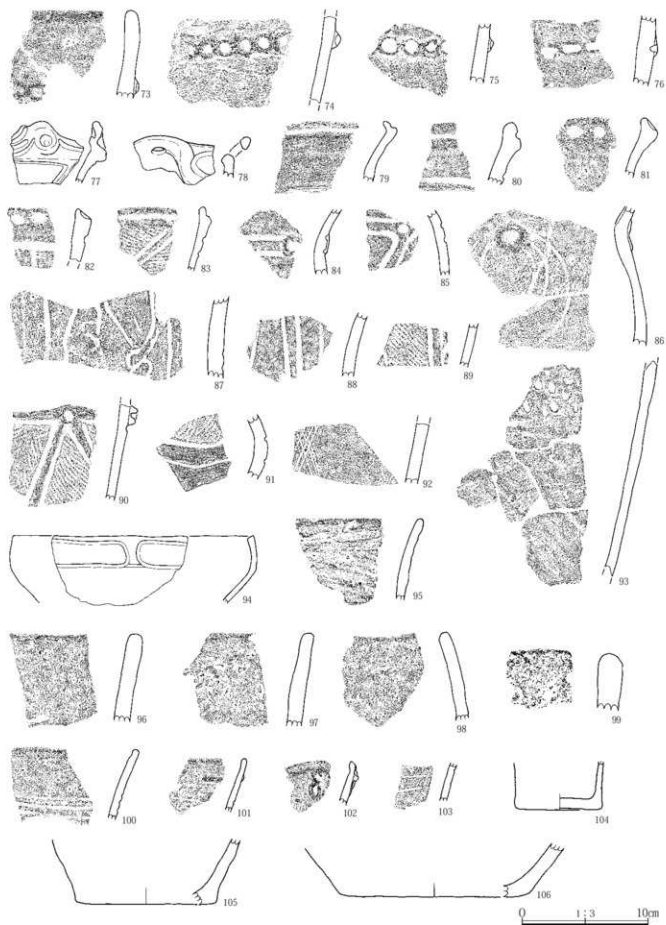
この内、石器および加工痕のある剥片は67点であり、遺構外出土石器として図示したのは、打製石斧12点、磨製石斧1点、敲石3点、磨石1点、凹石3点の計20点である。打製石斧には分銅型が多く、大型の石鏃に類される石斧も存在し、石鏃は弥生時代の石器である可能性をもつ。



第22図 遺構外出土縄文土器(1)

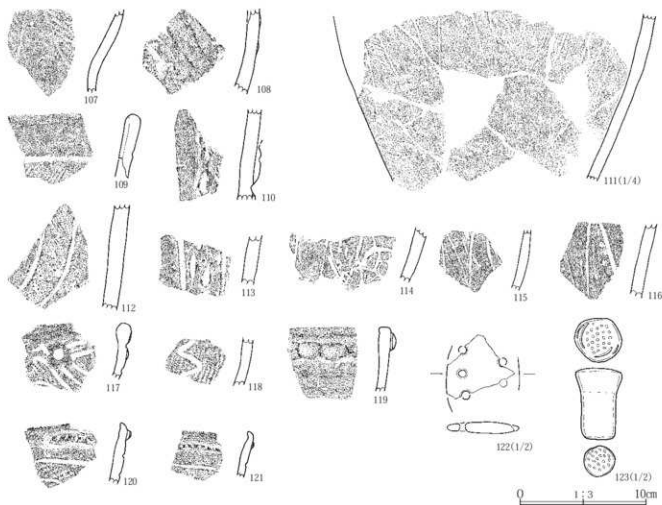


第23図 遺構外出土縄文土器(2)



第24図 遺構外出土縄文土器(3)

第3章 富岡清水遺跡の調査



第25図 遺構外出土縄文土器(4)

第13表 遺構外出土縄文時代土器観察表

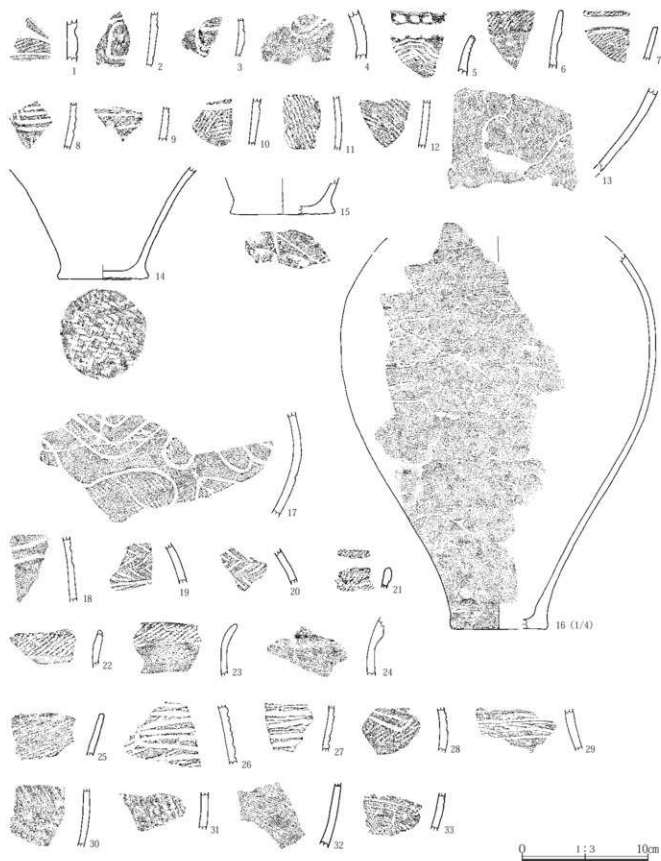
縄文番号 図版番号	No.	器形	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	摘要
第22図 PL.24	1	深鉢	胴部破片	A区	粗砂、細礫/赤褐/良好	R Lを横位施文する。	諸磯a式
第22図 PL.24	2	深鉢	胴部破片	A区	細砂、黒色粒/橙/良好	L R縦位施文を地文とし、縦位沈線、蛇行懸垂文を施す。	堀之内1式
第22図 PL.-	3	深鉢	胴部破片	A区	粗砂、黒色粒、チャート 細礫/橙/ふつつ	横位、縦位、斜位の沈線を施す。	堀之内1式
第22図 PL.-	4	深鉢	口縁部破片	C区	粗砂、黒色粒/橙/良好	横位、波状の条線をめぐらし、円形刺突を施す。	諸磯a式
第22図 PL.-	5	深鉢	胴部破片	C区	粗砂/橙/ふつつ	浮線をめぐらす。浮線は白い粘土を用いる。	諸磯a式
第22図 PL.-	6	深鉢	胴部破片	C区	粗砂、チャート/明赤褐/ ふつつ	隆帯による懸垂文を施し、L Rを縦位充填施文する。	加賀利E 4式
第22図 PL.-	7	深鉢	口縁部破片	C区	粗砂、黒色粒、チャート /にふい黄橙/ふつつ	波状口縁で波頂部に貼付を付す。帯状沈線によるモチーフを描き、 列点を充填施文する。	称名寺式
第22図 PL.-	8	深鉢	口縁部破片	C区	粗砂、チャート/明赤褐/ 良好	沈線によるモチーフを描く。波状口縁で口縁が短く内折、内折部に 刺突、沈線を施す。	称名寺式
第22図 PL.-	9	深鉢	口縁部破片	C区	粗砂、黒色粒/明赤褐/ ふつつ	横位沈線、列点を施す。	称名寺式
第22図 PL.-	10	深鉢	口縁部破片	C区	粗砂、黒色粒/橙/ふつつ	帯状沈線によるモチーフを描き、L Rを充填施文する。	称名寺式
第22図 PL.24	11	深鉢	口縁部破片	C区	粗砂、黒色粒/にふい赤 褐/良好	横位沈線、L Rを施す。	称名寺式
第22図 PL.24	12	深鉢	口縁部破片	C区	粗砂、チャート細礫/ にふい黄橙/ふつつ	横位帯状沈線を施す。	称名寺式
第22図 PL.-	13	深鉢	口縁部破片	C区	細砂/橙/ふつつ	口縁下に押捺を施した隆帯をめぐらす。	称名寺式
第22図 PL.-	14	深鉢	口縁部破片	C区	粗砂、細礫、黒色粒/橙/ 良好	口縁下に押捺を施した隆帯をめぐらす。	称名寺式
第22図 PL.-	15	深鉢	胴部破片	C区	粗砂/橙/良好	押捺を施した隆帯をめぐらす。	称名寺式
第22図 PL.-	16	深鉢	口縁部破片	C区	粗砂、黒色粒/橙/良好	口縁下に隆帯をめぐらし、隆帯下に縦位条線を帯状施文する。	称名寺式

標本番号 / 図版番号	No.	器形	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備 考
第22図 PL-26	17	深鉢	口縁部破片	C区	粗砂、黒色粒/にぶい 黒/ふつつ	口縁下に隆帯をめぐらし、隆帯下に横位弧状の条線を施す。	称名寺式
第22図 PL-26	18	深鉢	胴部破片	C区	粗砂、白色粒、黒色粒 にぶい黄褐色/ふつつ	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺式
第22図 PL-24	19	深鉢	胴部破片	C区	粗砂/にぶい黄褐色/ふつつ	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺式
第22図 PL-24	20	深鉢	胴部破片	C区	粗砂、チャート細礫/明 赤褐色/ふつつ	帯状沈線によるモチーフを描く。	称名寺式
第22図 PL-24	21	深鉢	胴部破片	C区	粗砂、黒色粒/橙/良好	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺式
第22図 PL-24	22	深鉢	胴部破片	C区	粗砂、黒色粒、チャート /にぶい橙/ふつつ	縦位帯状沈線を施し、列点を充填施文する。	称名寺式
第22図 PL-24	23	深鉢	胴部破片	C区	粗砂、細礫、黒色粒/橙 /良好	縦位帯状沈線を施し、列点を充填施文する。	称名寺式
第22図 PL-24	24	深鉢	口縁〜胴下 位4/5	C区	粗砂、黒色粒/橙/ふつつ	2単位波状口縁、波頂部下に凹孔を穿ち、高文連繫文を伴う隆帯を貼付する。胴部には沈線を作った逆C字状隆帯を4単位に貼付、沈線をめぐらし、逆C字状隆帯下に3条沈線による逆J字状モチーフを描くが、下端は懸垂する。逆J字状モチーフ間には右斜する3条沈線による蛇行懸垂文を施し、余白に単沈線によるモチーフを配す。口径27.2cm、高さ20.1cm	堀之内1式
第22図 PL-25	25	浅鉢	口縁部破片	C区	粗砂、黒色粒、チャート 細礫/橙/ふつつ	口縁が短く内折、波状口縁で波頂部に突起を付す。突起内外面、左右に刺突を施す。	堀之内1式
第22図 PL-25	26	深鉢	口縁部破片	C区	粗砂、細礫/橙/ふつつ	波状口縁で口縁が短く内折、凹孔を囲むように沈線をめぐらし、刺突を施す。	称名寺式
第22図 PL-25	27	深鉢	口縁部破片	C区	粗砂/浅黄褐色/ふつつ	口縁が短く内折、内折部に沈線をめぐらす。	堀之内1式
第22図 PL-25	28	深鉢	口縁部破片	C区	粗砂、細礫、黒色粒/明 赤褐色/ふつつ	隆帯、沈線による同心円文を施し、中心に円形刺突を2個施す。	堀之内1式
第22図 PL-25	29	深鉢	口縁部破片	C区	粗砂、黒色粒/橙/良好	口唇前頭状。無文。外面横位のミガト調整。	後期前葉
第22図 PL-25	30	深鉢	口縁部破片	C区	粗砂/橙/ふつつ	無文。	後期前葉
第22図 PL-25	31	注口土 器	胴部破片	C区	粗砂、細礫/橙/良好	刺突、沈線を施した逆C字状の隆帯を貼付し、沈線によるモチーフを施す。	堀之内1式
第22図 PL-25	32	深鉢	胴部破片	C区	粗砂/黄褐色/良好	縦位、斜位の集合沈線を施す。	堀之内1式
第22図 PL-25	33	深鉢	胴部破片	C区	粗砂、黒色粒/にぶい橙 /ふつつ	斜位の条線を施す。	後期前葉
第22図 PL-25	34	深鉢	胴部破片	C区	細砂/にぶい橙/ふつつ	縦位弧状、蛇行する条線を施す。	後期前葉
第22図 PL-25	35	有孔鉢	胴部破片	C区	粗砂/橙/良好	弧状の条線を施す。	後期前葉
第22図 PL-25	36	深鉢	底部破片	C区	粗砂、細礫、黒色粒/橙 /良好	残存部は無文。底径11.0cm。	後期前葉
第22図 PL-25	37	深鉢	口縁部破片	E区	細砂、細礫/明黄褐色/ふ つつ	口唇前頭状。口縁下に平行沈線をめぐらす。	有尾式
第22図 PL-25	38	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、片岩/明赤褐色/良好	口縁が短く外反。口縁下に横位、波状の集合沈線を施す。器面磨滅。	諸磯a式
第22図 PL-25	39	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂/橙/良好	口縁外面肥厚、円形刺突を縦位に施す。	諸磯a式
第22図 PL-25	40	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、チャート/赤褐色/良 好	口縁下に横位平行沈線をめぐらして区画、区画内に木葉状モチーフを描き、刺突を重下させる。	諸磯a式
第22図 PL-25	41	深鉢	胴部破片	E区	粗砂/橙/良好	横位、波状の3条沈線を施す。	諸磯a式
第22図 PL-25	42	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、黒色粒/にぶい黄 褐色/良好	横位、波状の平行沈線を施し、縦位、菱形状に円形刺突を施す。器面磨滅。	諸磯a式
第22図 PL-25	43	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂/橙/良好	R L横位施文を地文とし、手載竹筒内皮による刺突を横位にめぐらす。	諸磯a式
第22図 PL-25	44	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、細礫/橙/良好	R Lを横位施文する。	諸磯a式
第22図 PL-25	45	深鉢	胴部破片	E区	粗砂/橙/良好	横位、弧状の連続爪形文を施し、爪形文間に斜位の沈線を充填する。	諸磯a式
第22図 PL-25	46	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、白色粒、黒色粒、 石瓦/黒褐色/ふつつ	隆帯を重下させる。器面磨滅。	加曾利E 4式
第22図 PL-25	47	深鉢	胴部破片	E区	粗砂/橙/良好	隆帯によるJ字状モチーフを施す。	加曾利E 4式
第22図 PL-25	48	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、白色粒、黒色粒、 石瓦/赤褐色/ふつつ	R Lを縦位施文する。	加曾利E 4式
第22図 PL-25	49	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、細礫/橙/ふつつ	波頂部の楕状突起。頂部に高文連繫文、刺突を施す。口縁内折部に楕円状文を描き、刺突を充填施文する。	称名寺式
第22図 PL-25	50	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、黒色粒/にぶい黄 褐色/ふつつ	波頂部の環状突起。表面は剥落するが、隆帯が縦に一部残存。内面は沈線施文。	称名寺式
第22図 PL-25	51	深鉢	把手	E区	粗砂/橙/良好	刺突、沈線を施す。側面に凹孔を穿つ。	称名寺式
第22図 PL-25	52	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、細礫/橙/良好	波頂部に楕状突起を付す。刺突、沈線を施した扁平隆帯を貼付し、沈線によるモチーフを描く。口縁内折部に刺突、沈線を施す。	称名寺式
第22図 PL-25	53	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、黒色粒/橙/ふつつ	凹孔を2個穿った突起を付す。高文連繫文を施した隆帯、沈線を施す。内面にも高文連繫文を施す。	称名寺式
第22図 PL-25	54	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、細礫/にぶい黄 褐色/ふつつ	口縁下に刺突を施した円状の隆帯を貼付、左右に連結させる。	称名寺式
第22図 PL-25	55	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、白色粒、黒色粒/ 橙/ふつつ	帯状沈線による弧状、逆J字状モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺式
第22図 PL-25	56	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、黒色粒、チャート 細礫/橙/ふつつ	帯状沈線によるモチーフを描く。	称名寺式

第3章 富岡清水遺跡の調査

検出番号 調査番号	No.	器形	部位	出土位置	胎土/黄成/色調	文様の特徴等	摘要
第23回 PL--	57	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂/黄粉/ふつつ	帯状沈線によるモチーフを描き、列点を充填施文する。	称名寺式
第23回 PL--	58	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、黒色粒/明黄濁/ふつつ	帯状沈線による曲線モチーフを描き、列点を充填施文する。	称名寺式
第23回 PL--	59	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、チャート/粗/良好	帯状沈線による曲線モチーフを描き、L Rを充填施文する。	称名寺式
第23回 PL--	60	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、黒色粒、チャート 細礫/にぶい/粗/ふつつ	帯状沈線による弧状、J字状モチーフを描き、L Rを充填施文する。	称名寺式
第23回 PL--	61	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、黒色粒、チャート 細礫、片岩/粗/良好	帯状沈線によるモチーフを描く。	称名寺式
第23回 PL--	62	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、黒色粒/粗/ふつつ	帯状沈線による曲線モチーフを描く。	称名寺式
第23回 PL--	63	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、黒色粒、チャート 細礫/にぶい/黄粉/ふつつ	帯状沈線によるモチーフを描く。	称名寺式
第23回 PL--	64	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、黒色粒/黄粉/ふつつ	帯状沈線による曲線モチーフを描く。	称名寺式
第23回 PL--	65	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、黒色粒、チャート、 片岩/粗/良好	帯状沈線によるJ字状モチーフを描く。	称名寺式
第23回 PL--	66	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、チャート細礫、片 岩/赤濁/良好	帯状沈線による曲線モチーフを描き、列点を充填施文する。	称名寺式
第23回 PL--	67	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、黒色粒/粗/ふつつ	帯状沈線による曲線モチーフを描き、列点を充填施文する。	称名寺式
第23回 PL--	68	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、黒色粒/粗/ふつつ	帯状沈線による弧状モチーフを描き、列点を充填施文する。	称名寺式
第23回 PL--	69	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、チャート細礫、片 岩/粗/良好	縦帯状沈線を施し、列点を充填施文する。	称名寺式
第23回 PL--	70	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、黒色粒、チャート /にぶい/赤濁/良好	口縁下に押捺を施した隆帯をめぐらす。	称名寺式
第23回 PL--	71	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、チャート細礫、片 岩/赤濁/良好	押捺を施した隆帯を逆V字状に施す。	称名寺式
第23回 PL--	72	深鉢	口縁部破片	E区		71と同一個体。	称名寺式
第24回 PL--	73	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、細礫、黒色粒/粗/ 良好	口縁下に押捺を施した隆帯をめぐらす。	称名寺式
第24回 PL--	74	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、黒色粒/粗/ふつつ	押捺を施した隆帯をめぐらす。	称名寺式
第24回 PL--	75	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、黒色粒、チャート 細礫/にぶい/粗/ふつつ	押捺を施した隆帯をめぐらす。	称名寺式
第24回 PL--	76	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、細礫、黒色粒/粗/ 良好	竹管によると思われる刺突付した低い隆帯をめぐらす。	称名寺式
第24回 PL--	77	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、黒色粒/黒濁/ふつつ	口縁が内折、小突起を付す。内外面ともに突起下の刺突を基点に左右に沈線を施す。内折部下にも斜位の隆帯、沈線を施す。	堀之内1式
第24回 PL--	78	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、黒色粒/にぶい/粗/ ふつつ	沈線1線で表頂部下に円孔を穿つ。表頂部から弧状の隆帯を垂下、楕円状の沈線を施す。	堀之内1式
第24回 PL--	79	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、黒色粒/暗赤濁/ふ つつ	くの字状に外折する器形。屈曲部に沈線をめぐらす。短く内折した口縁部に沈線をめぐらす。	堀之内1式
第24回 PL--	80	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、チャート/にぶい/ 粗/ふつつ	口縁肥厚部、肥厚部下に沈線をめぐらす。	堀之内1式
第24回 PL--	81	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、細礫/粗/ふつつ	口縁肥厚部に凹点をめぐらす。	堀之内1式
第24回 PL--	82	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、細礫/粗/ふつつ	横位、縦位の沈線を施す。口縁肥厚部に凹点をめぐらす。	堀之内1式
第24回 PL--	83	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、チャート細礫/粗/ 良好	斜行する2条の平行沈線を施し、余白にL Rを充填施文する。口縁肥厚部に沈線をめぐらす。	堀之内1式
第24回 PL--	84	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、チャート/赤濁/ふ つつ	外反する器形。屈曲部に2条の沈線、円形刺突を施した貼付文を付す。	堀之内1式
第24回 PL--	85	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、黒色粒/にぶい/赤 濁/ふつつ	横位、斜位の沈線、円形刺突を施し、余白にL Rを充填施文する。	堀之内1式
第24回 PL--	86	深鉢	胴部破片	E区	粗砂/にぶい/黄粉/ふつつ	くの字状に外折する器形。屈曲部に扁平な環状貼付文を付し、それを基点に沈線による楕円状モチーフを描く。	堀之内1式
第24回 PL--	87	深鉢	胴部破片	E区	粗砂/赤濁/良好	沈線による縦位、U字状、蛇行懸垂文を施す。	堀之内1式
第24回 PL--	88	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、黒色粒/粗/ふつつ	縦位沈線を施す。	堀之内1式
第24回 PL--	89	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、黒色粒、チャート /にぶい/赤濁/良好	縦位沈線を施し、余白にL Rを充填施文する。	堀之内1式
第24回 PL--	90	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、チャート/粗/良好	横位隆帯をめぐらし、逆V字状の隆帯を垂下、交点に円形刺突を施す。余白にL Rを充填施文。	堀之内1式
第24回 PL--	91	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、黒色粒、チャート 明赤濁/良好	帯状沈線による弧状モチーフを描き、余白にL Rを充填施文する。	堀之内1式
第24回 PL--	92	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、細礫、白色粒、黒 色粒/明濁/ふつつ	X字状に交差する条線を施す。	堀之内1式
第24回 PL--	93	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、黒色粒/粗/良好	胴上位に列点を密に施紋する。区画は施されない。	堀之内1式
第24回 PL--	94	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、黒色粒、石黄/淡 黄粉/ふつつ	無文。	後期前葉
第24回 PL--	95	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、チャート細礫/に ぶい/赤濁/良好	無文。横位、斜位の器面調整による凹凸顯著。	後期前葉
第24回 PL--	96	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、黒色粒、石黄/淡 黄粉/ふつつ	無文。	後期前葉
第24回 PL--	97	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、チャート中礫/明 赤濁/良好	無文。	後期前葉

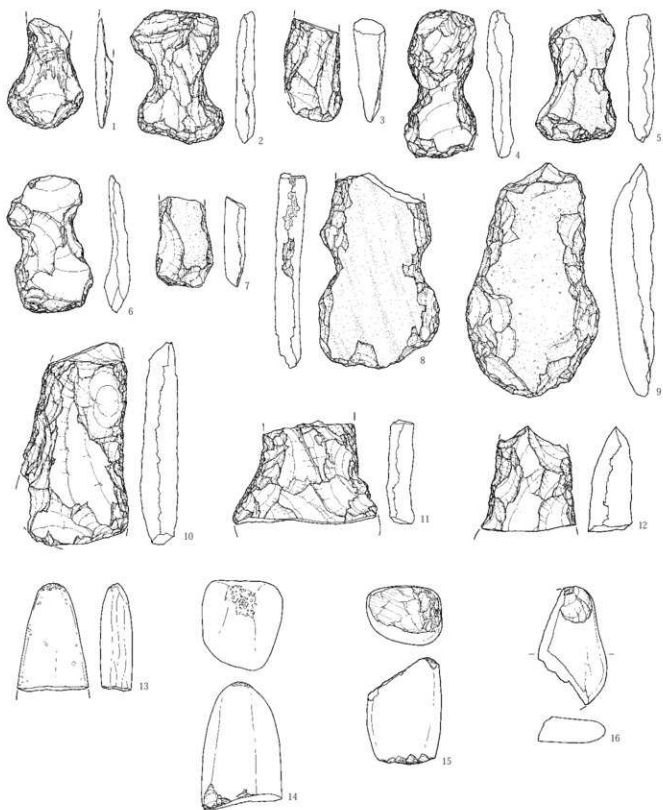
神田番号 図版番号	No.	器形	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	摘要
第24図 PL-	98	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、細礫/橙/良好	無文。口縁が内湾するようだ。	後期前葉
第24図 PL-	99	内耳壺	口縁部破片	E区	粗砂、黒色粒、チャート 細礫、片岩/橙/良好	無文。	後期前葉
第24図 PL-	100	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、黒色粒、チャート、 片岩/橙/良好	口縁下に横線3条の沈線をめぐらす。	堀之内2式
第24図 PL-	101	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、黒色粒/橙/良好	口縁下に1条の沈線、沈線をめぐらす。	堀之内2式
第24図 PL-	102	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、黒色粒/にぶい橙 ふつつ	溝状口縁。波頭部下に8の字貼付文を付し、沈線によるモチーフを描く。	堀之内2式
第24図 PL-	103	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、黒色粒、チャート/ 橙/良好	横帯状沈線を施す。	堀之内2式
第24図 PL-	104	深鉢	底部破片	E区	粗砂、黒色粒、石英/明 黄褐/良好	ほぼ直立する。残存部は無文。底径6.7cm。	堀之内2式
第24図 PL-	105	深鉢	底部破片	E区	粗砂、チャート/橙/ふつ つつ	残存部は無文。底径11.0cm。	後期前葉
第24図 PL-	106	深鉢	底部破片	E区	粗砂、チャート細礫/橙 ふつつ	残存部は無文。推定底径15.0cm。	後期前葉
第25図 PL-	107	深鉢	胴部破片	F区	粗砂、黒色粒/にぶい橙 ふつつ	沈線によるU字状モチーフを描き、LRを縦位充填施文する。	加賀利E4式
第25図 PL-	108	深鉢	胴部破片	F区	粗砂、黒色粒、チャート/ にぶい橙/ふつつ	2条隆帯による弧状モチーフを施す。	加賀利E4式
第25図 PL-	109	深鉢	口縁部破片	F区	粗砂、黒色粒/橙/ふつつ	横位沈線、LRを施す。	称名寺式
第25図 PL-	110	深鉢	胴部破片	F区	粗砂、黒色粒/にぶい赤 褐/良好	鎖状隆帯を垂下させる。	称名寺式
第25図 PL-	111	深鉢	胴部破片	F区	粗砂、白色粒、黒色粒/ 橙/ふつつ	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺式
第25図 PL-	112	深鉢	胴部破片	F区	粗砂/橙/ふつつ	弧状の帯状沈線を施し、LRを充填施文する。	称名寺式
第25図 PL-	113	深鉢	胴部破片	F区	粗砂、細礫、黒色粒/赤 褐/良好	斜位の帯状沈線を施し、列点を充填施文する。	称名寺式
第25図 PL-	114	深鉢	胴部破片	F区	粗砂、黒色粒/にぶい橙 ふつつ	帯状沈線によるモチーフを描き、列点を充填施文する。	称名寺式
第25図 PL-	115	深鉢	胴部破片	F区	粗砂、黒色粒/浅横帯/良 好	縦位、斜位の沈線を施す。	堀之内1式
第25図 PL-	116	深鉢	胴部破片	F区	粗砂、黒色粒/明赤褐/良 好	縦位、斜位の沈線を施す。	堀之内1式
第25図 PL-	117	深鉢	口縁部破片	F区	粗砂、黒色粒/にぶい橙 ふつつ	2ないし3条の沈線によるモチーフを描く。円形刺突を備した貼付文を付す。	堀之内1式
第25図 PL-	118	深鉢	胴部破片	F区	粗砂、黒色粒/にぶい橙 ふつつ	R L縦位施文を地文とし、沈線による蛇行懸垂文を施す。	堀之内1式
第25図 PL-	119	深鉢	口縁部破片	F区	粗砂、黒色粒/にぶい橙 ふつつ	口縁直下に押捺を付した隆帯をめぐらす。	後期前葉
第25図 PL-	120	深鉢	口縁部破片	F区	粗砂、チャート/にぶい 橙/ふつつ	口縁下に刻みを付した隆帯、横位帯状沈線を施し、LRを充填施文する。	堀之内2式
第25図 PL-24	121	深鉢	口縁部破片	F区	粗砂、黒色粒/にぶい赤 褐/ふつつ	口縁下に刻みを付した隆帯、横位沈線をめぐらす。	堀之内2式
第25図 PL-24	122	土製品	破片	C区	粗砂/橙/良好	楕円形か。側縁に沿って円孔を穿ち、計4ヶ所に確認できる。厚さ6mm。	後期前葉
第25図 PL-24	123	耳飾り	完形	E区	粗砂、黒色粒/橙/良好	スタンプ状。上下両面に刺突を充填施文する。上面は沈線で囲む。長さ3.8cm、上面径2.9cm、重さ17.8g。	後期前葉



第26図 遺構外出土弥生土器(5)

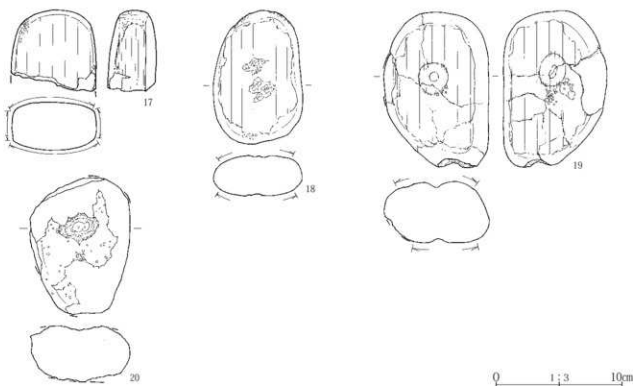
第14表 遺構外出土弥生時代土器観察表

検出番号 図録番号	No.	器形	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	備 考
第26図 PL-1	1	甕	胴部破片	A区	粗砂、黒色粒、石英/明赤褐/良好	横位、斜位沈線、三叉文を施し、LRを充填施文する。	弥生中期
第26図 PL-2	2	甕	胴部破片	C区	粗砂、細礫/橙/ふつう	方形ないし楕円状の文様を沈線で描く。	弥生中期
第26図 PL-3	3	甕	胴部破片	C区	粗砂/暗褐/ふつう	方形の文様を沈線で描く。	弥生中期
第26図 PL-4	4	甕	胴部破片	C区	粗砂、黒色粒/橙/良好	2条沈線によるU字状モチーフを施す。	弥生中期
第26図 PL-5	5	甕	口縁部破片	C区	粗砂/にぶい/橙/良好	口縁下に波状の条線をめぐらす。口唇部に押捺を施す。	弥生中期
第26図 PL-6	6	甕	口縁部破片	C区	粗砂、片岩/にぶい/赤褐/ふつう	口縁外面がやや肥厚し、段帯部を作出。段帯部にLRを横位施文する。	弥生中期
第26図 PL-7	7	甕	口縁部破片	C区	粗砂/にぶい/橙/ふつう	LRを横位施文する。口唇部にも施文。	弥生中期
第26図 PL-8	8	甕	胴部破片	C区	粗砂、石英、黒色粒/灰黄褐/ふつう	数本の太い沈線で文様を描く。	弥生中期
第26図 PL-9	9	甕	胴部破片	C区	粗砂、細礫/橙/ふつう	横位沈線を数本施す。	弥生中期
第26図 PL-10	10	甕	胴部破片	C区	粗砂、石英、黒色粒/明赤褐/ふつう	横位沈線と縄文を施す。	弥生中期
第26図 PL-11	11	甕	胴部破片	C区	粗砂、黒色粒/灰黄褐/ふつう	条痕を斜位に施す。	弥生中期
第26図 PL-12	12	甕	胴部破片	C区	粗砂、黒色粒/暗褐/ふつう	条痕を斜位に施す。	弥生中期
第26図 PL-13	13	密か雲	胴部破片	C区	粗砂、細礫、石英、片岩/にぶい/橙/良好	無文。	弥生中期
第26図 PL-14	14	密か雲	底部破片	C区	粗砂、黒色粒/橙/良好	残存部は無文。底面に朝代痕。底径6.9cm。	弥生中期
第26図 PL-15	15	密or密	底部破片	C区	粗砂、細礫/にぶい/橙/良好	底面に木葉痕をもつ。底径18.2cm。	弥生中期
第26図 PL-16	16	甕	胴下半	D区	粗砂、細礫/にぶい/橙/良好	胴部上半は横位に、下半は斜位に条痕を施す。器高39.5cm。底径10.0cm。	弥生中期
第26図 PL-17	17	甕	胴部破片	D区	粗砂、細礫/にぶい/橙/良好	鋸歯状や円形文、さらに曲線的な文様を描き、文様内にRLの縄文を充填する。	弥生中期
第26図 PL-18	18	甕	胴部破片	D区	粗砂/橙/ふつう	鋸歯状の文様を描き、LRの縄文を施す。	弥生中期
第26図 PL-19	19	甕	肩部破片	E区	粗砂、チャート/橙/良好	横位沈線、綾杉文を施す。	弥生中期
第26図 PL-20	20	甕	肩部破片	E区		19と同一個体。	弥生中期
第26図 PL-21	21	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、黒色粒、チャート/にぶい/橙/良好	折り返し状の肥厚口縁。LRを横位施文する。口唇部にも施文。	弥生中期
第26図 PL-22	22	甕	口縁部破片	D区	粗砂、黒色粒/灰黄褐/ふつう	平口縁の口縁下に、横位の太い沈線とLRの縄文を施す。	弥生中期
第26図 PL-23	23	甕	口縁部破片	D区	粗砂、黒色粒/灰黄褐/ふつう	平口縁の口縁下にLRの縄文を施す。	弥生中期
第26図 PL-24	24	甕	口縁部破片	D区	粗砂、細礫/赤褐/良好	折り返し口縁で有段となる。	弥生中期
第26図 PL-25	25	深鉢	口縁部破片	E区	粗砂、黒色粒、チャート/明赤褐/良好	LRを横位施文する。	弥生中期
第26図 PL-26	26	甕	胴部破片	D区	粗砂、細礫/橙/良好	27と同一個体。太い沈線で崩れた変形U字文を描く。	弥生中期
第26図 PL-27	27	甕	胴部破片	D区	粗砂、細礫/橙/良好	26と同一個体。太い沈線で崩れた変形U字文を描く。	弥生中期
第26図 PL-28	28	甕	胴部破片	D区	粗砂、細礫/赤褐/良好	横位・斜位に条痕が施される。	弥生中期
第26図 PL-29	29	甕	胴部破片	D区	粗砂/暗褐/ふつう	鋸歯状の文様を描く。	弥生中期
第26図 PL-30	30	甕	胴部破片	D区	粗砂/暗褐/ふつう	斜位に条痕を施す。	弥生中期
第26図 PL-31	31	甕	胴部破片	D区	粗砂/暗褐/ふつう	斜位に条痕を施す。	弥生中期
第26図 PL-32	32	深鉢	胴部破片	E区	粗砂、チャート細礫、片岩/にぶい/赤褐/良好	横位条線を施す。	弥生中期
第26図 PL-33	33	甕	肩部破片	E区	粗砂、黒色粒、チャート/明赤褐/良好	横位、斜位に条痕を施す。	弥生中期



第27図 遺構外出土縄文・弥生石器(6)

0 1:3 10cm



第28図 遺構外出土縄文・弥生石器(7)

第15表 遺構外出土縄文・弥生時代石器遺物観察表

種別番号 図記番号	No.	器物 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第27図 PL--	1	打製石斧 撥型?	A区	(8.6)	6.0	1.4	59.2	完成状態。対部摩耗・接縛痕とも明瞭。頭部側を大きく破損。	黒色頁岩
第27図 PL--	2	打製石斧 分刷型	C区	10.4	7.4	1.5	142.8	完成状態。対部摩耗・接縛痕とも高く、部分的である。対部は部分的に変形しており、対部再生は明らかである。	緑色片岩
第27図 PL--	3	打製石斧 短冊型	C区	(8.1)	4.5	(2.5)	98.4	完成状態。不明瞭だが部分的に対部摩耗がある。上端側を欠損する。	硬質泥岩
第27図 PL--	4	打製石斧 分刷型	E区	11.6	5.7	2.1	134.6	完成状態。上下両端とも対部摩耗、下端側は対部再生後も使用。接縛痕が著しい。	細粒輝石安山岩
第27図 PL--	5	打製石斧 分刷型	E区	10.2	6.3	2.1	140.3	完成状態。上下両端とも対部はリダクションされ、変形している。接縛痕あり。	珪化凝灰質砂岩
第27図 PL--	6	打製石斧 分刷型	F区	10.8	6.8	2.0	126.3	完成状態。対部摩耗・接縛痕とも明瞭。対部再生使用。	細粒輝石安山岩
第27図 PL--	7	打製石斧 短冊型	F区	(7.1)	4.5	(1.7)	66.3	完成状態。対部摩耗・接縛痕あり。上半部を欠損。	硬質泥岩
第27図 PL--	8	分刷型	E区	(15.4)	9.5	2.5	406.2	完成状態? 上端側を欠き不明だが、左辺側に装着部と見られる加工が2ヶ所あり、再生加工した可能性が高い。対部摩耗・接縛痕は石材的に観察し難い。	雲母石英片岩
第27図 PL--	9	打製石斧石鏃	E区	18.3	10.4	3.4	688.8	完成状態。弱い対部摩耗・接縛痕が見える。	変質安山岩
第27図 PL--	10	石鏃	E区	(16.0)	(8.5)	3	396.4	完成状態? エッジ・側面の種はシャープで、摩耗痕等は見られない。装着部となるべき上半部を除いて、全体に黒く焼けているように見える。上下両端を欠損する。	黒色安山岩
第27図 PL--	11	打製石斧石鏃	E区	(8.3)	(14.3)	(2.2)	200.9	未製型? 両側縁のエッジはシャープ、種の摩耗等は見られない。上下両端を欠損する。	変質安山岩
第27図 PL--	12	打製石斧石鏃 種?	E区	(8.2)	(7.5)	(3.4)	247.3	完成状態? 側部破片で断定できないが、下端側縁は閉き気味で、大型品の部類に属す。重量的には石鏃に近い。	黒色安山岩
第27図 PL--	13	磨製石斧乳房 状	C区	(5.7)	3.7	1.7	61.8	全面的に最打痕が残り、研磨は雑。石斧頭部破片。	変玄武岩
第27図 PL--	14	敲石柱状鏃	C区	(10.0)	(6.3)	(7.1)	625.3	上端小口部に最打痕、下端部別面の側縁に衝撃剥離痕がある。分別型は新製で、摩耗痕は見られない。	砂岩
第27図 PL--	15	敲石柱状鏃	E区	8.4	5.8	4.6	325.0	上下両端の破損面に最打・衝撃剥離痕がある。	粗粒輝石安山岩
第27図 PL--	16	敲石 扁平鏃	E区	(9.3)	(5.4)	(2.1)	113.2	上端側が最打され、これに伴う衝撃で破損したのたろう。裏面側は被熱してヒビ割れている。	デイサイト
第28図 PL--	17	磨石 石鏃型	E区	(6.4)	6.7	3.7	268.6	各面とも顕著に摩耗。鏃形状が大きく変形している。残存部は被熱してヒビ割れ、焼けている。	粗粒輝石安山岩
第28図 PL--	18	凹石 楕円扁平鏃	E区	10.5	7.0	3.2	330.7	表裏面とも摩耗・集合打痕が残る。小口部の打痕は見られない。	粗粒輝石安山岩
第28図 PL--	19	凹石 楕円鏃	A区	12.2	8.3	4.8	633.6	表裏面とも摩耗。漏斗状の孔1を穿つ。被熱して破損。	粗粒輝石安山岩
第28図 PL--	20	凹石 楕円鏃	E区	(10.8)	(7.8)	4.4	575.4	全体的に被熱して薄く剥落している。残存部のみに摩耗痕・漏斗状の孔が見える。	粗粒輝石安山岩

第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物

本調査で検出された奈良・平安時代の遺構は、A区からF区までの調査地全体に広がっているが、その地勢により検出される遺構の種類が異なる。住居および掘立柱建物、土坑が点在する箇所はやや微高となるA区およびB区の南側、B区北半の僅かな低地部を挟んだC区からF区の高田川寄りの微高地上に偏在し、E区西側となる平成21年の富岡市教育委員会による発掘調査地点での住居も集落を形成する一連の遺構と考えられる。さらに、溝や水路は微高地上にあり、西から東方向へないし南から北方向へ緩やかに傾斜をもつ。一方、As-B下水田はB区北半の低地部に検出され、平成21年の富岡市教育委員会による発掘調査地点においてもAs-B直下層での稲作の可能性が指摘されている。As-B下高はE区の北端で検出されているが、やはり住居のある面よりは一段低い面からである。また、水路等には、高田川の氾濫に起因すると考えられる洪水層が埋没土となっていることも確認された。

1 堅穴住居

A区では3軒の住居を検出したが、これらの住居は北側に隣接するB区南側と同一平面上にある。B区では南側の平坦地に3軒を検出した。C区では北側のE区に続く平坦面に住居が点在し、1～6号住居を1面調査時に、7号住居を2面調査時に検出した。D区では4軒を検出したが、いずれも調査区域にかかるとはなかった。E区においては最も多くの11軒を検出した。狭い調査区のF区では1軒検出した。

以下、各遺構ごとに記載する。

A区1号住居 (第30～32図、第16表、PL.4・5・25)

位置: A区の中央南東寄り、A区2号住居の南側8mの位置にある。

(座標) X軸=29,247～29,251 Y軸=83,607～83,610

重複: 北側にA区3号住居と大きく重複するが、土層断面の観察および床面の状況から、本住居の方が新しい。

形状: 東西に長い長方形を呈するが、カマドのある北東隅は丸みをもつ。

規模: 長辺4.15m 短辺3.35m 壁高45～48cm

長軸方向: N-80°-E **床面積:** 11.17㎡

埋没土: ロームブロックを含む暗褐色土を主体としていることから、人為的堆積と考えられる。

床面・壁: 床面は細かな凹凸はあるが、ほぼ水平。壁は全体に垂直に立ち上がる。

壁溝: 北壁下では両隅付近を除き見られるが、他の壁下では部分的である。深さは2～3cmで明瞭ではない。

カマド: 北東隅に位置し(方位N-40°E)、規模は全長1.87m、焚き口部から燃焼部長112cm、煙道部長75cm、焚き口部幅55cmを測る。燃焼部は壁外にあり、支脚には棒状礎を据えている。火床は床面よりやや低い。

貯蔵穴: 南東隅に位置し、径45cm、深さ40cmの歪んだ円形で、底面は平坦。壁も直線的に立ち上がる。底面直上には、長径25cmの礎が出土している。

その他: 床下土坑が2基礎確認された。床下1号土坑は西壁南側に隅丸長方形を呈し、長軸137cm、短軸50cm、深さ31cmを測る。床下2号土坑は西壁寄り中央に円形を呈し、径50cm、深さ29cmを測る。両床下土坑の上面は硬化していた。なお、床下2号土坑は3号住居の貯蔵穴の可能性もある。

遺物: カマド内および東壁下を中心に、多量の遺物が出土している。土器15点、石製品・鉄製品を各1点図示した。灰軸陶器皿9・甕13・羽釜15がカマド内、杯7・羽釜14が貯蔵穴内、杯5・甕10・12が東壁際の床直上から出土している。9の灰軸陶器には内底部に朱墨が付着する。掲載した以外に土師器58片、須恵器26片が出土した。

所見: 出土土器では杯類はかわらけ状となり、煮沸具が土釜状・羽釜状であることから、10世紀末から11世紀初頭の住居と考えられる。

A区2号住居 (第33・34図、第17表、PL.5・26)

位置: A区の中央北東寄り、A区1号住居の北側8mの位置にある。

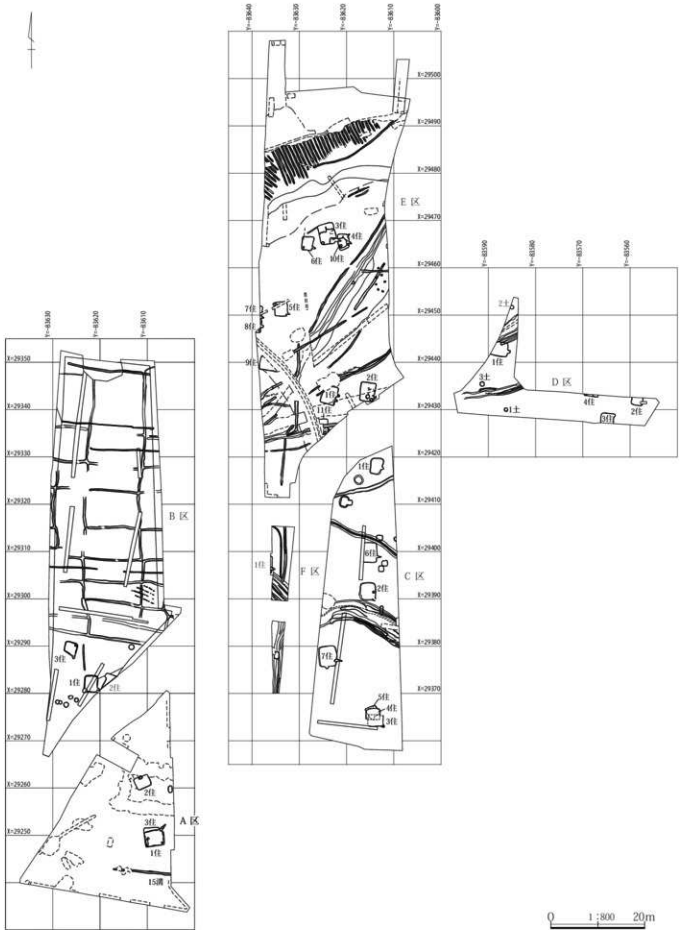
(座標) X軸=29,259～29,262 Y軸=83,609～83,612

形状: 東西に長い長方形を呈し、東辺が西辺より短い台形状にやや歪む。

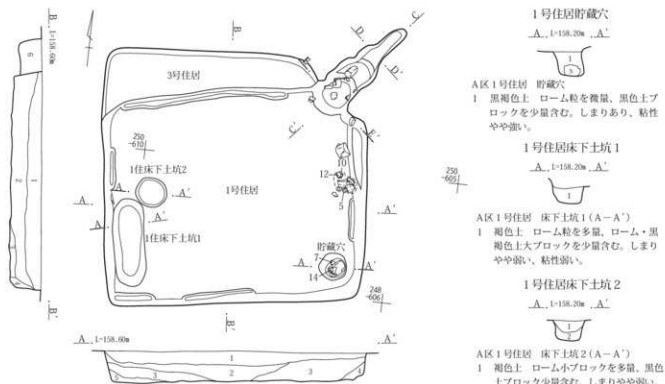
規模: 長辺3.3m 短辺2.25m 壁高51cm

長軸方向: N-65°-E **床面積:** 7.35㎡

埋没土: ロームブロックを多量に含む暗褐色土を主体としていることから、人為的堆積と考えられる。



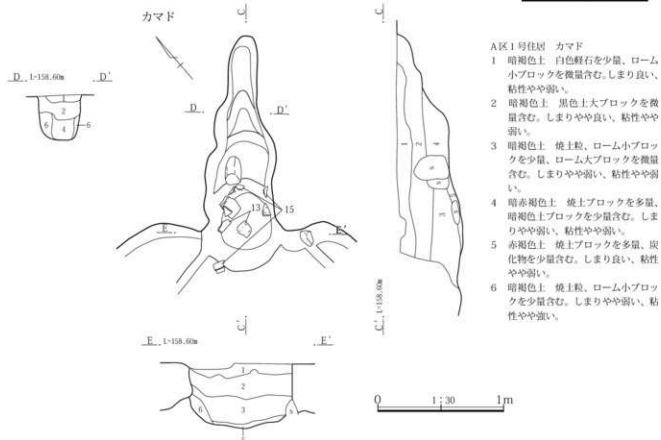
第29図 奈良・平安時代遺構配置図



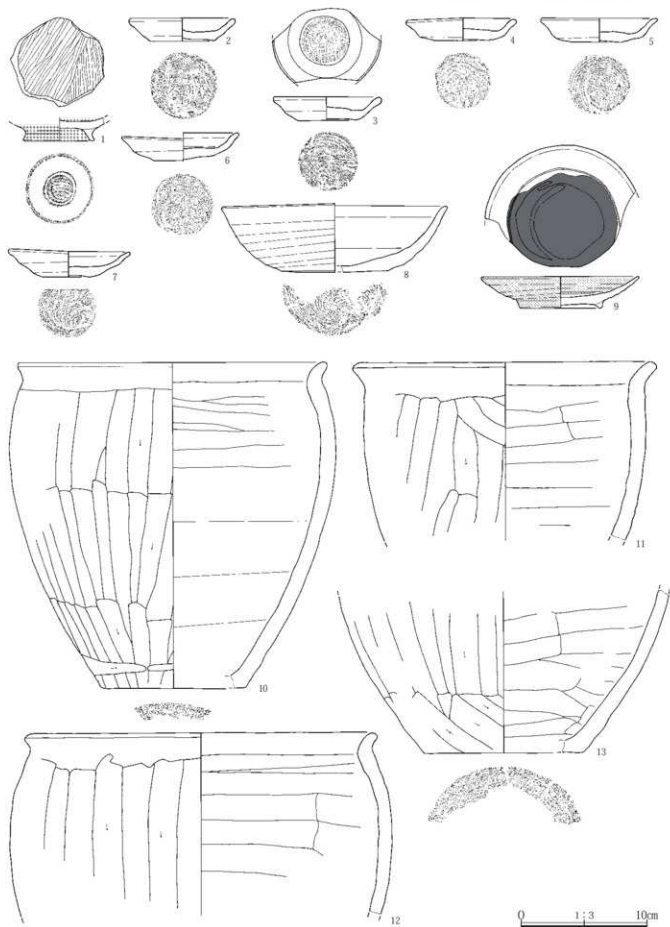
A区1・3号住居

- 1 暗褐色土 白色軽石、ローム粒を少量、ローム小ブロックを僅かに含む。しまりあり、粘性弱い。(1号住居)
- 2 暗褐色土 ローム粒・小ブロック、黒色土ブロックを少量、炭化物を僅かに含む。しまりやや弱い、粘性やや強い。(1号住居)
- 3 暗褐色土 ローム粒・中ブロックを少量含む。しまりあり、粘性やや強い。(1号住居)
- 4 暗褐色土 ローム粒を少量、ローム小ブロックを微量含む。しまりやや弱い、粘性やや強い。(1号住居)
- 5 黄褐色土 ローム粒・小ブロックを多量、黒色土ブロックを含む。しまりやや弱い、粘性やや弱い。(1号住居)
- 6 暗褐色土 白色軽石、ローム粒・小ブロックを少量、炭化物を微量含む。しまり弱い、粘性やや強い。(3号住居)

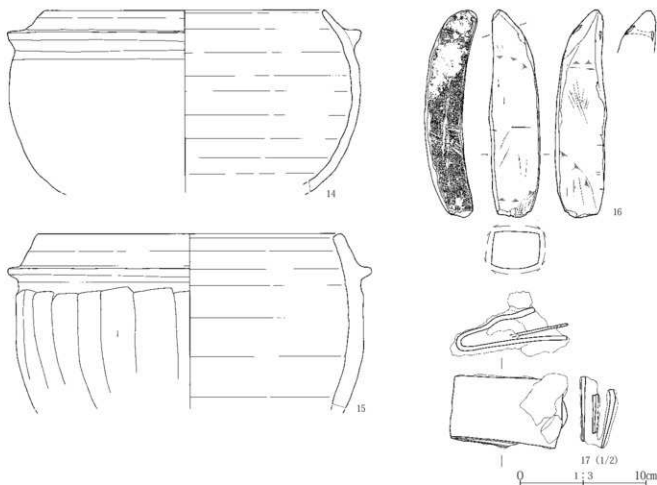
0 1:60 2m



第30図 A区1・3号住居、1号住居カマド平面図



第31図 A区1号住居出土遺物(1)



第32図 A区1号住居出土遺物(2)

第16表 A区1号住居出土遺物観察表

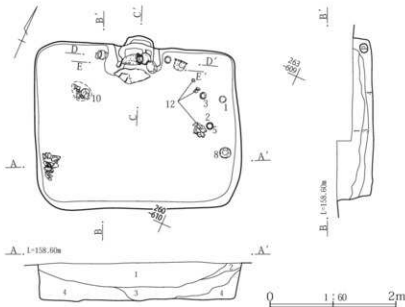
種別番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第31図 Pl.25	1 黒色土器 皿	埋土 底部	底径 5.3	細砂粒/還元焰/暗灰	内外面黒色処理。ロクロ整形。回転右回り。高台は貼付、底部は回転系切り。内面はへら磨き。	
第31図 Pl.25	2 須恵器 杯	埋土 3/4	口 8.0 高 1.8 底 5.2	細砂粒・粗砂粒・褐色粒/酸化焰/ふい煙	ロクロ整形。回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
第31図 Pl.25	3 須恵器 杯	埋土 2/3	口 8.2 高 1.9 底 4.6	細砂粒・粗砂粒・長石/酸化焰/明赤褐色	ロクロ整形。回転右回り。底部は回転系切り無調整。内面底部に糸切痕がわずかに残る。	
第31図 Pl.25	4 須恵器 杯	埋土、口縁部 1/5欠損	口 8.6 高 1.8 底 4.4	細砂粒・粗砂粒・褐色粒/酸化焰/明赤褐色	ロクロ整形。回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
第31図 Pl.25	5 須恵器 杯	床直 ほぼ完形	口 9.0 高 2.0 底 4.4	細砂粒/酸化焰/橙	ロクロ整形。回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
第31図 Pl.25	6 須恵器 杯	埋土 3/4	口 9.0 高 2.2 底 4.8	細砂粒・粗砂粒・褐色粒/酸化焰/橙	ロクロ整形。回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
第31図 Pl.25	7 須恵器 杯	貯蔵穴内 3/5	口 9.4 高 2.2 底 4.5	細砂粒・輝石/酸化焰/橙	ロクロ整形。回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
第31図 Pl.25	8 須恵器 碗	埋土 1/3	口 17.6 高 5.4 底 8.6	細砂粒・粗砂粒・白色粒/酸化焰/橙	ロクロ整形。回転右回り。底部は回転系切り無調整。	
第31図 Pl.25	9 灰釉陶器 皿	竈内 2/3	口 12.2 高 2.5 底 6.9 6.4	緻密/還元焰/灰白	ロクロ整形。回転右回り。高台は貼付、底部は回転ナデ。施釉方法は漬け掛け。	太原2号窯式 煎。転用皿。 内面底部に朱 墨が残る。
第31図 Pl.26	10 土師器 甕	床直、口縁部 ~底部片	口 24.4 高 25.6 底 12.4 脚 25.8	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/ふい・赤褐色	口縁部から胴部は横ナデ。胴部はへら削り、底部は砂底。内面は胴部上位がへらナデ。下半にロクロ痕が残る。	
第31図 Pl.26	11 土師器 甕	埋土、口縁部 ~胴部上半片	口 23.0	細砂粒・粗砂粒・長石/良好/ふい・赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第31図 Pl.26	12 土師器 甕	床直、口縁部 ~胴部上半片	口 26.8	細砂粒・粗砂粒・良好/ふい・赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第31図 Pl.26	13 土師器 甕	h7d内、底部 ~胴部下位片	底 12.6	細砂粒・粗砂粒・片岩/良好/明赤褐色	底部は砂底、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第32図 Pl.26	14 須恵器 羽釜	貯蔵穴内 口縁部~胴部 片	口 22.0 脚 27.8	細砂粒・粗砂粒・小礫・片岩/酸化焰/ふい・黄褐色	ロクロ整形。回転右回りか。罫は貼付、胴部はへら削り後ナデ。	
第32図 Pl.26	15 須恵器 羽釜	h7d内、口縁 ~胴部中位片	口 23.6 脚 28.7	細砂粒・粗砂粒・角閃石/酸化焰/橙	ロクロ整形。回転右回りか。罫は貼付、胴部はへら削り。	

石製品

種別番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第32図 PL.26	16	砥石 切り砥石	埋土	16.3	4.0	3.0	292.8	四面使用。内側面に折断面を部分的に残す。左側面に对ならし傷。上端側に径 ϕ mmの孔を内側穿孔する。	変質安山岩

金属製品

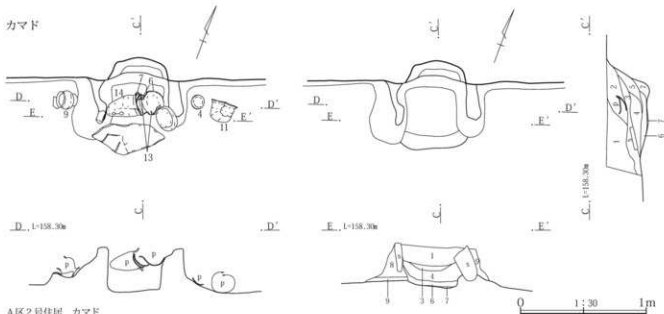
種別番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	特徴・状態	備考
第32図 PL.26	17	鉄製品 不明	埋土 完形否	-	-	-	-	一端が丸い最大幅36.2mm、厚さ2.0mmの板がほぼ中央で曲がり、内側に幅19mm、厚さ1.6mmの板が挟まる。内側の板も端部は丸く、小穿孔が認められる。内側にはもう一枚挟まる可能性があるが、鋸のため不明瞭。	



A区2号住居

- 1 暗褐色土 ローム粒・ローム中ブロックを多量、黒褐色粘土ブロックを微量含む。しまりあり、粘性弱い。
- 2 黒褐色土 ローム粒を少量含む。しまりあり、粘性やや弱い。
- 3 黒褐色土 ローム粒を多量、ローム大ブロックを少量、炭化物を僅かに含む。しまりあり、粘性弱い。
- 4 黒褐色土 ローム粒を少量、ローム小ブロックを微量含む。しまりあり、粘性やや弱い。

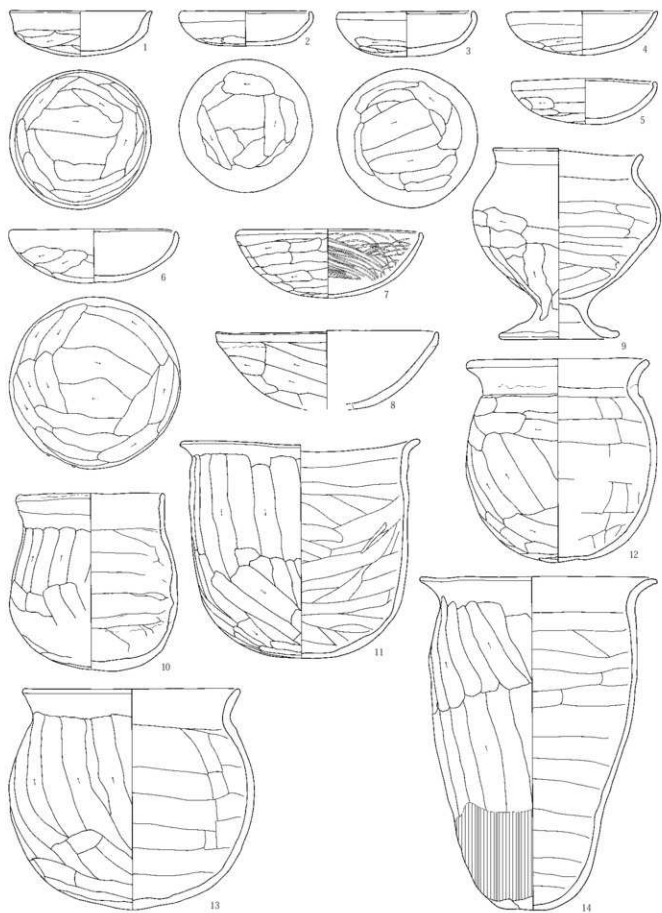
カマド



A区2号住居 カマド

- 1 黒褐色土 ローム粒・小ブロックを少量含む。しまりあり、粘性やや強い。
- 2 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを少量、炭化物を微量含む。しまりあり、粘性やや強い。
- 3 黒褐色土 ローム粒を多量、黒褐色土ブロックを微量含む。しまりやや弱い、粘性やや強い。
- 4 暗赤褐色土 焼土ブロック、ローム粒を多量、炭化物を微量含む。しまり強い、粘性やや強い。
- 5 黒褐色土 焼土小ブロック、炭化物を少量、ローム小ブロックを微量含む。しまりやや弱い、粘性やや強い。
- 6 暗褐色土 ローム粒・小ブロック、黒色土ブロック、焼土ブロックを少量含む。しまりやや弱い、粘性やや強い。
- 7 暗灰色土 ローム粒を少量、炭化物を微量含む。しまり弱い、粘性やや強い。
- 8 黄褐色土 ローム粒・小ブロックを多量に、黒褐色土ブロックとの混土。しまり強い、粘性弱い。(カマド袖)
- 9 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土ブロック、焼土ブロックの混土。しまりやや弱い、粘性弱い。(カマド袖)

第33図 A区2号住居・カマド平面図・カマド掘り方平面図



第34図 A区2号住居出土遺物

第17表 A区2号住居出土遺物観察表

種別 No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	概要
第34図 PL.26	1 土師器 杯	床直 完形	口 11.0 高 3.6 脚 10.6	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへう割り。	
第34図 PL.26	2 土師器 杯	床直 完形	口 10.0 高 2.7 脚 10.6	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへう割り。	
第34図 PL.26	3 土師器 杯	床直 完形	口 10.6 高 3.9 脚 11.2	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちへう割り。	
第34図 PL.26	4 土師器 杯	カマド脇 ほぼ完形	口 11.8 高 3.5	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちへう割り。	
第34図 PL.26	5 土師器 杯	床直 完形	口 11.2 高 3.6 脚 11.5	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちへう割り。	
第34図 PL.26	6 土師器 杯	カマド内 ほぼ完形	口 13.0 高 4.3 脚 13.5	細砂粒・角四石/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへう割り。	
第34図 PL.26	7 土師器 杯	カマド内 完形	口 14.4 高 5.4 脚 14.7	細砂粒・チャート/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへう割り。内面は体部から口縁部に弧状で斜放射状にへう割き。	
第34図 PL.26	8 土師器 杯	床直 底部欠損	口 17.2	細砂粒・粗砂粒・片岩/長石/良好/にぶい黄褐	外面体部に輪轆み痕が残る。口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへう割り。	
第34図 PL.27	9 土師器 台付甕	カマド脇床直 胴部一部欠損	口 11.5 高 15.0 脚 14.8	細砂粒・粗砂粒・片岩/良好/にぶい赤褐	脚部は貼付。口縁部は横ナデ、胴部上半はナデ下半はへう割り、脚部は横ナデ。内面は底部から胴部にへうナデ。	
第34図 PL.27	10 土師器 小型甕	床直 胴部一部欠損	口 11.4 高 14.0 脚 13.3	細砂粒・粗砂粒・片岩/良好/にぶい赤褐	内面胴部に輪轆み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はへう割り。一部表面摩滅のため単位不明。内面は底部から胴部にへうナデ。	
第34図 PL.27	11 土師器 小型甕	床直 胴部一部欠損	口 18.6 高 17.2 底 5.0 脚 17.3	細砂粒・粗砂粒・小磯・チャート/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はへう割り。内面は底部から胴部にへうナデ。	
第34図 PL.27	12 土師器 小型甕	床直 胴部一部欠損	口 14.0 高 16.0 底 2.5 脚 15.0	細砂粒・粗砂粒・角四石/良好/にぶい赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はへう割り。内面は底部から胴部にへうナデ。	
第34図 PL.27	13 土師器 小型甕	カマド内 1/2	口 17.0 高 17.4 底 7.0 脚 19.3	細砂粒・粗砂粒・片岩/長石/良好/にぶい黄褐	口縁部は横ナデ、胴部と底部はへう割り。内面は底部から胴部にへうナデ。	
第34図 PL.27	14 土師器 甕	カマド内 一部欠損	口 18.4 高 26.4 底 4.5	細砂粒・粗砂粒・片岩/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はへう割り。内面は底部から胴部にへうナデ。	

床面・壁：床面は細かな凹凸の多く、カマド東脇付近が僅かに窪む。壁は北・西辺で垂直に近い立ち上がり。

カマド：北壁のほぼ中央に位置し(方位N-17°W)、規模は全長0.7m、幅0.9m、焚き口部から燃焼部長48cm、煙道部長22cmを測る。燃焼部は壁内側にあり、焚口両脇には礫を据え、カマド前に焚口天井部の扁平礫が崩落していた。火床は住居床面より6cm低く、燃焼部の奥行に乏しい。

遺物：カマド内および周辺に、土器が多量に残存していた。14点の土師器を図示した。杯6・7および甕13・14がカマド内、杯4・台付甕9がカマド脇に置かれた状態で出土している。また、カマド内の長胴甕14には丸胴甕13を逆さまに乗せたような状態で出土している。他に杯1～3・5が北東隅付近、甕9や12も周辺の床直上からの出土である。さらに、摺網石17点が西壁下南寄りでもとまって出土している。形状は近似しているが、石材は多様である。図示はしていない。掲載した以外に土師器73片が出土した。

所見：カマド内で使用した甕が長胴で、杯類は丸底気味が主体だが、2の平底も加わることから、7世紀末から8世紀初頭の住居と考えられる。

A区3号住居 (第30図、PL.7)

位置：A区の中央南東寄り、A区1号住居と重複する。

(座標)X軸=29,250～29,251 Y軸=83,607～83,610

重複：A区1号住居の北側に住居の大半を重複するが、土層断面の観察および床面の状況から、本住居の方が古い。

形状：北壁周辺のみが残存で、先述のA区1号住居カマド東脇のテラス状平坦面が本住居床の東壁となる可能性が高く、方形を呈すると考えられる。

規模：東西辺長4.15m 壁高35cm

長軸方向：北辺方位N-85°E 床面積：(1.79) m²

埋没上：暗褐色土を主体とする。

床面・壁：床面は凹凸の多い床面で、残存する北壁は垂直に近い立ち上がり。

その他：カマドは残存していないが、A区1号住居のカマドと同じ位置にあった可能性がある。A区1号住居の床下2号土坑は、本住居に伴う貯蔵穴の可能性もある。

遺物：破片を含め出土遺物はない。

所見：時期決定の根拠を持たないが、A区1号住居と時期差のあまりない10世紀代の可能性が高い。

B区1号住居 (第35図、第18表、PL.6・27)

位置: B区の南端に位置し、本住居の東側1mにはB区2号住居が隣接している。

(座標)X軸=29,280 ~ 29,283 Y軸=-83,619 ~ 83,623

重複: 住居の南西隅をB区7号土坑と重複するが、その新田は不明。

形状: 南北に長い長方形を呈する。

規模: 長辺3.65m 短辺2.9m 壁高30cm

長軸方向: N-5°-E **床面積:** 8.10㎡

埋設土: ロームブロックを多量に含む黒褐色土を主体としていることから、人為的堆積と考えられる。

床面・壁: 床面は比較的平坦であるが、北側へ低く傾斜する。カマド前面や住居中央付近に炭化物粒が散っていた。壁は全体にやや傾斜をもって立ち上がる。

壁溝: カマド周辺を除いて全周する。幅10 ~ 15cm、深さ4cm前後を測る。

カマド: 東辺の南寄りに位置し(方位N-103°E)、煙道の先端は調査区外へ延びる。規模は全長(0.95)m、幅0.6m、焚き口部から燃焼部長50cm、煙道部長(45)cmを測る。焚き口の袖石を壁際に据える。燃焼部は壁外にあり、火床は床面と同レベルにある。

その他: 掘り方をもち、底面はほぼ平坦。掘り方調査時に、南東隅で径76×68cmの土坑を確認した。貯蔵穴のある施設だが、床下土坑の可能性もある。

遺物: 出土遺物は少なく、須恵器の杯3点を図示した。2・3は北寄り壁際の床直上付近、1は住居中央付近の床直上の出土である。掲載した以外に土師器7片、須恵器7片が出土している。

所見: 出土杯類は口径10cm前後と小型化し、厚手で扁平であることから、10世紀後半の住居と考えられる。

B区2号住居 (第36図、第19表、PL.6・27)

位置: B区の南端に位置し、本住居の西側1mにはB区1号住居が隣接している。

(座標)X軸=29,281 ~ 29,284 Y軸=-83,816 ~ 83,619

形状: 調査区域にあって、カマド等を含む住居の南東側が調査区外となる。方形を呈すると思われるが、西辺北隅に長さ1m、幅1.5mの張り出し部をもつ。

規模: 長辺3.6m 短辺(2.3)m 壁高30cm

西辺方位: N-29°-E **床面積:** (3.60)㎡

埋設土: 細かいロームブロックを含む黒褐色土を主体

としていることから、人為的堆積と考えられる。

床面・壁: 床面は細かな凹凸はあるが、ほぼ平坦。壁はやや傾斜をもって立ち上がる。

その他: 住居の床面下に深さ5cm前後の浅い掘り方をもち、中央付近に径68cm、深さ21cmを測る円形の床下土坑を有する。また、径16cm、深さ33cmの円形ピットを1カ所確認した。

遺物: 出土遺物は少なく、図示できたのは北東壁下床直上出土の須恵器椀1点のみである。他に土師器21片、須恵器38片が出土した。

所見: 図示した須恵器椀がやや外反する口縁部であることから、10世紀前半の住居と考えられる。

B区3号住居 (第37図、第20表、PL.7・27)

位置: B区の南西寄りに位置し、本住居の南東側5mにB区1号住居がある。

(座標)X軸=29,287 ~ 29,291 Y軸=-83,624 ~ 83,627

形状: 方形に近いが、南西隅が鈍角に開き、台形状に大きく歪む。

規模: 長辺2.7m 短辺1.9m 壁高15cm

長軸方向: N-72°-W **床面積:** 5.50㎡

埋設土: ロームブロックを含む黒褐色土を主体としていることから、人為的堆積と考えられる。

床面・壁: 床面は住居中央がやや窪みぎみとなるが、概ね平坦。壁は傾斜をもって立ち上がる。

壁溝: カマド周辺と貯蔵穴のある北東隅を除いて巡り、幅10 ~ 13cm、深さは3cm前後を測る。

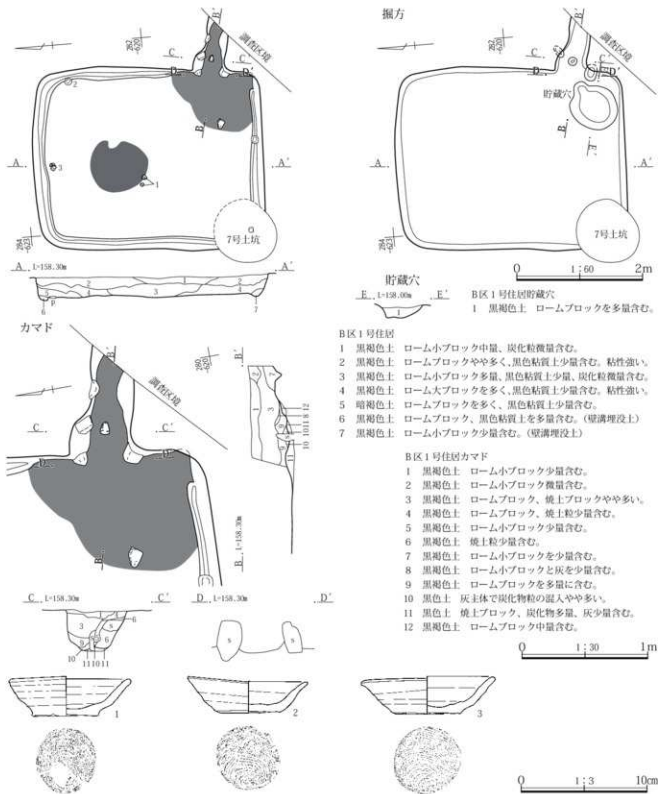
カマド: 鋭角にすまざる南東隅に位置し(方位N-169°E)、規模は全長0.68m、幅0.6m、焚き口部から燃焼部長68cmを測る。燃焼部は壁外にあり、火床は床面よりやや低くなる。焚き口の両脇に袖石の礎を据えている。一回り以上大きな掘り方をもつ。

貯蔵穴: 北東隅に位置し、径50cm、深さ29cmを測る円形で、底面は平坦。

その他: 深さ8cm前後の浅い土坑状の掘り方を、住居の中央付近とカマド前面に確認できた。

遺物: 出土遺物は少ないが、須恵器椀2点と土師器盃3点を図示した。いずれもカマド内からの出土である。掲載した以外に、土師器15片、須恵器20片が出土した。

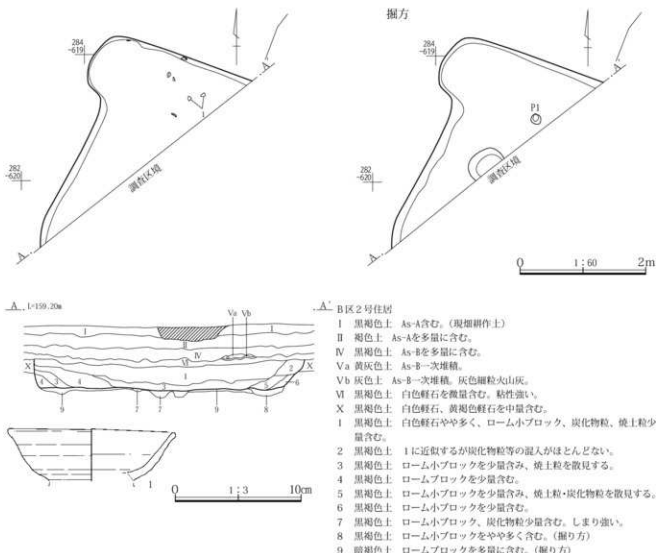
所見: 杯類は大型だが、盃類はコの字口縁の形態を留めていないことから、10世紀中頃の住居と考えられる。



第35図 B区1号住居・カマド平面図・掘り方平面図、出土遺物

第18表 B区1号住居出土遺物観察表

土器類		出土位置		計測値(cm)		胎土/焼成/色調		成形・整形の特徴		概要
種別番号 採取番号	No.	種類 器種	残存率	口 径	高	胎土	焼成	色調		
第35図 PL-27	1	須恵器 鉢	床直 1/2	□ 5.4	9.2 高 5.4	3.1	粗砂粒/酸化焙/にぶい 粗		口ケロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第35図 PL-27	2	須恵器 鉢	床直 完形	□ 5.2	9.3 高 5.2	2.9	粗砂粒/酸化焙/にぶい 粗		口ケロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第35図 PL-27	3	須恵器 鉢	床直 2/3	□ 5.4	10.2 高 5.4	3.0	粗砂粒・粗砂粒/酸化 焙/にぶい粗		口ケロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	



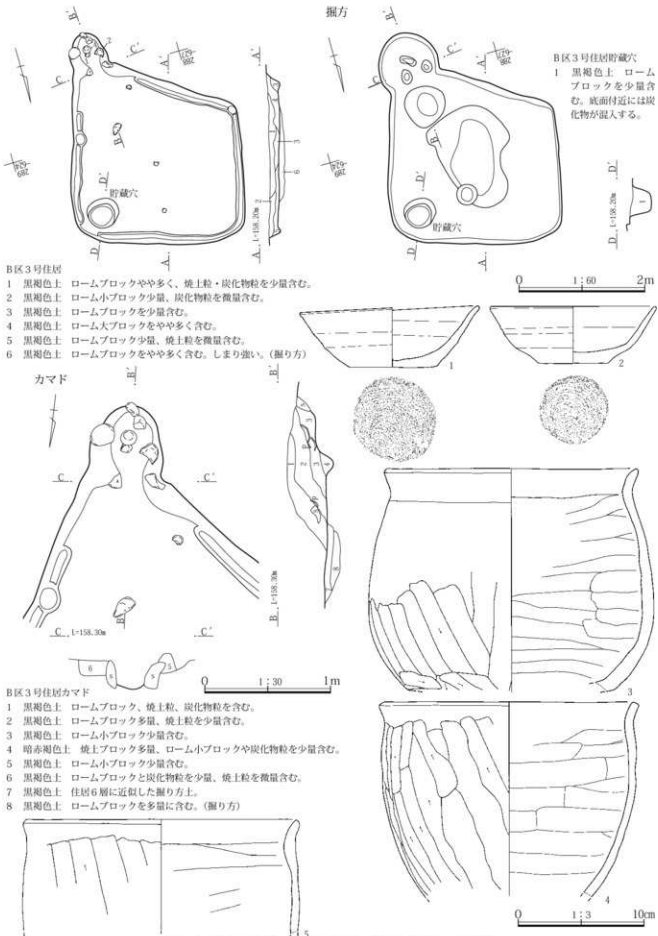
第36図 B区2号住居平面図・掘り方平面図、出土遺物

第19表 B区2号住居出土遺物観察表

土器類							
種別番号 図説番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第36図 PL-27	1	須恵器 杯	床直、口縁部 ～体部片	□ 13.0 底 6.8	細砂粒・粗砂粒/片岩・ 長石/酸化塩/にぶい相	ロクロ整形、回転右回り。高台が貼付されている。	

第20表 B区3号住居出土遺物観察表

土器類							
種別番号 図説番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第37図 PL-27	1	須恵器 椀	カマド内 完形	□ 13.9 高 4.8 底 7.0	細砂粒・粗砂粒/酸化 塩/にぶい相	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第37図 PL-27	2	須恵器 椀	カマド内 1/3	□ 13.0 高 4.5 底 55.4	細砂粒・褐色粒/酸化 塩/にぶい相	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第37図 PL-27	3	土師器 甕	カマド内、口 縁部～底部片	□ 19.5 胴 22.3 底 16.1	細砂粒・粗砂粒・頁岩/ 良好/にぶい赤褐色	口縁部から胴部は横ナデ。胴部は上半がナデ、下半は ヘラ削り。底部は砂底。内面胴部はヘラナデ。	
第37図 PL-27	4	土師器 甕	カマド内、口 縁部～胴部片	□ 19.7 胴 20.0	細砂粒・粗砂粒/角閃 石/良好/明赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第37図 PL-27	5	土師器 甕	カマド内、口縁 部～胴部上位片	□ 21.2	細砂粒・角閃石/良好/ にぶい赤褐色	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	



B区3号住居

- 1 黒褐色土 ロームブロックやや多く、焼土粒・炭化物粒を少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロック少量、炭化物粒を微量含む。
- 3 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 4 黒褐色土 ローム大ブロックをやや多く含む。
- 5 黒褐色土 ロームブロック少量、焼土粒を微量含む。
- 6 黒褐色土 ロームブロックをやや多く含む。しまり強い。(掘り方)

カマド

B区3号住居カマド

- 1 黒褐色土 ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロック多量、焼土粒を少量含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロック少量含む。
- 4 暗赤褐色土 焼土ブロック多量、ローム小ブロックや炭化物粒を少量含む。
- 5 黒褐色土 ローム小ブロック少量含む。
- 6 黒褐色土 ロームブロックと炭化物粒を少量、焼土粒を微量含む。
- 7 黒褐色土 住居6層に近似した掘り方上。
- 8 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。(掘り方)

第37図 B区3号住居・カマド平面図・掘り方平面図、出土遺物

C区1号住居 (第38図、第21表、PL.9・28)

位置：C区の北端に位置し、本住居の南側15mにC区6号住居が、北側12mにE区11号住居がある。

(座標)X軸=29,416～29,419 Y軸=83,612～83,615

形状：南北に長い隅丸長方形を呈するが、北辺が南辺より長い台形状。

規模：長辺3.45m 短辺2.35m 壁高35cm

長軸方向：N-10°-E 床面積：6.97㎡

埋没土：ロームブロックや鈍い黄褐色土ブロックを含む暗褐色土を主体としていることから、人為的堆積と考えられる。

床面・壁：床面はほぼ水平だが、中央が僅かに低くなる。壁はやや傾斜をもって立ち上がる。

カマド：東辺の中央やや南寄りに位置し(方位N-106°E)、規模は全長0.5m、幅0.6m、焚き口部から燃焼部長50cmを測る。燃焼部は壁際にある。

遺物：カマド前を含む住居東側に遺物の出土が多い。須恵器碗4点、土師器甕3点を図示した。碗2が南壁直下の床直上から出土し、碗4、甕5・7がカマド前に散るように出土している。掲載した以外に土師器414片、須恵器47片が出土した。

所見：杯類は大型で高台断面が三角形を呈し、甕類は口縁部にコの字の形状を残していることから、10世紀前半の住居と考えられる。

C区2号住居 (第39図、第22表、PL.9・10・28)

位置：C区のほぼ中央に位置し、本住居の北側2mにC区6号住居が、南西側6mにC区7号住居がある。

(座標)X軸=29,389～29,393 Y軸=83,613～83,617

重複：カマドの先端をC区1号土坑と重複するが、遺構確認時に本住居の方が旧いことは明らかであった。

形状：南北に長い長方形を呈する。

規模：長辺3.8m 短辺3.3m 壁高50cm

長軸方向：N-1°-E 床面積：10.06㎡

埋没土：上層の1・2層にA s-Bを含み、3層以下は焼土ブロックや炭化材・炭化物を含む黒褐色土ないし暗褐色土が主体となっていることから、人為的堆積と考えられる。

床面・壁：床面は細かな凹凸が多く、中央付近の広い範囲に硬化面が及ぶ。壁はやや傾斜をもって立ち上がる。

カマド：南東隅に位置する(方位N-118°E)、燃焼

部中央から先端は重複により不明。規模は全長(0.45)m、幅0.6mを測る。燃焼部は壁外にあり、火床は住居床より僅かに低い。焚き口部の左袖石は壁際にあり、燃焼部中央に棒状礎が支脚として据えられている。

その他：ほぼ全体に掘り方をもち、中央付近が深く最深16cm前後を測る。

遺物：住居全体から遺物と共に、多くの炭化材が出土した。遺物は小皿2と羽釜5がカマド内、甕4がカマド前の壁直下、甕3が東壁中央付近から出土している。掲載した以外に土師器72片、須恵器44片、灰釉4片が出土した。

所見：供献土器は高台杯の皿で変則的な遺物だが、かわらけ状の小皿であり、煮沸具も羽釜・土釜状である。10世紀末から11世紀代の住居と考えられる。また、炭化材のあり方から、焼失住居の可能性はある。

C区3号住居 (第40図、第23表、PL.10・28)

位置：C区の南端付近に位置し、本住居の北西側6mにC区7号住居がある。

(座標)X軸=29,362～29,365 Y軸=83,612～83,615

重複：本住居とC区4・5号住居の3軒が重複するが、カマド等の残存状況や土層断面の確認から、本住居が最も新しい。

形状：確認できたのは南辺と東辺で、不明瞭ではあるが東西に長い長方形と考えられる。

規模：長辺(3.2)m 短辺(2.3)m 壁高24cm

長軸方向：N-86°-E 床面積：(推定7.64)㎡

埋没土：1層および2層はA s-Bを多量に含んでいるが、後世の攪乱による層と思われる。4号住居との切り合いも明瞭なものではない。

床面・壁：床面はほぼ水平で、凹凸が少ない。壁はやや傾斜をもって立ち上がる。

カマド：南東隅に位置し(方位N-169°E)、規模は全長0.65m、幅0.6m、焚き口部から燃焼部長65cmを測る。燃焼部は壁外にあり、火床は床面と同じ高さにある。火床には深さ2cmの不明瞭な窪みを2カ所確認できた。カマド壁外の南側には川原石が並べられているが、本カマドに伴う施設か判断できない。

遺物：かわらけ状の小皿2点を図示した。1は住居中央の床直上、2はカマド内からの出土である。掲載した以外に土師器11片、須恵器23片が出土した。

所見：出土遺物がかわらけ状であることから、11世紀前半の住居と考えられる。

C区4号住居 (第40図、PL.10)

位置：C区の南端付近に位置し、C区3・5号住居と重複する。

(座標)X軸=29,364～29,366 Y軸=83,613～83,615

重複：本住居とC区3・5号住居が重複するが、カマド等の残存状況や土層断面の確認から、本住居はC区3号住居より古い、C区5号住居より新しい。

形状：東西に長い長方形と考えられる。

規模：長辺3.15m 短辺2.3m 壁高20cm

長軸方向：N-88°-W 床面積：(推定6.44)㎡

埋没土：ロームブロックを混入する黒褐色土を主体としていることから、人為的堆積と考えられる。

床面・壁：床面は概ね平坦である。壁はやや傾斜をもって立ち上がる。

カマド：3号住居との重複により残存しない。

その他：床面下には、浅く掘り方をもつ。

遺物：破片を含め、本住居の出土遺物はない。

所見：根拠はないが、C区3号住居よりは古いものの近接した時期が想定される。

C区5号住居 (第40図、PL.10)

位置：C区の南端付近に位置し、C区3・4号住居と重複する。

(座標)X軸=29,364～29,367 Y軸=83,612～83,616

重複：本住居とC区3・4号住居が重複するが、カマド等の残存状況や土層断面の確認から、本住居はいずれの住居より最も古い。

形状：残存する壁から、不整形と考えられる。

規模：短辺2.4m 壁高5cm

長軸方向：N-33°-W 床面積：(推定5.07)㎡

埋没土：ロームブロックを混入する黒褐色土を主体としていることから、人為的堆積と考えられる。

床面・壁：床面は西側に一部残存するのみだが、ほぼ水平。壁は傾斜をもって立ち上がる。

カマド：C区3号住居の床面に僅かに焼土が残存することから、南辺西隅にカマドがあった可能性をもつが詳細は不明。

遺物：破片を含め、本住居の出土遺物はない。

所見：遺物の出土もなく、時期は不明。

C区6号住居 (第41図、第24表、PL.10・28)

位置：C区の中央やや北寄りに位置し、本住居の北側15mにC区1号住居が、南側2mにC区2号住居がある。

(座標)X軸=29,399～29,401 Y軸=83,612～83,616

形状：トレンチ確認の際に住居の西壁を壊してしまったが、南北に長いやや歪んだ長方形を呈するようで、東辺はカマドを挟んでやや食い違う。

規模：長辺4.15m 短辺(2.9)m 壁高10cm

長軸方向：N-5°-E 床面積：(11.04)㎡

埋没土：暗褐色土を主体としており、自然堆積かは不明。

床面・壁：床面は細かな凹凸が多い。壁は傾斜をもって立ち上がる。

カマド：東壁の南寄りに位置し(方位N-89°-E)、規模は全長1.1m、幅0.55m、焚き口部から燃焼部長50cm、煙道部長60cmを測る。燃焼部は壁外にあり、火床は床面と同レベルにある。燃焼部中央には棒状礎を支脚として据え、焚き口部の袖石を両壁際に据えている。カマド前には焚き口部の天井石と思われる礎が崩落している。

遺物：土器はカマドとその周辺に集中し、南壁際に径20cm前後の扁平礫が多く出土した。杯1・椀2・甕類5・6がカマド内から、羽釜7がカマド前から出土。8の手捏ねは埋没土中からの出土である。掲載した以外に土師器29片、須恵器28片、灰釉1片が出土した。

所見：椀2が高足高台をもつことから、10世紀中頃の住居と考えられる。

C区7号住居 (第42・43図、第25表、PL.10・29)

位置：C区の南西寄りに位置し、本住居の北東側6mにC区2号住居が、南東側6mにC区3号住居がある。

(座標)X軸=29,375～29,380 Y軸=83,620～83,625

形状：南北に長い長方形を呈し、東辺はカマドを挟んでやや食い違う。南辺やや西よりに張り出し状の施設があるが、やや大型ピットほどの規模で底面は住居床より4cm高く、重複する遺構の可能性もある。

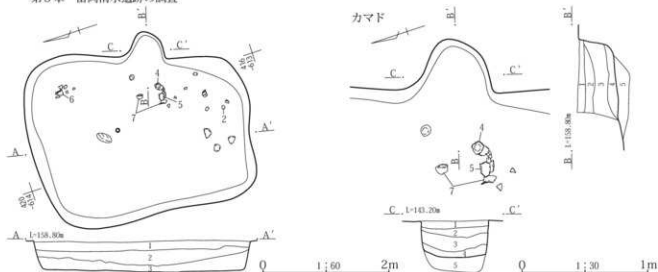
規模：長辺4.35m 短辺3.8m 壁高30cm

長軸方向：N-5°-W 床面積：14.09㎡

埋没土：ロームブロックを含む暗褐色土を主体としていることから、人為的堆積と考えられる。

床面・壁：緩やかな凹凸のある床面で、カマド前面から住居中央付近がやや高い。壁は北・南壁が直立きみで、西壁は傾斜をもって立ち上がる。

第3章 富岡清水遺跡の調査

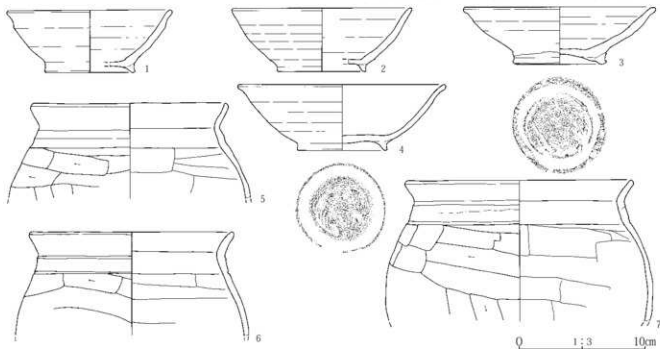


C区1号住居

- 1 暗褐色土 ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を少量含む。しまり強い。
- 2 暗褐色土 黄褐色土小ブロックをやや多く、焼土粒・炭化物粒を含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色土小ブロックを多量に、焼土粒を含む。

C区1号住居カマド

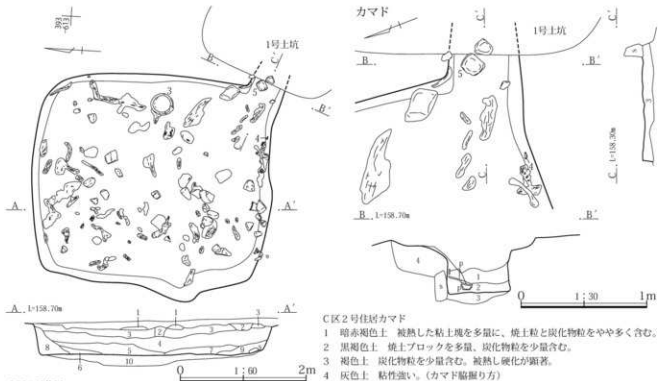
- 1 暗褐色土 ロームブロックと焼土粒を少量、炭化物粒を微量含む。
- 2 黒褐色土 暗灰黄色土小ブロックをやや多く、白色軽石を少量含む。
- 3 黒褐色土 暗灰黄色土小ブロックと焼土粒を少量含む。
- 4 暗赤褐色土 焼土粒を多量に、炭化物粒を少量含む。
- 5 暗赤褐色土 焼土ブロックを多量、炭化物粒を少量含む。(振り方)



第38図 C区1号住居・カマド平面図、出土遺物

第21表 C区1号住居出土遺物観察表

土器類		出土位置		計測値(cm)		胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
種別番号 図説番号	No.	種別 器種	残存率	口	高			
第38図 Pl. 28	1	須臾器 椀	埋土 1/5	口 12.8 底 7.0	高 4.9 台 6.6	細砂粒・粗砂粒/還元 胎/灰	ロクロ整形、回転右回りか。高台は貼付、底部はナデ。	
第38図 Pl. 28	2	須臾器 椀	床直 1/4	口 13.9 底 7.0	高 4.5 台 6.7	細砂粒・粗砂粒/還元 胎/灰白	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第38図 Pl. 28	3	須臾器 椀	埋土 1/3	口 14.9 底 7.4	高 4.5 台 6.6	細砂粒・粗砂粒/還元 胎/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転系切り。	
第38図 Pl. 28	4	須臾器 椀	床直 1/3	口 16.2 底 7.0	高 5.2 台 6.6	細砂粒・粗砂粒・長石 胎/酸化胎/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転系切り。	
第38図 Pl. -	5	土師器 甕	床直、口縁部 ~胴部上位片	口	15.2	細砂粒/良好/赤、橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第38図 Pl. 28	6	土師器 甕	床直、口縁部 ~胴部上位片	口	15.8	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第38図 Pl. 28	7	土師器 甕	床直、口縁部 ~胴部上平片	口	17.6 胴 21.0	細砂粒/良好/橙	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

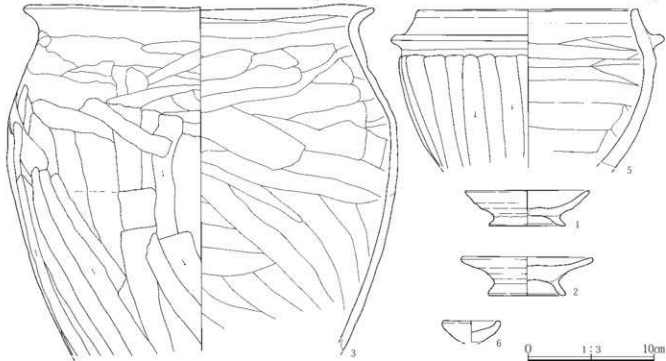


C区2号住居カマド

- 1 暗赤褐色土 被熱した粘土塊を多量に、焼土粒と炭化物粒をやや多く含む。
- 2 黒褐色土 焼土ブロックを多量、炭化物粒を少量含む。
- 3 褐色土 炭化物粒を少量含む。被熱し酸化が顕著。
- 4 灰色土 粘性強い。(カマド脇掘り方)

C区2号住居

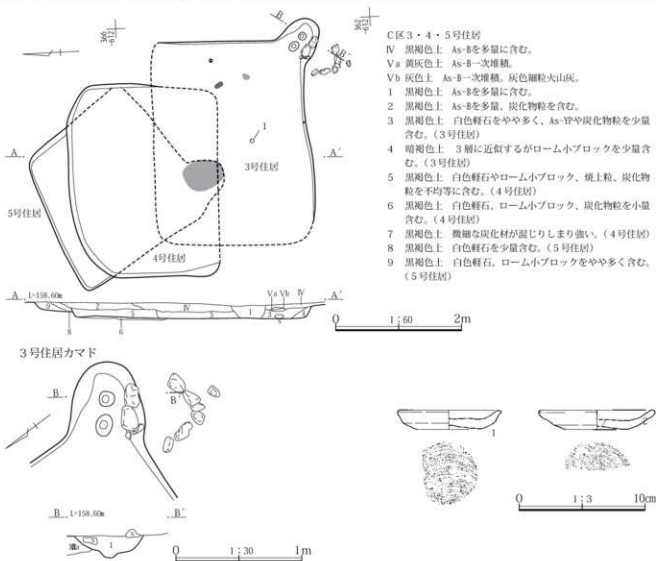
- 1 暗灰色軽石 As-Bを多量に含む。
- 2 黒褐色土 As-Bをやや多く含む。
- 3 黒褐色土 焼土粒を少量、炭化物粒を微量含む。
- 4 暗褐色土 白色軽石、焼土粒を少量、炭化物粒を微量含む。
- 5 暗褐色土 焼土小ブロックをやや多く、白色軽石や炭化物粒を少量含む。
- 6 黒褐色土 焼土粒を少量含む。
- 7 黒褐色土 焼土小ブロックをやや多く、炭化物粒を少量含む。
- 8 暗褐色土 焼土粒、炭化物粒を少量含む。
- 9 暗褐色土 8層と同じだが焼土粒、炭化物の混入が多い。
- 10 暗黄褐色土 黄褐色土小ブロックを多量に含む。上面は踏み固められしまり強い。(掘り方)



第39図 C区2号住居・カマド平面図、出土遺物

第22表 C区2号住居出土遺物観察表

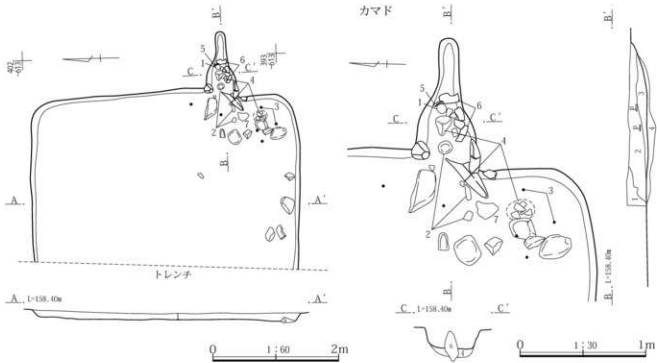
種類	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・形状の特徴	概要
第39回 PL-28	1	須恵器 皿	埋上 1/3	口 9.6 高 2.8 底 5.6 6.0	細砂粒/酸化塩/にぶい 黄橙	口クロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ナデ。	
第38回 PL-28	2	須恵器 皿	カマド内 1/2	口 10.1 高 3.0 底 5.3 6.0	細砂粒/酸化塩/にぶい 黄橙	口クロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ナデ。	
第38回 PL-28	3	土師器 甕	床直、口縁部 ~胴部上位	口 27.0 胴 30.5	細砂粒・粗砂粒・長石 /良好/明赤褐	外面胴部に輪轆み痕が残る。口縁部は横ナデ、頸部はヘラナデ、胴部はヘラ削り。内面は頸部から胴部にヘラナデ。	
第38回 PL-28	4	土師器 甕	床直、口縁部 ~胴部上位片	口 26.0 胴 28.5	細砂粒・粗砂粒/良好 /にぶい/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第38回 PL-28	5	須恵器 羽釜	炉内、口縁 ~胴部下位片	口 17.0 胴 21.6	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/酸化塩/にぶい/橙	口クロ整形、回転方向不明。跨は貼付、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第38回 PL-28	6	手捏ね土器 杯形	埋上 3/4	口 4.2	細砂粒/良好/にぶい/橙	内外面ともナデ。	



第40回 C区3・4・5号平住居・3号住居カマド平面図、出土遺物

第23表 C区3号住居出土遺物観察表

種類	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・形状の特徴	概要
第40回 PL-28	1	須恵器 皿	床直 1/2	口 7.8 高 1.9 底 5.1	細砂粒/酸化塩/橙	口クロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第40回 PL-28	2	須恵器 皿	カマド内 1/2	口 8.8 高 1.9 底 5.2	細砂粒/酸化塩/橙	口クロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	

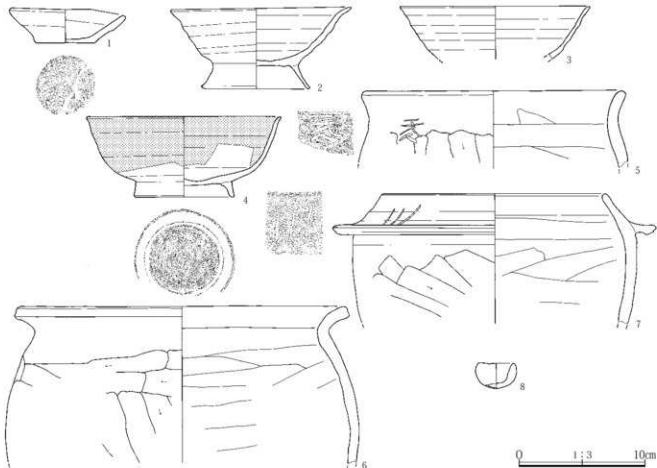


C区6号住居

1 暗褐色土 黒褐色土小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。

C区6号住居カマド

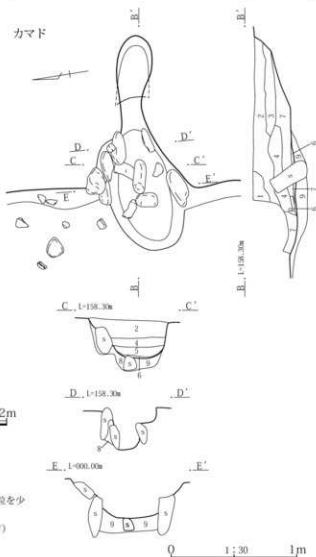
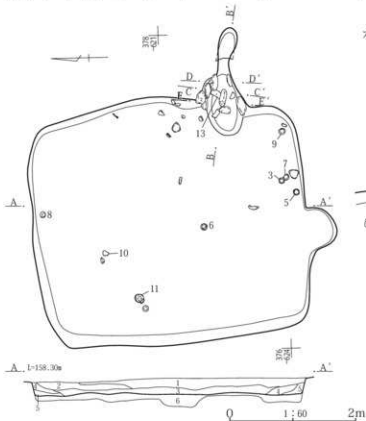
- 1 暗褐色土 住居1層に近似し、焼土粒を微量含む。
 2 暗灰黄色土 カマド天井部構築材を主体に、焼土粒を少量含む。
 3 黒褐色土 暗灰黄色土小ブロックや焼土ブロックをやや多く含む。
 4 黒褐色土 焼土小ブロックを多量に、炭化物粒や灰を少量含む。
 (掘り方)



第41図 C区6号住居・カマド平面図、出土遺物

第24表 C区6号住居出土土物観察表

土器類	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	概要
第41図 PL.28	2	須恵器 椀	カマド内 3/4	口 14.0 高 6.4 底 6.7 台 8.2	細砂粒・粗砂粒・片岩 酸化塩/にふい黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ。	
第41図 PL.28	3	須恵器 椀	埋上、口縁部 ~体部片	口 14.8	細砂粒・長石/酸化塩/ 灰	ロクロ整形、回転右回り。	
第41図 PL.28	4	灰輪陶器 椀	床直 1/2	口 15.2 高 6.3 底 7.5 台 7.6	微砂粒/還元塩/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は糸切り 後はほぼ全面回転ヘラナデ。施釉方法は塗り掛り。	虎渡山1号窯式。
第41図 PL.28	5	土師器 甕	カマド内、口縁 ~胴部上位片	口 20.2	細砂粒・粗砂粒・小礫、 長石/良好/にふい赤褐色	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	外面頸部に「天人」の刻書、焼成前。
第41図 PL.28	6	土師器 甕	カマド内、口縁 ~胴部上半片	口 25.5 胴 28.0	細砂粒/良好/にふい褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
第41図 PL.28	7	須恵器 羽釜	床直、口縁部 ~胴部上半片	口 17.6 踵 25.6	細砂粒・粗砂粒/酸化塩/ にふい黄褐色	ロクロ整形、回転方向不明。踵は貼付、胴部は跨や 下よりヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	外面頸部に「川」の刻書、焼成前。
第41図 PL.28	8	手捏ね土器 椀形	埋上 1/2	口 2.6 高 2.0	細砂粒/良好/にふい赤褐色	口縁部から体部はナデ、底部はヘラナデ。	



C区7号住居

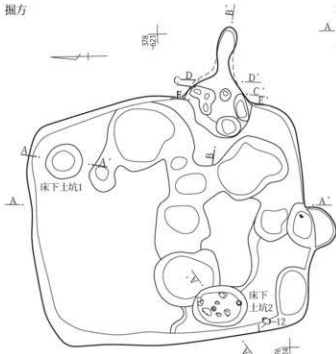
- 1 暗褐色土 白色軽石、ローム小ブロック、焼土粒、炭化物粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 1層に近似するがロームブロックの混入物やや多い。
- 3 暗褐色土 1層に近似するが混入物は少ない。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロックと焼土粒を少量、炭化物粒を微量含む。
- 5 暗褐色土 ローム小ブロックをやや多く、北側では焼土粒、南側では炭化物粒を少量含む。
- 6 黒褐色土 ロームブロックを多量に含み、細礫も混入。しまり強い。(掘り方)

C区7号住居カマド

- 1 暗褐色土 住居1層に同じ。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック、焼土粒、炭化物粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロック少量、炭化物粒を微量含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。(天井部構築材)
- 5 暗褐色土 ローム小ブロック多量、焼土粒を少量含む。
- 6 暗褐色土 灰を多量に、炭化物粒を少量含む。
- 7 黒褐色土 住居6層に同じ。
- 8 黒褐色土 ローム小ブロックや焼土粒を少量含む。
- 9 暗灰色土 焼土粒や灰を多量に含む。

第42図 C区7号住居・カマド平面図

掘方



床下土坑1

A. 1-138.00m A'



床下土坑2

A. 1-138.20m A'



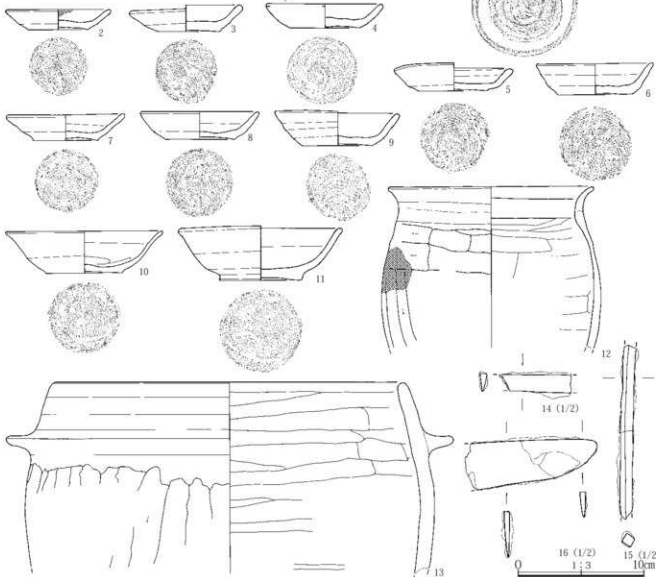
0 1:60 2m

C区7号住居床下土坑1

- 1 黒褐色土 繊維をやや多く含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。
- 3 黒褐色土 2層に近似するが黒色味強い。

C区7号住居床下土坑2

- 1 黒褐色土 ロームブロックをやや多く、焼土粒を微量含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを少量含む、壁際ほど混入物が大粒になる。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロックを多量に含む、焼土ブロックの混入もやや多い。



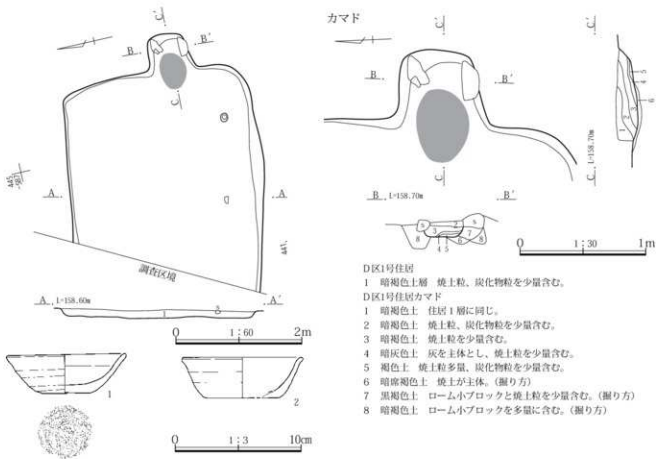
第43図 C区7号住居掘り方平面図、出土遺物

第25表 C区7号住居出土土器観察表

種類	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備考
第43区 PL-29	1	黒色土器 椀	埋土 1/4	口 17.4 高 7.2 底 7.6 台 7.6	細砂粒・粗砂粒・輝石/ 酸化塩/橙	内面黒色処理。口クロ整形、回転右回り。高台は取付、 底部は回転ヘラナデ。内面はヘラ磨き。	
第43区 PL-29	2	須虫器 皿	埋土 3/5	口 8.0 高 1.6 底 4.7	細砂粒・長石/酸化塩/ 橙	口クロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	内面に煤が付着。
第43区 PL-29	3	須虫器 杯	床直 完形	口 8.5 高 2.1 底 4.9	細砂粒・粗砂粒/酸化 塩/橙	口クロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第43区 PL-29	4	須虫器 杯	床直 完形	口 9.0 高 1.9 底 5.4	細砂粒/酸化塩/橙	口クロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第43区 PL-29	5	須虫器 杯	床直 完形	口 9.0 高 2.2 底 5.5	細砂粒/酸化塩/にぶい 橙	口クロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第43区 PL-29	6	須虫器 杯	床直 完形	口 9.0 高 2.4 底 6.0	細砂粒・粗砂粒/酸化 塩/橙	口クロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第43区 PL-29	7	須虫器 杯	床直 完形	口 9.2 高 2.1 底 5.0	細砂粒・粗砂粒/酸化 塩/橙	口クロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第43区 PL-29	8	須虫器 杯	床直 完形	口 9.2 高 2.2 底 5.4	細砂粒・粗砂粒/酸化 塩/橙	口クロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第43区 PL-29	9	須虫器 杯	床直 完形	口 9.6 高 2.8 底 5.4	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/酸化塩/橙	口クロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第43区 PL-29	10	須虫器 杯	埋土 2/5	口 12.2 高 3.3 底 6.1	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/酸化塩/にぶい黄橙	口クロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。 内面底部にナデ。	
第43区 PL-29	11	須虫器 杯	床直 完形	口 12.5 高 4.3 底 6.4	細砂粒・粗砂粒/酸化 塩/橙	口クロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第43区 PL-29	12	土師器 甕	埋土、口縁部 ~胴部中位片	口 16.0 底 6.0	細砂粒/良好/にぶい赤 褐色	外面頸部に輪組み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ。 胴部はヘラ磨り。内面胴部はヘラナデ。	外面胴部の一部に煤付着
第43区 PL-29	13	須虫器 羽釜	口7'内、口縁 ~胴部上位片	口 27.0 脚 30.2	細砂粒・粗砂粒・片岩 /酸化塩/にぶい赤相	口クロ整形、回転方向不明。踵は取付。胴部はヘラナデ。 内面は口縁部から胴部にヘラナデ。	

金属製品

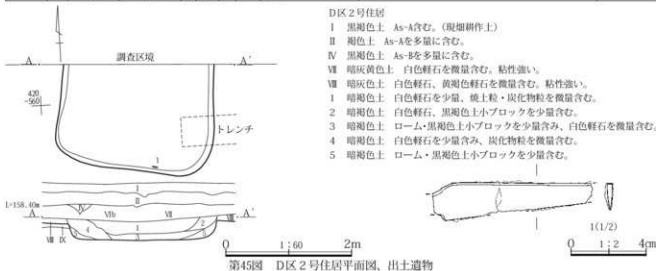
種類 採取番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	特徴・状態	備考
第43区 PL-29	14	鉄製品 刀子か	埋土 破片	-	-	-	-	幅10mm。平造の刀子片か。	
第43区 PL-29	15	鉄製品 不明	埋土 破片	-	-	-	-	一辺5.8mmほどの断面方形の棒状鉄。両端欠損。	
第43区 PL-29	16	鉄製品 刀子か	埋土 切っ先	-	26.3	-	2.0	平造りの切っ先部。切っ先は丸みを帯びる。	



第44図 D区1号住居・カマド平面図、出土遺物

第26表 D区1号住居出土遺物観察表

種類 土器類	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第44図 PL.24	1	須恵器 杯	カマド内 完形	口 9.2 高 3.1 底 3.7	細砂粒・粗砂粒・褐色 粒/酸化塩/ぶい/橙	口コク整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第44図 PL.-	2	須恵器 杯	埋土 1/6	口 9.3 高 3.2 底 6.0	細砂粒・粗砂粒/酸化 塩/橙	口コク整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	



第2表 D区2号住居出土遺物観察表

種類 金属製品	No.	種類 器種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	特徴・状態	備考
第45図 PL.29	1	鉄製品 刀子か	埋土 破片	-	-	-	-	平造りの刀子で切っ先と茎欠損。刃区と穂区は残る。身幅は切っ先側が狭い。	

カマド：東壁の南寄りに位置し(方位N-100°E)、規模は全長1.7m、幅0.9m、焚き口部から燃焼部長97cm、煙道部長73cmを測る。燃焼部は壁際であり、火床は床面よりやや低い。焚き口部の袖石を両壁際に据え、燃焼部中央には大振りの棒状礫を支柱として据えられている。また、袖石と同規模の礫による石組みで、カマドの側壁としている。煙道は先端がやや南側へ屈曲する。

その他：土坑状の窪みとなる掘り方があった。このうち床下土坑とした2カ所に断面観察を加えた。床下土坑は底面が平坦で、配置から貯蔵穴の可能性がある。床下土坑2には礫や土器片の出土がやや多かった。

遺物：住居のほぼ全域から遺物が出土し、土器13点、鉄器3点を図示した。カマド内からは羽釜13を出土した。3～9・11など完形に近い杯類が目立つが、床面から3cm前後浮いた状態のものが大半である。掲載した以外に土師器43片、須恵器94片、灰砂3片が出土した。

所見：かわらけ状の杯類やカマド内の羽釜から、10世紀後半から11世紀初頭の住居と考えられる。

D区1号住居 (第44図、第26表、PL.13)

位置：D区の西端中央付近に位置する。

(座標)X軸=29,441～29,444 Y軸=-83,585～83,589

形状：住居の西側は調査区外となるが、東西に長い長方形を呈すると考えられる。

規模：長辺(3.5)m 短辺3.0m 壁高10cm

長軸方向：N-102°-E **床面積**：8.59㎡

埋没土：暗褐色土を堆積土としており、自然堆積かは不明。

床面・壁：全体に水平な床面であるが、緩やかな凹凸をもつ。壁は傾斜をもって立ち上がる。

カマド：東壁の中央やや南寄りに位置し(方位N-102°-E)、規模は全長0.64m、幅0.72m、焚き口部から燃焼部長64cmを測る。燃焼部は壁際にあり、火床は床面よりやや低い。火床には焼土主体の土を埋戻している。**遺物**：出土遺物は極めて少ないが、杯類2点を図示した。杯1はカマド内の出土である。掲載した以外に土師器1片、須恵器4片が出土した。

所見：1は小振りの須恵器杯で口縁端部の外反がないことから、10世紀中頃の住居と考えられよう。

第3章 富岡清水遺跡の調査



第46図 D区3号住居平面図、出土遺物

D区3号住居

- I 黒褐色土 As-A含む。(現堀耕作土)
- II 褐色土 As-Aを多量に含む。
- IV 黒褐色土 As-Bを多量に含む。
- VII 暗灰色土 白色軽石を微量含む。粘性強い。
- VIII 暗灰色土 白色軽石、黄褐色軽石を微量含む。粘性強い。
- 1 黒褐色土 白色軽石、焼土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 白色軽石、黒褐色土小ブロックを少量含む。
- 3 暗褐色土 黒褐色土小ブロック、暗灰色土ブロックをやや多く含む。
- 4 暗褐色土 黒褐色土小ブロックをやや多く、暗灰色土ブロック少量、焼土粒を微量含む。
- 5 暗褐色土 黒褐色土小ブロックをやや多く、白色軽石少量、暗褐色土小ブロックを微量含む。
- 6 暗褐色土 黒褐色土小ブロック、暗灰色土ブロックをやや多く含む。
- 7 暗褐色土 黒褐色土小ブロックをやや多く、暗灰色土小ブロックを少量含む。



第28表 D区3号住居出土遺物観察表
金属製品

調査番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	特徴・状態	備考
第46図 PL.29	1	鉄製品 紡錘車	埋土 1/2	48.8	-	1.7	-	直径4.8cmの円盤状を呈し、中央に孔を設けると推定される。紡錘車のはずみ車と考えられる。	

DIK 2号住居 (第45図、第27表、PL.13)

位置：D区の東側の北壁東端付近に位置し、本住居の西側4mにD区4号住居が、南西側2mにD区3号住居がある。

(座標)X軸=29,430～29,432 Y軸=83,557～83,559

形状：北側半分が調査区外となるが、隅丸方形を呈すると考えられる。

規模：長辺(1.7)m 短辺2.45m 壁高25cm

長軸方向：N-8°-E 床面積：3.58㎡

埋設土：暗褐色土を主体とするが、下位の3層にはロームブロックを含むことから、人為的堆積と考えられる。

床面・壁：床面はほぼ平坦。壁は直立ぎみに立ち上がる。

遺物：南壁際出土の刀子と思われる鉄製品を図示した。土器類は破片を含め出土していない。

所見：土器の出土がなく、時期は不明。

DIK 3号住居 (第46図、第28表、PL.13)

位置：D区の東側の南壁東寄りに位置し、本住居の北東側2mにD区2号住居が、北西側2mにD区4号住居がある。

(座標)X軸=29,427～29,429 Y軸=83,563～83,566

形状：南側半分が調査区外となるが、方形を呈すると考えられる。東辺北隅に間口約60cm、壁外へ55cmを測る張り出し部をもつ。

規模：長辺2.75m 短辺(2.1)m 壁高45cm

長軸方向：N-3°-E 床面積：(5.56)㎡

埋設土：黒褐色土・暗灰色暗ブロックを含む褐色土を主体とすることから、人為的堆積と考えられる。

床面・壁：ほぼ水平な床面だが、張り出し部は3cmほど低い。壁は直立ぎみに立ち上がる。

遺物：東壁下から鉄製紡輪破片を出土した。その他には土師器1片が出土したのみである。

所見：土器の出土がほとんどなかったが、鉄製紡輪は平安時代に増加する遺物であることから、9・10世紀の住居と推測できる。

D区4号住居 (第47図、第29表、PL.13)

位置：D区の東側の北壁中央付近に位置し、本住居の東側4mにD区2号住居が、南東側2mにD区3号住居がある。

(座標)X軸=29,432～29,433 Y軸=83,566～83,569

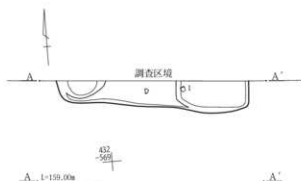
形状：住居の大半が調査区外となるが、方形を呈すると考えられる。南壁下部分が把握できたのみである。

規模：南辺3.05m 東辺(0.45)m 壁高60cm

長軸方向：N-84°-W 床面積：(1.00)㎡

埋設土：暗灰色土を主体とするが、3層以下にはロームブロックを含むことから、人為的堆積と考えられる。

床面・壁：凹凸のある床面で、中央付近が低くなって



D区4号住居

I 黒褐色土 As-A含む。(現畑耕作土)

IV 黒褐色土 As-Bを多量に含む。

1 黒褐色土 焼土粒を少量含む。粘性土。

2 暗灰黄色土 焼土粒。炭化材を少量含む。

3 暗灰黄色土 焼土粒。炭化物粒をやや多く、ローム小ブロックを少量含む。

4 暗灰黄色土 ローム小ブロック、焼土粒、炭化物粒をやや多く含む。

5 黒褐色土 ローム小ブロックを微量含む。

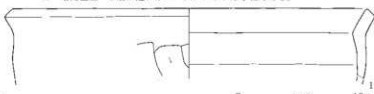
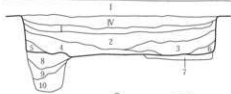
6 暗灰黄色土 ローム小ブロック、焼土粒をやや多く、炭化物粒を少量含む。

7 暗褐色土 焼土粒を多量、ローム小ブロック、炭化物粒を少量含む。

8 暗褐色土 ローム小ブロック、炭化物粒を少量含む。(貯蔵穴)

9 暗褐色土 8層に近いが混入物少ない。

10 暗褐色土 8層に近いがロームブロックは小粒である。



第47図 D区4号住居平面図、出土遺物

第29表 D区4号住居出土遺物観察表

土器類

調査番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第47図 PL. -	1	土師器 甕	床直、口縁部 ~胴部片	27.8	細砂粒・粗砂粒/良好 にぶい黄橙	口縁部横ナデ、腰部(縁下)から底部は手持ちへう削り。	

いる。壁はほぼ直立に立ち上がる。

その他：南東隅に深さ3cmほどの整った方形を呈した掘り方をもつ。また、南西隅から径70cm前後、深さ54cmを測る円形を呈す床下土坑を確認した。この床下土坑は住居廃絶時には埋め戻され、床面より5cm前後盛り上がっていたことが断面から確認でき、規模と位置から貯蔵穴の可能性もある。

遺物：甕1が南壁下ほぼ床直上から出土している。掲載した以外に土師器2片、須恵器2片が出土した。

所見：甕から、10世紀以降の住居と考えられる。

E区1号住居 (第48・49図、第30表、PL.15)

位置：E区の南端付近に位置し、本住居の東側2mにE区2号住居、南側1.5mにE区11号住居、北西5mにE区9号住居がある。

(座標)X軸=29,430 ~ 29,434 Y軸=-83,621 ~ 83,625

形状：南北方向に長軸をもつ長方形を呈するが、北西隅は上面からの攪乱で削平されている。

規模：長辺3.87m 短辺3.15m 壁高27cm

床面・壁：床面は多少の凹凸はあるものの、全体的にほぼ平坦。壁は垂直ぐみに立ち上がる。

カマド：東壁に2基付設されている。1号カマドは東壁中央のやや北寄りに位置し(方位N-110°-E)、規模は全長72cm、焚き口部から燃焼部長67cm、焚き口部幅

53cmを測る。2号カマドは東壁中央のやや南寄りに位置し(方位N-110°-E)、規模は全長93cm、焚き口部から燃焼部長78cm、焚き口部幅55cmを測る。燃焼部は1、2号とも壁外にある。

その他：2号カマド右脇にピット1基を検出した。規模は長軸33cm、短軸28cm、深さ21cmを測る楕円形で、貯蔵穴の可能性もある。遺物は出土していない。

遺物：遺物は全体で219点(土師器166点、須恵器53点)が出土し、この内の9点を図示した。1号カマド内から甕4と甕5・7、床直上から椀2が出土している。

所見：2基のカマドは遺物の出土量比はあるものの、同方向に並列していることや灰の散在状況等から、同時存在したものと考えられる。床直上やカマド内から出土した土器から、9世紀後半の住居と考えられる。

E区2号住居 (第50図、第31表、PL.15・30)

位置：E区の南端東寄りに位置し、本住居の西側2mにE区1号住居、南西側4mにE区11号住居がある。

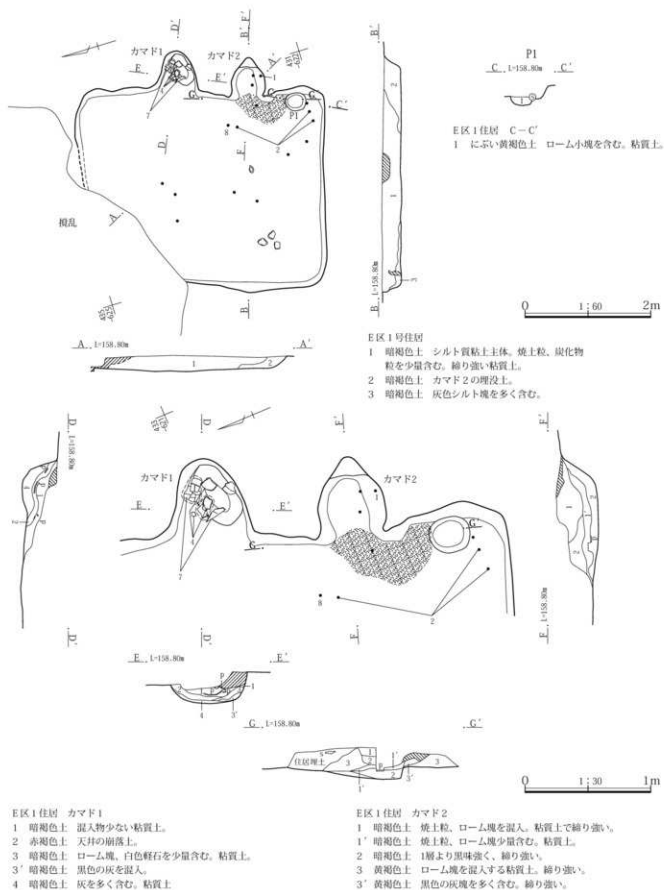
(座標)X軸=29,431 ~ 29,435 Y軸=-83,613 ~ 83,617

形状：南北方向に長軸をもつ長方形を呈する。

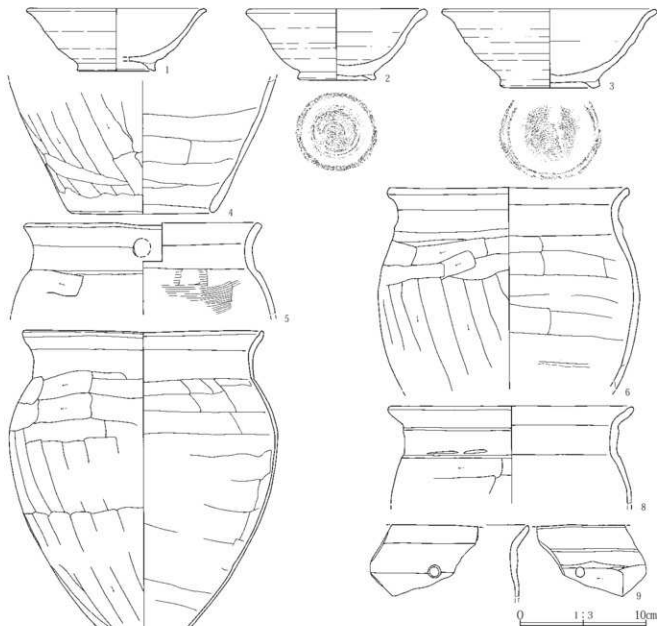
規模：長辺4.1m 短辺3.3m 壁高20cm

長軸方向：N-8°-E **床面積：**11.264㎡

埋没土：埋没土は2層の褐灰色土と3層の暗褐色土を主体とする。3層上面からは径20~30cmの礫が数多く



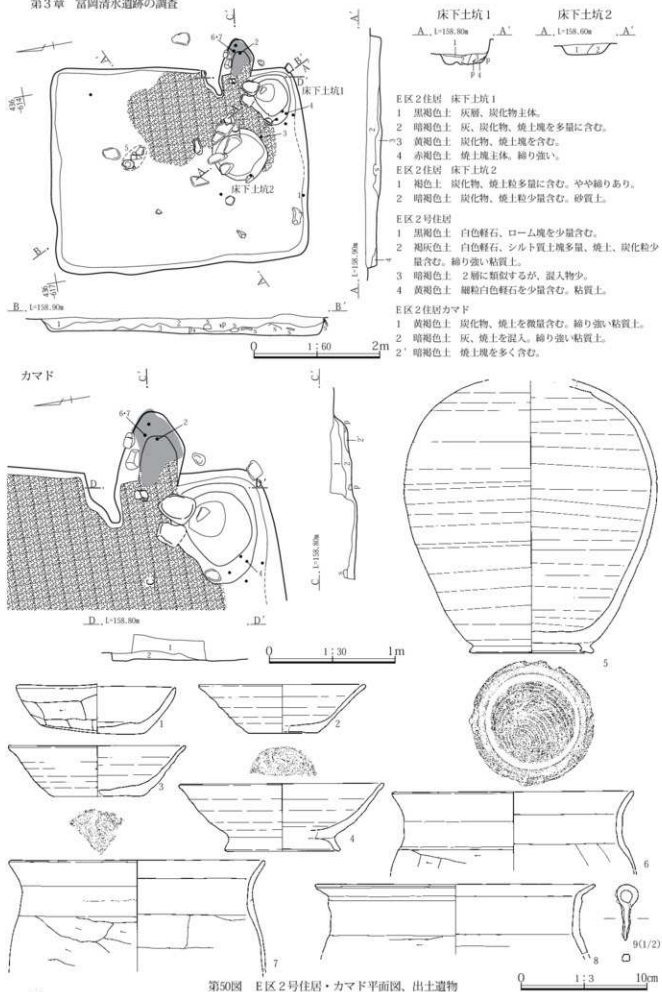
第48図 E区1号住居・1・2号カマド平面図



第49図 E区1号住居出土遺物

第30表 E区1号住居出土遺物観察表

土器類							
種別番号 図記番号	No.	種別 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第49図 Pl.29	1	須虫器 碗	埋土	□ 13.8 高 4.9 底 6.2 台 6.2	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/還元焰/灰白	ロケロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ。	
第49図 Pl.29	2	須虫器 碗	成直	□ 13.8 高 5.6 底 5.9 台 6.2	細砂粒・粗砂粒・片岩 /還元焰/灰白	ロケロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ。	
第49図 Pl.29	3	須虫器 碗	埋土	□ 16.5 高 6.2 底 7.7 台 7.0	細砂粒・粗砂粒・片岩 /還元焰/灰	ロケロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第49図 Pl.29	4	土師器 甗	カマド内 胴部下位片	底 11.0	細砂粒/良好/にぶい橙	胴部はヘラ削り、底部周辺はナデ。内面胴部はヘラナデ。	
第49図 Pl.-	5	土師器 甗	カマド内 口縁部～胴部 上位片	□ 18.0	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	頸部に径1.5 ×1.3cmの円 形の穿孔、焼 成前。
第49図 Pl.30	6	土師器 甗	埋土、口縁部 ～胴部中位	□ 18.9 高 脚 20.5	細砂粒/良好/にぶい黄 褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第49図 Pl.30	7	土師器 甗	カマド内、口 縁～胴部下位	□ 18.8 高 脚 21.0	細砂粒・褐色粒/良好/ にぶい赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第49図 Pl.-	8	土師器 甗	埋土、口縁部 ～胴部上位片	□ 19.1	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第49図 Pl.30	9	土師器 甗	埋土 口縁部～胴部 上位片		細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	頸部下に径 0.6cmの円形 の穿孔、焼成 前。



第50図 E区2号住居・カマド平面図、出土遺物

第31表 E区2号住居出土土物観覧表

土器類						成形・整形の特徴		概要	
種別番号 (図版番号)	No.	種別 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調				
第50図 PL.30	1	土師器 杯	埋土 7/8	口 12.5 高 4.0 底 8.3	細砂粒・粗砂粒・片岩・ 長石/やや軟質/にぶい 橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。			
第50図 PL.30	2	須恵器 杯	カマド内 1/5	口 13.0 高 3.8 底 5.4	細砂粒・粗砂粒・角四 石/還元焰/灰白	口ロク整形、回転右回り。底部は回転糸切り。			
第50図 PL.30	3	須恵器 杯	埋土 1/5	口 13.8 高 4.0 底 6.6	細砂粒/還元焰/灰白	口ロク整形、回転右回り。底部は回転糸切り。			
第50図 PL.30	4	須恵器 杯	床下土坑1 口縁部～底部 片	口 15.9 高台 5.3 底 8.2	細砂粒・粗砂粒・片 岩・角四石/還元焰/灰 オリーブ	口ロク整形、回転右回り。高台は貼付、底部切り離し 技法は不明。			
第50図 PL.30	5	須恵器 長頸壺	床直、底部～ 胴部上位片	底 9.4 胴 台 9.6	20 細砂粒/還元焰/灰	口ロク整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸 切り。			
第50図 PL.-	6	土師器 甕	47°内、口縁 ～胴部上位片	口 18.8	細砂粒/良好/にぶい赤 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。			
第50図 PL.30	7	土師器 甕	47°内、口縁 ～胴部上位片	口 20.0	細砂粒/良好/橙	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、 胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。			
第50図 PL.-	8	土師器 甕	埋土、口縁部 ～胴部上位片	口 22.0	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。			
金属製品									
種別番号 (図版番号)	No.	種別 器種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	特徴・状態	備考
第50図 PL.30	9	鉄製品 不明	埋土 完形	30.0	12.2	-	-	錆が著しく土部の形状は不明瞭であるが、器具を呈すると 推定される。器具部の面方向は不明であるが、実測面の 左から右方向に曲げられた可能性がある。	

出土しており、埋没途中の投棄の様相を呈していることから、人為的堆積と考えられる。

床面・壁：床面は細かな凹凸をもつがほぼ平坦で、硬く良好である。カマド前には黒色灰が広がる。壁は垂直気味に立ち上がる。

カマド：東壁の南寄りに位置する(方位N-94°-E)。規模は全長90cm、焚き口部から燃焼部長70cm、焚き口部幅53cmを測る。燃焼部は壁外にある。燃焼部左壁には構築材と考えられる礎2点が据えられている。また、カマド前から出土した礎にも被熱痕が認められ、カマドの構築材として使用された礎と考えられる。

その他：カマド右脇から床下土坑1を検出したが、貯蔵穴の可能性もある。形状は歪んだ楕円形で、長軸75cm、短軸60cm、深さ15cmを測り、底面はほぼ平坦である。底面付近から土師器裏片が出土している。また、住居中央やや南寄りで床下土坑2を検出した。形状は円形で、径80cm、深さ17cm、底面はほぼ平坦である。

遺物：遺物は全体で190点(土師器148点、須恵器点42、金属製品1点)が出土し、その内の9点を図示した。カマド内から椀2と甕6・7、床下土坑1から椀4、床直上から長頸壺5が出土している。

所見：長頸壺5やカマド出土土器から、9世紀後半の住居と考えられる。

E区3号住居 (第51図、第32表、PL.15・30)

位置：E区の中央付近に位置し、本住居の東側でE区

4・10号住居と重複、西側0.5mにE区6号住居が隣接する。

(座標) X軸=29,464～29,469 Y軸=29,621～29,626

重複：東側でE区4号住居、E区10号住居と重複するが、遺構確認や土層断面の確認から、本住居はいずれの住居よりも新しい。

形状：南北方向に長軸をもつ長方形を呈する。

規模：長辺4.55m 短辺3.45m 壁高20cm

長軸方向：N-13°-W **床面積**：13.882㎡

埋没土：埋没土は2層の暗褐色土塊を混在する黄褐色土が主体であり、層下位には焼土粒や炭化物が多い。断面観察から人為的な堆積と考えられる。

床面・壁：床面には大小の凹凸が多くあり、平坦ではない。住居中央部がやや高く、カマド前は大きく凹む。また、床面上には多量の炭化材や炭化物が出土している。壁面には焼けた痕跡がみられ、ほぼ垂直に立ち上がる。

カマド：南東隅に寄った位置にある(N-99°-E)。規模は全長2.45m、焚き口部から燃焼部長1.75m、焚き口部幅65cm、煙道部長70cmを測る。燃焼部は壁外にある。焚き口部の両側には礎が据えられ、燃焼部側壁には石組みをもち、燃焼部中央には支脚として棒状礎が残存する。カマド内に崩落している礎も構築材と考えられる。

その他：床下調査で南西隅にピットを検出した。規模は長軸70cm、短軸58cm、深さ45cmを測る楕円形で、須恵器杯小片が出土しており、貯蔵穴の可能性をもつ。

遺物：遺物は全体で26点(土師器5点、須恵器21点)が出土し、その内の5点を図示した。いずれも床直上やカマド内からの出土である。

所見：床面全体に広がる多量の炭化材や、壁のほとんどに焼けた痕跡が残ることから、本住居は焼失住居と考えられる。また、出土土器から11世紀前半の住居と考えられる。

E区4号住居 (第52図、第33表、PL.16・30)

位置：E区の中央付近に位置し、E区10号住居と大きく重複し、本住居の西側をE区3号住居と重複する。(座標)X軸=29,463～29,467 Y軸=83,618～83,621

重複：住居の西側でE区3号住居のカマド、さらにE区10号住居と大きく重複するが、遺構確認や土層断面の確認から、本住居はE区10号住居より新しく、E区3号住居より古い。

形状：南北に長軸をもつ長方形を呈し、南壁がやや外側に歪む。

規模：長辺3.52m 短辺2.4m 壁高20cm

長軸方向：N-9°-W **床面積**：6.45㎡

埋没土：中層以下に焼土粒や炭化物を含む暗褐色土および黒褐色土が堆積する。中でも、3層は炭化物が主体となる。人為的堆積の可能性が高い。

床面・壁：床面はカマド前が平坦となるが、それ以外は大小の凹凸が多い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

カマド：東壁に2基付設されている。1号カマドは東壁中央のやや南寄りに位置し(方位N-107°-E)、規模は全長90cm、焚き口部から燃焼部長52cm、焚き口部幅80cmを測る。2号カマドは北東隅に位置し(方位N-50°-E)、全長83cm、焚き口部から燃焼部長50cm、焚き口部幅60cmを測る。2基とも燃焼部は壁外にある。

遺物：遺物は全体で33点(土師器6点、須恵器27点)が出土し、その内の7点を図示した。椀2や杯3、片口鉢4、甕5は床直上から出土している。

所見：2基のカマドには、両カマド共に残存状態の悪い釉が確認されていることから、同時存在したと考えられる。また、埋没土中や床面に炭化材や焼土が多く散見されたことから、焼失住居の可能性をもつ。出土土器から、10世紀前半の住居と考えられる。

E区5号住居 (第53図、第34表、PL.16・31)

位置：E区の西寄りに位置し、本住居の西側1.5mに

重複するE区7・8号住居、北北東6mにE区6号住居、南南西5mにE区9号住居がある。

(座標)X軸=29,449～29,452 Y軸=83,631～83,635

重複：北西隅でE区3号土坑と重複するが、遺構確認時に本住居の方が古いことは明らかであった。

形状：南北にやや長い方形を呈するが、北西部をE区3号土坑に壊され、トレンチで一部を削平されている。

規模：長辺3.0m 短辺2.7m 壁高15cm

長軸方向：N-0°-E **床面積**：7.312㎡

埋没土：土暗褐色土塊を含む暗褐色土を主体とすることから、人為的堆積の可能性が高い。

床面・壁：床面は大小の凹凸が多く、平坦ではない。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

カマド：南東隅付近に位置し(N-110°-E)、規模は全長83cm、焚き口部から燃焼部長52cm、焚き口部幅50cmを測る。燃焼部は壁外にある。

遺物：遺物は全体で47点(土師器28点、須恵器19点)が出土し、その内3点を図示した。3点はいずれも床直上から出土している。また、住居中央部に被熱痕のある大型礫が2点出土している。

所見：床面から炭化材が出土しているため、焼失住居の可能性もある。遺物は少ないが灰陶器や羽釜から、10世紀後半の住居と考えられる。

E区6号住居 (第54図、第35表、PL.16・31)

位置：E区の中央付近に位置し、本住居の東側0.5mにE区3号住居が隣接し、西側2.5mに重複するE区4・10号住居、南南西6mにE区5号住居がある。

(座標)X軸=29,463～29,466 Y軸=83,626～83,629

重複：東壁と西壁の一部を近世畑のサクで壊される。

形状：南北方向に長軸をもつ長方形を呈するが、北辺が南辺よりも長い台形状。

規模：長辺2.95m 短辺2.13m 壁高28cm

長軸方向：N-5°-E **床面積**：5.936㎡

埋没土：炭化物を含む黄褐色土を主体とし、床面付近では炭化物や焼土粒が多くなる。自然堆積は不明。

床面・壁：床面は細かな凹凸があるが、ほぼ平坦である。壁は垂直に立ち上がる。

カマド：東壁の南寄りに位置し(N-103°-E)、規模は全長95cm、焚き口部から燃焼部長52cm、煙道部長43cm、焚き口部幅42cmを測る。燃焼部は壁外にある。焚

き口部の両袖には円形礫を据え、燃焼部中央部には支脚として棒状礫を使用している。また、カマド前の床直上には長さ60cmの大型礫が出土しており、焚き口部の天井石の可能性をもつ。

遺物：遺物は極めて少なく須恵器9点である。図示した2点の椀は床直上とカマド内から出土している。

所見：出土の椀から、10世紀後半の住居と考えられる。
E区7号住居（第55図、PL.16）

位置：E区の西壁際に位置し、南側をE区8号住居と重複し、本住居の東側1.5mにE区5号住居が隣接する。
(座標)X軸=29,449～29,451 Y軸=83,637～83,638

重複：南側でE区8号住居と重複するが、遺構確認時に本住居の方が新しいことは明らかであった。

形状：住居西側の大半を調査区外とするため全容は不明であるが、方形を呈すると考えられる。

規模：長辺2.85m 短辺(0.65)m 壁高14cm

長軸方向：N-8°-E **床面積**：(1.044)㎡

埋没土：暗褐色土を主体とする。自然堆積かは不明。

床面・壁：検出範囲の床面は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

カマド：東壁の南寄りに位置し(N-104°-E)、規模は全長85cm、焚き口部から燃焼部長50cm、焚き口部幅45cm、煙道部長35cmを測る。燃焼部は壁外にある。

遺物：遺物は土師器小片が1点のみ出土している。

所見：土器の出土が少なく時期決定の根拠を持たないが、重複するE区8号住居より新しいことから、10世紀前半以降の住居と考えられる。

E区8号住居（第55図、第36表、PL.16・31）

位置：E区の西壁際に位置し、北側をE区7号住居と重複し、本住居の北東1.5mにE区5号住居が隣接し、南側2.5mにE区9号住居が近接する。

(座標)X軸=29,446～29,449 Y軸=83,637～83,639

重複：北側でE区7号住居と重複するが、遺構確認時に本住居の方が古いことは明らかであった。

形状：E区7号住居と同様に、住居西側の大半を調査区外とするため全容は不明であるが、方形を呈すると考えられる。

規模：長辺2.75m 短辺(1.05)m 壁高13cm

長軸方向：N-5°-E **床面積**：(1.142)㎡

埋没土：締まりの強い黄褐色土を主体とする。自然堆

積かは不明。

床面・壁：検出範囲の床面は多少の凹凸はあるものの、平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

カマド：東壁の中央やや南寄りに位置し(N-111°-E)、規模は全長75cm、焚き口部から燃焼部長50cm、焚き口部幅85cmを測る。燃焼部は壁外にある。

その他：P1・2を床面から検出した。P1はカマド右脇に位置し、長軸60cm、短軸43cm、深さ12cmを測り、貯蔵穴と考えられる。P2はカマド左脇に位置し、径58cm、深さ16cmを測る。

遺物：遺物は全体で50点(土師器26点、須恵器24点)が出土し、その内の6点を図示した。椀4と甕5はカマド内、椀2はP2、椀1・3および羽釜6は床直上から出土している。

所見：出土した椀や羽釜から、10世紀前半の住居と考えられる。

E区9号住居（第56図、第37表、PL.17・31）

位置：E区の西壁南寄り際に位置し、本住居の北側2.5mに重複するE区7・8号住居、北北東4.5mにE区5号住居、南西側5mにE区1号住居がある。

(座標)X軸=29,438～29,441 Y軸=83,635～83,638

形状：住居北東部の半分が掘削により削平されているため全容は不明であるが、方形を呈すると考えられる。

規模：長辺(3.35)m 短辺(2.95)m 壁高30cm

東西方向：N-100°-E **床面積**：(6.932)㎡

埋没土：ローム土塊を含む締まり強い褐色土を主体とすることから、人為的堆積と考えられる。

床面・壁：床面は大小の凹凸が多く、平坦ではない。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝：南西隅付近から西壁下に溝が走り、幅10cm、深さ7cmを測る。

カマド：検出されていない。

その他：床下土坑を3基検出した。1号床下土坑は長軸1.45m、短軸45cm、深さ30cmの楕円形で、貯蔵穴の可能性をもつ。2号床下土坑は長軸73cm、短軸65cm、深さ14cmの楕円形を呈する。3号床下土坑は径60cm、深さ25cmの円形を呈する。

遺物：遺物は全体で264点(土師器159点、須恵器103点、灰釉陶器3点、鉄製品2点)が出土し、その内の7点を図示した。灰釉陶器椀3と甕4が1号床下土坑、灰釉陶

器2と羽釜5が床直上から出土している。

所見：1号床下土坑から出土した灰軸陶器から、10世紀前半の住居と考えられる。

E区10号住居 (第57図、第38表、PL.17)

位置：E区の中央付近に位置し、E区4号住居と大きく重複する。

(座標)X軸=29,463～29,466 Y軸=83,619～83,621

重複：E区3号住居カマドおよびE区4号住居のほぼ中央に重複する。遺構確認や土層断面の確認から、本住居はいずれの住居よりも古い。

形状：小型で、南北方向に長軸をもつ隅丸方形。東辺より西辺がやや長い台形状。なお、E区4号住居との重複のため、残存状況は良くない。

規模：長辺2.1m 短辺1.75m 壁高6cm

長軸方向：N-20°-W **床面積**：3.012㎡

埋没上：黒色土塊を少量含む褐色土を主体とすることから、人為的堆積の可能性がある。

床面・壁：床面は細かな凹凸があるが、ほぼ平坦。壁はやや不明瞭。

カマド：東壁の中央やや北寄りに位置し(N-64°-E)、規模は全長50cm、焚き口部から燃焼部長30cm、焚き口部幅50cmを測る。燃焼部は壁外にある。

遺物：遺物は少なく、南壁付近から図示した須恵器の羽釜1が出土している。

所見：本住居はE区4号住居精査中の床面から検出されたことからその新旧は明らかであり、出土遺物からも、E区4号住居と大きく時期を隔てない10世紀前半の住居と考えられる。

E区11号住居 (第58図、第39表、PL.17・31)

位置：E区の南端に位置し、本住居の北側1.5mにE区1号住居、北東側4mにE区2号住居がある。

(座標)X軸=29,424～29,428 Y軸=83,623～83,625

重複：E区11号溝と重複するが、遺構確認や土層断面の確認から本住居の方が新しい。

形状：西半を攪乱で削平されているため全容は不明であるが、南北方向に長軸をもつ方形と考えられる。

規模：長辺3.25m 短辺(1.85)m 壁高7cm

長軸方向：N-3°-E **床面積**：(4.95)㎡

埋没上：ローム小塊を含む締まりの強い暗褐色土を主体とすることから、人為的堆積と考えられる。

床面・壁：床面は細かな凹凸があるが、ほぼ平坦。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

カマド：東壁の中央南寄りに位置し(N-90°-E)、規模は全長1.2m、焚き口部から燃焼部長45cm、焚き口部幅40cmを測る。燃焼部は壁外にある。

遺物：遺物は土師器19点が出土し、図示した甕1はカマド内から出土している。

所見：カマド出土土器から9世紀後半の住居と考えられる。

F区1号住居 (第59図、第40表、PL.20)

位置：F区の西壁中央北寄りに位置する。

(座標)X軸=29,395～29,399 Y軸=83,635～83,636

形状：検出できたのはカマドを含む東側の一部であり、西側の大半が調査区外となるが、方形を呈すると考えられる。

規模：南北辺3.6m 東西辺(0.4)m 壁高45cm

床面積：(1.03)㎡

埋没上：ロームブロックを多量に含む褐色土ないし暗褐色土を主体とすることから、人為的堆積と考えられる。垂直に近い壁が残存しており、壁高は45cm前後を測る。

床面・壁：床面は平坦で凹凸が少ない。壁は垂直に立ち上がる。

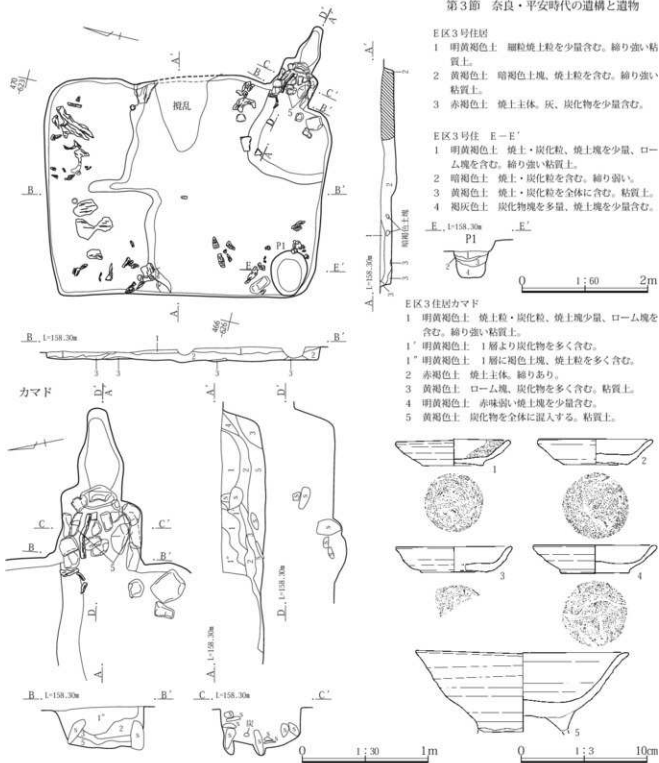
カマド：東壁の中央南寄りに位置し(方位N-96°E)、規模は全長(1.0)m、幅0.75m、焚き口部から燃焼部長(60)cm、煙道部長40cmを測る。燃焼部は住居内から壁外にあり、火床は床面よりやや後低い。燃焼部奥の両側壁に礎が据えられている。

その他：南東隅に深さ12cmを測る不整形な窪みを検出したが、貯蔵穴貯蔵穴の可能性をもつ。

遺物：遺物の出土は少なく、須恵器3点と鉄器2点を図示した。椀1がカマド内から出土し、釘と思われる鉄製品4・5は東壁際から2本重なって出土した。掲載した以外に土師器12片、須恵器31片が出土した。

所見：出土土器から9世紀後半の住居と考えられる。

第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物



E区3号住居

- 1 明黄褐色土 細砂焼土粒を少量含む。締り強い粘質土。
- 2 黄褐色土 暗褐色土塊、焼土粒を含む。締り強い粘質土。
- 3 赤褐色土 焼土主体。灰、炭化物を少量含む。

E区3号住居 E-E'

- 1 明黄褐色土 焼土・炭化焼、焼土塊を少量、ローム塊を含む。締り強い粘質土。
- 2 暗褐色土 焼土・炭化粒を含む。締り弱い。
- 3 黄褐色土 焼土・炭化粒を全体に含む。粘質土。
- 4 褐色土 炭化物塊を多量、焼土塊を少量含む。

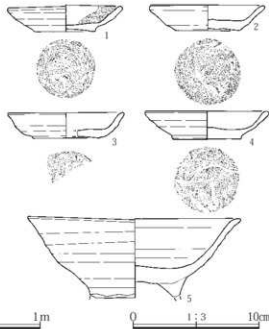
E, 1-158.30m
E', 1-158.30m



0 1:60 2m

E区3住居カマド

- 1 明黄褐色土 焼土粒・炭化粒、焼土塊少量、ローム塊を含む。締り強い粘質土。
- 1' 明黄褐色土 1層より炭化物を多く含む。
- 2 赤褐色土 焼土主体。締りあり。
- 3 黄褐色土 ローム塊、炭化物を多く含む。粘質土。
- 4 明黄褐色土 赤味強い焼土塊を少量含む。
- 5 黄褐色土 炭化物を全体に混入する。粘質土。

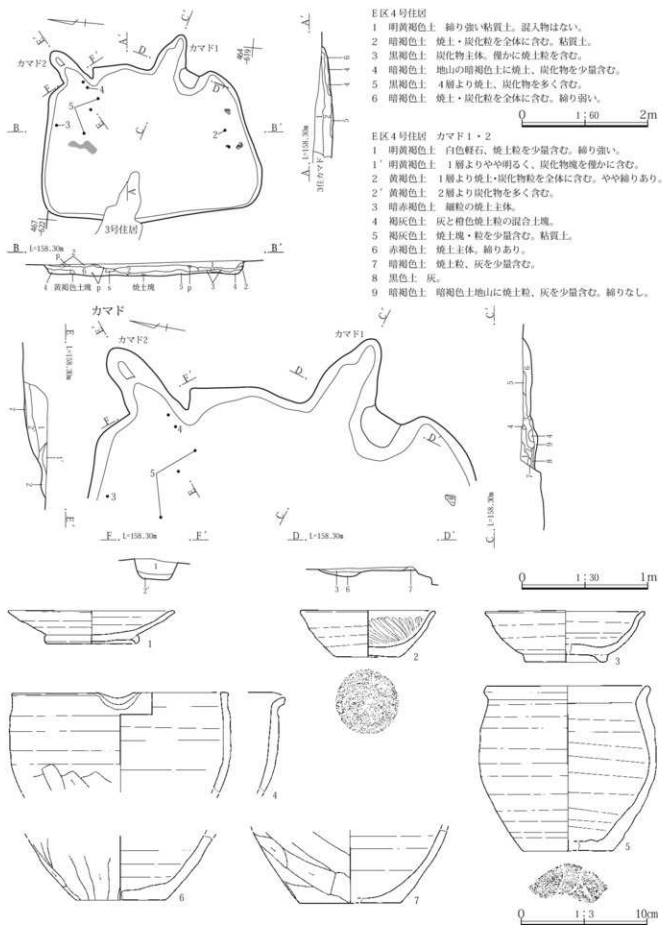


第51図 E区3号住居・カマド平面図、出土遺物

第32表 E区3号住居出土遺物観察表

土器類		出土位置		計測値(cm)		胎土/焼成/色調		成形・整形の特徴		摘要
神宮寺同 図庫番号	No.	種類 器種	残存率	口	底	胎土	焼成/色調	成形・整形の特徴		摘要
第51図 Pl.30	1	須虫器 杯	床直 完形	口 8.7 底 4.7	高 2.1	細砂粒/酸化塩/にぶい 橙		口クロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。		
第51図 Pl.30	2	須虫器 杯	床直、口縁部 一部欠損	口 8.7 底 5.0	高 2.0	細砂粒/酸化塩/赤褐		口クロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。		
第51図 Pl.30	3	須虫器 杯	床直 1/3	口 9.0 底 5.2	高 2.0	細砂粒/酸化塩/橙		口クロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。		
第51図 Pl.30	4	須虫器 杯	床直 1/2	口 9.4 底 5.6	高 2.2	細砂粒/酸化塩/にぶい 橙		口クロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。		
第51図 Pl.30	5	須虫器 碗	カマド内 3/4	口 16.4 底 7.5		細砂粒/酸化塩/橙		口クロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ラナデ。		高台は端部欠損後、捲り整えている。

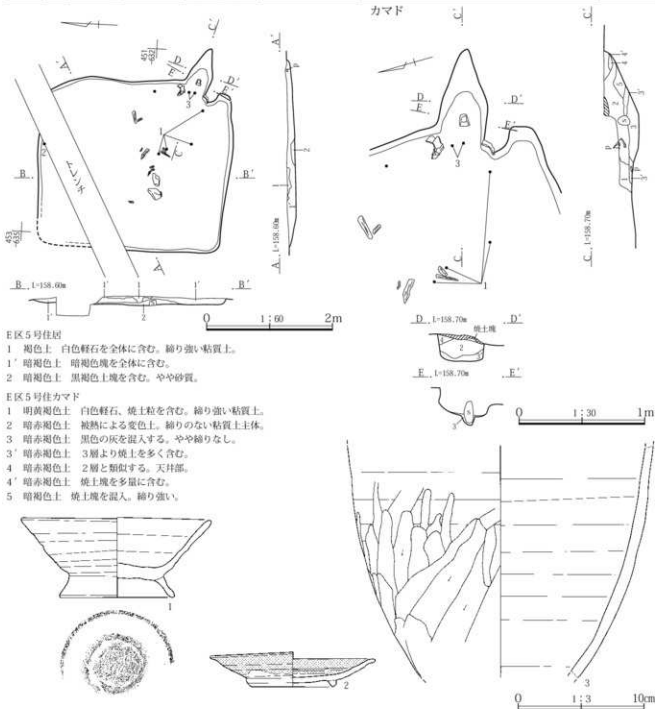
第3章 富岡清水遺跡の調査



第52図 E区4号住居・1・2号カマド平面図、出土遺物

第33表 E区4号住居出土遺物観察表

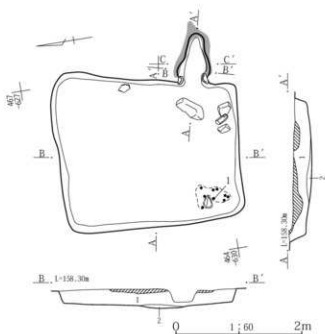
種別 器物番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	概要
第52図 PL.30	1	須恵器 皿	埋土 1/3	口 12.8 高 2.6 底 7.2 台 7.0	細砂粒/還元塩/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ。	
第52図 PL.30	2	須恵器 椀	床直 2/3	口 10.5 高 3.7 底 5.1	細砂粒・褐色粒/酸化塩/橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。内面は体部から口縁部に斜射状ヘラ磨き。	本来は内面黒色処理か。
第52図 PL.30	3	須恵器 椀	床直 1/2	口 12.4 高 4.1 底 6.8 台 5.6	細砂粒・粗砂粒・角閃石/酸化塩に赤い黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切りか。	
第52図 PL.30	4	須恵器 片口鉢	床直 口縁部片	口 17.0	細砂粒・粗砂粒・角閃石・片岩/還元塩/灰	ロクロ整形、回転右回りか。体部下半はヘラ削り。口縁部に1方所注ぎ口がついている。	
第52図 PL.30	5	土師器 甕	床直 1/2	口 12.6 高 13.0 底 7.0 胴 14.0	細砂粒・粗砂粒・角閃石/良好/明黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部の整形は割面磨滅のため不明	北陸系ロクロ甕。
第52図 PL.30	6	須恵器 羽釜	埋土、底部～ 胴部下位片	底 7.0	細砂粒/酸化塩/灰褐色	ロクロ整形、回転方向不明。底部と胴部はヘラ削り。	
第52図 PL.30	7	須恵器 羽釜	埋土、底部～ 胴部下位片	底 8.0	細砂粒・粗砂粒・片岩・角閃石/還元塩/灰	ロクロ整形、回転方向不明。胴部はヘラ削り、底部は割面磨滅のため不明。	



第3章 富岡清水遺跡の調査

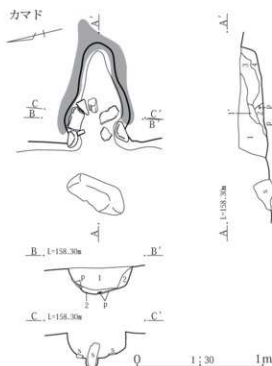
第34表 E区5号住居出土遺物観察表

種別 土器類	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	概要
第53図 PL.31	1	須恵器 椀	床直 高台1/2欠損	口 14.6 高 6.3 底 7.4 台 8.5	細砂粒・粗砂粒・角閃石/酸化塩/硝	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
第53図 PL.31	2	灰釉陶器 段皿	床直 完形	口 12.8 高 2.7 底 7.1 台 6.4	緻密/還元塩/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ。無釉方法は掛け掛け。	大原2号窯式
第53図 PL.31	3	須恵器 羽釜	床直 胴部下片	口 底 高	細砂粒・粗砂粒/酸化塩/明赤釉	ロクロ整形、回転右回り。胴部下位はヘラ削り。	



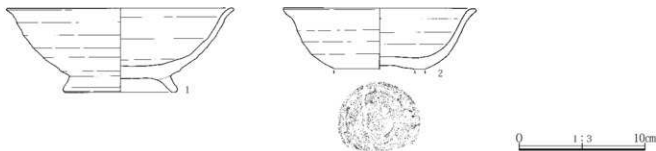
E区6号住居

- 1 黄褐色土 炭化物粒を含む。締り強い粘質土。
- 2 暗褐色土 炭化物粒、焼土塊を少量含む。



E区6号住居カマド

- 1 黄褐色土 シルト質で暗褐色土を混入する。締り強い。
- 1' 褐色土 焼土塊・粒を多量に含む。やや締りあり。
- 2 暗褐色土 灰・焼土粒を少量混入する。粘質土。
- 3 明黄褐色土 ローム塊を全体に、焼土粒を少量含む。
- 4 暗赤褐色土 暗赤色の焼土粒を不均等に含む。



第54図 E区6号住居・カマド平面図、出土遺物

第35表 E区6号住居出土遺物観察表

種別 土器類	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	概要
第54図 PL.31	1	須恵器 椀	床直 1/2	口 17.8 高 6.6 底 8.0 台 8.4	細砂粒/酸化塩/にふい 黄釉	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部回転ヘラナデ。	
第54図 PL.31	2	須恵器 椀	カマド内 1/3	口 15.0 底 7.2	細砂粒・粗砂粒・片岩 /酸化塩/硝	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付が割落、底部は回転糸切り。	

第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物

P1

C L=158.40m C'

黄褐色土

E区8号住居 C-C'

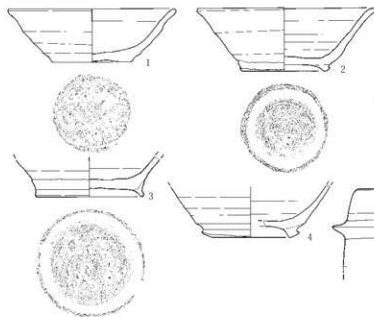
- 1 暗褐色土 炭化物を全体に含む。締りあり。
- 2 褐色土 僅かに炭化物を含む。やや粘質性を伴う。

0 1:60 2m



E区7号住居カマド

- 1 黄褐色土 焼土小塊を少量、黒色土塊を含む。締り強い。
- 1' 黄褐色土 黒色土塊を含む。締り強い。
- 2 暗赤褐色土 焼土粒、灰、炭化物を含む。
- 3 暗褐色土 地山に近い粘質土。



E区8号住居カマド

- 1 黄褐色土 焼土粒を少量含む。締り強い。
- 2 黄褐色土 1層より焼土を多く含む。
- 2' 暗赤褐色土 焼土塊、粒を多量に含む。
- 3 赤褐色土 焼土粒を全体に含む。締りやや弱い。
- 4 褐色土 2層に類似するが、焼土の印象が強い。
- 5 暗赤褐色土 焼土塊・粒が主体。締り強い。

0 1:30 1m

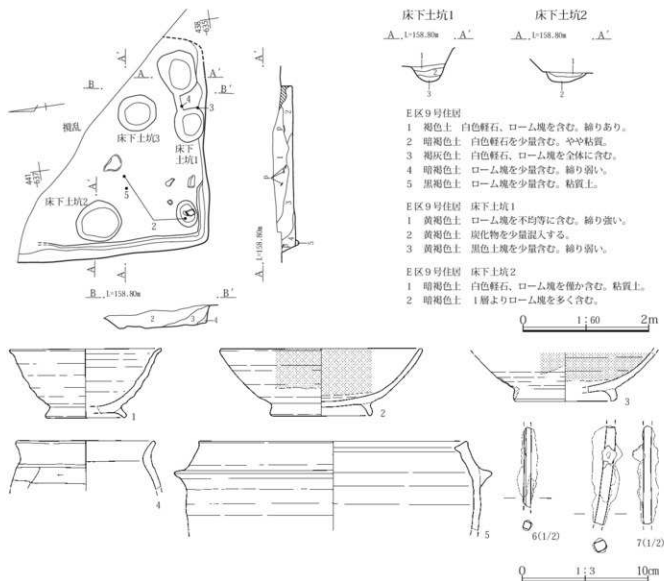
0 1:3 10cm

第55図 E区7・8号住居平面図、8号住居出土遺物

第36表 E区8号住居出土遺物観察表

土器類						成形・整形の特徴		概要
種別番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調			
第55図 PL.31	1	須恵器 椀	床直、口縁部 1/5欠損	口 13.0 高 4.2 底 6.3	細砂粒・粗砂粒・角閃 石/還元焰/灰	口クワ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。		
第55図 PL.31	2	須恵器 椀	P 2、口縁部 1/4欠損	口 13.7 高 5.1 底 7.2 6.5	細砂粒/還元焰/にぶい 黄相	口クワ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。		
第55図 PL.31	3	須恵器 椀	床直、底部～ 体部下位	底 8.2 台 8.2	細砂粒/還元焰/灰	口クワ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。		
第55図 PL.31	4	須恵器 椀	口内、底部 ～体部下位片	底 8.5 台 6.0	細砂粒・角閃石/還元 焰/浅黄相	口クワ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ。		
第55図 PL.31	5	土師器 鉢	口内、口縁 ～胴部上位片	口 17.7	細砂粒/良好/にぶい相	口縁部から胴部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部は櫛状のヘラによるヘラナデ。		
第55図 PL.31	6	須恵器 羽釜	床直、口縁部 ～胴部上位片	口 21.7 踵 23.6	細砂粒/還元焰/浅黄相	口クワ整形、回転方向不明。踵は貼付。		

第3章 富岡清水遺跡の調査



第56図 E区9号住居平面図、出土遺物

第37表 E区9号住居出土遺物観察表
土器類

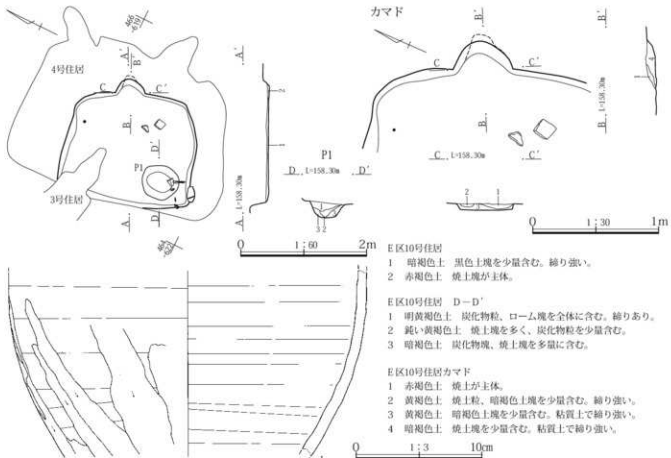
種別番号 図記番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第56図 PL--	1	須恵器 甕	埋土 1/5	口 11.8 高 5.4 底 5.1 台 6.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ。	
第56図 PL--	2	灰軸陶器 甕	床直 1/4	口 15.7 高 5.3 底 8.0 台 7.8	緻密/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部はヘラナデ。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯式 期。
第56図 PL--	3	灰軸陶器 甕	床下土坑1 底部~体部 片	底台 8.0 台 7.4	微砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ。内面底部に重ねたきねが残る。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯式 期。
第56図 PL-31	4	土師器 甕	床下土坑1 口縁~胴部 片	口 10.7	細砂粒/良好/にぶい	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第56図 PL--	5	須恵器 羽釜	床直、口縁部 ~胴部上位片	口 21.0 踵 25.0	細砂粒・粗砂粒・砂岩 /酸化焰/にぶい黄粒	ロクロ整形、回転方向不明。踵は貼付。	

金属製品

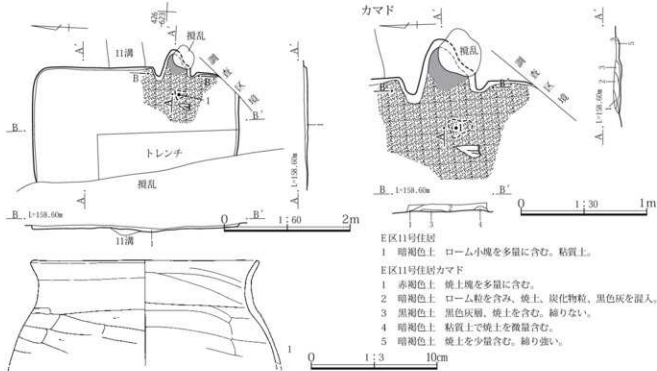
種別番号 図記番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	特徴・状態	備考
第56図 PL-31	6	鉄製品 釘か	埋土 破片	-	-	-	-	錆が著しく形状不明瞭。割口は断面方形。両端欠損。	
第56図 PL-31	7	鉄製品 不明	埋土 破片	-	0.68	-	-	錆と錆による土の付着が多く形状不明瞭。やや湾曲した棒状製品。断面形は方形の可能性が高い。	

第38表 E区10号住居出土遺物観察表
土器類

種別番号 図記番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第57図 PL--	1	須恵器 羽釜	埋土 胴部下半片		細砂粒・粗砂粒・片岩 /酸化焰/にぶい黄粒	ロクロ整形、回転右回りか。胴部下位はヘラ削り。	



第57図 E区10号住居・カマド平面図、出土遺物

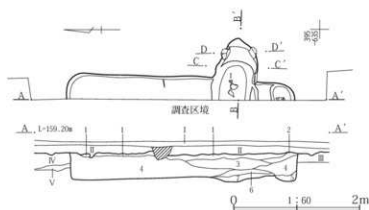


第58図 E区11号住居・カマド平面図、出土遺物

第39表 E区10号住居出土遺物観察表

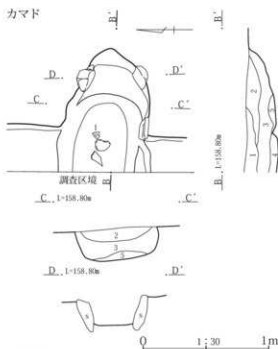
種別	No.	種類	出土位置	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第58図 Pl.31	1	土師器 甕	カマド内、口縁 ~胴部上辺片	17.7	細砂粒/良好に赤い、黄 褐色	口縁部から胴部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ、ヘラナデは一部口縁部まで及ぶ。	

第3章 富岡清水遺跡の調査



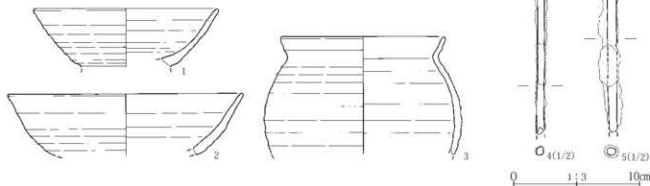
F区1号住居

- I 碎石
 II 暗褐色土 As-Aを多量に含む。(B・C区第2層と対応層)
 III 暗茶色土 白色粒を微量含む。(5号溝の覆土)
 IV 暗褐色土 白色軽石を少量含む。
 V 黒色土 白色粒を少量含む。
 視乱 灰色土 As-Aを多量、炭化物を少量含む。
 1 暗褐色土 白色粒を少量含む。
 2 暗褐色土 混入物なく、粘性あり。
 3 褐色土 ローム小ブロックを多量、黒色土ブロックを微量含む。
 4 暗褐色土 ローム小ブロックを多量、黒色土ブロック、白色粒を少量含む。
 5 暗褐色土 焼土粒、炭化粒を微量含む。(貯蔵穴)
 6 暗褐色土 焼土粒、炭化粒を少量含む。
 7 暗灰色土 灰を多量、焼土粒、炭化粒を微量含む。



F区1号住居カマド

- 1 褐色土 ロームブロックを多量、黒色土ブロックを微量含む。(住居3層)
 2 暗褐色土 ロームブロックを少量、白色粒を微量含む。
 3 暗褐色土 炭化粒・焼土粒を少量、砂岩ブロックを微量含む。(住居6層)
 4 暗灰色土 灰を多量、炭化粒・焼土粒を微量含む。(住居7層)
 5 赤褐色土 焼土を多量に含む。天井部の崩落上。



第59図 F区1号住居・カマド平面図、出土遺物

第40表 F区1号住居出土遺物観察表

土器類		種類・形状				出土位置		計測値(cm)		胎土/焼成/色調		成形・整形の特徴		備考
種別番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴					
第59図 PL.31	1	須恵器 椀	カマド内、口 縁部～体部片	口 14.4 底 7.0	-	-	-	細砂粒/還元焰/灰	口クロ整形、回転右回りか。高台が附付されている。					
第59図 PL.31	2	須恵器 椀	埋土、口縁部 ～体部片	口 18.4	-	-	-	細砂粒/還元焰/灰	口クロ整形、回転右回りか。					
第59図 PL.31	3	土師器 甕	埋土、口縁部 ～胴部中位片	口 12.8 胴 15.6	-	-	-	細砂粒/良好に灰、黄 橙	口クロ整形、回転右回りか。					北陸系ロクロ 袋。
金属製品		種類・形状		長さ		幅		厚		重		特徴・状態		備考
種別番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)							
第59図 PL.31	4	鉄製品 不明	埋土 破片	-	0.65～ 0.50	-	-					棒状製品で図示した上部に比して下部がやや細い。断面形 は不整形な形か。紡錘車の軸の可能性はある。		
第59図 PL.31	5	鉄製品 不明	埋土 破片	-	0.65	-	-					直径6.5mmの棒状製品。断面形は不明瞭。		

2 掘立柱建物

本調査で検出された掘立柱建物は、A区において1棟を検出したのみである。

A区1号掘立柱建物 (第60図、PL.3)

位置：A区北側の東壁寄りに位置し、本掘立柱建物の南西10mにA区2号住居がある。

(座標)X軸=29,269 ~ 29,275 Y軸=-83,605 ~ 83,608

形状・規模：長方形を呈し、梁行1間(2.2m)×桁行2間(5.4m)を測る。 桁行方向：N-6°-E

柱穴：P1～P6の6本を検出した。各柱間の距離は、ほぼ均等に梁行間2.2m、桁行間2.7mを測る。各柱穴の規模は、P1が径22cm、深さ33cm、P2が径25cm、深さ58cm、P3が径22cm、深さ48cm、P4が径25cm、深さ43cm、P5が径24cm前後、深さ45cm、P6が径27cm、深さ43cmを測る。埋土は暗褐色土である。

所見：出土遺物がなく、時期の特定は難しいが、周辺の状況等から古代の可能性はある。

3 土坑

検出された土坑は調査範囲全体に散漫に分布し、A区で3基、B区で5基、C区で8基、D区で3基、F区で1基の計20基を検出した。円形、方形、長方形を呈し、遺物をほとんど出土させていないが、唯一C区5号土坑に杯・椀類が出土している。また、後述する水路と重複する土坑も存在する。

以下、各調査区の主な土坑を記載することとし、土坑一覧表(第45表)にまとめた。

A区1号土坑 (第61図、第45表、PL.5)

位置：A区中央の東壁際に位置し、本土坑の西北西4mにA区2号住居がある。

(座標)X軸=29,260 Y軸=-83,605

形状・規模：南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、長軸1.5m、短軸0.9m、深さ30cmを測る。

長軸方向：N-0°-E

埋没土：ロームブロックを含む粘性の強い暗褐色土を主体とすることから、人為的堆積と考えられる。

遺物：埋土中から獲の胴部片が1点出土している。

所見：出土遺物や周辺の状況等から、古代の遺構と考えられる。

B区1号土坑 (第61図、第45表、PL.7)

位置：B区南端付近に位置し、周囲にはB区2～5号土坑が近接する。

(座標)X軸=29,278 Y軸=-83,627

形状・規模：円形を呈し、径1.15m、深さ36cmを測る。

埋没土：ロームブロックを含む黒褐色土と黒色土を主体とすることから、人為的堆積と考えられる。

所見：出土遺物がなく、時期の特定は難しいが、周辺の状況等から古代の可能性はある。

C区4・13号土坑 (第62図、第45表、PL.11)

位置：C区北側の西壁寄りに位置し、C区4号土坑と13号土坑が重複する。

(座標)X軸=29,410 Y軸=-83,619

重複：土層断面等の観察からも、両土坑の新田は不明。

形状・規模：4号土坑は東西方向に長軸をもつ長方形を呈すると考えられ、長軸1.1m以上、短軸1.15m、深さ79cmを測り、底面は13号土坑より高い位置にある。13号土坑は南北方向に長軸をもち、上面は楕円形を呈し、底面は長方形を呈する。長軸2.55m、短軸1.85m、深さ93cmを測る。

埋没土：上位層は両土坑共にAs-Bを含む。下位層でも共にロームブロックを含む土を主体とすることから、人為的堆積と考えられる。

所見：出土遺物がなく、時期の特定は難しいが、周辺の状況等から古代の可能性はある。

C区5号土坑 (第61図、第41表、PL.11)

位置：C区中央の東寄りに位置し、C区2号住居と重複するC区1号土坑の東側に近接する。なお、後述するC区2b・3・4号水路と重複する。

(座標)X軸=29,388 Y軸=-83,613

重複：土層断面等の観察から、C区2b・3号水路よりも本土坑が新しく、C区4号水路より古い。

形状・規模：南北方向に長軸をもち、上面は楕円形を呈し、底面は長方形を呈する。長軸2.0m、短軸0.65m、深さ14cmを測る。

長軸方向：N-0°-E

埋没土：黒褐色土ブロックと鈍い黄褐色土ブロックを含む暗灰黄色土および黒褐色土を主体とすることから、

人為的堆積と考えられる。

遺物：南半の底面から、1～4に図示した完形の内面黒色処理の杯1点、内面黒色処理の椀2点、須恵器の杯1点が出土している。

所見：出土土器から、本土坑は10世紀後半と考えられる。

C区6号土坑（第62図、第45表、PL.11）

位置：C区北端付近に位置し、周辺には北東にC区1号住居、南側にC区2～4・13号土坑がある。

（座標）X軸=29,415 Y軸=-83,617

形状・規模：やや不整な円形を呈し、径2.0m、深さ72cmを測る。

埋没上：ロームブロックや黒褐色土ブロックを含む暗褐色土を主体とし、埋土中に礫を多く含むことから、人為的堆積と考えられる。

所見：出土遺物がなく、時期の特定は難しいが、周辺の状況等から古代の可能性はある。

C区9号土坑（第63図、第45表、PL.11）

位置：C区中央の北寄りに位置し、C区6号住居の北東に近接する。なお、後述するC区7号用水路と重複する。

（座標）X軸=29,403 Y軸=-83,613

重複：土層断面等の観察から、C区7号用水路よりも本土坑が新しい。

形状・規模：東西方向にやや長い方形を呈し、長軸1.45m、短軸1.2m、深さ12cmを測る。

長軸方向：N-95°-E

埋没上：黒褐色土ブロックを含む暗灰黄色土と黒褐色土を主体とすることから、人為的堆積の可能性をもつ。

所見：出土遺物がなく、時期の特定は難しいが、周辺の状況等から古代の可能性はある。

D区3号土坑（第63図、第45表、PL.13）

位置：D区西側に位置し、北側にD区1号住居がある。

（座標）X軸=29,435 Y軸=-83,591

形状・規模：円形を呈し、径1.05m、深さ40cmを測る。

埋没上：ロームブロックを含む黒褐色土と鈍い黄褐色土を主体とすることから、人為的堆積と考えられる。

所見：出土遺物がなく、時期の特定は難しいが、周辺の状況等から古代の可能性はある。

F区1号土坑（第63図、第45表、PL.20）

位置：F区の南側に位置し、F区3号溝と重複する。

（座標）X軸=29,378 Y軸=-83,635

形状・規模：東西方向にやや長い方形を呈し、長軸1.48m、短軸1.16m、深さ50cmを測る。

長軸方向：N-95°-E

埋没上：黒褐色土ブロックとロームブロックを含む暗褐色土を主体とすることから、人為的堆積と考えられる。

所見：出土遺物がなく、時期の特定は難しいが、周辺の状況等から古代の可能性はある。

4 ピット

A区2面調査時に多くのピットを検出したが、先述したA区1号掘立柱建物以外には建物を想定することはできなかった。ピットは径20～30cm前後、深さ10～40cm前後を測るものがほとんどで、暗褐色土を埋土とし、特徴的なものはなかった。

5 溝

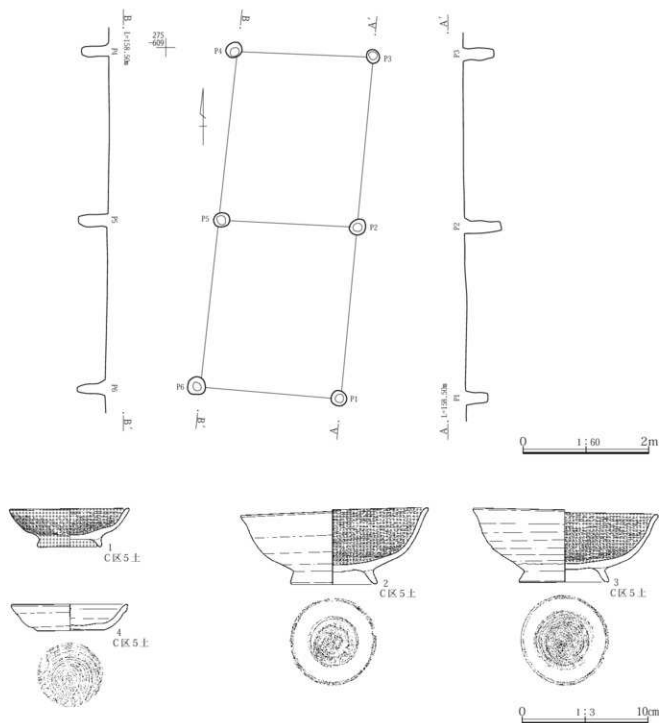
検出された古代の溝は数多くあるが、用水路と考えられる溝もあることから、本報告では溝と用水路を分け、ここでは溝についての記載を行う。

各調査区における溝は、A区で1条、E区で14条、F区で5条の計20条を数える。これらの溝については、表46に奈良・平安時代の溝一覧としてまとめた。

第69図のE区における溝の傾向として走向方向を見ると、E区9号溝に代表されるように調査区の南西から北東方向へ延びるグループと、E区11・18号溝のように西から東方向へ延びる溝、さらにはE区17・20号溝のように南から北方向へ延びる溝とがある。また、埋土に洪水層のシルト質土で埋没している溝が多いのも特徴である。

第71・72図のF区においてもE区と同様で、F区1・2号溝は南から北方向へ延びる溝である。

この遺跡のA～D区では、古墳時代と想定されるIX層以上を掘込み面とし、いずれも微高地の縁辺部を西から東の方向に走行する14条の用水路を確認。A～D区の地形は、旧高田川と考えられるいく筋かの旧河道が西から東へ走行することから、南北方向に微高地と低地を繰り返す地形を呈す。このうち①A区～B区南端部、②B区北端部～C区南側、③C区北端部～D区はいずれも微高地にあたり、それぞれの間が低地となる(図1)。

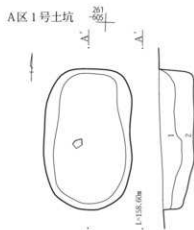


第60図 A区1号掘立柱建物、C区5号土坑出土遺物

第41表 C区5号土坑出土遺物観察表

土器類		出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
種別 No.	種類 器種					
第60図 PL.31	1 黒色土器 鉢	底面 完形	口 9.4 高 3.1 底 5.2 台 5.2	細砂粒/酸化焙/黒	内外面とも黒色処理。ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ヘラナデ。体部から口縁部は斜放射状へラ磨き、内面は全面へラ磨き。	
第60図 PL.31	2 黒色土器 椀	底面 完形	口 14.8 高 6.1 底 6.4 台 6.5	細砂粒/酸化焙/明赤褐	内面黒色処理。ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部回転ヘラナデ。内面は全面へラ磨き。	
第60図 PL.31	3 黒色土器 椀	底面 ほぼ完形	口 14.5 高 5.9 底 6.4 台 6.2	細砂粒/酸化焙/明赤褐	内面黒色処理。ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部回転ヘラナデ。内面は全面へラ磨き。	
第60図 PL.31	4 須臾器 鉢	底面 完形	口 9.0 高 2.1 底 5.1	細砂粒・粗砂粒/酸化焙/粗	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	

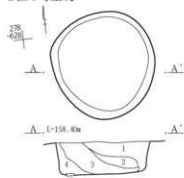
第3章 富岡清水遺跡の調査



A区1号土坑

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック、炭化物を少量、焼土粒を微量含む。しまりよい、粘性やや強い。
- 2 暗褐色土。ローム粒を少量、ロームブロック、炭化物をわずか含む。しまりややよい、粘性強い。

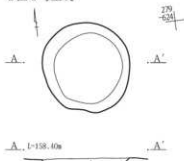
B区1号土坑



B区1号土坑

- 1 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 2 黒色土 ロームブロックを多く含む。
- 3 黒褐色土 ロームブロックを多量含む。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。

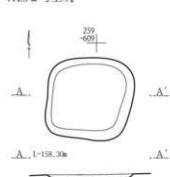
B区5号土坑



B区5号土坑

- 1 黒褐色土 ロームブロック含む。

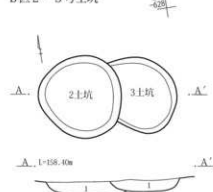
A区2号土坑



A区2号土坑

- 1 黒褐色土 ローム粒を少量、ローム小ブロックを微量含む。しまりやや弱い、粘性やや強い。

B区2・3号土坑



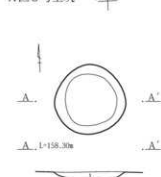
B区2号土坑

- 1 褐色土 ローム小ブロックを含む。

B区3号土坑

- 1 黒褐色土 ローム小ブロックを含む。

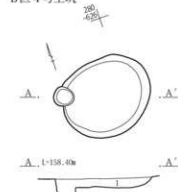
A区3号土坑



A区3号土坑

- 1 黒褐色土 ローム粒を少量、ローム小ブロックを微量含む。しまりやや弱い、粘性やや強い。

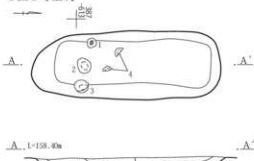
B区4号土坑



B区4号土坑

- 1 褐色土 ロームブロックを少量含む。

C区5号土坑

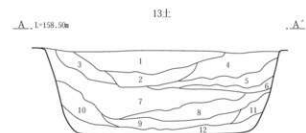
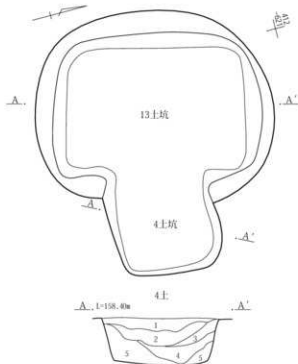


C区5号土坑

- 1 暗灰黄色土 黒褐色土ブロックを少量含む。
- 2 黒褐色土 黒褐色土ブロック、鈍い黄褐色土小ブロック少量含む。
- 3 暗灰黄色土 鈍い黄褐色土小ブロック中量、黒褐色土小ブロック少量含む。
- 4 暗褐色土 砂粒中量含む。

第61図 A区1～3号、B区1～5号、C区5号土坑

C区4・13号土坑



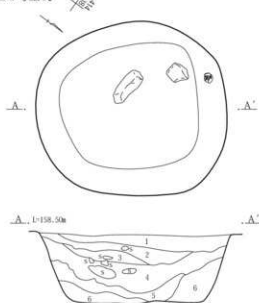
C区4号土坑

- 1 暗灰黄色土 As-B中量、黒褐色土小ブロック少量含む。
- 2 暗灰黄色土 ローム小ブロック、黒褐色土小ブロック多量、As-B少量含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック中量、黒褐色土小ブロック少量含む。
- 4 暗灰黄色土 ロームブロック中量、黒褐色土小ブロック少量含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロック中量、黒褐色土小ブロック少量含む。粘性強い。

C区13号土坑

- 1 暗灰色土 As-B多量含む。
- 2 暗灰色土 As-B中量、黒褐色土小ブロック少量含む。
- 3 暗灰黄色土 黒褐色土小ブロック少量含む。
- 4 暗灰黄色土 白色軽石、黒褐色土小ブロック少量含む。
- 5 暗灰黄色土 黒褐色土小ブロック中量、白色軽石少量含む。
- 6 暗灰黄色土 黒褐色土小ブロック中量、ローム小ブロック少量含む。
- 7 暗灰黄色土 黒褐色土小ブロック少量、ローム小ブロック微量含む。
- 8 暗灰黄色土 ロームブロック少量、黒褐色土小ブロック微量含む。
- 9 暗灰色土 砂粒を多量、ロームブロック中量、黒褐色土小ブロック少量含む。
- 10 暗灰黄色土 黒褐色土小ブロック中量、ローム小ブロック少量含む。
- 11 黒褐色土 ローム小ブロック中量含む。
- 12 鈍い黄褐色土 ロームブロック多量、黒褐色土小ブロック中量含む。

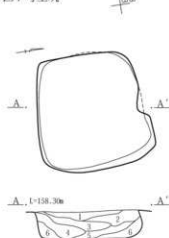
C区6号土坑



C区6号土坑

- 1 暗褐色土 白色軽石中量、ローム小ブロック少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック少量、炭化粒を微量含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック、黒褐色土小ブロック多量含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロック、黒褐色土小ブロック少量含む。
- 5 暗褐色土 黒褐色土小ブロック少量、ローム小ブロック微量含む。
- 6 暗褐色土 黒褐色土小ブロック少量含む。

C区7号土坑



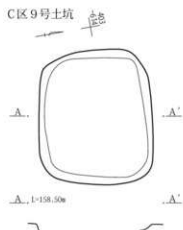
C区7号土坑

- 1 暗灰黄色土 白色軽石中量、黒褐色土小ブロック少量含む。
- 2 暗灰黄色土 白色軽石、黒褐色土小ブロック少量含む。
- 3 暗灰黄色土 黒褐色土小ブロック少量、白色軽石微量含む。
- 4 暗灰黄色土 黒褐色土小ブロック微量含む。
- 5 暗灰黄色土 黒褐色土小ブロック少量含む。粘性あり。
- 6 暗灰黄色土 黒褐色土小ブロック中量含む。

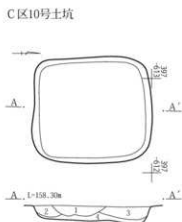
0 1:40 1m

第62図 C区4・13・6・7号土坑

C区9号土坑



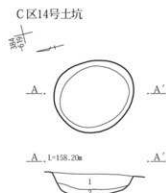
C区10号土坑



C区10号土坑

- 1 暗灰黄色土 砂粒少量含む。
- 2 暗灰黄色土 砂粒、黒褐色土小ブロック少量含む。
- 3 暗褐色土 鈍い黄褐色土小ブロック中量含む。
- 4 黒褐色土 鈍い黄褐色土小ブロック多量含む。

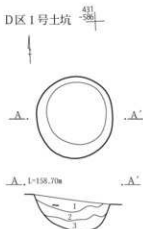
C区14号土坑



C区14号土坑

- 1 黒褐色土 白色軽石、焼土粒、炭化粒少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック中量含む。

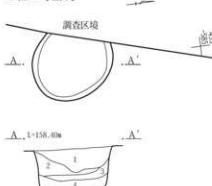
D区1号土坑



D区1号土坑

- 1 暗灰黄色土 黒褐色土小ブロック、炭化粒少量含む。
- 2 暗灰黄色土 黒褐色土小ブロック少量、焼土粒、炭化粒微量含む。
- 3 暗褐色土 ローム小ブロック少量含む。

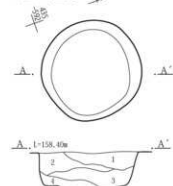
D区2号土坑



D区2号土坑

- 1 黒褐色土 白色軽石中量、ローム小ブロック少量含む。
- 2 黒褐色土 白色軽石、ローム小ブロック少量含む。
- 3 黒褐色土 ローム小ブロック中量、白色軽石少量含む。
- 4 暗褐色土 ローム小ブロック多量、砂粒中量、白色軽石少量含む。

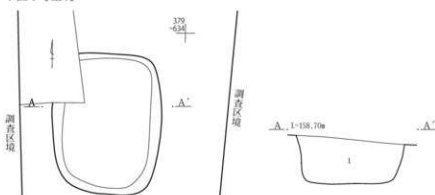
D区3号土坑



D区3号土坑

- 1 黒褐色土 白色軽石、ローム小ブロック少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロック中量、白色軽石、焼土粒微量含む。
- 3 鈍い黄褐色土 ローム小ブロック多量、砂粒中量、黒褐色土小ブロック少量含む。
- 4 鈍い黄褐色土 ローム小ブロック多量、黒褐色土小ブロック中量、砂粒少量含む。

F区1号土坑



F区1号土坑

- 1 暗褐色土 黒色土ブロックを多量、ロームブロックを少量含む。

0 1:40 1m

第63図 C区9・10・14、D区1～3、F区1号土坑

6 用水路

確認した用水路はいずれも、基本的に②と③の微高地と低地の縁辺部付近に立地するが、これは微高地と低地の縁辺部に用水路を通し、それより下側(低地部側)が水田域となる一般的な用水路の立地を示す。幹線水路の取水は、遺跡の西側約150mを北流する現高田川からと考えられる。高田川は遺跡の西側で北側へ大きく屈曲するが、この屈曲した攻撃面から取水した可能性が高い。但し、高田川の河道は移動しており、確認した用水路の年代における河道の位置は不明である。

B区1号用水路 (第65図、PL.9)

立地・走向: B区北端部の北側から南側への傾斜変換点付近を、等高線にはぼ沿うように西→東に走向する。

規模・形状: 上幅50cm、下幅30cm、深さ20cm。

埋没土: 洪水堆積物の二次堆積層で埋没する。

重複: 直接的な重複はないが、層位的には基本土層IV層(浅間B混土層)下面で検出した12世紀初頭以降の水田の下位に位置し、平面的にはその走向が擬似畦畔の東西方向に近い。

年代: 浅間B軽石降下以前だが、伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明。層位的には8世紀代に想定されるVI層以前と推定される。

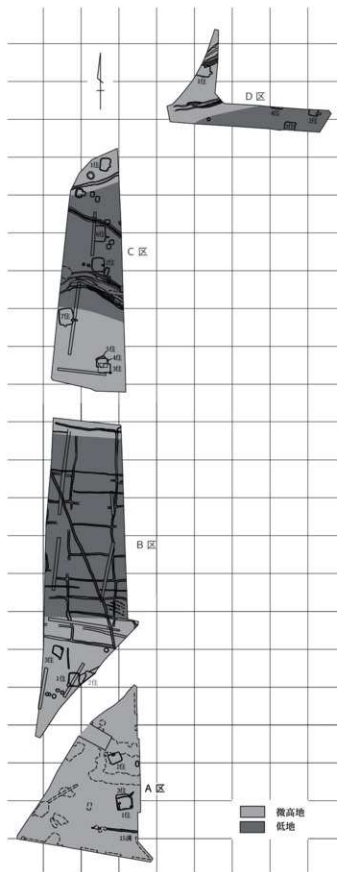
所見: 地形の傾斜変換点付近を等高線にはぼ沿うように走向することから、用水路と判断される。走向は、条里地割の可能性が高い浅間B混土層下面水田の東西方向の軸線に近いが、層位的にはこの水田より明らかに下位に位置する。詳細な年代は不明だが、層位的には少なくとも基本土層VI層以前で、層位的に推定される8世紀代の水田に伴う用水路の可能性が高い。

C区1号用水路 (第64図、PL.12)

立地・走向: C区北端部の北側から南側への傾斜変換点付近を、等高線にはぼ沿うように西南西→東北東に走向する。西端部と東端部における底面の標高はほぼ同じだが、地形を考慮すると西南西→東北東に流下したものと推定される。

規模・形状: 上幅90cm、下幅60cm、深さ10～20cm、断面形状は逆台形状を呈す。

埋没土: 洪水堆積物の二次堆積層で埋没する。



第64図 富岡清水遺跡A～D区の地形概略図

年代: 伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明だが、8世紀代と推定する基本土層Ⅶ層を掘り込み、11世紀代と推定するⅥ層が上位に位置することから、8世紀以降で、11世紀以前と推定される。

所見: 地形の傾斜変換点付近を等高線にほぼ沿う走向から、用水路と判断される。東北東に向かう走向は、微高地が東北東に向かう地形に規定される。年代は8世紀以降、11世紀以前と幅があって限定できないが、B区における水田耕作土の年代幅と矛盾しない。

C区2～6号用水路 (第65図、第42表、PL.12)

概要: F区中央部からC区中央部にかけて、大きく2回蛇行して西北西から東南東へ流下する。幹線水路と考えられる中央部の2a・2b号水路と、これらの両側に幹線水路から分岐した3・6号水路が位置する。土層断面などの所見から、これらは全てが同時存在したのではなく、大きくは2b・3号水路が埋没後、2a・6号水路への造り替えが行われたものと判断される。4・5号水路は、おそらく6号水路の一部が造り替えられたもの。

立地・走向: 全体として南側から北側への緩傾斜地を、等高線にほぼ沿って西北西→東南東の方向に蛇行して走向する。中央部の2a・2b号は、西端部と東端部における底面の比高がそれぞれ約10cm、平均的な勾配約0.6%で緩やかに流下する。

規模・形状: 規模が確認できたものは幹線水路と考えられる2a号が上幅1.5～2.5m、下幅2.0m、深さ25cm、断面形状は緩やかな逆台形状を呈す。幹線水路から分岐した3号が上幅60cm、下幅30cm、深さ30cm、断面形状は緩やかな船底状を呈す。同じく6号が上幅60cm、下幅30cm、深さ15cm、断面形状は緩やかな逆台形状を呈す。幹線水路の2b号は、2a号に掘られて不明。

埋没上: いずれも洪水起源の一次堆積層で埋没し、洪水堆積物の一部には小礫を含むものも存在する。

取水構造: 最北部に位置する3号は、東西方向の中央部で掘り込みによる段差がなくなる一方で、その南側の基部から上流(西側)に向けてやや開く形で2b号まで約4mほど延びた礫の列を確認した。これは、現在の築の構造に似た2b号からの取水構造と判断した。また、南端部に位置する6号は、接続する2a号との底面の比高が約15cmある。この接続部の西側には一帯に礫が散乱し

た状態で出土しているが、これらの礫は具体的な構造は不明ではあるものの、6号への取水に用いられた可能性が高い。したがって、3号は2b号から、6号は2a号からそれぞれ分岐していたものと判断した。

遺物: 2a号から須恵器杯片、2b号から土師器杯片が出土した。

重複: 2b号→2a号、2b・3号→5号土坑、5号→4号→6号の順で新しい土層断面の所見を得た。

年代: 伴出遺物から2a号は8世紀中葉、2b号は8世紀前半と推定される。

所見: 2a・2b号水路はその規模からみてこの遺跡周辺の幹線水路と想定でき、その取水はおそらく遺跡の西側約150mを北流する現高田川からと考えられる。土層断面及び出土遺物の所見から、当初2b・3号水路が造られ、これらが8世紀前半と推定される洪水堆積物で埋没後、2a・6号水路に造り替えられ、これらも8世紀中葉の洪水堆積物で埋没したものと判断される。

なお、植物珪酸体分析で水田耕作土と認定できるB区の基本土層Ⅵ層とⅦ層は、これらの8世紀前半と中葉の洪水堆積物が耕土化されたものの可能性が高い。

C区7号用水路 (第66図、PL.12)

立地・走向: C区北側で北側から南側への緩傾斜変換点付近を、等高線にほぼ沿うように西北西→東南東に走向する。西端部と東端部における底面の比高は約10cm、平均的な勾配約0.6%で緩やかに蛇行して東側に流下する。

規模・形状: 上幅1.1m、下幅20cm、深さ30cm、断面形状は緩やかな船底状で、中央部は幅10cm、深さ5cmほどのU字状に窪む。

埋没上: 底面上20cmは洪水の一次堆積層で埋没し、その上位10cmは基本土層Ⅶ層と考えられる黒褐色土で人為的に埋め戻す。

重複: 9号土坑→7号水路の順で新しい、土層断面の所見を得た。

年代: 伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明だが、層位的には基本土層Ⅶ層以降で、Ⅶ層以前。Ⅶ層には3世紀後半の浅岡C軽石(As-C)を含み、Ⅶ層は8世紀代に想定できることから、古墳時代の可能性も考えられる。

所見: 洪水の一次堆積層で埋没後、残存した窪みをⅦ層と考えられる土壌で人為的に埋め戻すが、これは次の

三つのことを示唆する。①基本土層で確認した最下層の洪水層はⅦ層であることから、洪水層を含まないⅧ層で埋められていることは、この遺跡で最古の洪水層の可能性が高い。②Ⅷ層には浅間C軽石を含み、上位のⅧ層が8世紀代に想定されることから、7号水路とこれを直接埋めた洪水層は古墳時代まで遡る可能性が高い。つまり、この周辺地域の水田耕作は古墳時代まで遡り、これはⅧ層中から700個/gのイネのプラント・オブパールが検出されていることと矛盾しない。③洪水で埋没後の残存した窪みを埋めることは、ここを平坦化する必要があったものと考えられ、これは洪水の後にこの用水路部分も含めた水田化を暗示する。

D区1号用水路 (第67図)

立地・走向：D区南側で北側から南側への傾斜変換点付近を、等高線にほぼ沿うように西南西→東北東に走向する。西端部と東端部における底面の比高約5cm、平均的な勾配約0.4%で緩やかに東側に流下する。

規模・形状：上幅1.2m、下幅70cm、深さ30cm、断面形状は逆台形状を呈す。

埋没土：洪水堆積物の二次堆積層で埋没する。

重複：2号水路→1号水路の順で新しい、土層断面の所見を得た。

年代：伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明だが、基本土層Ⅶ層以降と推定される。

所見：地形の傾斜変換点付近を等高線にほぼ沿う走向から、用水路と判断。東北東に向かう走向は、微高地が東北東に向かう地形に規定される。

D区2号用水路 (第67図)

立地・走向：D区南側で北側から南側への傾斜変換点付近を、西南西→東北東に走向する。流路が重複する1号水路とほぼ重なり、全体の状況は不明である。

規模・形状：上幅20cm、下幅10cm、深さ10cm、断面形状は逆台形状を呈す。

埋没土：洪水堆積物の二次堆積層で埋没する。

重複：2号水路→1号水路の順で新しい、土層断面の所見を得た。

年代：伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明だが、基本土層Ⅶ層以降と推定される。

所見：地形の傾斜変換点付近を等高線にほぼ沿う走向から用水路と判断したが、全体の状況は不明である。

D区3号用水路 (第67図)

立地・走向：D区の北側を西南西→東北東に走向する。西端部と東端部における底面の比高約5cm、平均的な勾配約1.2%で緩やかに東側に流下する。

規模・形状：上幅70cm、下幅30cm、深さ30cm、断面形状は逆台形状を呈す。

埋没土：洪水堆積物の二次堆積層で埋没する。

年代：伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明だが、基本土層Ⅶ層以降と推定される。

所見：北側の段丘崖付近をほぼ平行に走向することから、用水路と判断される。

D区4号用水路 (第67図)

立地・走向：D区の北側を西南西→東北東に走向する。土層断面の所見から、重複するa・bの2条と判断される。

規模・形状：4a号は上幅1.5m、下幅1.0m、深さ40cm、断面形状は逆台形状を呈す。4bは不明である。

埋没土：洪水堆積物の二次堆積層で埋没する。

重複：4b号水路→4a号水路の順で新しい、土層断面の所見を得た。

年代：伴出遺物が皆無で詳細な年代は不明だが、4aは基本土層Ⅶ層以降、4bは基本土層Ⅷ層以降と推定される。

所見：北側の段丘崖付近をほぼそれに沿って平行に走向することから、用水路と判断される。

F区3号溝 (第72図、第44表、PL.20)

立地・走向：F区南側で等高線に直行するように南→北に走向する。

規模・形状：上幅1.52cm、下幅50cm、深さ44cm。

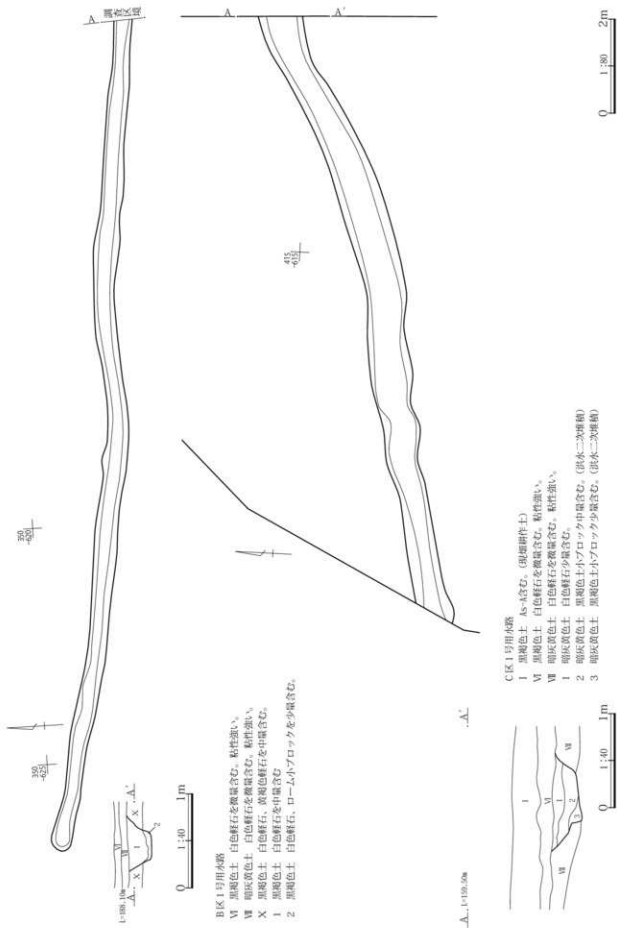
埋没土：洪水堆積物の二次堆積層で埋没するが、底面および中間に流水に伴う砂礫層を確認した。

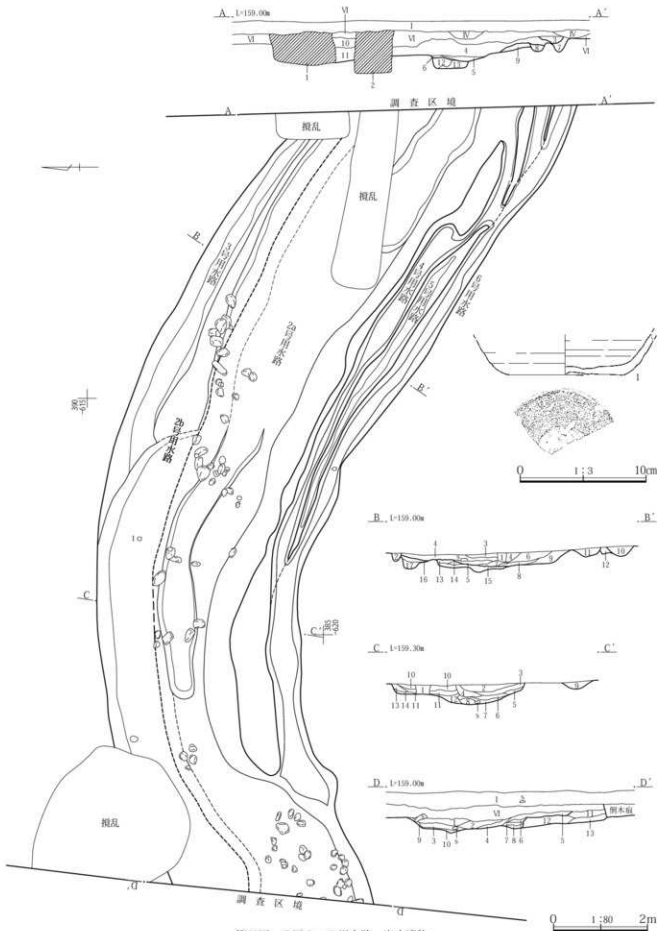
遺物：図示した土師器の杯、須恵器の杯・椀・長頸壺の口縁部が1点ずつ出土した。

重複：直接的な重複はないが、北側のF区4・5号溝に取り付く可能性が高い。また、F区1号土坑と重複するが、本溝の方が古い。

年代：出土土器から8世紀後半である。

所見：F区4・5号溝に取り付く可能性があることと、底面および中間に流水に伴う砂礫層を確認できたことから、複数時期にわたる用水路と判断される。





第66図 C区2～6水路、出土遺物

0 1:80 2m

第3章 富岡清水遺跡の調査

C区2～6号水路 A-A'

- 1 黒褐色土 As-A含む。(現掘り作上)
- IV 黒褐色土 As-Bを多量に含む。
- M 黒褐色土 白色軽石を微量含む。粘性強い。
- 1 暗褐色土 As-B中量、黒褐色土小ブロック少量含む。(人為的埋没)
- 2 暗褐色土 黒褐色土ブロック中量、As-B、白色軽石少量含む。(人為的埋没)
- 3 暗褐色土 白色軽石少量含む。(土坑)
- 4 暗灰黄色土 白色軽石、黒褐色土小ブロック少量含む。(2号用水路)
- 5 暗灰黄色土 砂粒中量、細礫少量含む。(2号用水路)
- 6 暗褐色土 細礫多量、砂粒中量含む。(2号用水路)
- 7 暗褐色土 砂粒多量含む。(2号用水路)
- 8 暗灰黄色土 鈍い黄褐色土小ブロック中量含む。(6号用水路)
- 9 暗灰黄色土 砂粒多量、黒褐色土小ブロック少量含む。(4号用水路)
- 10 黒褐色土 暗灰黄色土小ブロック少量含む。(5号用水路)
- 11 暗灰黄色土 砂粒中量含む。(2号用水路)
- 12 暗灰黄色土 砂粒中量、細礫少量含む。(2号用水路)
- 13 暗褐色土 細礫中量、ローム小ブロック少量含む。(2号用水路以前の用水路、洪水二次堆積)

C区2～6号溝 B-B'

- 1 暗褐色土 白色軽石、ローム粒中量含む。
- 2 暗灰色土 As-中量含む。
- 3 暗灰黄色土 砂粒多量、黄褐色粒少量含む。(2号用水路、洪水一次堆積)
- 4 暗灰黄色土 砂粒中量、白色軽石、黒褐色土小ブロック少量含む。(2号用水路、洪水一次堆積)
- 5 暗灰黄色土 砂粒多量、細礫中量含む。(2号用水路、洪水一次堆積)
- 6 暗灰黄色土 砂粒中量含む、黒褐色土大ブロックが混入。粘性あり。(2号用水路、洪水一次堆積)
- 7 鈍い黄褐色土 白色軽石、砂粒少量含む。(2号用水路、洪水一次堆積)
- 8 暗灰色土 礫多量、砂粒少量含む。(2号用水路、洪水一次堆積)
- 9 暗灰黄色土 砂粒多量、黒褐色土小ブロック少量含む。(2号用水路、洪水一次堆積)
- 10 暗灰黄色土 鈍い黄褐色土小ブロック中量含む。(6号用水路、洪水一次堆積)
- 11 暗灰黄色土 黒褐色土小ブロック少量含む。(4号用水路、洪水一次堆積)
- 12 鈍い黄褐色土 砂粒中量、黒褐色土小ブロック少量含む。(5号用水路、洪水一次堆積)
- 13 鈍い黄褐色土 砂粒、細礫少量含む。(2号用水路、洪水一次堆積)
- 14 暗灰黄色土 黒褐色土小ブロック少量含む。粘性あり。(2号用水路、洪水一次堆積)
- 15 暗灰色土 砂粒少量含む。(2号用水路、洪水一次堆積)
- 16 暗灰黄色土 砂粒多量含む。(3号用水路、洪水一次堆積)
- 17 暗灰黄色土 砂粒中量、粘質土をブロック状に含む。(3号用水路、洪水一次堆積)

C区2～6号溝 C-C'

- 1 暗褐色土 黒褐色土小ブロック、褐色粒中量含む。
- 2 暗灰黄色土 細礫少量含む。粘性あり。(2号用水路)
- 3 暗灰黄色土 砂粒、黒褐色土小ブロック少量含む。(2号用水路)
- 4 暗灰黄色土 砂粒、焼土粒少量含む。粘性あり。(2号用水路)
- 5 暗灰黄色土 砂粒中量、黒褐色土小ブロック少量含む。(2号用水路)
- 6 暗褐色土 砂粒、細礫多量含む。(2号用水路)
- 7 暗灰色砂質土 砂粒多量含む。(2号用水路)
- 8 暗褐色土 小礫多量、砂粒中量含む。(2号用水路)

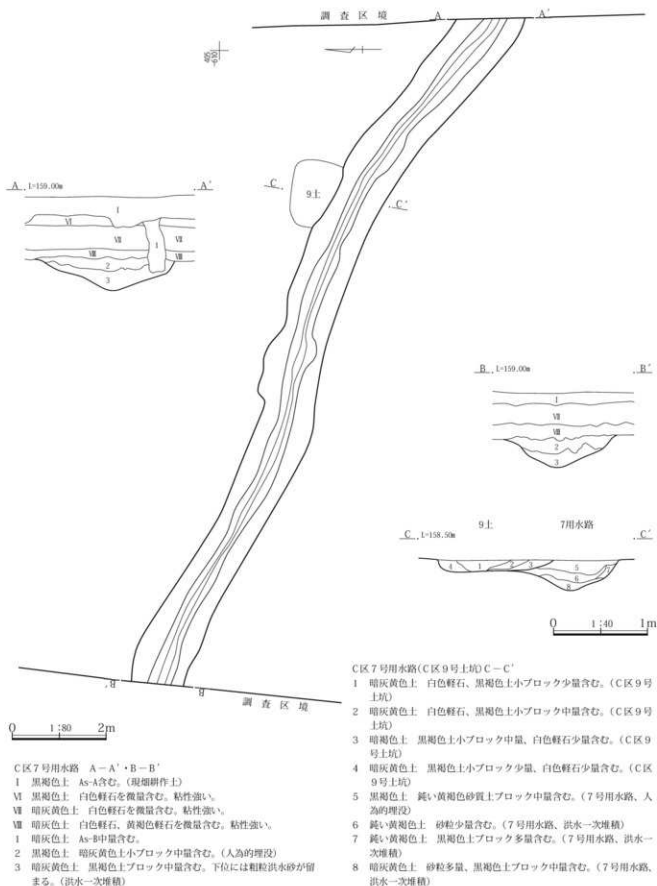
- 9 暗灰黄色土 鈍い黄褐色土小ブロック中量含む。(6号用水路)
- 10 暗灰黄色土 砂粒、黒褐色土小ブロック少量含む。(2b号用水路)
- 11 暗灰黄色土 砂粒、黒褐色土小ブロック中量含む。(2b号用水路)
- 12 暗灰黄色土 砂粒多量含む。(2b号用水路)
- 13 暗灰黄色土 黒褐色土小ブロック少量含む。(2b号用水路)
- 14 暗褐色土 黒褐色土小ブロック中量含む。(2b号用水路)

C区2～6号溝 D-D'

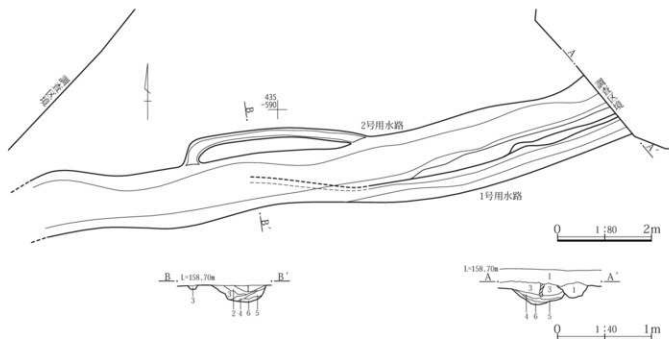
- 1 暗褐色土 白色軽石少量含む。(2号用水路)
- 2 暗灰黄色土 やや粒の大きい砂粒中量、白色軽石少量含む。(2号用水路)
- 3 暗灰黄色土 白色軽石、黒褐色土小ブロック少量含む。(2号用水路)
- 4 鈍い黄褐色土 砂粒多量、黒褐色土小ブロック少量含む。鉄分が沈着。(2号用水路)
- 5 鈍い黄褐色土 砂粒多量含む。(2号用水路)
- 6 鈍い黄褐色土 砂粒多量、黒褐色土小ブロック少量含む。(2号用水路)
- 7 暗褐色土 砂粒、細礫多量含む。(2号用水路)
- 8 暗灰黄色土 砂粒中量、細礫少量含む。(2号用水路)
- 9 暗褐色土 黒褐色土小ブロック中量含む。(2号用水路)
- 10 暗灰黄色土 砂粒中量含む。(2号用水路)
- 11 鈍い黄褐色土 砂粒多量、黒褐色土小ブロック少量含む。(2b号用水路)
- 12 鈍い黄褐色土 砂粒中量、細礫少量含む。(2b号用水路)
- 13 暗灰黄色土 砂粒中量、黒褐色土小ブロック少量含む。(2b号用水路)

第42表 C区2号用水路出土遺物観察表

土器類		種類		出土位置		計測値(cm)		胎土/焼成/色調		成形・整形の特徴		概要	
探検番号 調査番号	No.	種類 器種	部位	位置 埋土	層位	計測値	寸法	胎土	焼成	色調	成形	整形	特徴
第66回 Ⅸ-1	1	須臾器 鉢	底	埋土	底	9.0		細砂粒/還元焰/灰			ロケロ型、回転右回り。底部は回転へら削り。		

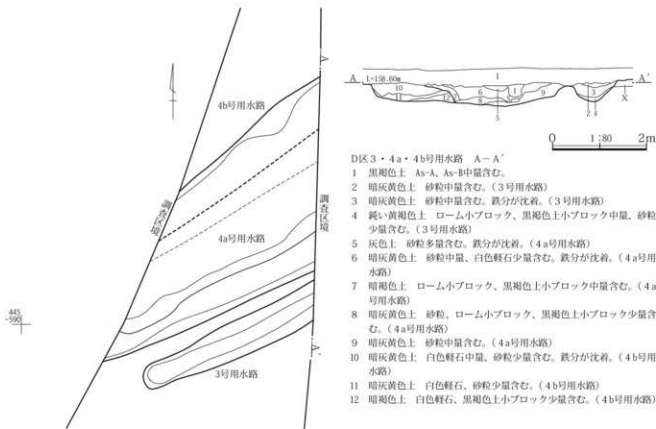


第67図 C区7号用水路



D区1・2号用水路 A-A'・B-B'

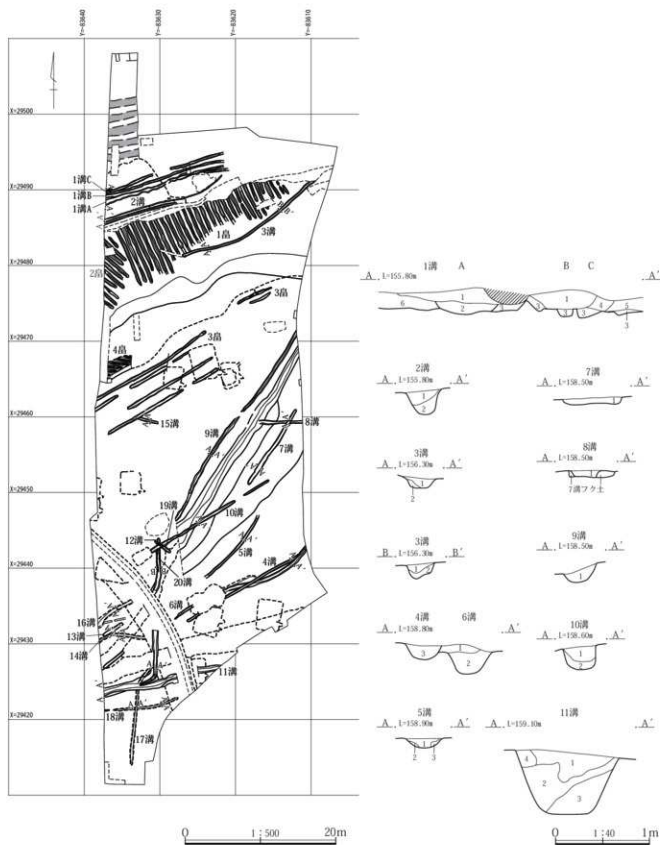
- 1 暗灰黄色土 砂粒中量含む。(1号用水路)
- 2 暗灰黄色土 砂粒中量、炭化粒少量含む。(2号用水路)
- 3 暗灰黄色土 砂粒中量、白色軽石少量含む。(2号用水路)
- 4 暗灰黄色土 砂粒多量、白色軽石微量含む。(2号用水路)
- 5 暗灰黄色土 砂粒中量、黒褐色土小ブロック少量含む。(2号用水路)
- 6 暗褐色土 黒褐色土小ブロック中量、砂粒少量含む。(2号用水路)



D区3・4a・4b号用水路 A-A'

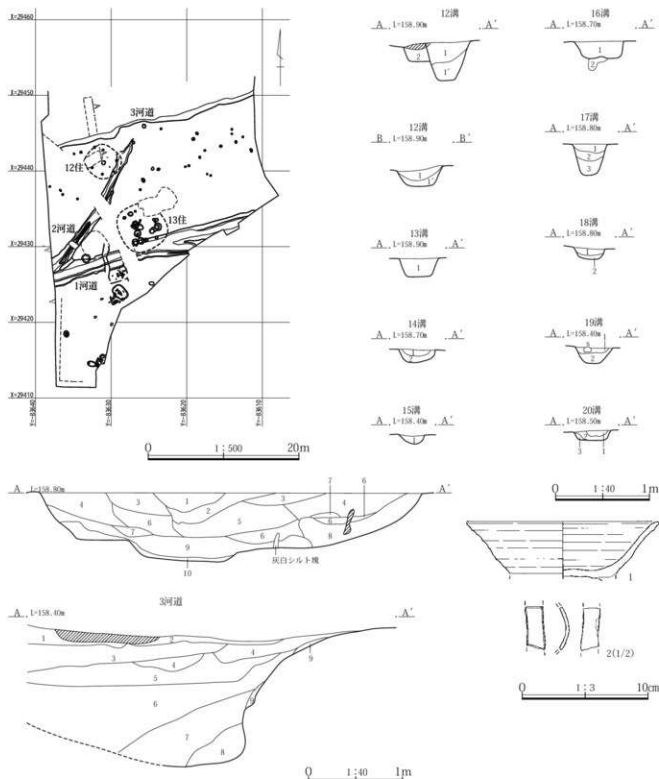
- 1 黒褐色土 As-A, As-B中量含む。
- 2 暗灰黄色土 砂粒中量含む。(3号用水路)
- 3 暗灰黄色土 砂粒中量含む。鉄分が沈着。(3号用水路)
- 4 鈍い黄褐色土 ローム小ブロック、黒褐色土小ブロック中量、砂粒少量含む。(3号用水路)
- 5 灰色土 砂粒多量含む。鉄分が沈着。(4a号用水路)
- 6 暗灰黄色土 砂粒中量、白色軽石少量含む。鉄分が沈着。(4a号用水路)
- 7 暗褐色土 ローム小ブロック、黒褐色土小ブロック中量含む。(4a号用水路)
- 8 暗灰黄色土 砂粒、ローム小ブロック、黒褐色土小ブロック少量含む。(4a号用水路)
- 9 暗灰黄色土 砂粒中量含む。(4a号用水路)
- 10 暗灰黄色土 白色軽石中量、砂粒少量含む。鉄分が沈着。(4b号用水路)
- 11 暗灰黄色土 白色軽石、砂粒少量含む。(4b号用水路)
- 12 暗褐色土 白色軽石、黒褐色土小ブロック少量含む。(4b号用水路)

第68図 D区1・2・3・4a・4b号用水路



第69図 E区1～20号溝、1～11号溝断面図

第3章 富岡清水遺跡の調査



第70図 E区12～20号溝断面図、1～3号河道、10号溝出土遺物

第43表 E区10号溝出土遺物観察表

土器類								
種別番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴		摘要
第70図 PL-	1	須恵器 椀	埋土 1/4	□ 14.9 底 8.4	細砂粒/還元焰/灰白	口ケロ整形、回転右回り。高台は貼付が剥落、底部は回転糸切り。		
金属製品							特徴・状態	
種別番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考
第70図 PL-	2	鉄製品 不明	埋土 破片	-	-	-	-	最大幅10.0mm。厚さ1.5mmで湾曲するが、両端を欠損。全体形状は不明。

E区1号溝A、B、C

- 1 灰黄褐色土 As-A混上。黄褐色粘質土を混入する。
- 2 褐色土 As-A混上。褐色土粘土塊を僅かに含む。
- 3 褐色土 As-A混上。2層より軽石が少なく粘質土を多く含む。
- 4 灰白色土 As-A混上1層と類似するが1層より軽石少量。
- 5 褐色土 粘質土塊を多量に含み、締り強い。
- 6 褐色土 As-A混上。

E区2号溝

- 1 暗褐色土 灰白色土塊を少量含む。粘質土。
- 2 灰白色土 As-A軽石を僅かに含む。粘質土。

E区3号溝

- 1 暗褐色土 As-B混上。黄褐色粘質土塊を少量含む。
- 2 暗褐色土 1層より黄褐色粘質土塊を少量含む。

E区4・6号溝

- 1 鈍い黄褐色土 As-A軽石を僅かに含む。やや粘質。(6号溝)
- 2 鈍い黄褐色土 洪水層シルト主体。(6号溝)
- 3 褐色土 褐色洪水層シルト主体。褐色土塊を混入。(4号溝)

E区5号溝

- 1 暗褐色土 黄褐色土を全体に含む。やや粘質。
- 2 暗褐色土 褐色シルト塊、黄褐色土を少量含む。やや粘質。
- 3 暗褐色土 黄褐色土塊を含む。

E区7号溝

- 1 暗褐色土 洪水層シルト主体。細粒白色軽石、褐色シルト塊、黄褐色土を少量含む。やや粘質。

E区8号溝

- 1 鈍い黄褐色土 洪水層シルト主体。黄褐色土を少量含む。

E区9号溝

- 1 褐色土 褐色洪水層シルト主体。褐色土塊を混入。

E区10号溝

- 1 鈍い黄褐色土 As-A軽石を僅かに含む。
- 2 暗褐色土 黄褐色土塊を少量含む。粘質土。

E区11号溝

- 1 鈍い黄褐色土 細粒白色軽石、褐色土塊を少量含む。
- 2 明黄褐色土 褐色土塊を少量含む。
- 3 暗褐色土 褐色シルト主体。褐色土塊、細粒白色軽石、褐色土塊を少量含む。
- 4 灰黄褐色土 細粒白色軽石、黄褐色土、ローム塊を全体に混入す

E区12号溝

- 1 褐色土 褐色洪水層シルト主体。淡い斑状の鉄分あり。(12号溝)
- 1' 暗褐色土 1層より斑鉄を多く含む。洪水層シルト。(12号溝)
- 2 暗褐色土 黒味が強い粘質土塊を多く含む。(河道)

E区13号溝

- 1 鈍い黄褐色土 細粒白色軽石、褐色土塊を含む。やや粘質。

E区14号溝

- 1 褐色土 褐色洪水層シルト主体。
- 2 黄褐色土 黄褐色塊を含む。細粒白色軽石を少量含む。洪水層。

E区15号溝

- 1 黄褐色土 シルト主体。黒褐色土塊を含む。締り強い。

E区16号溝

- 1 褐色土 褐色洪水層シルト主体。
- 2 黒褐色土 細粒白色軽石を少量含む。粘質土。

E区17号溝

- 1 鈍い黄褐色土 細粒白色軽石、褐色土塊を含む。
- 2 鈍い黄褐色土 細粒白色軽石、褐色土塊を全体に含む。
- 3 鈍い黄褐色土 褐色土塊を少量含む。

E区18号溝

- 1 鈍い黄褐色土 細粒白色軽石を含む。締りあり。
- 2 鈍い黄褐色土 細粒白色軽石、黄褐色土塊を含む。締りあり。

E区19号溝

- 1 鈍い黄褐色土 不明瞭なローム状主体。平安の洪水層に似たシルト質上との混上。締り強い。
- 2 暗褐色土 細粒白色軽石を霏降り状に含む。ローム粒を少量含む。締り強い。

E区20号溝

- 1 鈍い黄褐色土 洪水層シルト質上主体。ローム塊との混上。締り強い。
- 2 暗褐色土 細粒白色軽石を含む。ローム粒を少量含む。締り強い。
- 3 黄褐色土 黄褐色塊を多量に含む。

E区1号、2号河道

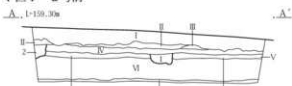
- 1 黄褐色土 やや大粒の白色軽石を含む。黄褐色土塊を含む。
- 2 黄褐色土 1層に類似するが、軽石の混入は見られない。締りあり。
- 3 暗褐色土 褐色土塊を全体に含む。白色軽石を少量含む。
- 4 褐色土 褐色土塊、白色軽石を少量含む。
- 5 黄褐色土 白色軽石を全体に含む。締り強い。
- 6 鈍い黄褐色土 灰シルト塊を全体に含む。やや粘質性を伴う。
- 7 鈍い黄褐色土 6層と類似する。褐色土塊を含む。
- 8 暗褐色土 黄褐色土塊を含む。灰白色シルト塊を全体に少量含む。
- 9 褐色土 褐色シルト塊を全体に含む。黄褐色土塊を少量含む。
- 10 黄褐色土 褐色シルト塊、黄褐色土塊を少量含む。締り弱い。

E区3号河道

- 1 黄褐色土 褐色粘質土塊を少量含む。洪水層。やや粘質。
- 2 暗褐色土 砂質上主体。細粒黄褐色土粒を全体に含む。
- 3 暗褐色土 混入物ない。粘質土で締り強い。
- 4 黄褐色土 3層塊を少量含む。締り強い。
- 5 黄褐色土 3層塊、褐色土塊を少量含む。洪水層。
- 6 黄褐色土 褐色土塊を少量含む。洪水層。
- 7 暗褐色土 ローム塊、黄褐色土塊を少量含む。粘質土。
- 8 黒褐色土 3層と類似する。ローム塊を少量含む。粘質土。
- 9 黄褐色土 地山ローム崩れ主体。

第3章 富岡清水遺跡の調査

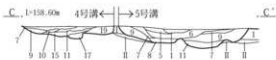
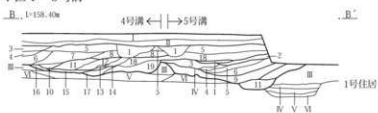
F区1・2号溝



F区1・2号溝 A-A'

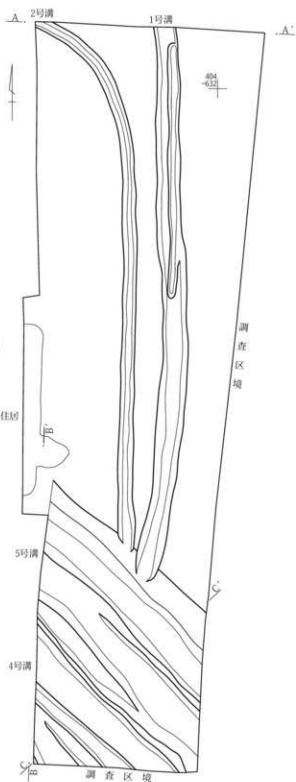
- I 碎石
- II 暗茶色土 白色粒・黄色粒を微量含む。
- III 明灰色土 白色粒を少量、灰色土ブロックを多量含む。
- IV 暗灰黄色土 白色粒を少量、砂を上部に多く含む。(B・C区第7層と対応)
- V 暗灰色土 白色軽石を少量、黄色軽石を微量含む。(B・C区第8層と対応)
- VI 黒褐色土 白色軽石を少量、橙色軽石を下部に微量含む。(B・C区第10層と対応)
- VII 茶褐色土 白色粒を少量含む。(B・C区第14層と対応)
- 1 暗灰黄色土 白色粒を少量含む。第IV層が混入。(1号溝)
- 2 明灰色土 灰色土ブロックを多量含む。第III層が混入。(2号溝)

F区4・5号溝

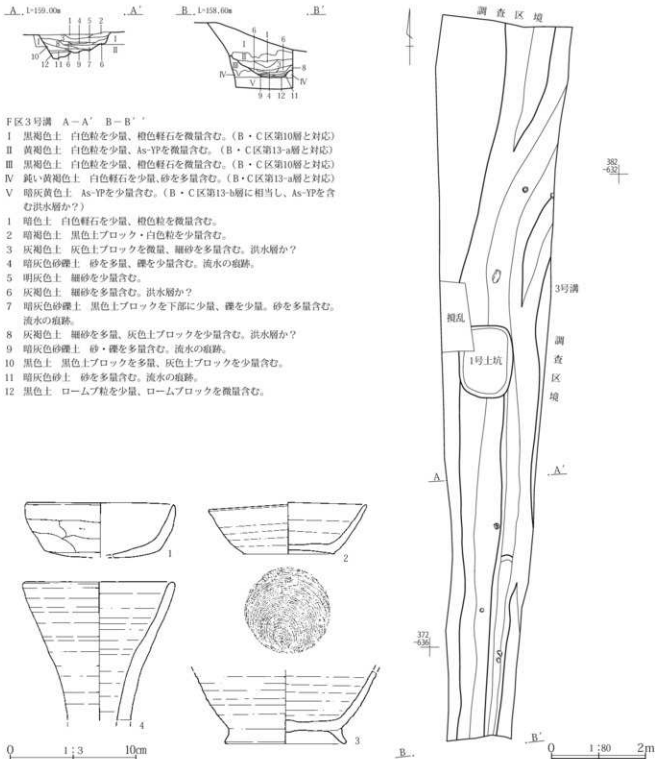


F区4・5号溝 B-B' C-C'

- I 碎石
- II 暗褐色土 As-Aを多量含む。
- III 鈍黄褐色土 白色軽石を少量含む。(B・C区第6b層と対応)
- IV 暗灰黄色土 白色粒を少量含む。(B・C区第7層と対応)
- V 黒褐色土 白色粒を少量、橙色軽石を微量含む。(B・C区第10層と対応)
- VI 茶褐色土 白色軽石を少量、黄色軽石を微量含む。(B・C区第11層と対応)
- VII 暗褐色土 白色軽石を少量含む。(B・C区第12層と対応)
- VIII 鈍い黄褐色土 As-YPを少量、砂を多量含む。(B・C区第13-a層と対応)
- 1 暗褐色土 白色粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 灰色土ブロックを少量含む。
- 3 暗灰色土 混入物なし。
- 4 灰色土 砂を多量、黄色粒を微量含む、鉄分が沈着。
- 5 暗灰色土 細砂を少量、白色粒を微量含む。
- 6 灰色土 鉄分が沈着。
- 7 暗灰色土 白色粒を少量含む、鉄分が沈着。
- 11 明灰色土 細砂を少量含む、鉄分が沈着。
- 12 灰色土 白色粒を少量含む、鉄分が沈着。
- 13 灰色砂土 砂を多量含む。
- 15 灰色砂礫土 砂・礫を多量含む。
- 16 暗灰色土 砂を少量、ロームブロック・炭化物を微量含む。
- 17 暗灰色土 細砂を少量含む。
- 19 明灰黄色土 細砂をラミナ状に含む。



第71図 F区1・2・4・5溝



第72図 F区3号溝、出土遺物

第44表 F区3号溝出土遺物観察表

土器類		出土位置		計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
神岡番号 図取番号	No.	種類 器種	残存率				
第72図 PL-	1	土師器 杯	埋土 底部1/2欠損	口 11.5 底 9.0	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへラ削り。	
第72図 PL-	2	須恵器 杯	埋土 完形	口 12.3 高 4.1 底 7.0	細砂粒/還元焰/灰	口ケ口整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第72図 PL-	3	須恵器 碗	埋土 底部～体部片	底 9.0 台 9.2	細砂粒・粗砂粒・長石 /還元焰/灰	口ケ口整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転へラ起し。	
第72図 PL-	4	須恵器 長頸壺	埋土 口縁部片	口 11.5	細砂粒/還元焰/灰	口ケ口整形、回転右回り。	

第3章 富岡清水遺跡の調査

第45表 奈良・平安時代土坑一覧表

調査区	番号	位置		平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係	時期/備考
		X座標	Y座標		長軸(径)	短軸	深さ			
A	1	X=29,200	Y=83,605	長方形	1.48	0.92	0.38	N-2°-W		
A	2	X=29,258	Y=83,609	方形	0.9	0.85	0.10	N-8°-W		
A	3	X=29,240	Y=83,616	円形	0.75	-	0.08	N-		
B	1	X=29,278	Y=83,627	円形	1.1	-	0.34	N-		
B	2	X=29,278	Y=83,629	円形	0.88	-	0.15	N-		
B	3	X=29,278	Y=83,628	-	0.7	(0.6)	0.10	N		
B	4	X=29,279	Y=83,626	円形	0.98	-	0.10	N-	3号土坑	
B	5	X=29,279	Y=83,625	円形	0.97	-	0.10	N		
C	4	X=29,411	Y=83,620	-	1.12	-	0.48	N-6°-E		
C	5	X=29,279	Y=83,624	長方形	0.20	0.75	0.18	N-2°-W		
C	6	X=29,415	Y=83,618	円形	2.00	1.80	0.74	N-		
C	7	X=29,398	Y=83,612	方形	1.24	1.10	0.30	N-88°-W		
C	9	X=29,403	Y=83,613	方形	1.45	1.20	0.12	N-85°-W	7号用水路	
C	10	X=29,397	Y=83,613	方形	1.25	-	0.18	N-		
C	13	X=29,412	Y=83,619	円形	2.50	-	0.92	N-	4号土坑	
C	14	X=29,383	Y=83,620	円形	0.85	-	0.25	N-		
D	1	X=29,430	Y=83,586	円形	0.84	-	0.35	N-		
D	2	X=29,432	Y=83,585	-	0.85	-	0.42	N-		
D	3	X=29,435	Y=83,591	円形	1.10	-	0.38	N-		
F	1	X=29,378	Y=83,635	長方形	1.45	1.10	0.50	N-3°-E	3号溝	

第46表 奈良・平安時代溝一覧表

調査区	番号	位置		規模(m)			走向方向	重複遺構/交差溝	所属時期/備考
		X座標	Y座標	長さ	上面幅	底面幅			
E区	5	X= 29,439 ~ 29,446	Y= 83,616 ~ 83,623	28.42	0.4	0.22	0.06	南西→北東	
E区	7	X= 29,451 ~ 29,461	Y= 83,418 ~ 83,611	11.82	0.45	0.5	0.07	北→南	8号溝
E区	8	X= 29,459	Y= 83,611 ~ 83,616	5.8	0.55	0.24	0.1	西→東	7号溝
E区	9	X= 29,446 ~ 29,471	Y= 83,612 ~ 83,627	26.4	0.56	0.15	0.08	南→北	
E区	11	X= 29,423 ~ 29,426	Y= 83,622 ~ 83,637	15.83	1.09	0.53	0.68	東→西	11号住居、17号溝
E区	12	X= 29,424 ~ 29,431	Y= 83,630 ~ 83,632	21.24	0.64	0.22	0.43	南→北	10号溝
E区	13	X= 29,431 ~ 29,432	Y= 83,635 ~ 83,637	3.32	0.47	0.30	0.12	北東→南西	14号溝
E区	14	X= 29,430	Y= 83,632 ~ 83,637	6.0	(0.45)	0.23	0.14	西→東	13号溝
E区	15	X= 29,459	Y= 83,630 ~ 83,632	2.86	0.42	0.13	0.07	東→西	3号溝
E区	16	X= 29,432 ~ 29,435	Y= 83,633 ~ 83,637	5.25	(0.85)	0.33	0.18	南西→東北	
E区	17	X= 29,424 ~ 29,427	Y= 83,631 ~ 83,633	9.85	0.46	0.18	0.3	北→南	18号溝
E区	18	X= 29,421 ~ 29,422	Y= 83,627 ~ 83,636	10.0	0.38	0.23	0.11	東→西	17号溝
E区	19	X= 29,442 ~ 29,443	Y= 83,628 ~ 83,630	2.63	0.4	0.2	0.17	北西→南西	
E区	20	X= 29,439 ~ 29,442	Y= 83,629 ~ 83,630	3.55	0.39	0.3	0.06	南→北	
F区	1	X= 29,373 ~ 29,405	Y= 83,632 ~ 83,633	15.0	0.51	0.38	0.22	南→北	5号溝
F区	2	X= 29,374 ~ 29,405	Y= 83,633 ~ 83,635	12.5	0.31	0.18	0.08	南→北	5号溝
F区	3	X= 29,370 ~ 29,385	Y= 83,633 ~ 83,635	15.0	1.29	0.53	0.45	南→北	1号土坑
F区	4	X= 29,389 ~ 29,392	Y= 83,632 ~ 83,635	4.3	1.19	1.0	0.21	北西→南西	5号溝
F区	5	X= 29,389 ~ 29,395	Y= 83,632 ~ 83,635	4.5	2.60	1.85	0.48	南東→北西	4号溝

F区4・5号溝 (第71図、PL.20)

立地・走向：F区北側の南端で北西から南東へ走向し、C区中央部に検出された大きく蛇行するC区2a・2b号用水路の延長部である(先述したC・F区2～6号用水路を参照)。

7 水田・畠

1. 水田

古代の水田は、B区2面調査時に検出されたのが唯一である。

B区水田 (第73図、PL.9)

検出：基本土層IV層下面で、南北約57m、東西約23m、面積約1,300㎡の範囲に検出した。基本土層IV層は多量の浅間B軽石(As-B)を含むいわゆる浅間B混土層で、浅間B軽石の一次堆積層ではないことから、火山灰に直接被覆された旧地表面としての水田ではなく、浅間B軽石を踏み込んだIV層を耕作土とし、下層のVI層に畦畔の痕跡を刻んだ。浅間B軽石降下以降の疑似畦畔と判断した。

地形：基底面での標高は、南北方向の最高部である南端部が158.55m、最低部の北端部が158.35mで、比高20cm。また、東西方向の最高部である西端部が158.30m、最低部の東端部が158.22mで、比高約8cm。したがって、平均的な勾配約0.4%で南から北へ、また西から東へ緩やかに傾斜するほぼ平坦面上に立地していた。

畦の走行と区画：調査範囲が狭いために区画の詳細は不明だが、原地形の傾斜に沿って南北方向に規則的な間隔の畦を配置し、これを傾斜に応じた直交する畦で区切り、東西方向に長軸をもつ区画を構成する。南北軸の方向はN-1～3°-Eでほぼ現在の真北に近く、東西軸はこれにほぼ直交する。区画の範囲が確認できたのは、推定も含めて8区画(表47参照)。南北方向の畦の芯々間隔は平均で約12.0m、東西方向の畦の間隔は4.1m～7.8m、平均5.4m、定型化した区画の面積は48.4㎡～91.3㎡、平均63.9㎡である。

耕作土：多量の浅間B軽石を含む黒褐色土(IV層)で、層厚約10cm。7,000個/gのイネのプラント・オパールを検出した植物珪酸体分析の結果は、この層が水田耕作土であることを明確に示す(「自然科学分析」131頁参照)。

水田基底面：全体にほぼ平坦で、一部に耕作痕と考えられる不規則な掘削痕を検出したが、規則的な連続耕作

痕は不明瞭であった。

畦の状況：平均的な畦の規模は土幅30cm、下幅50cm、高さ0～5cm。特に太畦に相当するような畦は見当たらず、いずれも近似した規模をもつ。調査区域の北端部は東西方向の畦がなく、南北方向の畦は微高地から直接延びる。これは、この地点が水田範囲の北端部であるか、あるいは水田面がこの地点から棚田状の段差をもつかのいずれかであるが、北側に接続するC区においては基本土層IV層が存在せず、畦畔が確認できないことから水田の有無は不明である。これは調査区域の南端部も同様。

水口：調査区域の南側において、数か所に確認した。いずれも幅10～15cmだが、水流によって深く掘り込まれた部分はなく、配水方向は不明瞭である。

用水路：確認できないが、地形的に遺跡の南方から取水した可能性が高い。

取・配水構造：用水路が確認できないために取水構造は不明である。配水構造は、地形の傾斜を考慮すると基本的に南→北、西→東の方向に配水したものと考えられる。

重複：北北西から南南東の方向に1号溝が疑似畦畔を掘り込んで走向する他、東西方向の畦に平行する溝が疑似畦畔を掘り込む。また、調査区域南東部の連続耕作痕も疑似畦畔を掘り込む後世のものである。

年代：浅間B軽石が降下した天仁元年(1108)以降の比較的近接した時期と考えられるが、詳細な年代は不明である。

所見：富岡清水遺跡において、浅間B軽石降下以降の疑似畦畔として確認した唯一の地区である。南北方向の畦の軸線がN-1～3°-Eで真北に近いことから、条里地割の可能性が高いものと考えられるが、一町(109m)を単位とする環境の畦に相当するような太畦は確認できなかった。

第47表 水田区画面積一覧表

番号	短軸(南北)m	長軸(東西)m	面積(㎡)	備考
1	5.0 (推)	11.2 (推)	56.0 (推)	北辺不明瞭
2	7.8	11.7	91.3	
3	7.1	12.0 (推)	85.2 (推)	西辺不明瞭
4	4.7	12.7	59.7	
5	4.3	12.2	52.5	
6	4.1	11.8	48.4	区画不整形
7	4.7	11.5 (推)	54.1 (推)	
8	4.5	5.8	25.6	区画不整形

この擬似畦畔を検出した基本土層IV層下位のV層は、浅間B軽石が遺存していればおそらくその直下層に相当する層位であるが、珪酸体分析の結果9,000個/gのイネのプラント・オパールを検出した水田耕作土である(「自然科学分析」130頁参照)。したがって、基本土層IV層下面で検出したこの擬似畦畔はV層水田に継続し、その区画を踏襲した可能性が高いものと考えられる。

なお、遺構として畦畔を確認できたのはこのIV層下面のみだが、下位のV層、VI層、VII層は水田耕作土の可能性が高く、この範囲は少なくとも古代からの継続的な水田耕作域と考えられる(「富岡清水遺跡周辺の古代水田と用水系統について」189頁参照)。

2. 畠

古代の畠は、E区に畝方向の異なる2区画が検出されただけである。

E区1号畠 (第74図、PL.19)

検出: E区の北側で浅間B軽石(As-B)の一次堆積層下に、南北約8m、東西約23m、面積約180㎡の範囲に検出。火山灰に直接被覆された旧地表面としての畠と判断した。

地形: E区中央以南の住居を検出した台地部より一段低い位置にあり、その比高差は1.8mある。南から北へ緩やかに傾斜するほぼ平坦面上に立地する。

畝の走行と区画: 調査範囲が狭いために区画の詳細は不明だが、地形の段差を起点に、傾斜に直行して、北北西方向にほぼ等間隔な畝・畝間をもつ。南北軸の方向はN-23°-W。畝間の芯々間隔は概ね70～80cm。

重複: 畝方向の異なる区画のE区2号畠が西隣に接する。また、南側の段差下に本畠の南端と接するようにE区3号溝が走向するが、3号溝はAs-B混土を理土としていることから、本畠より新しい溝である。

年代: As-Bの一次堆積層下での検出であることから、軽石が降下した天仁元年(1108)と考えられる。

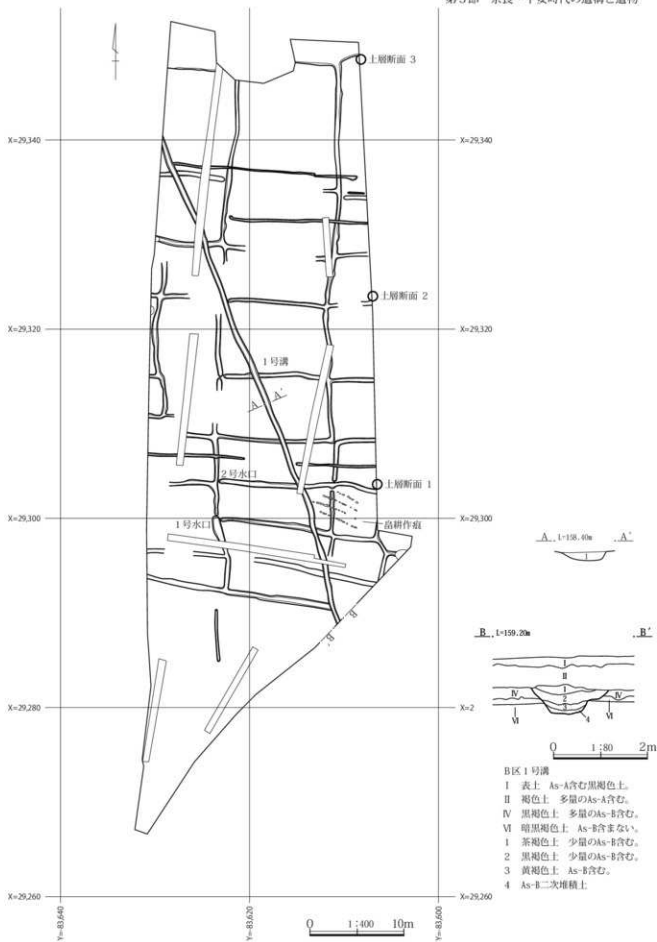
E区2号畠 (第74図、PL.19)

検出: E区1号畠の西隣に、浅間B軽石(As-B)の一次堆積層下から検出したが、その面積は僅かである。やはり、火山灰に直接被覆された旧地表面としての畠と判断した。

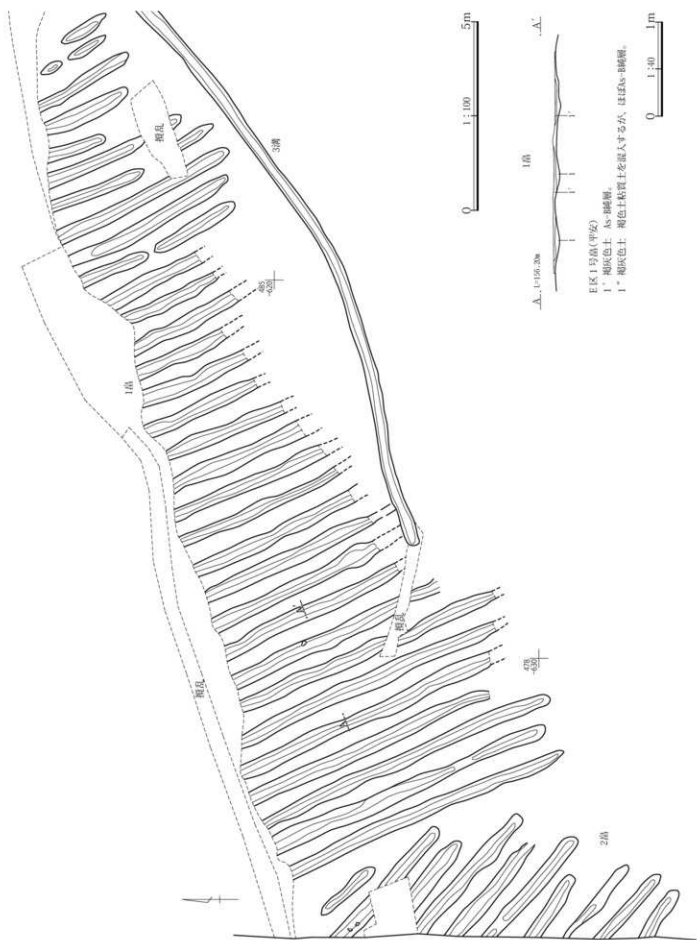
地形: 住居を検出した台地部より一段低い位置にあり、南から北へ緩やかに傾斜するほぼ平坦面上に立地する。

畝の走行と区画: 調査範囲が狭いために区画の詳細は不明だが、地形の段差を起点に、傾斜に直行して、1号畠の畝方向とは異なる北西方向にほぼ等間隔な畝・畝間をもつ。南北軸の方向はN-45°-W。畝間の芯々間隔は1号畠とほぼ同様。

年代: 1号畠と同一面で、共にAs-Bの一次堆積層下での検出であることから、軽石が降下した天仁元年(1108)に共存した一連の畠と考えられる。



第73図 B区1号溝



第74図 E区1・2号冪

第4節 中世以降の遺構と遺物

本調査で検出された中世以降の遺構は、A区からE区までの調査地全体に広がっている。中世以降の土坑や溝はB・C・E区で検出された。特に、近世以降の遺構として、A区での大型建物や道状遺構は特徴的で、さらに一番掘り用水の一部も検出されている。一方、E区では天明三年の浅間山噴火の降下火山灰である浅間A軽石(As-A)の一次堆積層下に畚を検出した。しかし、これらの遺構に伴う遺物は極めて少ない。

1 建物

A区の1面調査時において近世以降の大型建物を2棟検出したが、残存状況はあまり良くない。2棟は重複し、共に道状遺構の北側に面する建物である。

A区1号建物 (第76・78図、PL.3)

概要: A区の南側を、凡そ東西に直進するA区1号道状遺構(A区2・3号溝とA区4・5号溝の間)の北側に面するように本建物を検出した。建物は礎石の検出がなく、柱部が方形ないし円形の浅い掘り込みである。埋土中にAs-Aを多く含むことから遺構確認は容易であったが、攪乱や確認面が低くなっていた箇所は遺構の把握ができなかった。その為、建物の北側が不明確になってしまった。また、本建物の西辺に面するようにA区7・8号溝が検出され、細い道状遺構の様相を呈している。さらに、東辺側でも数本の溝を検出したが、溝底面の状況や道状遺構にかかること等から時期の異なる畚と考えた。

位置: A区中央の東寄りに位置し、A区2号建物と重複し、A区1号道状遺構の北側に面する。

(座標)X軸=29,246～29,260 Y軸=83,606～83,615

重複: 南東部でA区2号建物の東辺と僅かに重複する。同一建物の可能性も考えたが、柱穴の位置のずれ、本建物の西辺脇に検出されたA区7・8号溝が本建物の西辺を規制する細い道状遺構である可能性が高いことから、これを跨ぐ2号建物とは異なる個別の建物とした。

形状・規模: 南北に長い長方形を呈すると考えられるが、北側での構造は不明。1号道状遺構に面する南辺で

は柱間5間(8.25m)、西辺では柱間4間(5.9m)、東辺では柱間5間(7.2m)、建物中央部の南北方向は9間分(13.6m)を確認した。

南北方向: N-10°-E

柱穴: 確認できたのは計40本分の柱穴である。一部には複数の柱穴をみるが、穴の掘り換えと考えられる。各柱間の距離は、ほぼ均等に東西方向の間が1.7～1.8m、南北方向の間が1.5m前後を測る。各柱穴の規模は、径ないし1辺が35～50cm前後、深さは深いもので15cmを測る円形ないし方形。埋土はAs-Aを多く含む暗褐色土で、硬く締まっていた。

所見: 東辺では本建物と柱位置の異なる柱穴列(A区1号柵列)が接するようにあり、本建物構造とは関わらないが、建物の東側を面する柵列と考えられる。出土遺物がなく、時期の特定は難しいが、柱穴埋土にAs-Aを多く含むことから天明三年以降と考えられる。なお、建物構造に関わる礎石は検出されていないが、建物の大きさからしても、また天明三年以降の建物であることから、礎石建ち建物であった可能性は否めない。

A区2号建物 (第77図、PL.3)

概要: A区1号建物と同様に、A区の南側を東西に直進するA区1号道状遺構の北側に面するように本建物を検出した。礎石はなく、柱部が方形ないし円形の浅い掘り込みである。攪乱により建物の全体は把握できなかった。その為、建物の西側は不明確である。

位置: A区中央の西寄りに位置し、A区1号建物と重複し、A区1号道状遺構の北側に面する。

(座標)X軸=29,248～29,252 Y軸=83,614～83,626

重複: 本建物の東辺が、A区1号建物の西辺と僅かに重複する。柱穴の位置のずれ等から、個別の建物のとしたが、その新旧は不明。

形状・規模: 東西に長い長方形を呈するが、西側での構造は不明。1号道状遺構に面する南辺では柱間7間(11.8m)、東辺では柱間2間(3.1m)、建物中央部の南北方向でも2間(3.1m)を確認した。

東西方向: N-101°-E

柱穴: 確認できたのは計20本分の柱穴である。各柱間の距離は、ほぼ均等に東西方向の間が1.6～1.7m、南北方向の間が1.5～1.6mを測る。各柱穴の規模は、径ないし1辺が35～50cm前後、深さは10cm前後を測る円

形ないし方形。埋土はAs-Aを多く含む暗褐色土で、硬く縮まっていた。

所見：出土遺物がなく、時期の特定は難しいが、柱穴埋土にAs-Aを多く含むことから天明三年以降と考えられる。なお、1号建物と同様に、礎石建ち建物であった可能性は否めない。

2 道状遺構

A区1号道状遺構（第76図、PL.3）

概要：A区の1面調査時において、A区の南側を、凡そ東西に平行して直進するA区2・3号溝とA区4・5号溝を検出した。そのA区4・5号溝の北側に面するようにA区1・2号建物があることから、2・3号溝と4・5号溝が道状遺構の側溝であると考え、A区1号道状遺構とした。なお、本道状遺構の西側で、A区1号溝とした旧一番堰用水と考えられる溝と交差することとなるが、その部分が攪乱を受けていたために確認できなかった。

位置：A区南側に位置し、凡そ東西に直進する。A区1・2号建物の南側に面する。

(座標)X軸=29,242～29,248 Y軸=83,605～83,627

形状・規模：凡そ東西方向に平行して直進するA区2・3号溝とA区4・5号溝からなり、2・3号溝が本道状遺構の南側側溝、4・5号溝が北側側溝となる。路面は確認できていない。検出された距離は23m。道幅は、外側となる2号溝と5号溝の間で2.6m、内側の3号溝と4号溝の間で1.75mを測る。側溝となる2号溝は幅20cm、深さ11cm。3号溝は幅33cm、深さ8cm。4号溝は幅20cm、深さ6cm。5号溝は幅25cm、深さ7cmを測る。各溝の埋土はAs-Aを含む暗褐色土である。

走向方向：N-99°-E

所見：時期の特定は難しいが、側溝の埋土にAs-Aを多く含むことから天明三年以降と考えられる。

なお、1号建物の西片に面したA区6・7号溝についても、本道状遺構よりも狭いが、同様の道状遺構であり同時期と考えられる。

3 土坑

検出された中世以降の土坑は、B区に1基、C区に6基、E区に3基の計10基である。この内、B・C区の7

基の土坑は埋土中にAs-Bを含み、E区の3基の土坑はAs-Aを含む埋土である。円形、方形を呈し、遺物をほとんど出土させていない。

ここでは個別土坑の記載をせずに、中世以降の土坑一覧表(第50表)にまとめた。

4 溝

検出された中世以降の溝は、A区1号溝、B区1号溝、E区1A～1B号溝、E区2～4・6・10号溝の計10条である。この内、埋土中にAs-Bを含む溝に、B区1号溝、E区3号溝がある。また、埋土中にAs-Aを含む溝に、A区1号溝、E区1A～1B・2・4・6・10号溝があり、中世以降および天明三年以降に埋没した溝であると考えられる。特に、A区1号溝の直ぐ北脇には現用水路が流れており、現用水路の前進である可能性が極めて高く、この溝が旧一番堰用水の一部であると考えられる。各調査区における溝は、表51に中世以降の溝一覧としてまとめた。

なお、A区で検出された溝の内、A区8～14号溝については、埋土中にAs-Aを含むことから天明三年以降の畚と考えられる

5 畚

中世以降の畚はE区に検出されただけである。近世以降の畚には、E区で天明三年の浅間山噴火の降下火山灰である浅間A軽石(As-A)の一次堆積層下に、A区では埋土中にAs-Aを含む溝として検出している。

E区3号畚（第82図、PL.19）

検出：E区中央の北寄りに、E区3・6号住居の上面で溝状の畚間を検出した。As-B混土を畚間の埋土とした畚で、畚間は溝状に4条確認できたのみであり、全体は不明。

地形：E区中央付近で検出された住居と同じ台地上に立地する。

畚の走行：残存状態が悪いため、区画の詳細は不明。地形の等高線に沿って、南西から北東方向に溝状の畚間が延びる。畚間の方向はN-60°-E。

重複：E区3・6号住居の上面に検出したことから、本畚の方が新しい。

年代：As-B混土の埋土であることから、中世以降の冨と考えられる。

E区4号冨 (第82図、PL.19)

検出：E区中央の北寄りの西壁際でAs-Aの一次堆積層下に検出した。検出範囲は狭く、その全体は不明。火山灰に直接被覆された(上位の軽石は二次堆積と考えられる)、旧地表面の冨と判断した。

地形：E区中央以南の住居を検出した台地部より一段低い位置にあるが、先述のE区1・2号冨検出面よりは一段高い幅狭な平坦面上に立地する。

畝の走行：調査範囲が狭いため、区画の詳細は不明。地形の段差を起点に、傾斜に沿って、西方向にほぼ等間隔な畝・畝間をもつ。東西軸の方向はN-87°-W。畝間の芯々間隔は、概ね55cm前後を測る。

年代：As-Aの一次堆積層下での検出であることから、軽石が降下した天明三年と考えられる。

6 遺構外出土遺物

A～F区各調査区からは、多くはないものの、遺構に伴わない中世以降の遺物が出土している。遺物には陶磁器類(中世の陶磁器類2点、近世の国産陶磁25点、国産施釉陶器32点、国産焼締陶器2点、在地系焙烙・鍋3点、近現代の陶磁器類20点)をはじめとし、石製品、金属製品があり、古銭も含まれる。これらの遺物の内、図示したものは第83図に示した12点であり、全てE区からの出土である。

以下、種別ごとに記載する。

1. 陶磁器類 (第83図、第49表)

1は京・信楽系陶器の碗、2は三田青磁、3は肥前磁器の碗で外面に雪輪梅樹文、高台内に不明な銘があり、底部内面に釘描き、4は瀬戸・美濃陶器の丸碗、5は肥前磁器の皿、6は肥前磁器の青磁香炉、7は美濃陶器の灯火皿である。

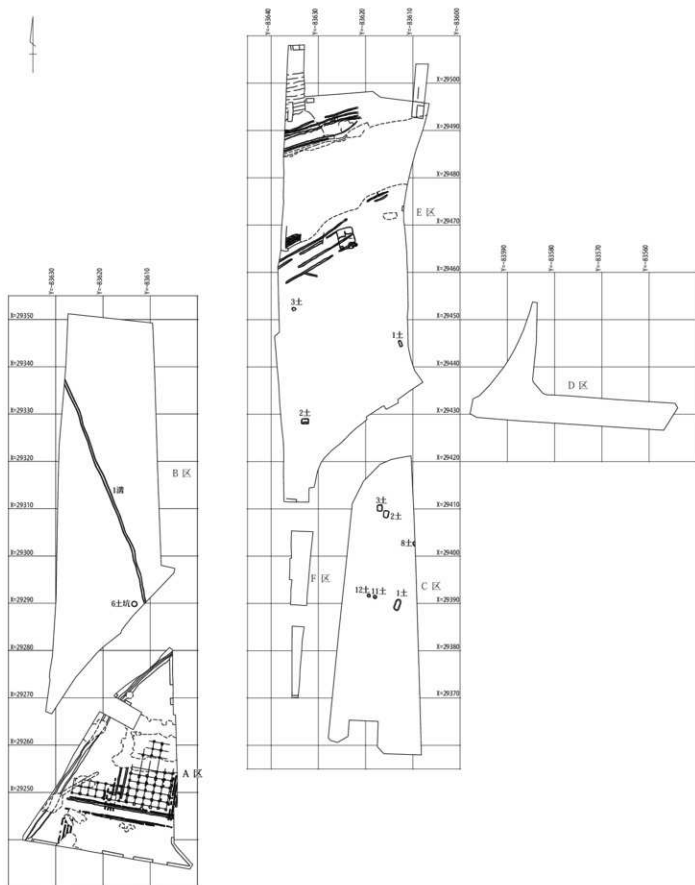
2. 石製品 (第83図、第49表)

8の1点のみで、砥石である。

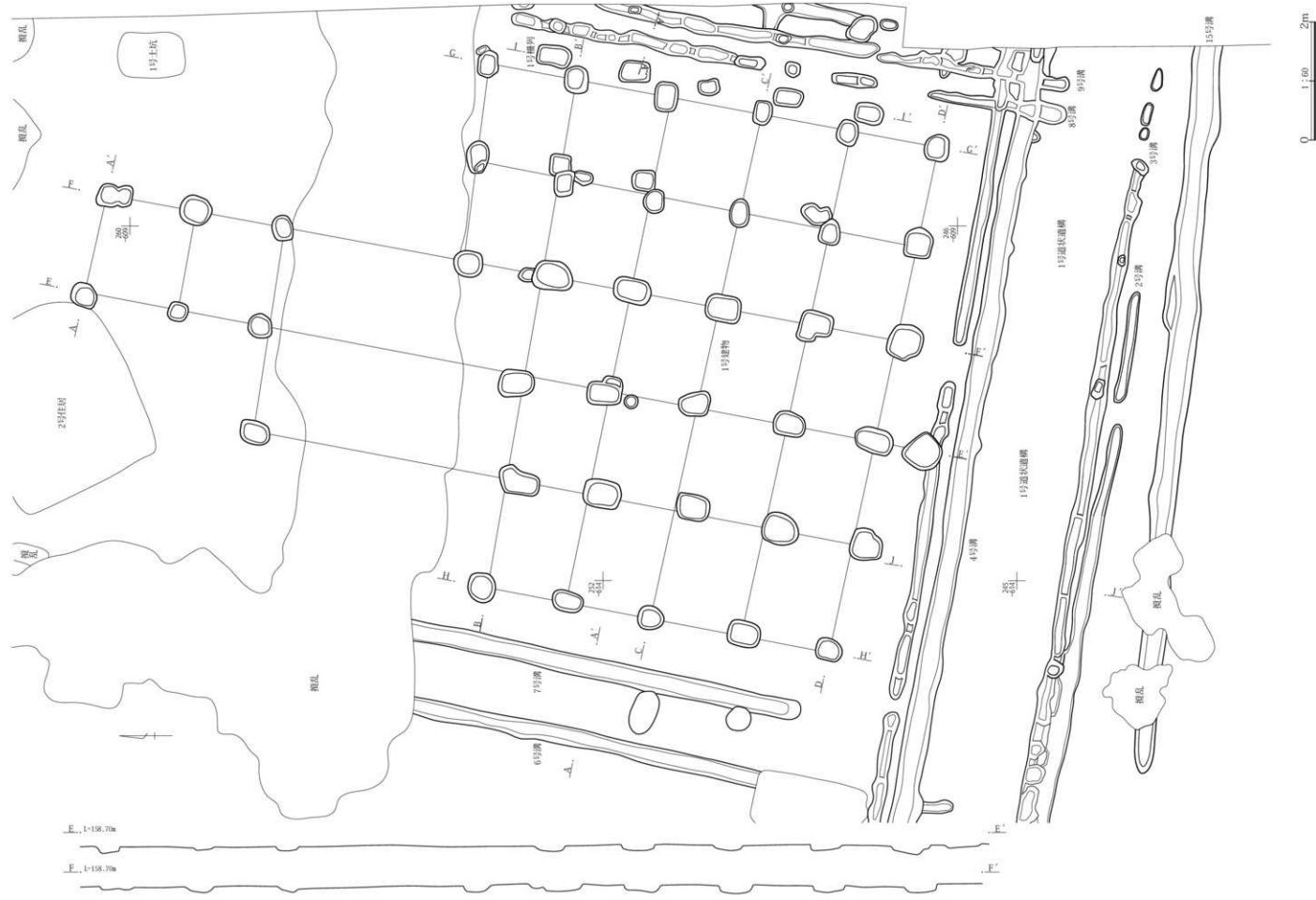
3. 金属製品 (第83図、第49表)

9～11は煙管で、9・10は雁首で10の肩は明瞭な段

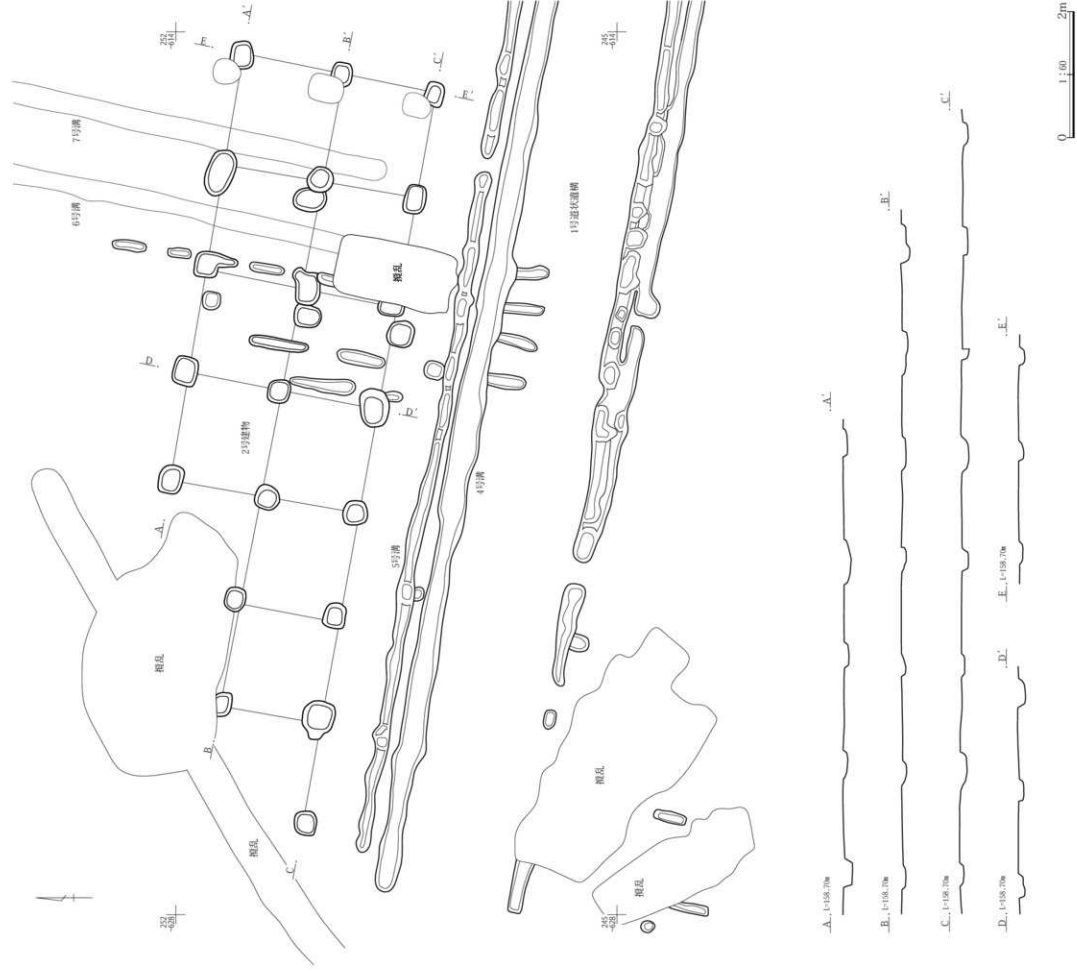
をなし、肩と小口間は断面八角形を呈する。11は吸い口である。12は銅銭で、「寛永通寶」。



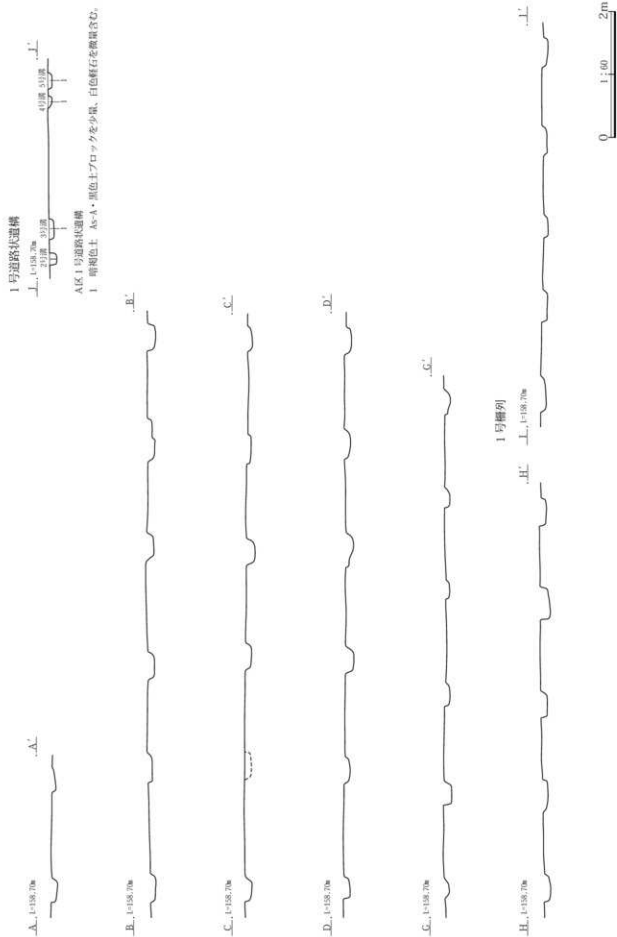
第75図 中・近世遺構配置図



第76号 A区1号建物・1号道坑遺構

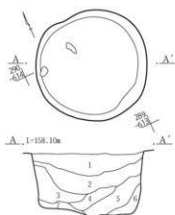


第77图 A区2号建物平面图及断面图



第78図 A区1号建物断面図

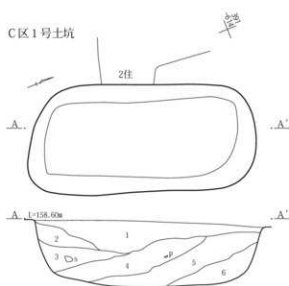
B区6号土坑



B区6号土坑

- 1 黒褐色土 As-B多量、ロームブロック少量含む。
- 2 黒褐色土 As-B少量、炭化粒少量含む。
- 3 黒褐色土 As-B少量、ローム小ブロック微量含む。
- 4 黒色土 灰、炭化粒少量含む。
- 5 黒褐色土 ローム小ブロック少量含む。
- 6 黒褐色土 ロームブロック含む。
- 7 暗灰色土 灰、焼土ブロック少量含む。

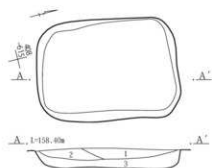
C区1号土坑



C区1号土坑

- 1 黒褐色土 As-B、黒褐色土小ブロック中量、鈍い黄褐色土小ブロック少量、焼土粒、炭化粒を微量含む。
- 2 黒褐色土 黒褐色土小ブロック中量、As-B、鈍い黄褐色土小ブロック少量、焼土粒を微量含む。
- 3 暗褐色土 黒褐色土小ブロック少量、As-B、焼土粒を微量含む。
- 4 暗褐色土 黒褐色土小ブロック多量、焼土粒少量、As-Bを微量含む。
- 5 暗褐色土 As-B、黒褐色土小ブロック、鈍い黄褐色土小ブロック少量、焼土粒を微量含む。
- 6 暗褐色土 黒褐色土小ブロック中量、As-B、鈍い黄褐色土小ブロック少量、焼土粒を微量含む。

C区2号土坑



C区2号土坑

- 1 暗灰黄色土 As-B中量、ローム小ブロック、焼土粒を微量含む。
- 2 暗灰黄色土 As-B中量、ローム小ブロック少量、炭化粒を微量含む。
- 3 暗灰黄色土 As-B中量、ローム小ブロックを微量含む。

C区3号土坑



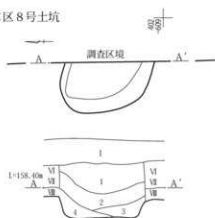
C区3号土坑

- 1 暗灰黄色土 As-B中量、黒褐色土小ブロック少量、焼土粒を微量含む。
- 2 暗灰黄色土 As-B、黒褐色土小ブロック中量、焼土粒を微量含む。粘性強い。
- 3 暗灰黄色土 As-B中量、黒褐色土小ブロック少量含む。

0 1:40 1m

第79図 B区6号・C区1～3号土坑

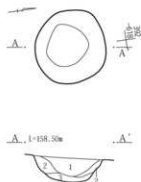
C区8号土坑



C区8号土坑

- VI 黒褐色土 白色軽石を微量含む。粘性強い。
 VII 暗灰黄色土 白色軽石を微量含む。粘性強い。
 VIII 暗灰色土 白色軽石、黄褐色軽石を微量含む。粘性強い。
 1 暗灰黄色土 As-B中量、黒褐色土小ブロック少量含む。
 2 暗灰黄色土 As-B中量、黒褐色土小ブロック少量、炭化粒糞量含む。
 3 暗灰黄色土 As-B少量含む。
 4 暗灰黄色土 As-B、黒褐色土小ブロック少量含む。

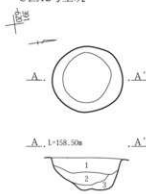
C区11号土坑



C区11号土坑

- 1 暗灰黄色土 As-B中量含む。
 2 暗灰黄色土 As-B中量・黒褐色土小ブロック少量含む。
 3 黒褐色土 As-B少量含む。

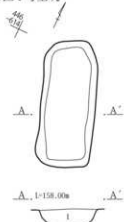
C区12号土坑



C区12号土坑

- 1 暗灰黄色土 As-B中量含む。
 2 暗灰黄色土 As-B中量・黒褐色土小ブロック少量含む。
 3 黒褐色土 As-B少量含む。

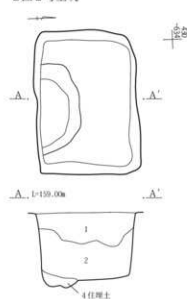
E区1号土坑



E区1号土坑

- 1 にぶい黄褐色土 As-A混土。

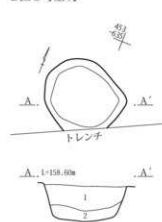
E区2号土坑



E区2号土坑

- 1 褐灰色土 As-A、黄褐色土塊、黒色土塊、赤色土塊が混在。
 2 黒褐色土 黄褐色土塊、黒色土塊、赤色土塊が混在。

E区3号土坑

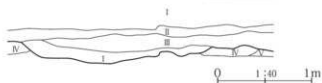


E区3号土坑

- 1 にぶい黄褐色土 As-A混土。褐色土塊が混在。
 2 灰褐色土 白色軽石、褐色土塊を少量含む。

第3章 富岡清水遺跡の調査

A, 1-159.00m



A区1号溝(東壁3)

I 碎石

II 灰褐色土 As-A多量、ロームブロックを少量含む。しまりあり、粘性やや弱い。(B・C区第2層に対応)

III 暗褐色土 As-A、白色軽石少量、黄褐色軽石を微量含む。しまりあり、粘性やや弱い。

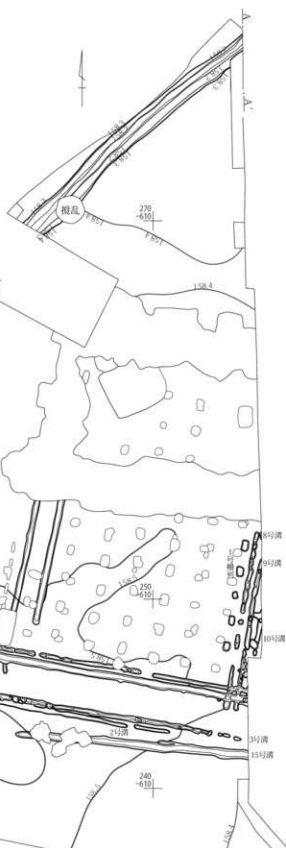
IV 黒褐色土 白色軽石少量、黄褐色軽石を微量含む。しまりあり、粘性あり。(B・C区第10層に対応)

V 鈍い黄色土 As-YPを少量含む。しまりあり、粘性やや強い。(B・C区第13-a層に対応)

I号溝 暗褐色土 白色軽石少量、黄褐色軽石、ロームブロックを微量含む。しまりやや強い、粘性あり。



0 1:200 5m

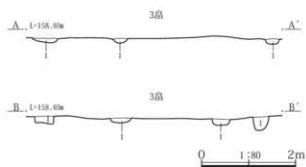
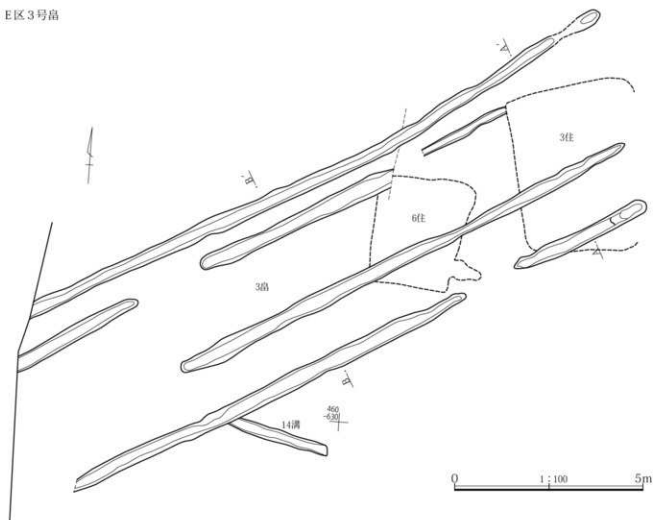


第81図 A区1号溝、出土遺物

第48表 A区1号溝出土遺物観察表

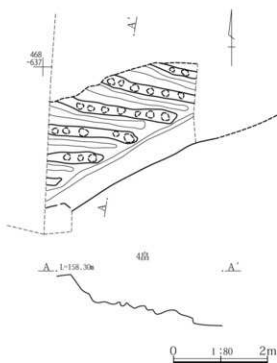
陶磁器類										
神戶考古 図説番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考	
第81図 PL.-	1	瀬戸陶器 すり鉢	埋土 口縁部片	-	-	-	淡橙	口縁部は屈曲して外反、口縁部上面の突出部は摩滅して平坦となる。口縁部外面下端は細い敲打による凸凹が連続する。内外面筋施。	17世紀前半～ 中頃。	

E区3号畠



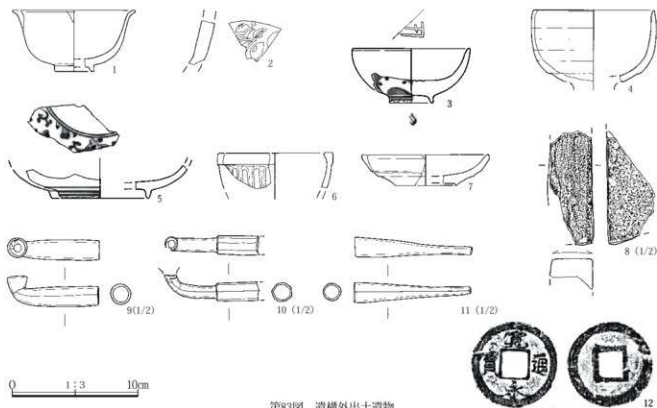
E区3号畑(天明以降～現代)
1 褐色土 As-A段上。

E区4号畠



第82図 E区3・4号畠

第3章 富岡清水遺跡の調査



第83図 遺構外出土遺物

第49表 中世以降遺構外出土遺物観察表

陶磁器類		No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考
第83図 PL-	1	京・信楽系陶器 丸碗	E区 1/5	(9.6)	(3.6)	-	4.8	灰白	口縁部は外反。削り出し高台。内面から高台脇に二重貫入の入る灰輪。	19世紀か。
第83図 PL-	2	三田青磁 細片	E区	-	-	-	-	灰白	やや劣成不整で暗緑灰色の発色。型作り成形で輪に重ねが認められる。胎土は磁土でややガラス質。	19世紀か。
第83図 PL-	3	肥前磁器 碗	E区。口縁 一部底部 2/3	-	3.4	-	4.3	灰白	外面に雪輪梅樹文。高台内不明瞭。底部内面に「四十」の釘掻き。	19世紀前半～中頃。
第83図 PL-	4	瀬戸・美濃陶器 丸碗	E区 1/4	(9.4)	-	-	-	灰白	内面から高台脇に挿軸。	江戸時代。
第83図 PL-	5	肥前磁器 皿	E区 1/4	-	(10.0)	-	-	白	輪に貫入が入る。高台内1重圈線。	江戸時代。
第83図 PL-	6	肥前磁器 青磁香炉	E区 1/6	(9.0)	-	-	-	白	外面に直線文を陶刻。	江戸時代。
第83図 PL-	7	美濃陶器 灯火皿	E区 1/5	(10.0)	(4.8)	-	2.4	淡黄	内面から体部外面中位鉋軸。高台は髹漆筒状。	17世紀後半～18世紀前半。
石製品		No.	器種 形態・素材	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第83図 PL-	8	砥石 切り砥石	E区2号品	(6.0)	2.4	2.5	22.2	-	背面側のみ覆り輪染痕が残る。右側面は平坦だが、磨き整形されておらず、分別しただけであるように見える。	珪化層灰質砂岩
金属製品		No.	種類 器種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	特徴・状態	備考
第83図 PL-	9	銅製品 煙管首	E区 完形	4.9	10.4	16.6	-	-	磨返しはなく、火皿の立ち上がりも直線的。	-
第83図 PL-	10	銅製品 煙管首	E区 両端欠	-	10.5	-	-	-	磨返しは湾曲し、肩は明確な段をなす。肩と小口間は断面八角形を呈する。火皿挿軸部が廻る可能性が高い。	-
第83図 PL-	11	銅製品 煙管吸口	A区 完形	6.2	11.1	4.1	-	-	肩はないが、口付き部との直径差は大きい。	-
第83図 PL-	12	銅銭 寛永通寶	E区 完形	2.29	0.12～ 0.13	-	-	2.40	左側は湾曲し、縁にヒビが入る。新貨水。	-

第50表 中世以降土坑一覽表

調査区	番号	位置		平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係	時期/備考
		X座標	Y座標		長軸(径)	短軸	深さ			
B	6	X=29,290	Y=83,613	円形	1.18	-	0.08	N-		
C	1	X=29,390	Y=83,613	長方形	2.42	1.15	0.09	N-20°-E		
C	2	X=29,409	Y=83,615	長方形	1.48	1.09	0.22	N-10°-E	3号土坑	
C	3	X=29,410	Y=83,618	長方形	1.33	1.08	0.21	N-0°	2号土坑	
C	8	X=29,403	Y=83,610	-	0.95	(0.55)	0.20	N-		
C	11	X=29,391	Y=83,618	円形	0.78	-	0.27	N-		
C	12	X=29,392	Y=83,619	円形	0.75	-	0.35	N-		
E	1	X=29,445	Y=83,613	長方形	1.35	0.58	0.18	N-22°-W		
E	2	X=29,429	Y=83,633	長方形	1.56	1.10	0.72	N-90°-E		
E	3	X=29,452	Y=83,635	楕円形	0.85	0.75	0.38	N-98°-E		

第51表 中世以降溝一覽表

調査区	番号	位置		規模(m)				走向方向	重複遺構/交差溝	所属時期/備考
		X座標	Y座標	長さ	上面幅	底面幅	深さ			
A	1	X=29,239 ~ 29,279	Y=83,605 ~ 83,635	51.6	2.0	1.5	0.19	南西→北東		
B	1	X=29,289 ~ 29,340	Y=83,610 ~ 83,629	55.2	0.55	0.37	0.08	南→北		
E	1	X=29,488 ~ 29,492	Y=83,621 ~ 83,637	16.44	0.29	0.42	0.05	南西→北東	1 B号溝	
E	1	X=29,489 ~ 29,493	Y=83,621 ~ 83,637	15.63	0.46	0.15	0.02	南西→北東	1 C号溝	
E	1	X=29,490 ~ 29,494	Y=83,622 ~ 83,637	16.36	0.40	0.25	0.05	南西→北東	1 B号溝	
E	2	X=29,485 ~ 29,491	Y=83,621 ~ 83,639	16.83	0.52	0.22	0.13	南西→北東		
E	3	X=29,481 ~ 29,491	Y=83,609 ~ 83,626	19.9	0.46	0.20	0.24	西→北東		
E	4	X=29,433 ~ 29,442	Y=83,610 ~ 83,626	23.0	0.47	0.25	0.17	北東→南西	1号住居、6号溝	
E	6	X=29,434 ~ 29,442	Y=83,610 ~ 83,627	20.0	0.47	0.23	0.24	南西→北東		
E	10	X=29,442 ~ 29,451	Y=83,615 ~ 83,631	18.46	0.46	0.30	0.19	南西→北東	12号溝	

第5節 自然科学分析

本遺跡の調査の最初となった平成19年度調査において、層位や年代が不明な土層を対象に地質調査およびテフラ分析が必要となっていた。また、B区で検出された水田、C区7号用水路脇、D区基本土層の各土層断面を対象に、植物珪酸体(プラント・オパール)分析による稲作との関連を検証するため、これらの自然科学分析を株式会社火山灰考古学研究所に委託して実施した。

今回の分析の結果、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定から、下位より浅間大窪沢テフラ群(As-0k Group, 約1.6～1.7万年前)に由来する火山ガラス、浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 約1.3～1.4万年前)、浅間C軽石(As-C, 4世紀初頭)起源と思われる火山ガラス、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)、浅間A軽石(As-A, 1783年)起源の軽石などが検出された。また、C区7号用水路の層位については、As-Cより上位でAs-Bより下位にあると推定することができた。

植物珪酸体(プラント・オパール)分析の結果では、B区基本土層セクション2のⅧ～Ⅳ層、C区7号用水路脇土層断面のⅥ層、およびD区基本土層のAs-B下位から、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断することができた。また、C区7号用水路脇土層断面のⅨ～Ⅶ層などでもイネが検出され、稲作が行われていた可能性が認められた。

以下、分析の報告を掲載する。

I 富岡清水遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

群馬県西毛地域に分布する後期更新世以降に形成された地層や土壌の中には、浅間、榛名、八ヶ岳、御岳など北関東地方や中部地方の火山、さらには中国地方や九州地方などの火山に由来するテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が多く認められる。その中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構や遺物包含層の層位や年代を知ることができるようになっている。

そこで、層位や年代が不明な土層が検出された富岡市

富岡清水遺跡においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、テフラ検出分析や屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、土層の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、14トレンチ、基本土層セクション2、7号用水路脇土層断面、そしてB区2面2号住居址覆土断面の4地点である。

2. 土層の層序

(1) 14トレンチ

河岸段丘面上でも相対的に高い場所に位置する14トレンチでは、河岸段丘礫層(礫層の最大径133mm)の上位に、下位より褐色がかった黄色土(層厚38cm)、成層したテフラ層(層厚25cm)、黄色軽石を多く含む黄灰色土(層厚11cm)、軽石の最大径8mm)が認められる(84図)。その上位には、不整合関係で腐植質土壌が形成されている。その土層は、下位より黄色細粒軽石を含む暗灰色土(層厚12cm)、軽石の最大径2mm、X層)、褐色がかった灰色軽石を多く含む暗灰褐色粘質土(層厚8cm、軽石の最大径6mm、IV層)、暗灰褐色粘質土(層厚15cm、III層)、灰白色軽石に富む灰褐色土(層厚34cm、軽石の最大径13mm、II層)、暗灰褐色表土(層厚14cm、I層)が認められる。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より粗粒の黄色軽石層(層厚16cm、軽石の最大径33mm、石質岩片の最大径13mm)、細粒の黄色軽石層(層厚9cm、軽石の最大径14mm、石質岩片の最大径2mm)からなる。このテフラ層は、層相から約1.3～1.4万年前^{*)}に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP、新井、1962、町田・新井、1992)に同定される。また、IV層中に多く含まれる褐色がかった灰色軽石については、その層位や岩相から、1108(天仁元年)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B、荒牧、1968、新井、1979)に由来すると考えられる。さらに、II層中に多く含まれている灰白色軽石については、その層位や岩相から1783(天明3年)に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A、荒牧、1968、新井、1979)に同定される。

(2) 基本土層セクション2

河岸段丘面上の埋没谷部に位置する基本土層セクション2では、礫層(礫の最大径148mm)の上位に、下位より

亜円礫混じり黄灰色粘質土(層厚16cm, 礫の最大径21mm)、わずかに灰色がかかった黄色粘質土(層厚26cm)、黄灰色粘質土(層厚18cm)、灰褐色砂質土(層厚13cm)、砂混じりでわずかに黄色がかかった灰褐色土(層厚15cm)、黄色粗粒火山灰混じり暗灰褐色土(層厚6cm)、黄褐色風化軽石混じり暗灰褐色土(層厚10cm, 軽石の最大径3mm)、黄色や灰色の粗粒火山灰混じり暗灰褐色粘質土(層厚19cm)、灰色粗粒火山灰混じりで色調やや黒い暗灰褐色粘質土(層厚9cm)、やや色調が暗く鉄分を多く含む灰褐色土(層厚16cm, VIII層)、やや色調が暗い灰褐色粘質土(層厚18cm, VII層)、褐色がかかった灰色軽石に富む灰褐色土(層厚13cm, 軽石の最大径18mm, IV層)、褐色がかかった灰色軽石を含む灰褐色土(層厚49cm, 軽石の最大径4mm, III層)、灰白色軽石に富む灰色土(層厚10cm, 軽石の最大径11mm, II層)、灰白色軽石を多く含む色調がやや暗い灰色土(層厚13cm, I層)が認められる(85図)。

本地点においても、IV層中に多く含まれる褐色がかかった灰色軽石については、その層位や岩相からAs-Biに由来すると考えられる。また、II層やI層に多く含まれている灰白色軽石については、その層位や岩相からAs-Aと考えられる。

(3) 7号用水路脇土層断面

7号用水路脇土層断面では、段丘礫層(礫の最大径124mm, XVI層)の上位に、下位より灰色がかかった黄色土(層厚8cm, XVI層)、灰色がかかった黄色土(層厚19cm, XV層)、礫を含み褐色がかかった明るい黄色粘質土(層厚24cm, 礫の最大径29mm)、風化した灰色粗粒火山灰層(層厚18cm, XII層)、黄灰色土(層厚5cm, XI層)、灰褐色土(層厚19cm, XI層)、黒灰褐色土(層厚44cm, X層)、わずかに色調が明るい黒灰褐色土(層厚17cm, IX層)が認められる(86図)。

その上位に7号用水路が造られており、その覆土は、下位より灰色砂層(層厚9cm)、黒褐色ブロック混じて黄色がかかった灰色砂質シルト層(層厚12cm, 以上2層)、黒褐色土(層厚16cm, I層)からなる。その上位には、さらに下位より灰褐色土(層厚11cm, VIII層)、炭化物混じて色調がやや暗い灰褐色土(層厚21cm, VII層)、暗灰褐色土(層厚8cm, VI層)、灰色軽石混じり灰褐色土(層厚7cm, 軽石の最大径12mm, IV層)、灰白色軽石に富む灰褐色土(層厚21cm, 軽石の最大径11mm, I層)が認められる。

これらのうち、風化した灰色粗粒火山灰層(XIII層)については、その層位や層相からAs-YPと考えられる。またI層中の灰白色軽石については、その層位や岩相からAs-Aと考えられる。

(4) B区2面2号住居址覆土断面

B区2面2号住居址覆土断面では、成層したテフラ層が認められた。このテフラ層は、下位より黄色細粒軽石混じり黄色粗粒火山灰層(層厚0.8cm, 軽石の最大径2mm)、暗灰色粗粒火山灰層(層厚0.2cm)、褐色砂質粗粒火山灰層(層厚0.2cm)、褐色粗粒軽石層(層厚3cm, 軽石の最大径22mm)からなる。このテフラ層は、層相からAs-Bの基底部(IV層下部)に相当すると考えられる。

2. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

地質調査の際に採取された土壌およびテフラ試料のうち、14トレンチの4点(T5～T2)および7号用水路脇土層断面の1点(試料T23)の合計5点を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表52に示す。14トレンチでは、いずれの試料からも火山ガラスが検出できた。火山ガラスは白色や透明の軽石型や透明で塊状の中間型のものである。試料の中では、試料T3により多くの火山ガラスが含まれている。一方、7号用水路脇土層断面の試料T23には、灰白色、白色、透明の軽石型ガラスのほか、透明で塊状の中間型ガラスが少量含まれている。

3. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

テフラ検出分析対象試料のうち、14トレンチの試料T3に含まれる火山ガラスについて、温度変化型屈折率測定装置(京都フィクション・トラック社製RIMS2000)を使

用して、火山ガラスの屈折率測定を行った。なお、塊状の中間型ガラスについては、後期更新世の浅間火山起源のテフラの中でよく認められることから、それ以外の軽石型ガラスを手選して、測定対象とした。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表53に示す。火山ガラス10粒子の屈折率(n)は、1.501–1.503である。

4. 考察

14トレンチの試料T3に含まれる火山ガラスについては、層位や形態や色調さらに火山ガラスの屈折率を総合すると、浅間大窪沢第1軽石(As-0k 1, 約1.7万年前^{*}、中沢ほか, 1984, 早田, 1996)および浅間大窪沢第2軽石(As-0k 2, 約1.6万年前^{*}、中沢ほか, 1984, 早田, 1996)からなる、浅間大窪沢テフラ群(As-0kGroup)と考えられる。両者を識別するような明確な違いはこれまでに知られていないことから、今後の調査研究が必要となっている。なお、14トレンチにおいては、試料T3により多くの火山ガラスが認められたものの、さほど顕著な濃集層準とは言いがたい。また、同層準は最終氷期最寒冷期にほぼ相当しており、テフラ粒子も本来の降灰層準からかなり上下にかなり拡散している可能性もある。したがって、ここでは、試料T5からT2にかけては、As-0k Group降灰後に形成された可能性が高い、ということにとどめておきたい。

一方、7号水路路断層面の試料T23に含まれる軽石型火山ガラスのうち、灰白色軽石型ガラスは発泡が比較的良く、4世紀初頭に浅間火山から噴出したと推定されている浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 友廣, 1988, 若狭, 2000)に由来すると思われる。火山ガラスの屈折率測定などによる同定精度の向上が必要ではあるが、As-Bに由来する淡褐色の軽石粒子が認められないことを合わせると、現段階においては、試料1が採取された2層下部およびそれが基底部に堆積している7号水路の層位については、As-Cより上位でAs-Bより下位であると推定されよう。

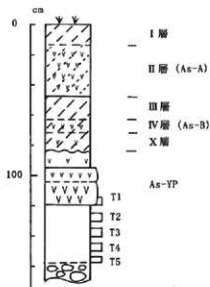
5. まとめ

富岡清水遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より浅間大窪沢テフラ群(As-0k Group, 約1.6–1.7万年前^{*})に由来する火山ガラス、浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 約1.3–1.4万年前^{*})、浅間C軽石(As-C, 4世紀初頭)起源と思われる火山ガラス、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)、浅間A軽石(As-A, 1783年)起源の軽石などを検出することができた。7号水路の層位については、As-Cより上位でAs-Bより下位にあると考えられる。

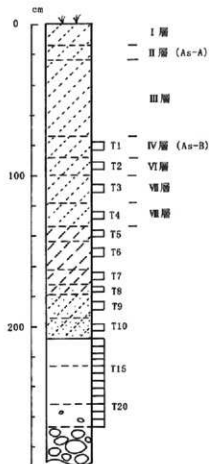
* 1 放射性炭素(14C)年代、ATおよびAs-YPの暦年較正年代については、各々約2.6–2.9万年前と約1.5–1.65万年前と推定されている(町田・新井, 2003)。

文献

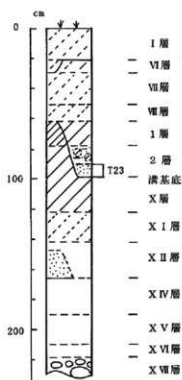
- 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年, 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1–79.
 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層, 考古学ジャーナル, no.53, p.41–52.
 荒牧重雄(1968)「浅間火山の地質」, 地研専報, no.14, 45p.
 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.
 町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス, 東京大学出版会, 336p.
 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦(1984)浅間火山, 異態～前掲期のテフラ層序, 日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69–70.
 坂口 一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器, 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103–119.
 早田 勉(1990)群馬の自然と風土, 群馬県史通史編, 1, p.37–129.
 早田 勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴～とくに御居第1テフラより上位のテフラについて-, 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256–267.
 若狭 徹(2000)群馬の赤土土器が狭むるとき, かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く—古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41–43.
 友廣哲也(1988)古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石, 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p.325–336.



84図 14トレンチの土層柱状図
T数字はテフラ分析の試料番号



85図 基本土層セクション2の土層柱状図
T数字はテフラ分析の試料番号



86図 7号用水路脇土層断面の土層柱状図
T数字はテフラ分析の試料番号

表52 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
14トレンチ	T2	-	-	-	+	pn, md	白, 透明
	T3	-	-	-	++	pn, md	白, 透明
	T4	-	-	-	+	pn, md	白, 透明
	T5	-	-	-	+	pn, md	白, 透明
	7号用水路脇土層断面	T23	-	-	-	+	pn, md

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない, 最大径の単位は, mm, bw: バブル型, md: 中間型, pn: 軽石型.

表53 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス (n)	測定粒子数
14トレンチ	T3	1.501-1.503	10

測定は、温度変化型屈折率測定装置 (RIMS2000) による。

II 富岡清水遺跡における植物珪酸体(プラント・オパール)分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸(SiO₂)が蓄積したもので、植物が枯れた後もガラス質の微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

2. 試料

分析試料は、基本土層セクション2(試料1~5)、7号用水路脇土層断面(試料6~10)、そしてD区基本土層断面のAs-B下位(試料11)の計11点である。前2地点の試料採取層位を分析結果図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重

(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10-5g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的ににとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属(ヨシ)は6.31、ススキ属(ススキ)は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である(杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1、図2に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)、ウシクサ族B(大型)

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、メダケ属型(メダケ属、ホウライチク属)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(プラント・オパール)が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 基本土層セクション2 (87図)

V層の下層(試料5)からIV層(試料1)までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、VII層(試料3)からAs-B起源のテフラ粒子が混在するIV層(試料1)までの各層で密度が7,000～9,000個/gと高い値であり、VIII層(試料4)でも4,900個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

V層の下層(試料5)では、密度が700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2) 7号水路脇土層断面(88図)

I層(試料10:溝内)からVI層(試料6)までの層準について分析を行った。その結果、IX層(試料9)からVI層(試料6)までの各層からイネが検出された。このうち、VI層(試料6)では密度が5,800個/gと高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。IX層(試料9)とVIII層(試料8)では700個/gと低い値で、VII層(試料7)では密度が2,800個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

3) D区基本土層断面(88図)

As-Bより下位の層準から採取された試料(試料11)について分析を行った。その結果、イネが4,900個/gと比較的高い密度で検出された。したがって、同層あるいはその周辺で稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、キビ属型(キビが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)、オヒシバ属(シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分

類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には未検出のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。2セクション谷部のVIII層の下層では、ススキ属型が比較的多量に検出され、ヨシ属、ネザサ節型なども認められた。VIII層からVII層にかけては、イネの増加に伴ってススキ属型は減少している。おもな分類群の推定生産量によると、VIII層より下位ではヨシ属およびススキ属型が優勢であり、VII層より上位層ではイネが優勢である。7号水路脇でも、おおむね同様の結果であるが、ススキ属型は比較的少量である。

以上の結果から、VIII層より下位層の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、VIII層以降の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属、メダケ属(ネザサ節)などが分布していたと考えられ、とくに基本土層セクション2のVIII層の下層ではススキ属が多く見られたと推定される。

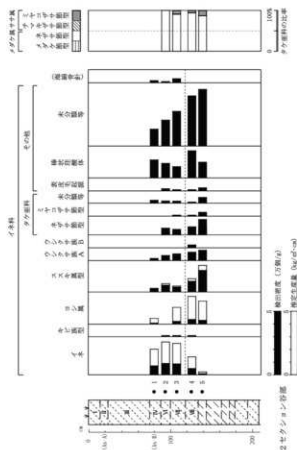
6. まとめ

植物珪酸体(プラント・オパール)分析の結果、基本土層セクション2のVIII～IV層、7号水路脇土層断面のVI層、およびD区基本土層のAs-B下位では、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、7号水路脇土層断面のIX～VII層などでもイネが検出され、稲作が行われていた可能性が認められた。

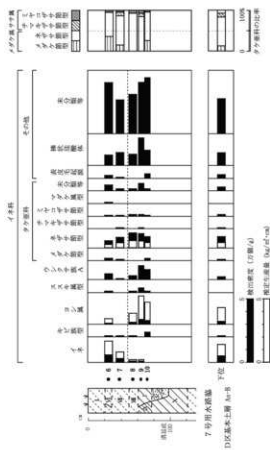
文献

- 杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)、考古学と植物学、同成社、p.189-213。
 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―、考古学と自然科学、9、p.15-29。
 藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田地の探査―、考古学と自然科学、17、p.73-85。

第3章 富岡清水遺跡の調査



87図 富岡清水遺跡における植物珪体分析結果

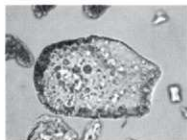
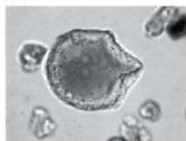
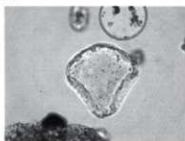
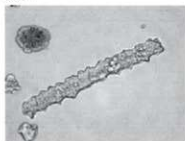


88図 富岡清水遺跡における植物珪体分析結果

表54 富岡清水遺跡における植物珪体分析結果

分類群	学名	地点・試料					7号用水路跡					1号基本土層	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
イネ科	<i>Oryza sativa</i>	70	80	80	49	7	58	28	7	7			49
キジ藨類	<i>Panicum</i> type	7	7	7			7	7				35	7
コシノ	<i>Phragmites</i>	7		21	25	29	7		14	26	29	21	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	21	52	26	84	172	7		7	29	7		
ウツク草属A	<i>Andropogoneae A</i> type	14	22	50	43	79	44	7	29	108	77	21	
ウツク草属B	<i>Andropogoneae B</i> type					21							
タデ科類	<i>Bartholinaceae</i>												
メダケ類型	<i>Phlocladus</i> sect. <i>Nipponcalamus</i>					15	7			14	7	7	
ネギ科類型	<i>Phlocladus</i> sect. <i>Neesae</i>	52	43	43	122	58	80	121	115	91	91		
チマキ草類型	<i>Sea</i> sect. <i>Sea</i> etc.						7		7		7		
ミヤコザ草類型	<i>Sea</i> sect. <i>Crusoid</i>			7	7	29	7	7	14	14	7	14	
ツツク草類型	<i>Phlocladus</i>					7						21	
その他類型	Others	21	15	14	7	43	44	14	14	57	14	28	
その他のイネ科	Others												
表皮毛起源	Husk hair origin	15	7	7	22	22	7				35	28	
糊状珪体	Fluohydrated	139	112	86	211	122	80	190	86	215	118	96	
その他類型	Others	132	260	271	209	144	209	283	207	400	439	273	
海草類	<i>Spartina</i>	14	7	29									
植物珪体総数	Total	402	589	627	948	1009	754	524	607	989	894	642	
おとし生分群の形成生量 (単位: kg/100g) 試料の乾重量を1.0と仮定して算出													
イネ	<i>Oryza sativa</i>	2.04	2.55	2.51	1.41	0.21	1.75	0.84	0.21	0.21		1.44	
コシノ	<i>Phragmites</i>	0.44		1.35	2.21	1.81	0.40	0.90	2.26	1.76		1.32	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.26	0.65	0.44	1.04	2.13	0.09	0.09	0.36	0.39		0.38	
メダケ類型	<i>Phlocladus</i> sect. <i>Nipponcalamus</i>						0.17	0.08		0.14		0.08	
ネギ科類型	<i>Phlocladus</i> sect. <i>Neesae</i>	0.25	0.21	0.30	0.38	0.38	0.28	0.41	0.38	0.55	0.43	0.44	
チマキ草類型	<i>Sea</i> sect. <i>Sea</i> etc.						0.05		0.05		0.05		
ミヤコザ草類型	<i>Sea</i> sect. <i>Crusoid</i>			0.02	0.02	0.09	0.02	0.02	0.04	0.04	0.02	0.04	
タデ科類の比率 (%)													
メダケ類型	<i>Phlocladus</i> sect. <i>Nipponcalamus</i>						36	15			38	13	
ネギ科類型	<i>Phlocladus</i> sect. <i>Neesae</i>	100	91	94	87	87	59	72	93	85	70	71	
チマキ草類型	<i>Sea</i> sect. <i>Sea</i> etc.						9	9	8	8	9	9	
ミヤコザ草類型	<i>Sea</i> sect. <i>Crusoid</i>						9	8	13	5	8	7	

富岡清水遺跡の植物珪酸体(プラント・オパール)

イネ
試料3イネ
試料3イネ
試料5イネ(無面)
試料1キビ族型
試料4ヨシ属
試料1ヨシ属
試料4ススキ属型
試料3ススキ属型
試料3ネザサ節型
試料2棒状珪酸体
試料5海綿骨針
試料3

 50 μ m

第4章 富岡城跡の調査

第1節 遺跡の概要

本調査で検出された遺構には、弥生時代後期の竪穴住居7棟と土坑4基、古墳2基、それと中世城郭である富岡城の南西部および北東部での各郭と堀、土塁の痕跡、築城に関わる土盛り等の状況、さらに中世以降の掘立柱建物1棟といった各時代の様々な遺構がある。出土した遺物は、弥生時代中期から後期の土器・石器、さらに古墳出土の埴輪や須恵器、平安時代の土器、中世以降の陶磁器類等が出土している。

周辺における弥生時代の遺跡をみると、本遺跡が位置する高田川右岸の七日市から曾木に至る地域では、七日市観音前遺跡で弥生時代中期の再葬墓が、七日市六反田遺跡では弥生時代中期の包含層と弥生時代後期の土坑が調査されている。本富岡城跡と高田川を挟んだ南側の富岡清水遺跡でも、遺構は検出されていないが中期の土器・石器が多く出土していることは先述の通りである。さらに、高田川左岸の黒川伽藍堂遺跡で弥生時代後期の竪穴住居が調査されている。

一方、富岡城跡に関しては、城郭研究者であった山崎一氏の『群馬県古城址の研究』（1972）に記載されており、その縄張り図には主郭と東西の各郭および郭間の堀切りが示されている。また、富岡城は、佐貫荘小泉城（現大泉町）を本拠とした富岡氏が小泉城に入城する前に居た城であるという説があるものの、富岡氏の出自には不明な点が多く異なる見解もある。

この富岡城からは、高田川や鎌川を隔てた南に小幡氏の居城であった国峰城が、南東には浅場城や仁井屋城、長根城が一望でき、南西は高田川と鎌川が蛇行して最も近接する一ノ宮（貫前神社）付近までの富岡市街地をほぼ一望することができる。そうした状況からも、中世戦国期におけるこの地域での重要な地点に富岡城が位置していることは推測できる。なお、富岡城の直ぐ西側には、十王山塁跡（城山公園内）があり、その距離的な面からも両者の関連を十分に検討することが重要となっている。

第2節 城郭南西部における縄文～平安時代の遺構と遺物

本調査で検出された縄文時代の遺構はないが、土器が僅かに出土しており、周辺地に遺構の存在が想定される。また、弥生時代の遺構としては、後期の住居3軒、土坑2基が検出され、出土遺物には遺構外も含め中期初頭から後期の土器・石器がある。さらに、古墳1基の周溝が検出されたものの、墳丘は城郭によって削平され、残存していなかった。出土遺物には、周溝より埴輪や土器類がある。平安時代の遺構は検出されていないが、土器が出土している。

1 竪穴住居

検出された竪穴住居は、弥生時代後期の計3軒である。住居が検出された調査区は、1区とした調査地最東部の緩斜面に2軒、4区とした調査地西端の平坦地に1軒である。

以下、各住居ごとに記載する。

1号住居（第90・91図、第55表、PL.34・51）

位置:調査範囲の西端となる城郭外の平坦面に位置し、周辺に同時期の遺構は検出されていない。標高207.79m。
(座標) X軸=29.845～29.849 Y軸=-83.529～-83.534

形状:住居の北半を削平されて不明だが、東西方向に長い長方形を呈すると考えられる。

規模:長辺5.25m 短辺(2.93)m 壁高17cm

長軸方向:N-73°-W 床面積:(13.01)㎡

埋没土:黒褐色土を主体とする。自然堆積の可能性もある。

床面・壁:北半は不明だが、検出範囲の床面はやや凹凸をもつが概ね平坦である。壁は傾斜をもって立ち上がる。

炉:試掘調査のトレンチが住居中央部を縦断していることから、炉は確認できていない。しかし、西壁の北側付近に焼土を検出したが、本住居に伴うかは不明。

その他：東壁の南寄りに、径45cm、深さ30cmを測る円形の土坑を検出した。土坑内の埋土は黒褐色土と暗褐色土で、土器を出土している。

遺物：今回の調査の中で、最も遺物を多く出土させた住居である。遺物は住居の南東隅付近に集中し、壺、甕、台付甕、鉢といった器種の土器、石器には敲石が出土している。これらの遺物は、そのほとんどが床面直上からの出土である。

所見：出土土器から、弥生時代後期の住居と考えられる。

2号住居（第92図、第56表、PL.34・52）

位置：調査範囲の東端となる主郭の西側郭にあり、城郭築城時の整地盛り土の下に検出した。馬の背状の丘陵頂部に近い北緩斜面に位置し、本住居の南側を1号古墳の周溝と、北東隅に2号土坑と重複する。標高212.59m。（座標）X軸＝29.798～29.883 Y軸＝－83.459～83.463

重複：南側を1号古墳の周溝と重複するが、遺構確認時に本住居の方が新しいことは明らかであった。

形状：住居の南側を1号古墳の周溝と重複するが、南北方向にやや長い方形ないし長方形を呈すると考えられる。

規模：長辺4.39m 短辺4.15m 壁高30cm

長軸方向：N-18°-W **床面積**：(14.11) m²

埋没土：黒褐色土および暗褐色土を主体とし、ローム粒を多く含むことから、人為的堆積の可能性が高い。

床面・壁：南側は不明だが、床面はやや凹凸をもつが概ね平坦である。壁は比較的急角度に立ち上がる。

炉：住居の北寄り(炉1)と中央付近(炉2)の2箇所に焼土が確認され、地焼炉と判断した。炉1は床面に径35cm程の範囲が若干焼土化した程度であり、炉2は径30cm程の円形の凹み状で、底面の焼土化が著しい。

遺物：出土遺物はあまり多くはないが、炉1の周辺の床面直上から、図示した6～8の底部および9の敲石が出土している。

所見：出土土器から、弥生時代後期の住居と考えられる。

3号住居（第93図、第57表、PL.34・52）

位置：2号住居と同じ主郭の西側郭にあり、城郭築城時の整地盛り土の下に検出した。馬の背状の丘陵頂部に近い北西緩斜面に位置し、本住居の北東11mに1号住居

がある。標高212.27m。

（座標）X軸＝29.871～29.876 Y軸＝－83.472～83.477

形状：住居の西隅を城郭築城の際の擾乱を受けるが、緩斜面方向に近い南西方向にやや長い方形を呈する。

規模：長辺3.98m 短辺3.48m 壁高15cm

長軸方向：N-126°-W **床面積**：(11.24) m²

埋没土：黒褐色土および暗褐色土を主体とする。自然堆積の可能性もある。

床面・壁：床面は東半が概ね平坦であるのに対し、西半では中央付近と南北の両側に長軸0.9～1.8m、短軸0.65～0.8m、深さ8～14cmの掘り込みをもつ。また、南壁の西隅付近には幅20cm、深さ5cm前後の溝状の掘り込みもあり、壁周溝の可能性もある。

炉：住居中央の西寄りに、北西に長い長軸65cm、短軸50cmの僅かに窪んだ楕円形状に焼土を確認し、地床炉と判断した。この炉の南縁には長さ35cm程の棒状礫が残存していた。

遺物：出土遺物は少ない。炉の東側の床面直上から、図示した8の底部が出土している。埋土上層中からであるが、1の条痕を施した弥生時代中期の土器片が出土している。また、5は赤彩の施された壺形土器の肩部片である。

所見：出土土器から、弥生時代後期の住居と考えられる。

2 土坑

検出された土坑は、1区とした調査地最東部の緩斜面に2基のみで、共に弥生時代末葉の遺構である。

以下、各土坑ごとに記載する。

1号土坑（第94図、第58表）

位置：調査範囲の東端となる主郭の西側郭にあり、城郭築城時の整地盛り土の下に検出した。馬の背状の丘陵頂部に近い北緩斜面に位置し、2号住居と3号住居の中間ぐらにある。標高212.00m。

（座標）X軸＝29.880 Y軸＝－83.470

形状・規模：東北東方向に長軸をもつ楕円形を呈し、長軸1.69m以上、短軸1.10m、深さ32cmを測り、底面は平坦。

長軸方向：N-67°-E

埋没土：黒色土および黒褐色土を主体とする。自然堆積の可能性もある。

遺物：出土遺物は少なく、図示した1・2の底部と、敲石が出土している。

所見：出土土器から、弥生時代後期と考えられる。

2号土坑（第94図）

位置：1号土坑と同じ主郭の西側郭にあり、城郭築城時の整地盛り土の下に検出した。馬の背状の丘陵頂部に近い北緩斜面に位置し、2号住居の北東隅に重複する。標高212.63m。

(座標)X軸=29.883 Y軸=-83.460

重複：2号住居の北東隅に重複するが、新旧は不明。

形状・規模：北北西方向に長軸をもつ細長い楕円形を呈し、長軸2.5m以上、短軸0.62m、深さ35～60cmを測る。底面は北側が高くなる。

長軸方向：N-29°-W

埋没土：黒灰黄褐色土を主体とする。自然堆積の可能性もある。

所見：出土がなく、時期の特定は難しいが、周辺の状況等から弥生時代後期の可能性がある。

3 古墳

1号古墳（第95～98図、第59表、PL.35・52～54）

概要：検出されたのは古墳を巡る周溝の西半のみであり、墳丘は削平されて残存していないことから、その全容は不明。検出された周溝から円墳と考えられ、墳丘は径9m前後であったと推測できる。また、周溝の南側が切れていることから、南側に開口する石室が存在したものと推測できる。

位置：調査範囲の東端となる主郭の西側郭にあり、城郭築城時の整地盛り土の下に検出した。馬の背状の丘陵頂部に位置し、周溝の北側では2号住居と重複する。標高213.00m。

(座標)X軸=29.867～29.879 Y軸=-83.460～83.467

重複：周溝の北側で2号住居と重複するが、遺構確認時に本古墳の方が新しいことは明らかである。

周溝：円墳と考えられる墳丘を巡る周溝の西半を検出。周溝の南側が切れていることから、この部分が入り口部

前である可能性が高い。掘り込みは北側が深さ80cmと深く、西側は深さ45cm、南側が浅くなり掘り込みをもたず切れる。また、北から西側にかけての底面は、ローム層を掘り込んで平坦にしているが、外側ほど深い。南西部においては、基盤層である凝灰岩の岩盤層を一部掘り込むものの凹凸をもち、一部が深くなる。周溝内には葺き石に使用した礫の出土はなく、遺物としては埴輪が出土している。

周溝規模：外径15.0m前後 内径9.0m前後
幅2.5～3.5m 深さ(北側)80cm

埋没土：黒褐色土および暗褐色土を主体とし、ローム粒を多く含むことから、自然堆積の可能性が高い。

遺物：出土遺物には埴輪が多く、図示した1～23の円筒埴輪および24の土師器甕が出土している。

所見：出土遺物から、6世紀前半の古墳と考えられる。なお、墳丘の削平は、周溝南西部の上面に城郭に伴う盛り土が僅かに覆っていたことから、城郭の築城時と考えられる。

4 遺構外出土遺物

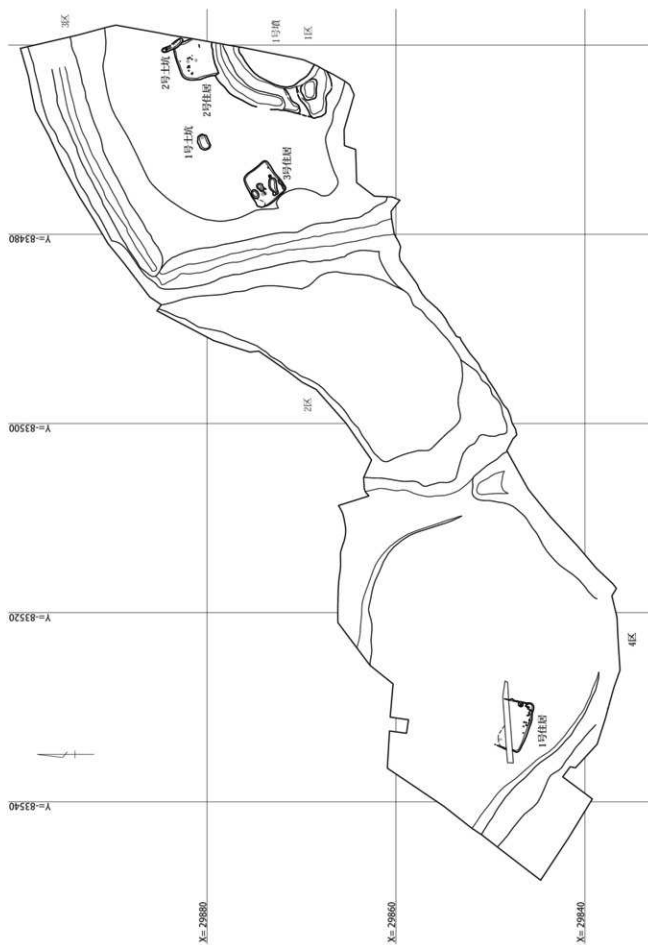
遺構外出土遺物は少ないものの、縄文時代および弥生時代、平安時代の土器・石器が出土しており、これらの時期の遺構が城郭の築城に伴い、消滅した可能性も否めない。

1. 縄文時代の遺構外出土土器（第99図、第60表）

1～4は胎土に繊維を含む前期中葉の有尾式土器で、5は浮線文を巡らせた前項後半の諸磯b式土器である。6～10は中期初頭の五頸ヶ台式土器で、11は中期前半の阿玉台式土器である。

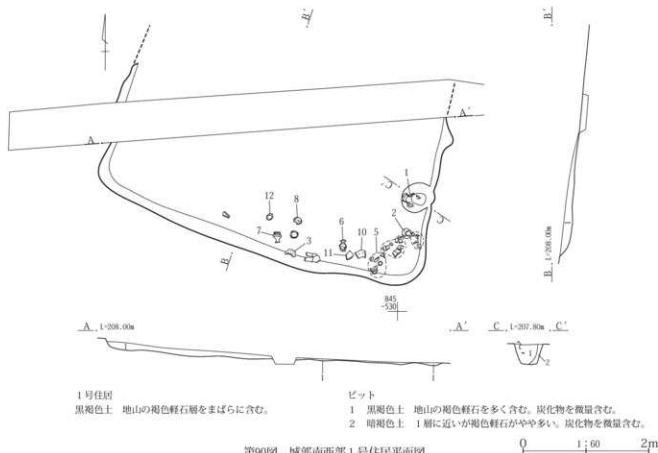
2. 弥生時代の遺構外出土土器（第99・100図、第60表）

出土の多くは、東端となる主郭の西側郭からである。12～13は中期初頭の土器であり、12は小波状口縁の頂部に刺突をもち、口縁直下と胴部に条痕を施す。13・15は口縁下から頸部に付けて条痕を施し、14は平口縁の半完形品で、口縁以下に条痕を施す土器である。16には変形工字文が描かれ、17～23は胴部に条痕が施されている。12・15は3号住居の上面から出土している。また、24～30は後期後半の土器で、簾状文や櫛描波状文が描



第80図 城郭南西部縄文・弥生時代遺構配置図

第4章 富岡城跡の調査



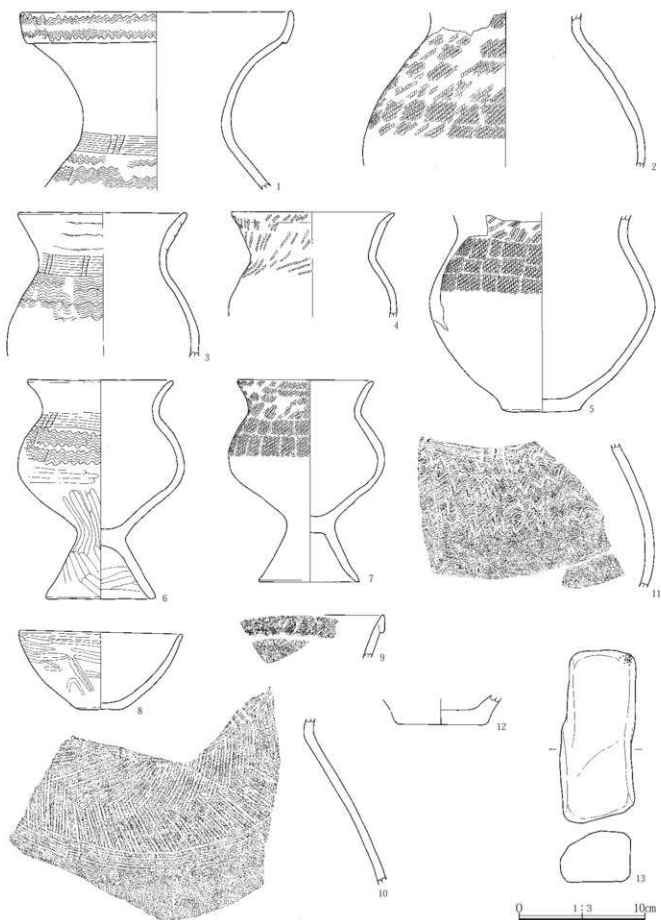
1号住居
黒褐色土 地山の褐色軽石層をまばらに含む。

ビット
1 黒褐色土 地山の褐色軽石を多く含む。炭化物を微量含む。
2 暗褐色土 1層に近いが褐色軽石がやや多い。炭化物を微量含む。

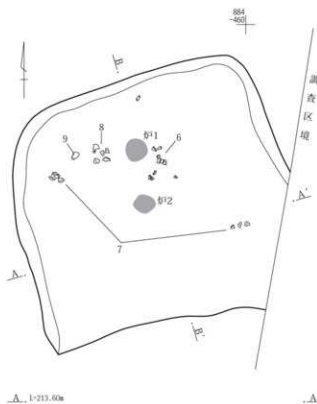
第90図 城郭南西部1号住居平面図

第55表 城郭南西部 1号住居出土遺物観察表

種別番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要		
第91図 PL-51	1	弥生土器 甕	床直 口縁～肩部	口 21.2 高 04.0 底 -	細砂、細礫/良好 にふい粉	折り返し口縁の口縁部に帯描波状文を廻らせ、頸部の器面が荒れているが帯描波状文を廻らせている可能性有り。頸部下に3連止め廉状文、肩部に帯描波状文を廻らせる。内面ナデ。施文具は8歯、14mm。			
第91図 PL-51	2	弥生土器 甕	床直 頸部～肩部	口 - 高 02.0 底 -	細砂、細礫/ふつ うにふい黄橙	頸部から肩部にかけてL Rの縄文を横位施文する。外面無文部はミガキ。内面ナデ。			
第91図 PL-51	3	弥生土器 甕	床直 口縁～肩部	口 13.0 高 01.3 底 -	細砂、細礫/ふつ うにふい黄橙	口縁部に2段の粘土紐積上げ痕を残し、頸部に2連止め廉状文、肩部に3帯の帯描波状文を廻らせ、外面無文部はミガキ。内面ナデ。			
第91図 PL-51	4	弥生土器 甕	床直 口縁～肩部	口 12.7 高 02.0 底 -	細砂、黒色粒/ふ つうにふい黄橙	口縁部に1段の粘土紐積上げ痕を残し、口縁から頸部にかけてL Rの縄文を横位施文する。外面無文部はミガキ。内面ナデ。			
第91図 PL-51	5	弥生土器 甕	床直 頸部～底部	口 - 高 05.0 底 6.1	細砂、黒色粒/良 好にふい黄橙	頸部から肩部にかけてL Rの縄文を横位施文する。外面無文部はミガキ。内面ナデ。			
第91図 PL-51	6	弥生土器 台付甕	床直 口縁～脚部2/3	口 11.3 高 17.2 底 8.5	細砂、白色粒、黒 色粒/良好にふい 黄橙	頸部に3連止め廉状文、肩部に2帯の帯描波状文を廻らせ、外面無文部はミガキ。内面ナデ。脚部内面はナデとケズリ。施文具は7歯、12mm。			
第91図 PL-51	7	弥生土器 台付甕	床直 はび完形	口 10.5 高 15.9 底 7.8	細砂、黒色粒/良 好/明赤褐	口縁から肩部にかけてL Rの縄文を横位施文する。外面無文部はナデ。内面は脚部にもナデ。			
第91図 PL-51	8	弥生土器 鉢	床直 はび完形	口 12.6 高 6.3 底 3.0	細砂、黒色粒/良 好にふい粉	口縁が緩く内湾。外面口縁部横磨き。体部縦磨き。内面ナデ。			
第91図 PL-51	9	弥生土器 甕	床直 口縁部片	口 - 高 - 底 -	細砂、黒色粒/ふ つうにふい黄橙	折り返し口縁の口縁部に帯描波状文を廻らせ、頸部はミガキ。内面ナデ。施文具は7歯、13mm。			
第91図 PL-51	10	弥生土器 甕	床直 頸部～肩部	口 - 高 - 底 -	細砂、黒色粒/良 好/黄橙	頸部に3連止め廉状文、肩部に帯描波状文を施し、2連止め廉状文を廻らせて区画する。外面無文部はミガキ。内面ナデ。施文具は8歯、15mm。			
第91図 PL-51	11	弥生土器 甕	床直 頸部～肩部	口 - 高 - 底 -	細砂、黒色粒/良 好/黄橙	頸部に3連止め廉状文、肩部に4帯の帯描波状文を廻らせ、外面無文部はミガキ。内面ナデ。施文具は7歯、13mm。			
第91図 PL-51	12	弥生土器 壺か甕	床直 底部	口 - 高 02.0 底 7.3	細砂、黒色粒/良 好/黄橙	外面は荒れが著しい。内面ナデ。			
石器									
種別番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第91図 PL-51	13	敲石 柱状礫		13.6	5.9	4.0	570.1	小口部上端に鋭く削打痕が残る。	砂岩



第91図 城郭南西部1号住居出土遺物



A. 1:213.0m

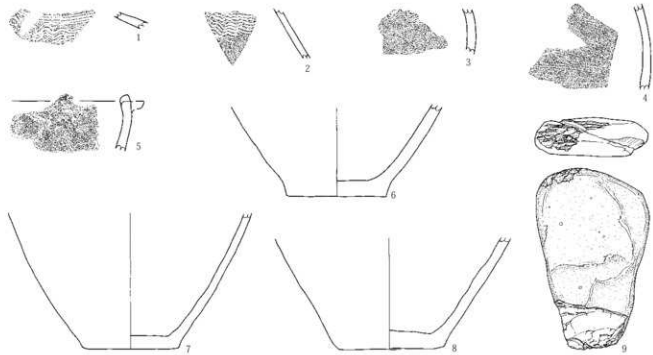
A'



0 1:60 2m

2号住居

- 1 黒褐色土 ローム粒を微量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒を多く含む。炭化物と焼土を微量含む。
- 3 黒褐色土 中や砂質、焼土を多く含む。

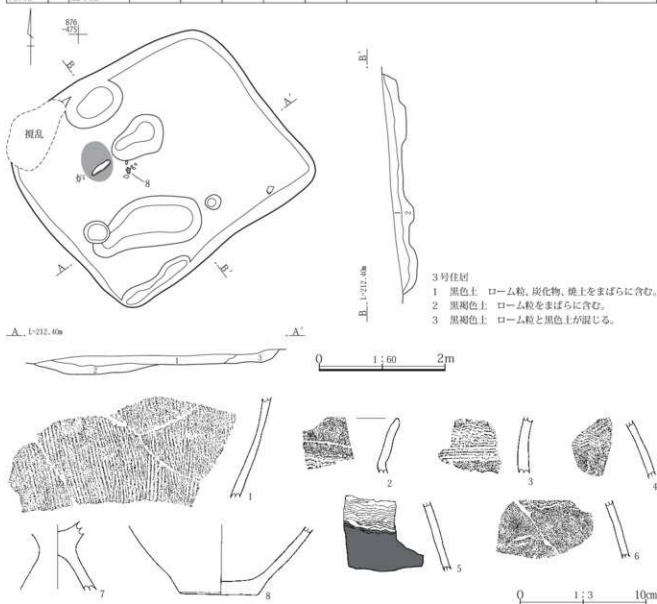


0 1:3 10m

第92図 城郭南西部2号住居平面図、出土遺物

第56表 城郭南西部 2号住居出土遺物観察表

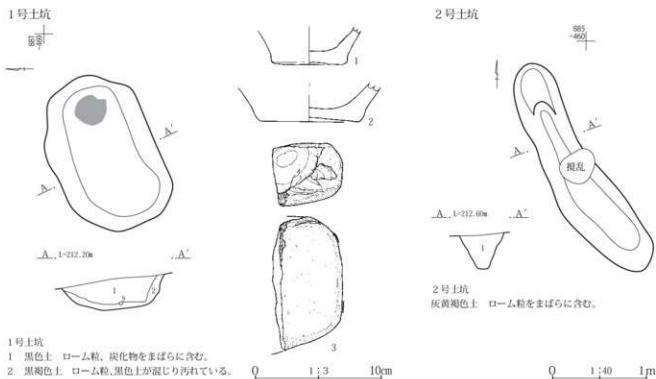
土器類		出土位置		計測値(cm)		胎土/焼成/色調		成形・整形の特徴		摘要
検出番号 図版番号	No.	種類 器種	残存率	口	底	口	底			
第92図 Pl. 52	1	赤生土器 甕	埋土 肩部～胴部片	口 - 高 -	底 -	細砂、黒色粒/良好/黄橙		頸部に2連止め廉状文、肩部に櫛描波状文を廻らせる。		
第92図 Pl. 52	2	赤生土器 甕	埋土 胴部片	口 - 高 -	底 -	細砂/良好/黄橙		胴部に櫛描波状文を廻らせる。施文具は6歯、14mm。		
第92図 Pl. 52	3	赤生土器 甕	埋土 胴部片	口 - 高 -	底 -	細砂/良好/にぶい黄橙		胴部に櫛描波状文を廻らせる。		
第92図 Pl. 52	4	赤生土器 甕?	埋土 体部片	口 - 高 -	底 -	細砂/良好/明黄橙		外内面にハケ目。		
第92図 Pl. 52	5	赤生土器 片口鉢	埋土 片口部片	口 - 高 -	底 -	細砂/良好/にぶい黄橙		片口部を僅かに残し、外面ナデ。		
第92図 Pl. 52	6	赤生土器 甕	床直 底部	口 7.8 底 7.8	高 7.3	細砂、細礫/良好/褐		外面はまばらにミガキ。内面ナデ。		
第92図 Pl. 52	7	赤生土器 甕	床直 底部	口 - 高 底 10.1	14.3	細砂、黒色粒/良好/黄橙		外面は僅かにミガキ。内面ナデ。		
第92図 Pl. 52	8	赤生土器 甕	床直 底部	口 - 高 底 11.2	11.7	細砂、細礫/良好/黄橙		外面は僅かにミガキ。内面ナデ。		
石器										
検出番号 図版番号	No.	器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況		石材
第92図 Pl. 52	9	敲石 扁平礫	埋土	14.3	8.9	3.0	496.0	上下両端の小口部に敲打痕・衝撃的離痕が残る。		変質安山岩



第4章 富岡城跡の調査

第57表 城郭南西部 3号住居出土遺物観察表

土器類		種類		出土位置		計測値(cm)		胎土/焼成/色調		成形・整形の特徴		摘要	
種別番号 図版番号	No.	種類	器種	出土位置	残存率	計測値	口径	高さ	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要		
第93図 PL.52	1	赤生土器	裏	埋土	-	口	-	高	-	細砂、細礫/良好 にふい黄橙	胴部下平に縦位の条痕が施される。		
第93図 PL.52	2	赤生土器	裏	埋土	-	口	-	高	-	細砂、白色粒/ふ つつ/褐橙	頸部に櫛描波状文を施される。		
第93図 PL.52	3	赤生土器	裏	埋土	-	口	-	高	-	細砂/ふつつ/褐橙	胴部に櫛描波状文を施される。施文目は6 齒、1.3mm。		
第93図 PL.52	4	赤生土器	裏	埋土	-	口	-	高	-	細砂、黒色粒/良 好/橙	胴部に櫛描波状文を施される。		
第93図 PL.52	5	赤生土器	裏	埋土	-	口	-	高	-	細砂、黒色粒/良 好/黄橙	胴部に櫛描波状文を施せる、外面無文部に赤彩。		
第93図 PL.52	6	赤生土器	裏	埋土	-	口	-	高	-	細砂、黒色粒/良 好/黄橙	胴部に櫛描波状文を施される。外面無文部はミガキ。		
第93図 PL.52	7	赤生土器	裏	埋土	-	口	-	高	-	細砂、白色粒/ふ つつ/赤褐	全体に器面が荒れている。		
第93図 PL.52	8	赤生土器	裏	埋土	-	口	-	高	6.0	6.0	細砂/良好/黄橙	外面は僅かにミガキ。内面ナデ。	

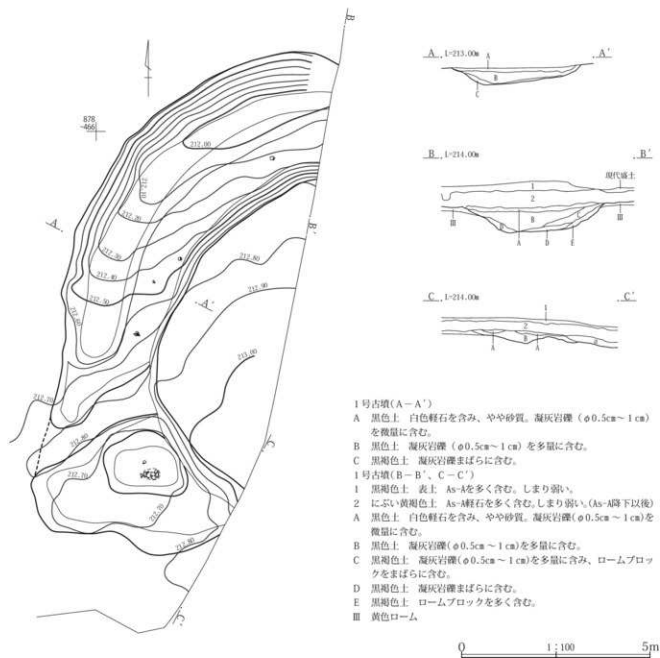


第94図 城郭南西部1・2号土坑平面図、1号土坑出土遺物

第58表 城郭南西部 1号土坑出土遺物観察表

土器類		種類		出土位置		計測値(cm)		胎土/焼成/色調		成形・整形の特徴		摘要
種別番号 図版番号	No.	種類	器種	出土位置	残存率	計測値	口径	高さ	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
第94図 PL.-	1	赤生土器	底	埋土	-	口	-	高	CU	細砂/良好/褐橙	外面は僅かにミガキ。内面ナデ。	
第94図 PL.-	2	赤生土器	底	埋土	-	口	-	高	CU	細砂、白色粒/ふ つつ/褐橙	内面ナデ。	

石器		器種		出土位置		計測値(cm)		重量(g)		製作・使用状況		石材			
種別番号 図版番号	No.	器種	形態・素材	出土位置	残存率	計測値	口径	高さ	重量	製作・使用状況	石材				
第94図 PL.-	3	敲石	扁平礫	埋土	-	長	(10.5)	幅	5.5	厚	5.0	重	451.2	下端側小口部に敲打・摩耗痕があるほか、背面側左辺に打 痕が残る。	砂岩



第95図 城郭南西部1号古墳平面図

1号古墳(A-A')

A 黒色土 白色軽石を含み、やや砂質。凝灰岩礫(φ0.5cm～1cm)を微量に含む。

B 黒色土 凝灰岩礫(φ0.5cm～1cm)を多量に含む。

C 黒褐色土 凝灰岩礫まばらに含む。

1号古墳(B-B', C-C')

1 黒褐色土 表土 As-Aを多く含む。しまり弱い。

2 にぶい黄褐色土 As-A軽石を多く含む。しまり弱い。(As-A降下以後)

A 黒色土 白色軽石を含み、やや砂質。凝灰岩礫(φ0.5cm～1cm)を微量に含む。

B 黒色土 凝灰岩礫(φ0.5cm～1cm)を多量に含む。

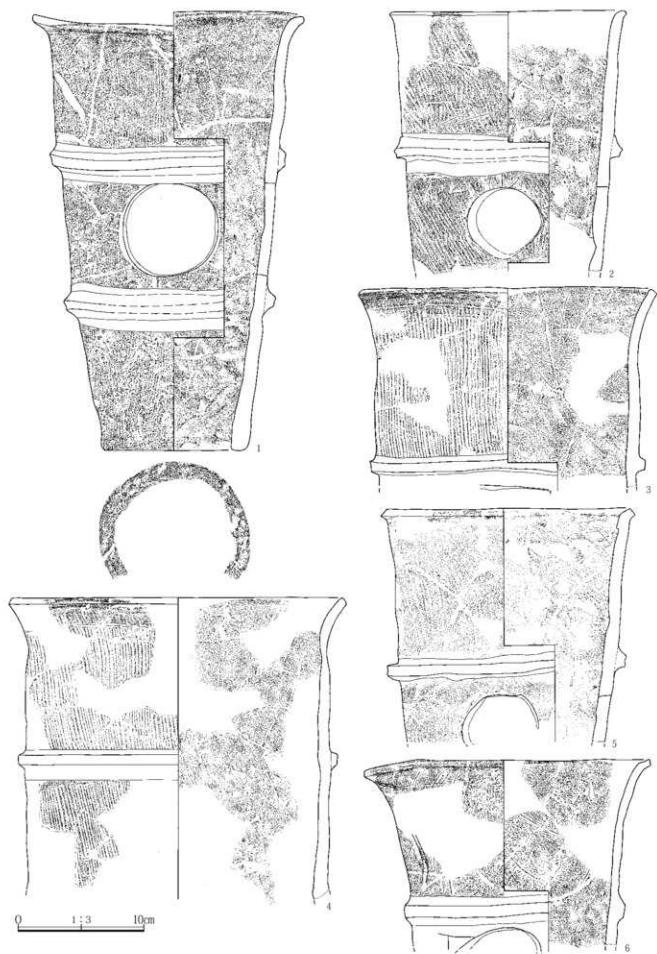
C 黒褐色土 凝灰岩礫(φ0.5cm～1cm)を多量に含む、ロームブロックをまばらに含む。

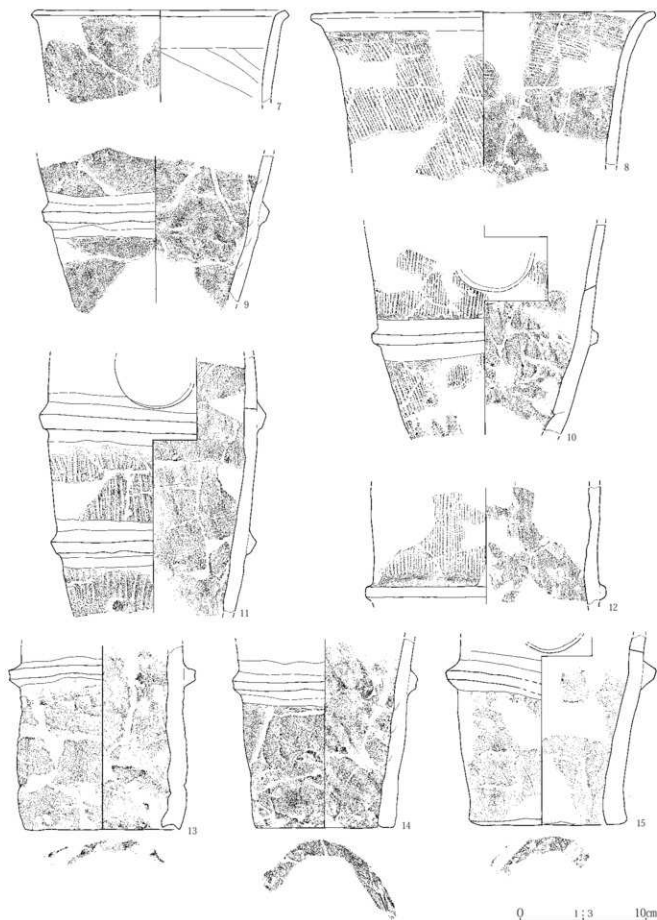
D 黒褐色土 凝灰岩礫まばらに含む。

E 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。

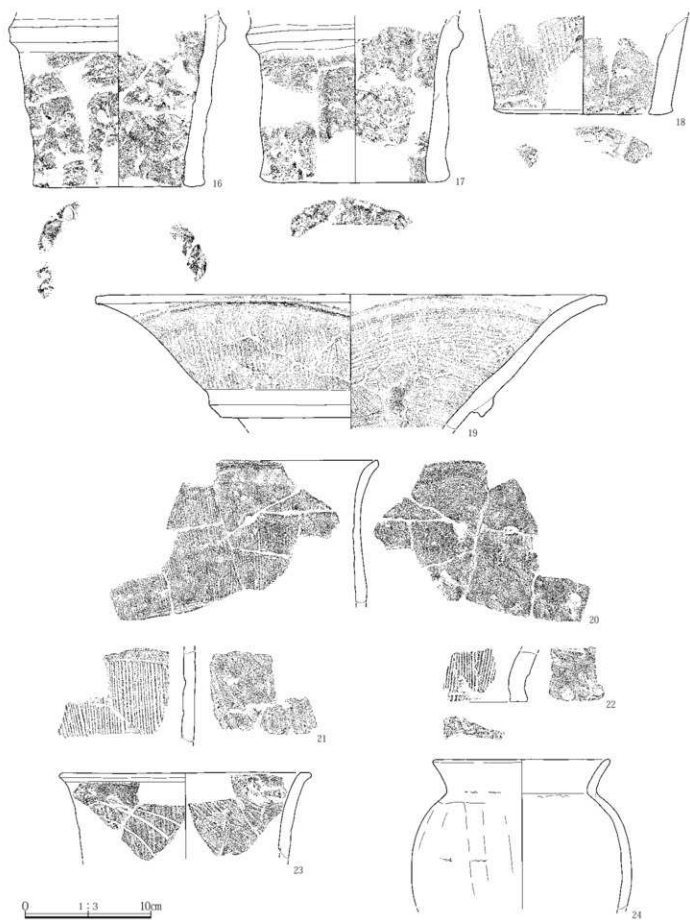
F 黄色ローム

0 1:100 5m





第97図 城郭南西部1号古墳周溝出土遺物(2)



第98図 城郭西南部1号古墳周溝出土遺物(3)

第59表 城郭南西部 1号古墳出土遺物観察表

上器類・埴輪		種類		出土位置		計測値(cm)		胎土/焼成/色調		成形・整形の特徴		備 考
検出番号 図版番号	No.	種類 部種	形状	出土位置	残存率	口 底	高	胎土	焼成	色調	成形・整形の特徴	備 考
第96図 PL.52	1	埴輪 円筒	ほぼ球形	埋土	-	口 21.2 底 11.3	高 34.5	細砂粒、粗砂粒、石灰/やや不良/橙	-	-	外面は縦ハケ(10本/2cm)凸帯間に径7.7cmほどの一對の円形透孔。内面は縦の溝な指ナデ。	内面下半に接合痕顯著
第96図 PL.53	2	埴輪 円筒	埋土	口縁-胴部	-	口 18.0 底 -	高 -	細砂粒、粗砂粒/良好/にぶい黄褐色	-	-	外面は斜め-縦方向のハケ(6本/2cm)円形透孔。内面は縦の溝な指ナデ。下半は縦方向の溝な指ナデ。	内面に接合痕顯著
第96図 PL.53	3	埴輪 円筒	埋土	口縁-胴部	-	口 23.0 底 -	高 -	細砂粒/良好/赤褐色	-	-	外面は縦のハケ(10本)、上端に2条の沈線。凸帯はシャープな整形。内面は斜めの指ナデ。	内面に接合痕顯著
第96図 PL.53	4	埴輪 円筒	埋土	口縁-胴部	-	口 26.0 底 -	高 -	細砂粒、粗砂粒/良好/赤褐色	-	-	外面は縦ハケ(6本/2cm)後、凸帯貼付。内面は斜めのヘラナデ。	内面に接合痕顯著
第96図 PL.53	5	埴輪 円筒	埋土	口縁-胴部	-	口 19.1 底 -	高 -	細砂粒/やや不良/橙	-	-	外面は縦ハケ(単位不明)。内面は溝な指ナデ、径6cmほどの円形透孔	内面に接合痕顯著、器面摩滅
第97図 PL.-	6	埴輪 円筒	埋土	口縁片	-	口 22.5 底 -	高 -	細砂粒/やや不良/橙	-	-	外面は縦ハケ(10本/2cm)凸帯下に円形透孔、外面に1方所縦の2条沈線。内面は斜めの丁寧な指ナデ	
第97図 PL.-	7	埴輪 円筒	埋土	口縁片	-	口 19.6 底 -	高 -	細砂粒/やや不良/橙	-	-	外面ナデ、器面摩滅のためハケ不明。内面は斜めの指ナデ。	
第97図 PL.53	8	埴輪 円筒	埋土	口縁片	-	口 27.0 底 -	高 -	粗砂粒、細砂粒/良好/明赤褐色	-	-	外面は斜めハケ(7本/2cm)。内面は指ナデ後、上端部右下りのハケ(9本/2cm)。	
第97図 PL.-	9	埴輪 円筒	埋土	胴部	-	口 - 底 -	高 -	細砂粒/やや不良/明黄褐色	-	-	外面はナデ。内面は縦の指ナデ。	器面摩滅、内面に接合痕
第97図 PL.-	10	埴輪 円筒	胴部片	埋土	-	口 - 底 -	高 -	細砂粒/良好/明赤褐色	-	-	外面は縦ハケ(9本/2cm)。内面は斜めの指ナデ。	内面に接合痕顯著
第97図 PL.54	11	埴輪 円筒	胴部片	埋土	-	口 - 底 -	高 -	細砂粒、粗砂粒/良好/橙	-	-	外面は縦ハケ(5本/2cm)、円形透孔。内面は縦方向の指ナデ。	内面に接合痕
第97図 PL.-	12	埴輪 円筒	埋土	胴部	-	口 - 底 -	高 -	粗砂粒、細砂粒/良好/明赤褐色	-	-	外面は縦ハケ(8本/2cm)凸帯上に円形透孔。内面指ナデ。	
第97図 PL.54	13	埴輪 円筒	胴部-底部	埋土	-	口 - 底 12.2	高 -	細砂粒/良好/橙	-	-	外面の凸帯下部に縦方向のヘラナデ。内面は縦方向の溝な指ナデ。	内外面に接合痕顯著
第97図 PL.-	14	埴輪 円筒	埋土	胴部-底部	-	口 10.8 底 -	高 -	細砂粒/良好/橙	-	-	外面下端は溝な指ナデ、内面は斜めの指ナデ	内面に接合痕
第97図 PL.54	15	埴輪 円筒	埋土	胴部-底部	-	口 - 底 12.5	高 -	細砂粒、粗砂粒/良好/灰黄褐色	-	-	外面の凸帯下部に縦方向のヘラナデ、円形透孔。内面は斜め方向の溝な指ナデ。	内面に接合痕
第98図 PL.-	16	埴輪 円筒	埋土	胴部-底部	-	口 - 底 13.6	高 -	細砂粒/良好/橙	-	-	外面下端はナデ。内面は斜めの溝な指ナデ	
第98図 PL.-	17	埴輪 円筒	埋土	胴部-底部	-	口 14.4 底 -	高 -	細砂粒/良好/橙	-	-	外面下端は斜めの指ナデ。内面は溝な斜めの指ナデ	
第98図 PL.-	18	埴輪 円筒	埋土	底部のみ	-	口 - 底 14.2	高 -	細砂粒/良好/橙	-	-	外面は縦ハケ(4本/2cm)。内面は溝な指ナデ。	
第98図 PL.54	19	埴輪 朝顔	埋土	口縁片	-	口 40.0 底 -	高 -	細砂粒/やや不良/橙	-	-	外面は縦ハケ(7本/2cm)凸帯ナデ。内面は上端部横ハケ後、横方向の指ナデ。	
第98図 PL.-	20	埴輪 円筒	埋土	口縁片	-	口 - 底 -	高 -	細砂粒/良好/橙	-	-	外面は縦ハケ(単位不明)。内面ナデ。	器面摩滅
第98図 PL.-	21	埴輪 円筒	埋土	胴部片	-	口 - 底 -	高 -	細砂粒/良好/明赤褐色	-	-	外面は縦ハケ(8本/2cm)後、凸帯部横ナデ。内面は溝な指ナデ。	内面に接合痕
第98図 PL.-	22	埴輪 円筒	埋土	胴部片	-	口 - 底 -	高 -	粗砂粒、細砂粒/良好/明赤褐色	-	-	外面は縦ハケ(8本/2cm)。内面は指ナデ。	接合部で割断
第98図 PL.-	23	埴輪 円筒	埋土	口縁片	-	口 19.8 底 -	高 -	細砂粒/良好/橙	-	-	口縁部内面は斜めのハケ、外面は縦ハケを他文後、斜めの縞ナデ。	
第98図 PL.-	24	土師器 甕	埋土	口縁-胴部片	-	口 13.8 底 -	高 -	細砂粒、粗砂粒(片切)/良好/にぶい赤褐色	-	-	口縁部横撫で、胴部外面は縦のヘラ撫で、内面は撫で。	頸部外面に輪横敷

かれる24・26、27の鉢、28・29の台付き甕や高杯の脚部が出土している。

3. 平安時代の遺構外出土土器 (第100図、第60表)

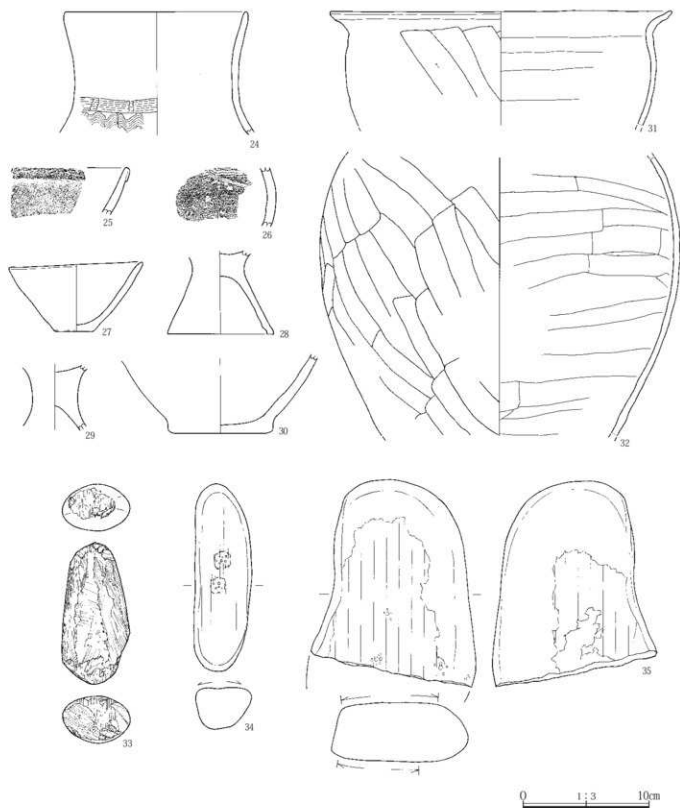
この時期の遺構は全く検出されていないが、31の土師器甕の口縁片と、32の土師器甕の胴部が出土している。共に、8世紀後半の土器である。

4. 遺構外出土土器 (第100図、第60表)

出土した石器は少なく、図示したのは敲石1点、凹石1点、台石1点の計3点である。他に剥片類として9点あり、黒曜石、チャート、黒色頁岩、珪質頁岩、硬質泥岩、粗粒輝石安山岩といった石材が用いられている。



第99図 城郭南西部遺構外出土遺物(1)



第100図 城郭南西部遺構外出土遺物(2)

第4章 富岡城跡の調査

第60表 城郭南西部 縄文～古墳時代遺構外出土遺物観察表

縄文土器類		No.		器形	部位	出土位置	胎土/焼成/色調	文様の特徴等	摘要		
第9999 PL-	1	深鉢	胴部破片	埋土	織織、細礫/ふつ/明褐色	平口縁の口縁下に平行沈線を2段巡らせる。		有尾式			
第9999 PL-	2	深鉢	胴部破片	埋土	織織、細礫/ふつ/暗褐色	口縁下に爪形刺突をもつ平行沈線を数段巡らせ、地文にL Rの縄文を施す。補修孔を有する。		有尾式			
第9999 PL-	3	深鉢	胴部破片	埋土	織織、細礫/ふつ/暗褐色	胴部にR LとL Rによる羽状縄文の縄文を施す。		有尾式			
第9999 PL-	4	深鉢	胴部破片	埋土	織織、細礫/ふつ/暗褐色	胴部にR LとL Rによる羽状縄文の縄文を施す。		有尾式			
第9999 PL-	5	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、細礫/ふつ/黄褐色	胴部に刻みをもつ浮線文を横位に数段巡らせ、地文にR Lの縄文を施す。		諸磯B式			
第9999 PL-	6	深鉢	口縁部破片	埋土	粗砂/ふつ/暗褐色	直立する平口縁で、頸部が屈曲する。口縁直下と屈曲部に刻みをもつ隆帯を巡らせて口縁部文帯帯を区別し、区画内に刻みをもつ平行沈線を巡らせ、内面を配する。頸部には縦位の平行沈線が文様で強調される。		五箇ヶ台式			
第9999 PL-	7	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、細礫/ふつ/明褐色	胴部上半に縦位の平行沈線と斜位沈線で文様を描き、横位の平行沈線で区画する。		五箇ヶ台式			
第9999 PL-	8	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、細礫/ふつ/明褐色	胴部上半に渦状の沈線および縦位の沈線で文様を描き、縦位回転のR Lの結節縄文を施す。		五箇ヶ台式			
第9999 PL-	9	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、細礫/ふつ/暗褐色	胴部に縦位回転のR Lの結節縄文を施す。		五箇ヶ台式			
第9999 PL-	10	深鉢	胴部破片	埋土	粗砂、細礫/ふつ/暗褐色	胴部に縦位回転の細いR Lの結節縄文を施す。		五箇ヶ台式			
第9999 PL-	11	深鉢	口縁部破片	埋土	粗砂、細礫、石英、雲母/ふつ/明褐色	平口縁で突起をもち、突起の口側に刻みを有し、押し引き沈線を弧状に施す。突起下には隆帯を垂下させる。		阿玉台式			
土器類		No.		種類	出土位置	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要		
第9999 PL-	12	赤生土器	底	口縁-胴上半	口底	- 高	細砂、細礫、白色粒/ふつ/暗褐色	突起状の小波状口縁で、底部部に刺突、口縁直下に縦位の条痕を縦状に施し、頸部は無文帯。胴部上半には斜位の条痕が施される。			
第9999 PL-	13	赤生土器	底	口縁部片	口底	- 高	細砂、細礫/良好/黄褐色	平口縁の口縁内面に3箇の連続刺突を廻らせ、外面口縁下に1条の隆帯が廻り(隆帯は剥落)、以下の頸部に横位の条痕が施される。			
第9999 PL-	14	赤生土器	底	口縁-台座1/3	口底	31.7 高 39.9 底 11.2	細砂、細礫/ふつ/ふい/暗褐色	平口縁の口縁部に縦位の刺突を有し、口縁下の胴部上半に斜位の条痕、胴部下半に斜位から縦位に近い条痕が施される。			
第9999 PL-	15	赤生土器	底	口縁部片	口底	- 高	細砂、細礫/良好/明褐色	口縁下に横位の条痕が施される。			
第9999 PL-	16	赤生土器	底	胴部片	口底	- 高	細砂、細礫/良好/赤褐色	胴部に沈線が削れた変形J字文が描かれ、その下に横位の沈線が2条廻る。			
第9999 PL-	17	赤生土器	底	胴部片	口底	- 高	細砂、細礫/良好/暗褐色	横位の沈線が廻り、胴部に斜位の条痕が施される。			
第9999 PL-	18	赤生土器	底	胴部片	口底	- 高	細砂、細礫/ふつ/ふい/暗褐色	胴部下半に斜位から縦位に近い条痕が施される。			
第9999 PL-	19	赤生土器	底	胴部片	口底	- 高	細砂、細礫/良好/赤褐色	胴部上半に横位の条痕が施される。			
第9999 PL-	20	赤生土器	底	胴部片	口底	- 高	細砂、細礫/良好/灰褐色	胴部下半に斜位から縦位に近い条痕が施される。			
第9999 PL-	21	赤生土器	底	胴部片	口底	- 高	細砂、細礫/良好/灰褐色	胴部下半に縦位の条痕が施される。			
第9999 PL-	22	赤生土器	底	胴部片	口底	- 高	細砂、細礫/ふつ/黄褐色	胴部下半に縦位の条痕が施される。			
第9999 PL-	23	赤生土器	底	底	口底	- 高	細砂、細礫/良好/ふい/赤褐色	胴部下半に縦位の条痕が施され、底面に網代模が残る。			
第10000 PL-	24	赤生土器	底	口縁部片	口底	14.4 高 (9.5)	細砂、白色粒/良好/ふい/暗褐色	口縁部には縦位の条痕のV字が僅かに残る。頸部に2連止め帯状文、胴部に帯状文が施される。底文は6箇、30mm。			
第10000 PL-	25	赤生土器	底	口縁部片	口底	- 高	細砂/良好/ふい/暗褐色	折り返し口縁であるが、器面が荒れている。			
第10000 PL-	26	赤生土器	底	胴部片	口底	- 高	細砂、細礫/良好/ふい/赤褐色	胴部に帯状文を廻らせる。外面無文部はミガキ。			
第10000 PL-	27	赤生土器	底	底	口底	10.5 高 3.0	細砂、細礫/ふつ/黄褐色	外内面ナデ。			
第10000 PL-	28	赤生土器	底	脚部	口底	8.5 高 (6.5)	細砂、細礫/ふつ/暗褐色	外面の荒れが著しい。内面ナデ。			
第10000 PL-	29	赤生土器	底	脚部片	口底	- 高	細砂/良好/暗褐色	器面の荒れが著しい。			
第10000 PL-	30	赤生土器	底	底	口底	7.8 高 (6.1)	細砂/良好/ふい/暗褐色	外面は僅かにミガキ。内面ナデ。			
第10000 PL-	31	赤生土器	底	口縁小片	口底	25.8 高	細砂/良好/明褐色	口縁部横ナデ後、胴部斜へう削り。内面横方向のナデ。			
第10000 PL-	32	赤生土器	底	胴部	口底	- 高	細砂/良好/暗褐色	外面は斜めへのう削り。内面は横方向へのう削り。	胴部側面に黒		
石器		No.		器種	出土位置	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	製作・使用状況	石材
第10000 PL-	33	磨製石斧	打製石斧			11.1	5.4	3.7	351.2	上下両端の敲打・摩耗痕が著しい。磨製石斧を転用。	変玄武岩
第10000 PL-	34	打製石斧	打製石斧			14.8	4.5	3.3	337.2	背面側中央に敲打痕。打痕は摩耗、礫面は光沢面を帯びており、石材側には砥石としても機能した可能性がある。	デイスイト
第10000 PL-	35	打製石斧	打製石斧			16.3	13.0	4.8	1559.2	表面側とも摩耗しており、不明瞭だが礫条痕が見える。礫石英岡緑岩砥石として長るべきかもしれない。	

第3節 城郭北東部における縄文～古墳時代の遺構と遺物

本調査で検出された縄文時代の遺構はないが、土器が僅かに出土している。弥生時代の遺構としては、後期の住居4軒、土坑1基が検出され、出土遺物には遺構外も含め後期の土器・石器がある。さらに、古墳1基の周溝が検出されたものの、墳丘は調査区外のため不明。出土遺物には、周溝内より土器類がある。

1 竪穴住居

検出された竪穴住居は、弥生時代後期の計4軒である。住居が検出された調査区は、2・3区に跨る箇所と3区に1軒ずつ、4区に2軒であり、いずれの住居も斜面に位置する。

以下、各住居ごとに記載する。

3区1号住居（第102図、第61表、PL.36・54）

位置：調査範囲の南側となる3区にあり、城郭築城時の整地盛り土の下に検出した。丘陵の西斜面に位置し、本住居の南側6mに3区2号住居、北北東8mに4区1号住居がある。標高210.33m。

(座標)X軸=29,934～29,940 Y軸=-83,396～83,399

形状：調査範囲が狭く、住居の西半は不明。検出できたのは東半だけで、南北方向に長い不整形な隅丸長方形を呈すると考えられる。

規模：長辺6.5m前後 短辺(2.9)m 壁高82cm

長軸方向：N-10°-E **床面積：**(11.34) m²

埋没土：鈍い黄褐色土を主体とし、黄褐色土ブロック含むことから、人為的堆積の可能性もある。

床面・壁：床面は概ね平坦であるが、西側へやや傾斜する。壁は東壁が高く82cmを測り、やや傾斜をもって立ち上がる。

その他：東壁寄りにピットを4基検出した。径40～50cm、深さ60～80cm前後を測る。

遺物：出土遺物は少なく、埋土中からである。図示した1～12の土器と、13の釳石が出土している。10・11は内外面に赤彩が施され、12は蓋の擴み部である。

所見：出土土器から、弥生時代後期の住居と考えられる。

3区2号住居（第103図、第62表、PL.36）

位置：調査範囲の南側となる2区と3区に跨っており、城郭築城時の整地盛り土の下に検出した。丘陵の西斜面に位置し、本住居の北側6mに3区1号住居がある。標高210.99m。

(座標)X軸=29,921～29,928 Y軸=-83,398～83,403

形状：調査範囲が狭く、検出できたのは西側だけで、住居の大部分となる東側は不明。北東方向に長い長方形を呈すると考えられる。

規模：長辺7.84m 短辺(1.8)m 壁高43cm

長軸方向：N-35°-E **床面積：**(9.08) m²

埋没土：鈍い黄褐色土を主体としている。

床面・壁：床面はほぼ平坦である。壁は西壁が低く、東側ほど高く43cmを測り、やや傾斜をもって立ち上がる。

炬：住居の南西隅付近(炬1)と中央西壁寄り(炬2)の2箇所に焼土が床面上に確認され、地床炬と判断した。炬1は床面に径50cm程の範囲が焼土化し、炬2は径40cm程の範囲が焼土化している。

その他：南寄りに、径36cm、深さ39cmを測るピットを1基検出した。主柱穴の1つである可能性をもつ。

遺物：出土遺物は極めて少なく、図示した1点が埋土中から出土している。

所見：出土土器から、弥生時代後期の住居と考えられる。

4区1号住居（第104図、第63表、PL.36）

位置：調査範囲の中央となる4区にあり、城郭築城時の整地盛り土の下に検出した。丘陵の北西緩斜面に位置し、本住居の北側を4区2号住居と重複し、南南西8mに3区1号住居がある。標高209.31m。

(座標)X軸=29,947～29,951 Y軸=-83,392～83,394

重複：土層断面の観察から、4区2号住居より本住居の方が新しい。

形状：調査範囲が狭く、住居の東半は不明。検出できたのは西半だけで、方形ないし東西方向に長い長方形を呈すると考えられる。

規模：南北方向3.6m 東西方向(2.4)m 壁高41cm

南北方向：N-14°-W **床面積：**(5.47) m²

埋没土：鈍い黄褐色土を主体とし、自然堆積の可能性

もある。

床面・壁:床面は概ね平坦であるが、細かい凹凸があり、北側へやや傾斜する。壁は南壁が高く41cmを測り、垂直ぎみに立ち上がる。

その他:径35cm前後、深さ16～28cmを測るピットを2基検出した。主柱穴の可能性をもつ。また、床面下に不整形な掘り込みが確認された。

遺物:出土遺物は少なく、埋土中からである。図示した1～4の土器と、5の石核が出土している。

所見:出土土器から、弥生時代後期の住居と考えられる。

4区2号住居 (第104図、PL36)

位置:調査範囲の中央となる4区にあり、城郭築成時の整地盛り土の下に検出した。丘陵の北西緩斜面に位置し、本住居の南側を4区1号住居と重複する。標高208.85m。

(座標)X軸=29,951～29,956 Y軸=-83,390～83,393

重複:土層断面の観察から、4区1号住居より本住居の方が古い。

形状:調査範囲が狭く、住居の東半は不明。検出できたのは西半だけで、不整形な形ないし北西方向に長い長方形を呈すると考えられる。

規模:南北方向(3.32m) 東西方向(2.65)m 壁高17cm

南北方向: N-55°-W 床面積: (6.24) m²

埋没土:鈍い黄褐色土を主体とし、4区1号住居の埋没土より締まっている。自然堆積の可能性もある。

床面・壁:床面は概ね平坦である。壁は南壁と北壁の一部を確認しただけで、南壁で17cmを測る。

その他:径30cm前後、深さ22cmを測るピットを1基検出した。

所見:出土土器がなく、時期の特定は難しいが、周辺の状況等から弥生時代後期の可能性がある。

2 土坑

3区1号土坑 (第105図、PL36)

位置:検出された土坑は本土坑のみで、3区の南側にあり、城郭築成時の整地盛り土の下に検出した。丘陵の西斜面に位置し、3区2号住居の北側に近接する。標高

210.43m。

(座標)X軸=29,930 Y軸=-83,400

形状・規模:径1.15m、深さ70cmを測る不整な円形を呈する。底面はほぼ平坦。

埋没土:黒褐色土を主体とする。自然堆積の可能性もある。

所見:出土がなく、時期の特定は難しいが、周辺の状況等から弥生時代後期の可能性がある。

3 古墳

古墳 (第105・106図、第64表、PL35)

概要:検出されたのは古墳を巡る周溝の東側の一部と考えられ、西側の調査区外に盛り上がった箇所が存在することから、古墳の主体は調査範囲の西側となる。墳丘等は不明だが、円墳の可能性が高い。

位置:調査範囲の北端となる10号トレンチ調査で検出された、古墳の周溝の一部である。標高213.00m。

(座標)X軸=29,007～29,014 Y軸=-83,386～83,389

周溝:円墳と考えられる墳丘を巡る周溝の東側の一部で、掘り込みは浅く弧状を呈する。底面は確認していない。周溝内には葺き石に使用した礫の出土はなく、遺物としては須恵器片や土師器片が出土している。

周溝規模:外径12.0m前後

埋没土:黒褐色土を主とし、自然堆積の可能性もある。

遺物:出土遺物は少ないが、図示した1～4の須恵器表片および5の土師器裏片が出土している。

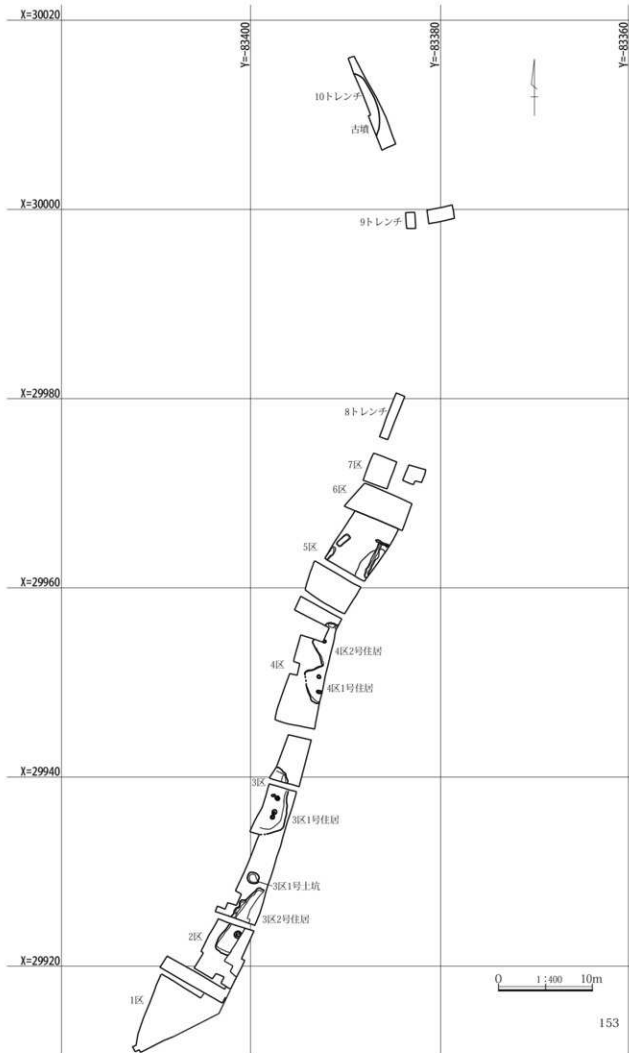
所見:出土遺物から、7世紀前半の古墳と考えられる。

4 遺構外出土遺物

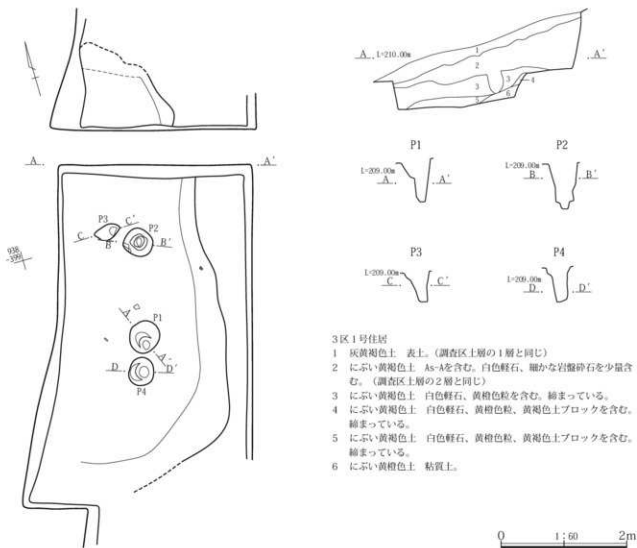
遺構外出土遺物は少ないものの、縄文時代および弥生時代、平安時代の土器・石器が出土している。

1. 縄文時代の遺構外出土土器 (第107図、第65表)

縄文時代の土器は極めて少なく、図示できたのは2点のみである。1・2は胎土に繊維を含む前期中葉の有尾式土器である。

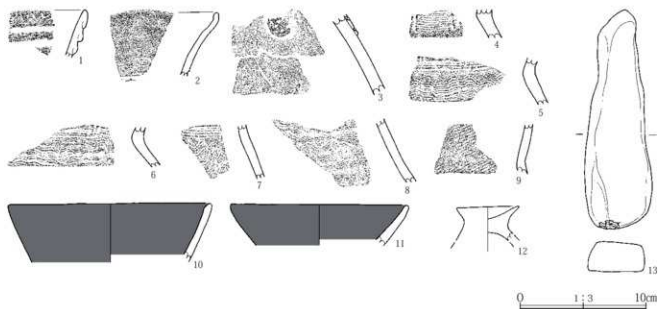


第101図 城郭北東部縄文・弥生時代遺構配置図



3区1号住居

- 1 灰黄褐色土 表土。(調査区上層の1層と同じ)
- 2 にふい黄褐色土 As-Aを含む。白色軽石、細かな岩盤砕石を少量含む。(調査区上層の2層と同じ)
- 3 にふい黄褐色土 白色軽石、黄褐色粒を含む。締まっている。
- 4 にふい黄褐色土 白色軽石、黄褐色粒、黄褐色土ブロックを含む。締まっている。
- 5 にふい黄褐色土 白色軽石、黄褐色粒、黄褐色土ブロックを含む。締まっている。
- 6 にふい黄褐色土 粘質土。



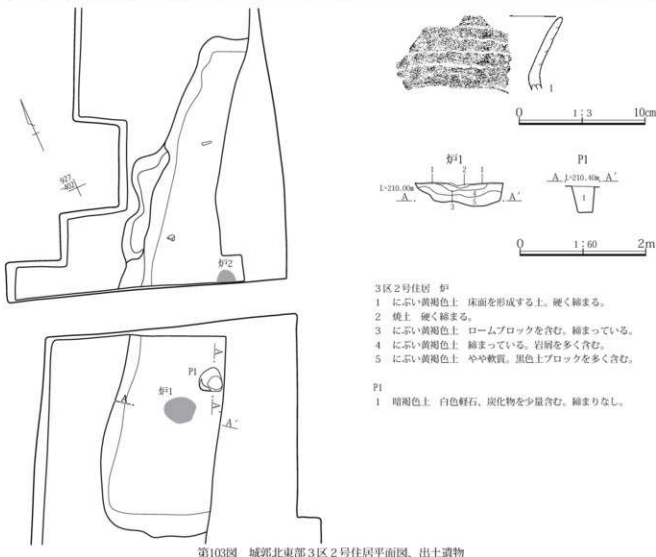
第102図 城郭北東部3区1号住居平面図、出土遺物

第61表 城郭北東部 3区1号住居出土遺物観察表

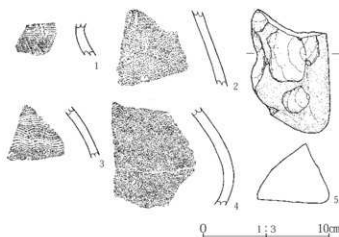
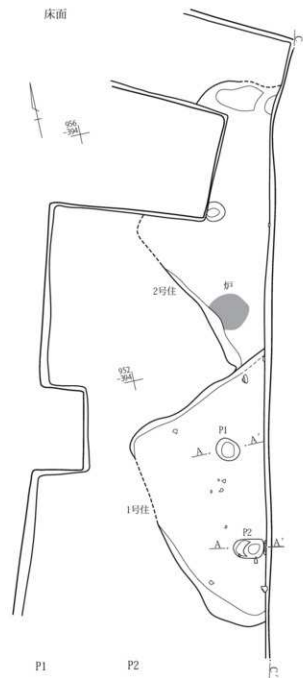
種別番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
第102図 PL-54	1	赤生土器 壺	埋土 口縁部片	口 底 - 高	細砂、黒色粒/良 好/黄褐色	3段の折り返し口縁部の口縁部に縞縞波状文を廻らせる。	
第102図 PL-54	2	赤生土器 壺	埋土 口縁部片	口 底 - 高	細砂/良好/にふ い/褐橙	口縁が緩く内湾。外面口縁部に横位のハケ目。内面ナデ。	
第102図 PL-54	3	赤生土器 壺	埋土 肩部片	口 底 - 高	細砂、赤色粒/良 好/黄橙	肩部に刺突を充填した円形貼付文を配す。	
第102図 PL-54	4	赤生土器 壺	埋土 肩部片	口 底 - 高	細砂、黒色粒/良 好/黄橙	頸部に2道止め縞状文、肩部に縞縞羽状文が施される。施 文具は9歯、15mm。	
第102図 PL-54	5	赤生土器 壺	埋土 肩部片	口 底 - 高	細砂、黒色粒/良 好/にふい/褐橙	頸部に3道止め縞状文、肩部に縞縞羽状文が施される。施 文具は7歯、13mm。	
第102図 PL-54	6	赤生土器 壺	埋土 肩部片	口 底 - 高	細砂、黒色粒/良 好/にふい/褐橙	頸部に3道止め縞状文、肩部に縞縞羽状文が施される。	
第102図 PL-54	7	赤生土器 壺	埋土 肩部片	口 底 - 高	細砂/良好/にふ い/褐橙	頸部に縞状文、肩部に縞縞羽状文が施される。	
第102図 PL-54	8	赤生土器 壺	埋土 肩部片	口 底 - 高	細砂、黒色粒/良 好/黄橙	肩部に縞縞羽状文が施される。	
第102図 PL-54	9	赤生土器 壺	埋土 肩部片	口 底 - 高	細砂/ふつう/にふ い/褐橙	頸部から肩部にかけてLRの縄文を横位施文する。	
第102図 PL-54	10	赤生土器 鉢	埋土 口縁部片	口 底 15.7 高 (4.6)	細砂/良好/褐橙	外内面赤彩、外面ミガキ、内面ハケ目。	
第102図 PL-54	11	赤生土器 高杯	埋土 口縁部片	口 底 13.8 高 (3.2)	細砂/良好/橙	杯部の外内面赤彩、ミガキ。	
第102図 PL-54	12	赤生土器 蓋	埋土 柄み部	口 底 - 高	細砂/良好/褐灰	杯状の柄みで、上端径4.5cm、内外面ナデ。	

石器

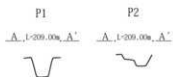
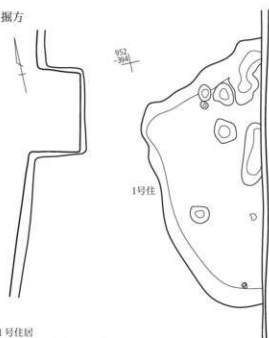
種別番号 図版番号	No.	器種・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
第102図 PL-54	13	敲石 扁平棒状物	埋土	17.2	5.3	2.4	312.2	小1部下端に打撃痕がある。	流紋岩



床面

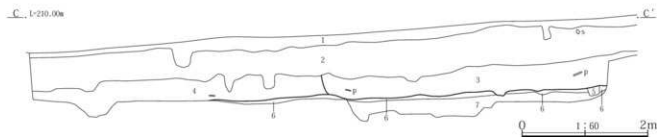


掘方



4区1号住居

- 1 灰黄褐色土 表土。(調査区土層の1層と同じ)
- 2 灰黄褐色土 As-Aを含む。(調査区土層の2層と同じ)
- 3 にぶい黄褐色土 白色軽石、黄褐色軽石、炭化物を含む。
- 4 にぶい黄褐色土 3層に似るが、締まっている。
- 5 にぶい黄褐色土 白色軽石、ロームブロックを含む。
- 6 明黄褐色土 明黄褐色土ブロックを多く含む。住居床面を形成する上。
- 7 にぶい黄褐色土 ロームブロックを多く、黄褐色粒、白色軽石を含む。(床下)



第104図 城郭北東部4区1・2号住居平面図、1号住居出土遺物

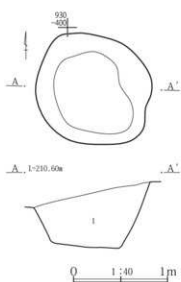
第62表 城郭北東部 3区2号住居出土遺物観察表

土器類		種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
種別番号 図版番号	No.						
第103図 PL-54	1	弥生土器 甕	埋土 口縁部片	口 底 -	- 高 -	- 細砂/良好/ - 褐 - 明黄橙	口縁部に4段の粘土紐積上げ痕を残す。器面の荒れが著しい。

第63表 城郭北東部 4区1号住居出土遺物観察表

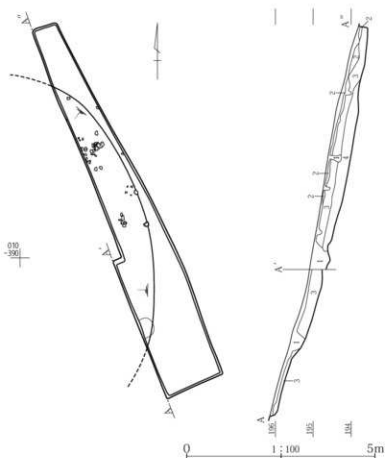
土器類		種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
種別番号 図版番号	No.						
第104図 PL-54	1	弥生土器 甕	埋土 肩部片	口 底 -	- 高 -	- 細砂/良好/ - 褐 - 明黄橙	頸部に2連止め縷状文を廻らせる。
第104図 PL-54	2	弥生土器 甕	埋土 肩部片	口 底 -	- 高 -	- 細砂/良好/ - ぶい - 褐 - 明黄橙	頸部に2連止め縷状文、肩部に帯帷羽状文が施される。
第104図 PL-54	3	弥生土器 甕	埋土 肩部片	口 底 -	- 高 -	- 細砂/良好/ - ぶい - 褐 - 明黄橙	肩部に帯帷羽状文が施される。施文具は5歯、9mm。
第104図 PL-54	4	弥生土器 甕	埋土 肩部片	口 底 -	- 高 -	- 細砂/良好/ - 褐 - 明黄橙	肩部に帯帷羽状文が施される。

石器		器種 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材
種別番号 図版番号	No.								
第104図 PL-54	5	石核 棒状礫	埋土	9.7	6.2	4.7	336.7	背面側で幅広剥片を剥離する。断面三角形状を呈する礫で、砂岩。裏面側の縁には弱い敲打痕が残る。	



3区1号土坑

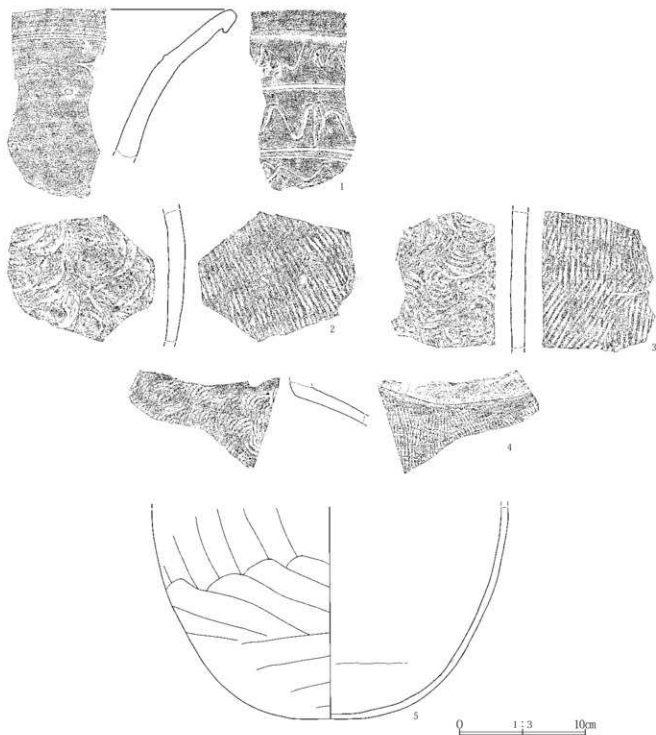
黒褐色土 白色軽石、黄褐色粒を少量含む。粘質。



10メートル 1号古墳

- 1 灰黄褐色土 表土。(調査区上層の1層と同じ)
- 2 灰黄褐色土 AS-Aを含む。(調査区上層の2層と同じ)
- 3 ぶい黄褐色土 明黄褐色土ブロックを含む。締まりなし。
- 4 黒褐色土 明黄褐色土ブロックを含む。(古墳周溝の埋没土)

第105図 城郭北東部3区1号土坑、1号古墳平面図



第106図 城郭北東部1号古墳出土遺物

第64表 城郭北東部 古墳出土遺物観察表

土器類		種類 器種	出土位置 残存率	計測 寸法(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考	
神宮番号 図版番号	No.							
第106図 PL.-	1	須恵器 甕	埋土 口縁片	口 底	- 高 -	細砂軽石/還元焼、 良好/灰オリブ	折り返し口縁、外面は1本単位の波状文と沈線文。	
第106図 PL.-	2	須恵器 甕	埋土 胴部片	口 底	- 高 -	細砂粒/還元焼、 良好/灰	外面は平行印き、内面は青海波文。	
第106図 PL.-	3	須恵器 甕	埋土 胴部片	口 底	- 高 -	細砂粒/還元焼/灰	外面は平行印き、内面は青海波文。	
第106図 PL.-	4	須恵器 甕	埋土 胴部小片	口 底	- 高 -	細砂粒/還元焼/灰 焼	外面は格子印き、内面は青海波文。	胴部接合部から剥離
第106図 PL.-	5	土師器 甕	埋土 胴部～底部片	口 底	- 高 -	細砂粒、粗砂粒/ 良好/にぶい赤褐	胴部外面は斜めのへら削り、内面は撫で。内面下位に接合痕	

第3節 城郭北東部における縄文～古墳時代の遺構と遺物



第107図 城郭北東部遺構外出土遺物

第4章 富岡城跡の調査

第65表 城郭北東部 縄文～古墳時代遺構外出土遺物観察表

縄文土器類								文様の特徴等		摘要
種別番号 図取番号	No.	器形	部位	出土位置	胎土/焼成/色調					
第107図 PL-	1	深鉢	胴部破片	埋土	繊維/ふつう/橙				胴部の括れ部に爪形刺突をもつ平行沈線を横位に数段巡らせ、以下にR Lの縄文を施す。	有尾式
第107図 PL-	2	深鉢	胴部破片	埋土	繊維/ふつう/橙				胴部にR Lの縄文を施す。	有尾式
土器類										
種別番号 図取番号	No.	器種	出土位置	残存率	計測値(cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴		摘要	
第107図 PL-	3	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂/良好/橙	頸部に2連止め縷状文を2帯廻らせる。器面の荒れが著しい。		
第107図 PL-	4	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂、黒色粒/良好/橙	胴部に刺突を充填した内形貼付文を配す。		
第107図 PL-	5	赤生土器 壺	口縁部片	口底	-	高-	細砂/良好/黄橙	折り返し口縁の口縁部・頸部に縷描波状文を廻らせる。		
第107図 PL-	6	赤生土器 壺	口縁部片	口底	-	高-	細砂/良好/黄橙	折り返し口縁で、器面の荒れが著しい。		
第107図 PL-	7	赤生土器 壺	口縁部片	口底	-	高-	細砂/良好/黄橙	折り返しの短口縁で、外内面ナデ。		
第107図 PL-	8	赤生土器 壺	口縁部片	口底	-	高-	細砂/良好/にぶい黄橙	2段の折り返し口縁で、口唇部と有段部にハゲ目工具による刺突を廻らせる。内面ナデ。		
第107図 PL-	9	赤生土器 壺	口縁部片	口底	-	高-	細砂/良好/橙	口縁部に6段の粘土組植上げ痕を残し、内面ナデ。		
第107図 PL-	10	赤生土器 壺	口縁部片	口底	-	高-	細砂、赤色粒/良好/橙	2段以上の折り返し口縁で、有段部にハゲ目工具による刺突を廻らせる。内面ナデ。		
第107図 PL-	11	赤生土器 壺	口縁部片	口底	-	高-	細砂、繊維/ふつう/橙	外内面ナデか。器面の荒れが著しい。		
第107図 PL-	12	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂、黒色粒/良好/黄橙	頸部に粘土組植上げ痕を残し、内面ナデ。		
第107図 PL-	13	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂、黒色粒/良好/黄橙	胴部に粘土組植上げ痕を残し、L Rの縄文を横位施文する。内面ナデ。		
第107図 PL-	14	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂、黒色粒/良好/黄橙	頸部に3連止め縷状文を廻らせる。器面の荒れが著しい。		
第107図 PL-	15	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂/良好/黄橙	頸部に縷状文、胴部に縷描羽状文が施される。施文具は9歯、22mm。		
第107図 PL-	16	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂/良好/黄橙	頸部に縷状文、胴部に縷描羽状文が施される。施文具は7歯、11mm。		
第107図 PL-	17	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂/良好/黄橙	頸部に2連止め縷状文、胴部に縷描羽状文が施される。施文具は8歯、15mm。		
第107図 PL-	18	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂、繊維/ふつう/黄橙	頸部に2連止め縷状文、胴部に縷描羽状文が施される。器面の荒れが著しい。		
第107図 PL-	19	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂/良好/黄橙	頸部に縷状文、胴部に縷描羽状文が施される。		
第107図 PL-	20	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂/良好/黄橙	頸部に2連止め縷状文、胴部に縷描羽状文が施される。施文具は6歯、11mm。		
第107図 PL-	21	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂/良好/黄橙	頸部に縷状文、胴部に縷描羽状文が施される。		
第107図 PL-	22	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂、赤色粒/良好/黄橙	胴部に縷描羽状文が施される。		
第107図 PL-	23	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂、繊維/ふつう/黄橙	胴部に縷描羽状文が施される。		
第107図 PL-	24	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂、黒色粒/良好/黄橙	胴部に縷描羽状文が施される。		
第107図 PL-	25	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂、赤色粒/良好/黄橙	胴部に縷描羽状文が施される。		
第107図 PL-	26	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂、黒色粒/良好/黄橙	胴部に縷描羽状文が施される。		
第107図 PL-	27	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂/良好/橙	胴部に縷描羽状文が施される。		
第107図 PL-	28	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂/良好/黄橙	胴部に縷描羽状文が施される。		
第107図 PL-	29	赤生土器 壺	胴部片	口底	-	高-	細砂/良好/黄橙	胴部にL Rの縄文を横位施文する。		
第107図 PL-	30	赤生土器 高杯	脚部片	口底	-	高-	細砂、白色粒/良好/にぶい黄橙	外面と杯部内面に赤彩。脚部ミガキ。		
第107図 PL-	31	赤生土器 壺か糞	底部	口底	5.8	高2.9	細砂、黒色粒/良好/にぶい黄橙	外内面ナデ。		
第107図 PL-	32	須恵器 灰	底部	口底	5.3	高-	細砂粒/還元色、良好/灰	口口整形。回転右回り、底部回転へうらし無調整。		
石器										
種別番号 図取番号	No.	器種	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況		石材
第107図 PL-	33	石核 分塊		8.3	8.5	4.2	318.8	背面側で幅広剥片を求心状に剥離する。		硬質泥岩
第107図 PL-	34	石核 片状		8.2	9.4	5.0	476.2	正面で上面の平坦な面より小型剥片を剥離するほか、裏面側小口部で小型剥片を剥離。小口部に比べ正面側の剥離は風化が著しく、時間差がある。		黒色安山岩
第107図 PL-	35	最石 柱状		12.5	5.5	4.0	336.1	小口部下端に敲打痕が残る。裏面側は凍結等で剥落。		変質安山岩
第107図 PL-	36	最石 棒状		11.7	3.0	3.0	177.4	上下両端の小口部に敲打・摩耗痕が残る。		緑色片岩
第107図 PL-	37	白石 棒状		12.5	6.7	6.0	462.6	背面側に強い摩耗痕。視察して背面側のみ部分的に機能部が残る。		粗粒輝石安山岩

2. 弥生時代の遺構外出土土器 (第107図、第65表)

出土の多くは、2～4区の城郭築城時の整地盛り土下となる基本土層IV層中から出土した。

3～31は後期末葉の土器で、壺および甕の器種に、折り返し口縁となる土器や、肩部に刺突を充填した円形貼付文をもつ土器、腹状文や柳描波状文が描かれる土器がある。31は外面と杯部内面を赤彩した高杯の脚部である。

3. 平安時代の遺構外出土土器 (第107図、第65表)

この時期の遺構は全く検出されていないが、32の須恵器杯の底部が出土している。7世紀後半の土器である。

4. 遺構外出土土器 (第107図、第65表)

出土した石器は少なく、図示したのは石核2点、敲石2点、台石1点の計5点である。他に剥片として4点あり、珪質頁岩、硬質頁岩を石材に用いている。

第4節 中世城郭

中世城郭である富岡城の調査にあたっては、平成22年度調査で城郭南西部が調査対象とされ、翌平成23年度調査では城郭北東部の西斜面となる細長い範囲(機能保証道路)が調査対象となった。山崎一氏の『群馬県古城址の研究』(1972)に掲載された富岡城の縄張り図から、平成22年度調査対象範囲は城郭の主郭西側に位置する郭から城郭外の平坦面までであることが想定され、主郭の西側郭、この郭の西側を画する堀切り、さらに西側に付随する小郭の検出が予測されていた。一方、平成23年度調査対象範囲は、主郭の東側を画する堀切りの北端付近から主郭の北東に位置する郭の西縁斜面と想定され、主郭東側の堀の一部と、主郭の北東側郭の縁および平成22年度調査で検出されたような横堀の存在が予測されていた。

以下、城郭南西部の調査と城郭北東部の調査に分けて記載する。なお、本書の記述にあたり、調査時に用いた各調査年度での区・トレンチ名ではなく、主郭の西側に位置する郭を2郭、主郭の北東側に位置する郭を3郭、2郭の西側に位置する小郭を4郭、4郭の西側に位置す

る平坦面を城郭外平坦面として説明する。

1 城郭南西部の調査

城郭南西部の調査にあたっては、『群馬県古城址の研究』(山崎 1972)での富岡城の縄張り図を参考に、調査地の東端となる平坦部(主郭の西隣に位置する)を1区、堀を挟んだ西側の斜面部を2区、1区の北側に一段低い帯状のテラス部分を3区、さらに調査区の西端となる平坦面を4区として設定し、まずは城郭面の調査を行った。さらに、城郭面の調査終了後、築城時の盛り土状況をトレンチにより確認し、併せて築城前の旧表土の残存状況を確認した。

以下、各郭および堀について記載する。

1.2 郭 (第108～112図、PL.39～45)

本郭は調査時に1区として調査した箇所である。郭の平坦面は表土およびAs-A混土層で覆われていた。また、平坦面の西縁中央は、西から東へと延びる現道により、一部が削平され斜路となっていた。

郭面: As-A混土層を除去した郭面の状況は、北面および西面は急角度の斜面となり1号ないし2号堀へ続き、南側は高田川へと続く急斜面となり、北縁がやや弧状となるものの西縁は直線的となる。郭面は概ね平坦で、西側の辺が狭くなる台形状の形状を呈する。詳細な観察では、凝灰岩の小礫を含む硬く締まった粘質土が、郭面の縁を取り巻くようにあり、むしろ郭中央部がやや低い状態となる。最も高い位置は南西隅で、部分的に基盤層の凝灰岩岩盤層の一部が露頭する。土層に関する遺構は検出されていないが、後述する堀や築城時の整地盛り土等を考えると、土層の存在は否定できない。城郭に伴う建物等の遺構はなく、郭面で検出された掘立遺構ならびにピットは埋土をAs-A混土とする遺構で、本城郭に伴う遺構ではない。

規模: 南北幅23.0m 東西幅(21.0)m

面積: (354.0) m²

北面の比高差: 北面中段から郭面3.15m

2号堀底面から郭面5.1m

西面の比高差: 1号堀底面から郭面0.3m

築城時の整地盛り土: 郭の北斜面において、斜面の上

土層が凝灰岩礫を多量に含んだ粘質土、その下にAs-Bを含む黒色土層、さらに黒褐色土層、黄色ローム層という層序となっていたことから、斜面上位層の凝灰岩礫を多量に含んだ粘質土が築城の際に斜面部に盛り土した層であることが明らかであった。このため、築城に関わる盛り土の構築状況の調査を行った。築城前の旧地形は、南側は高田川に面する南急斜面で、丘陵上は高田川に寄った南側が高く、北側への緩斜面から谷への急斜面となる。また、西側へも緩斜面となる。この三方向の斜面地に対し、郭の平坦面を削出するため、盛り土による造成がなされたようで、その際に先述した1号古墳のも削平氏他ものと考えられる。第109・111・112図に示したように、盛り土の厚さはCラインでみると郭の南縁で20cm、中央部で0cm、北縁で90cmの厚さを測り、Gラインでみる郭の西縁では45cmを測る。盛り土は斜面のより低い位置から進められ、徐々に高さを増していったことを、各土層断面から知ることができる。また、盛り土には基盤層の凝灰岩礫が大量に含まれ、ロームや粘質土のブロックが混在する土が用いられ、硬く締まっている。これら盛り土に混在する凝灰岩礫・ローム・粘質土は、各堀の掘削に伴って出たものであり、特に凝灰岩礫は1号堀での岩盤掘削の跡をみると理解できる。

2. 1号堀 (第109・112図、PL.42)

縄張り図から予測していた堀で、2郭と4郭の間にあり、1号堀として調査した。堀の中央部は西から東へと延びる規道のため、一部を客土されていたが、大部分は堀の形状を籠気にとどめ、表土およびAs-A混土層、As-Aの一次ないし二次堆積層で覆われていた。また、高田川に面する南急斜面にも堀の続きとなる縦堀状の痕跡が残っていた。

本堀は2郭の西側および4郭の東側を画する堀で、丘陵の尾根を東西に分断するように、基盤層である凝灰岩岩盤層を掘り込んだ掘り、南北に走向する。堀の埋没土はAs-A堆積層下となる第112図Hライン4層から10層は締まりの弱い暗褐色土を主体とし、以下の鈍い黄褐色土を主体とする12・13層とは大きく異なり、埋没時期の異なる可能性がある。埋没時期が異なる状況は、後述の2号堀でも確認されていることでもあり、両堀の埋没過程に共通する(堀は改修の可能性もある)。

堀の規模は、調査範囲内では長さ26m、上幅(2郭西縁から4郭東縁)8.8m、底面幅0.7~1.2m、堀中央部での2郭面からの深さ4.4m、4郭面からの深さ2.4mを測る。底面は平坦ではあるが、中央部が最も高く、南側および北側の両方向へ下り勾配となり(1ライン)、南側はそのまま縦堀へと続くと思われる。北側も谷側へ堀が続くことは、調査区境の土層断面で確認しているが、堀の底面位置よりもやや高い位置で谷側へと続く。ただし、谷側に縦堀が存在するかは不明。

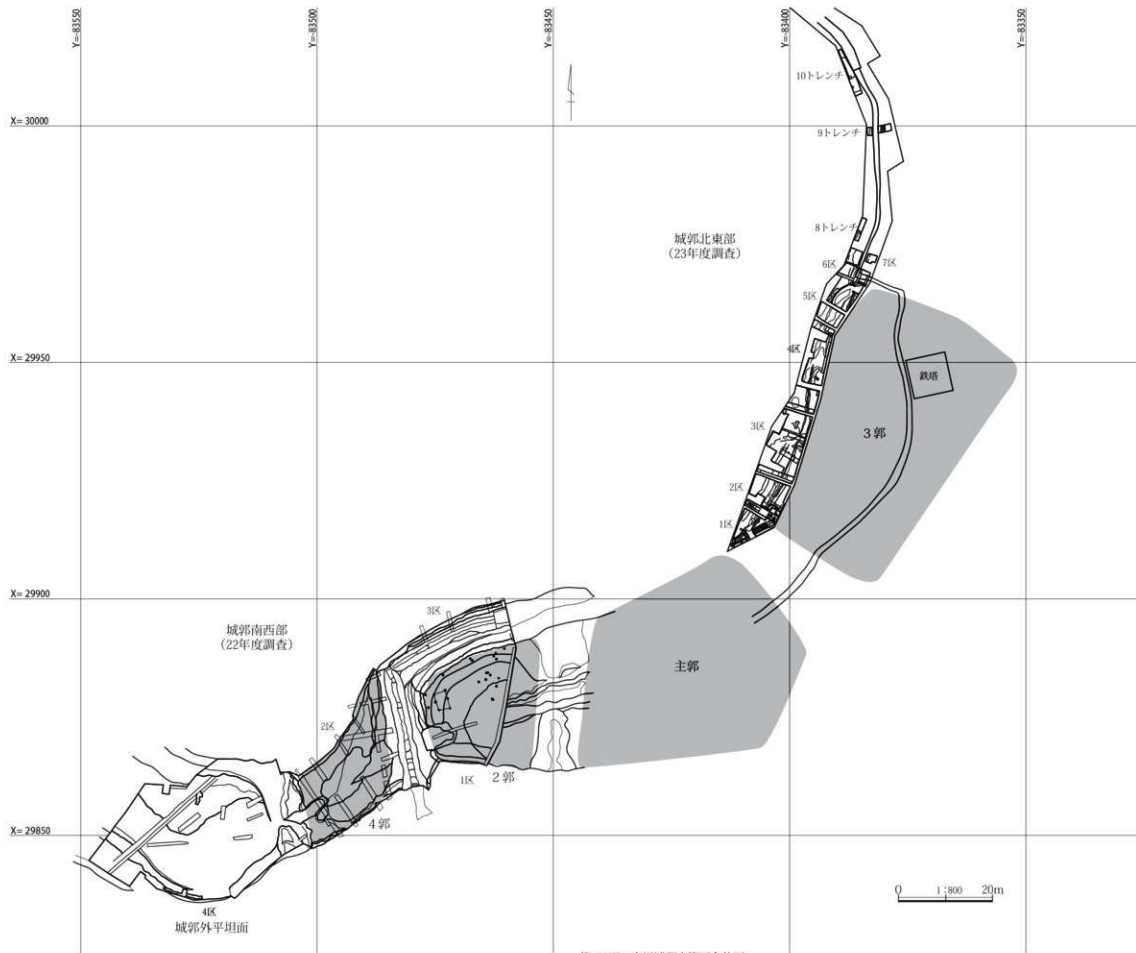
また、底面には橋脚等の柱の痕跡はなく、さらに堀の東西両面にもそうした痕跡は確認できなかったことから、堀を横断する施設は考え難い。

3. 2号堀 (第109~111図、PL.43~45)

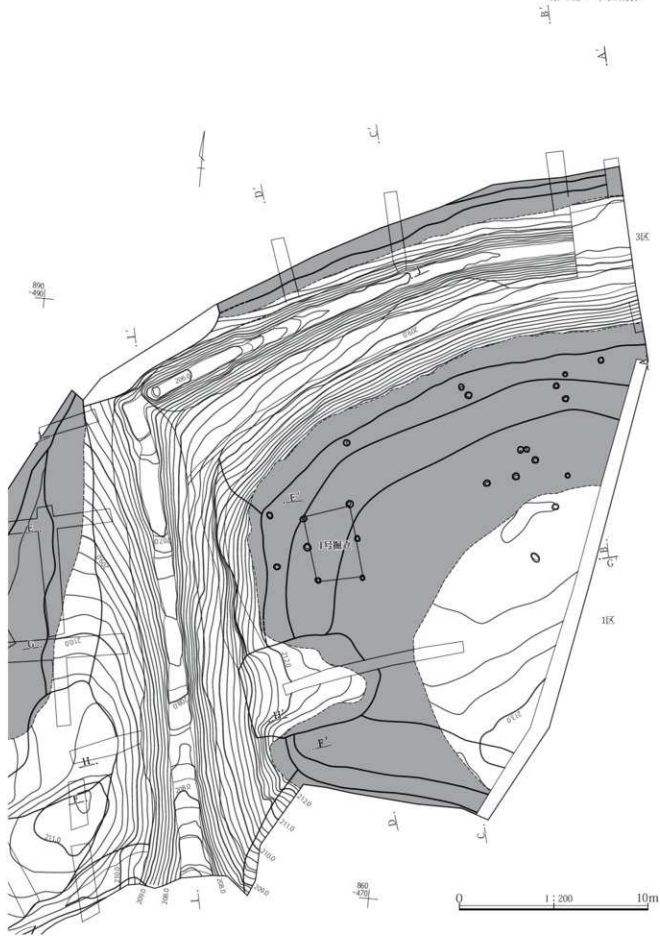
調査時に2郭の北斜面下にテラス状の平坦面を確認したことから、腰郭の存在を想定して3区として調査した箇所である。トレンチによる確認の結果、2郭の北面を画する堀であることが判明したため、2郭北斜面の調査と併せて、2号堀として調査した。なお、2郭北斜面一帯には、As-Aの二次堆積層が厚く確認されている。

本堀は2郭の北側を画する堀で、2郭北斜面下の丘陵斜面に沿うように東西方向に走向し、西端は1号堀の北側に接続、東側は調査区外へと延びる。斜面部のロームや粘土層を掘り込んだ堀で、一部では基盤層の凝灰岩岩盤層まで掘り込んでいる。堀の埋没土の状況は、第111図CラインではAs-A堆積層下となる4層から7層までは鈍い黄褐色土や暗褐色土、黒褐色土を主体とし、以下の9・11層上面はかなり堅く硬化し、凝灰岩礫層が薄く散乱する。さらに、9層以下の各層に粘質土が多量に混在する土質は、7層より上層の埋没土とは大きく異なる。そうした9層上面を境に、上層の埋没土と下層の埋没土には埋没の過程に違いがあることが考えられ、それが時間差であることも同時に考えられる。つまり、堀の改修により底面位置が異なっていると考えることができる。同様な状況は、第110図Aライン、第111図Bラインにも確認でき、先述した1号堀においても堀の改修の可能性をみることができる。

堀の規模は、調査範囲内で長さ27.0m、堀中央部での上幅5.0m、底面幅1.0m、深さ1.0m、2郭面から底面までの比高差5.1mを測る。底面は狭く平坦ではあるが、

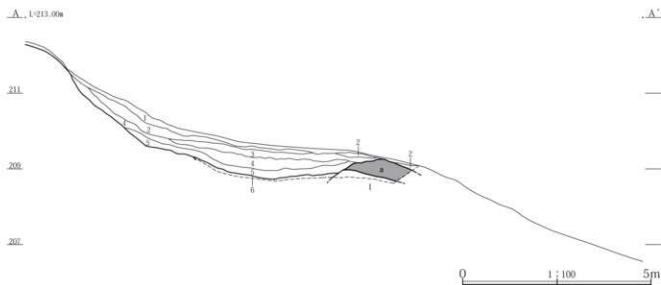


第108図 富岡城調査範囲全体図



第109図 2 郭平面図

第4章 富岡城跡の調査

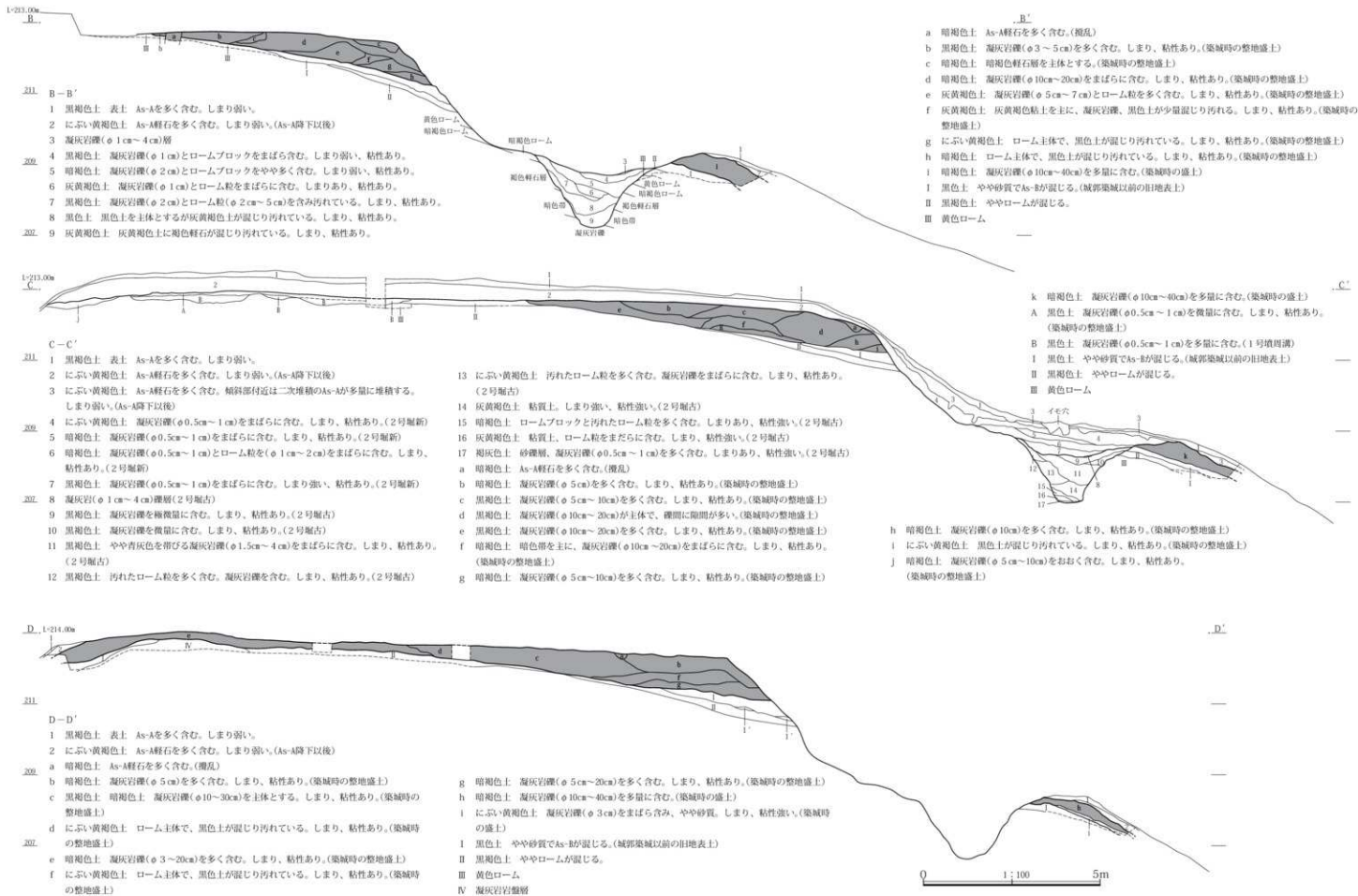


城郭南西部 城郭土層断面注記

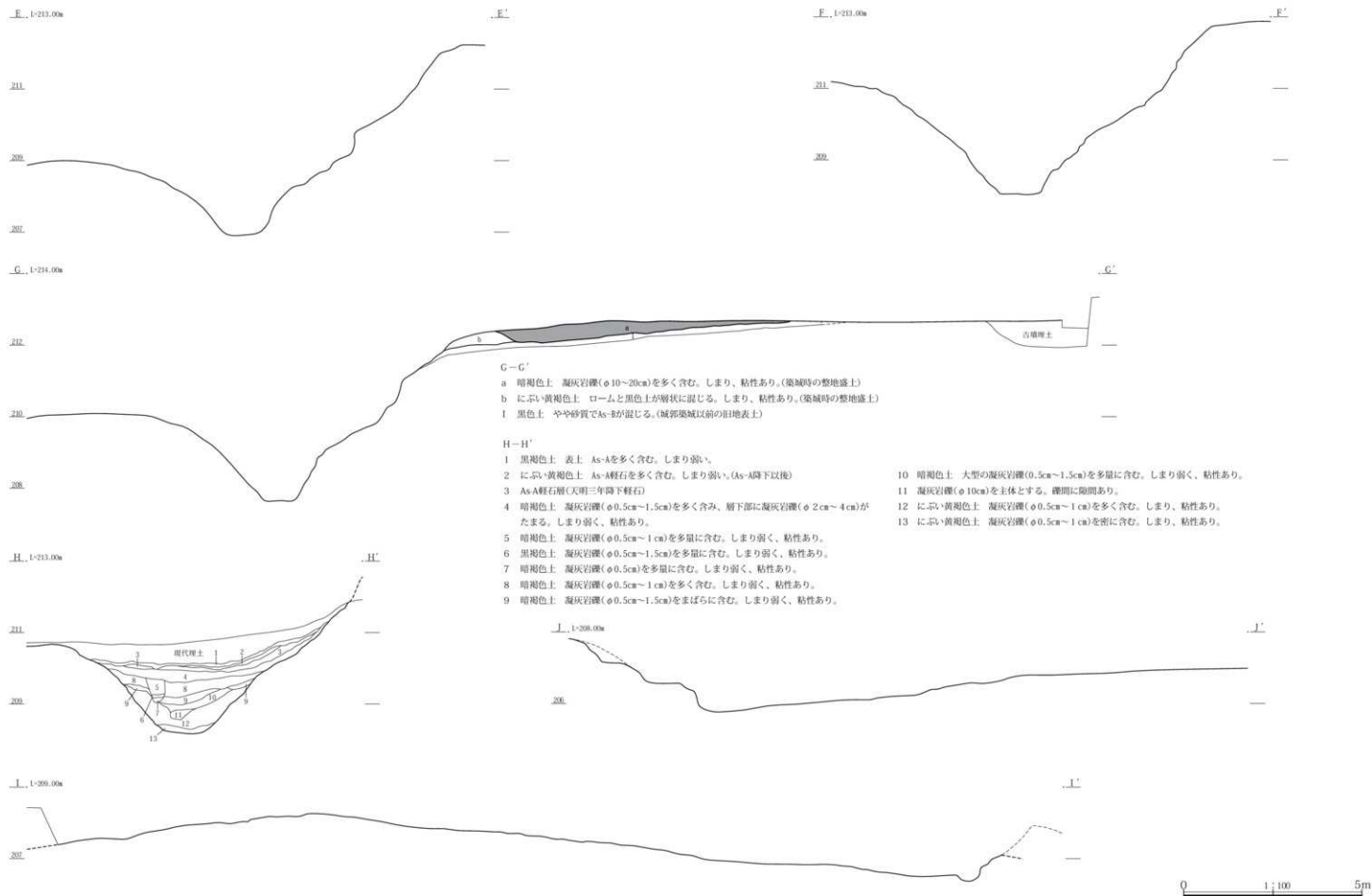
A - A'

- 1 黒褐色土 表土 As-Aを多く含む。しまり弱い。
- 2 にふい黄褐色土 As-A軽石を多く含む。傾斜部付近は2次堆積のAs-Aが多量に堆積する。しまり弱い。(As-A降下以後)
- 3 にふい黄褐色土 2層よりやや明るい。凝灰岩礫(φ0.5cm～1cm)を微量に含む。しまりやや弱い。
- 4 にふい黄褐色土 2層よりやや暗い。凝灰岩礫(φ0.5cm～1cm)を微量に含む。しまりやや弱い。
- 5 暗褐色土 凝灰岩礫(φ0.5cm～1cm)をまばらに含む。しまりやや弱い。
- 6 黒褐色土 凝灰岩礫(φ1cm)をまばらに含む。ロームブロックをまばらに含む。粘性あり。
- a 暗褐色土 凝灰岩礫(φ10cm～40cm)を多量に含む。(築城時の盛土)
- 1 黒色土 やや砂質でAs-Bが混じる。(城郭築城以前の旧地表土)

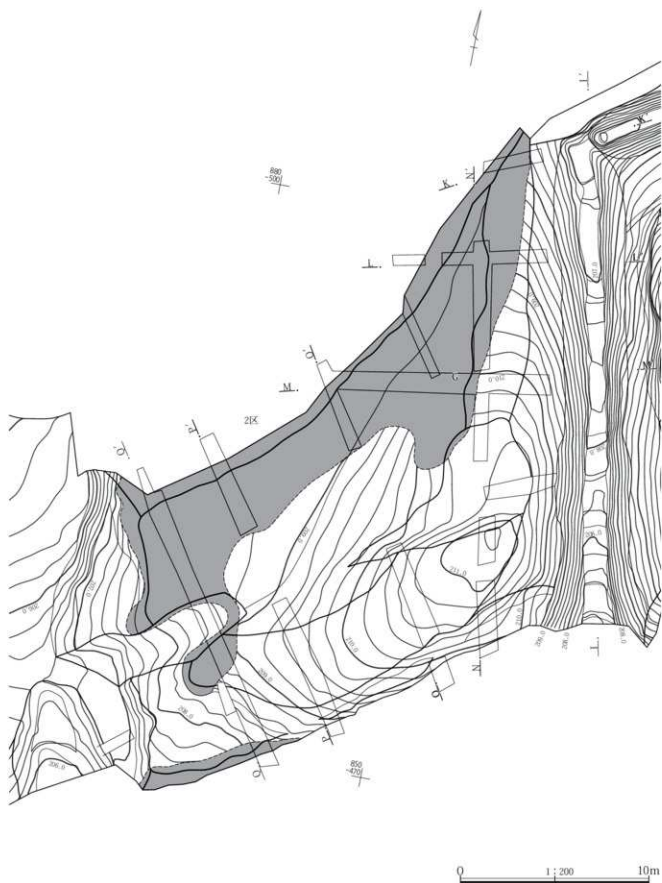
第110図 2郭断面図 - 1



第111図 2郭断面図-2



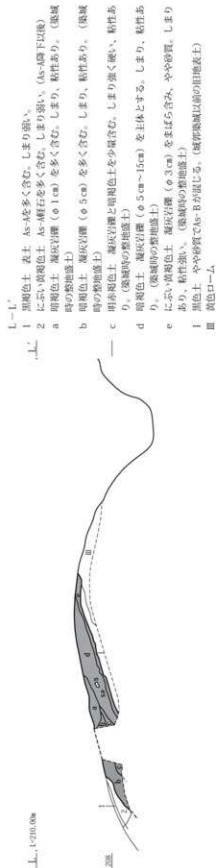
第112図 2郭断面図-3



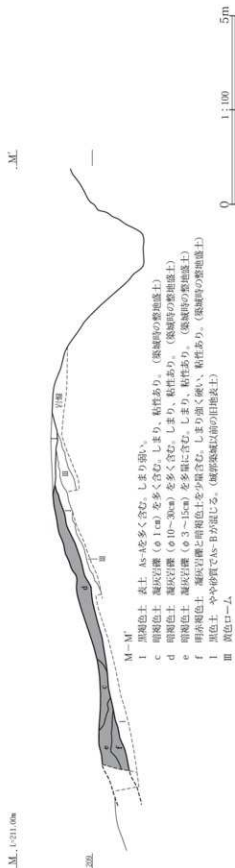
第113図 4 郭平面図



- K-K'
- a 暗褐色土 凝灰岩層 (φ 1cm) を多く含む。しまり、粘性あり。(築城時の築地盛土)
 - b 暗褐色土 凝灰岩層 (φ 5cm) を多く含む。しまり、粘性あり。(築城時の築地盛土)
 - i 黒色土 やや砂質でAs-Bが混じる。(築部築城以前の旧地表土)
 - III 黄色ローム



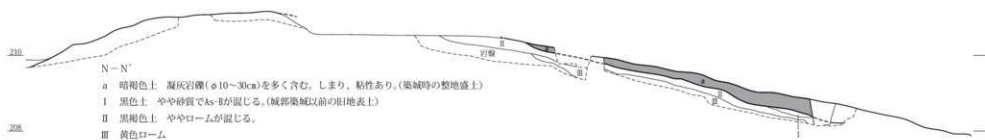
- L-L'
- 1 暗褐色土 表土 As-Aを多く含む。しまり強い。
 - 2 に近い暗褐色土 As-A層石を多く含む。しまり強い。(As-A層下以後)
 - a 暗褐色土 凝灰岩層 (φ 1cm) を多く含む。しまり、粘性あり。(築城時の築地盛土)
 - b 暗褐色土 凝灰岩層 (φ 5cm) を多く含む。しまり、粘性あり。(築城時の築地盛土)
 - c 明赤褐色土 凝灰岩層と暗褐色土を少量含む。しまり強く硬い。粘性あり。(築城時の築地盛土)
 - d 暗褐色土 凝灰岩層 (φ 5cm~15cm) を主体とする。しまり、粘性あり。(築城時の築地盛土)
 - e に近い暗褐色土 凝灰岩層 (φ 3cm) をまばら含む。やや砂質。しまりあり。粘性強い。(築城時の築地盛土)
 - f 黒色土 やや砂質でAs-Bが混じる。(築部築城以前の旧地表土)
 - III 黄色ローム



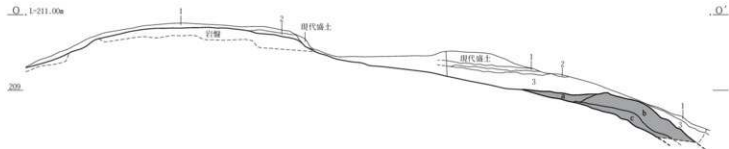
- M-M'
- 1 暗褐色土 表土 As-Aを多く含む。しまり強い。
 - c 暗褐色土 凝灰岩層 (φ 1cm) を多く含む。しまり、粘性あり。(築城時の築地盛土)
 - d 暗褐色土 凝灰岩層 (φ 10~30cm) を多く含む。しまり、粘性あり。(築城時の築地盛土)
 - e 暗褐色土 凝灰岩層 (φ 3~15cm) を多量に含む。しまり、粘性あり。(築城時の築地盛土)
 - f 明赤褐色土 凝灰岩層と暗褐色土を少量含む。しまり強く硬い。粘性あり。(築城時の築地盛土)
 - i 黒色土 やや砂質でAs-Bが混じる。(築部築城以前の旧地表土)
 - III 黄色ローム

第114図 4郭断面図 - 1

N, 1-212.00m



Q, 1-211.00m



P, 1-210.00m



Q, 1-209.00m



O-O'

- Ⅰ 黒褐色土 表土 As-Aを多く含む。しまり強い。
- 2 As-A軽石層(大明三年降下軽石)
- 3 にぶい黄褐色土 凝灰岩礫(φ0.5cm~1cm)をまばらに含む。しまり強く、粘性あり。
- a 暗褐色土 凝灰岩礫(φ0.5cm~1cm)を多く含む。しまり、粘性あり。(築城時の整地盛土)
- b 暗褐色土 凝灰岩礫(φ3cm~15cm)を多量に含む。しまり、粘性あり。(築城時の整地盛土)
- c 明赤褐色土 凝灰岩礫と暗褐色土を少量含む。しまり強く硬い、粘性あり。(築城時の整地盛土)
- Ⅰ 黒色土 やや砂質でAs-Bが混じる。(城跡築城以前の旧地表土)

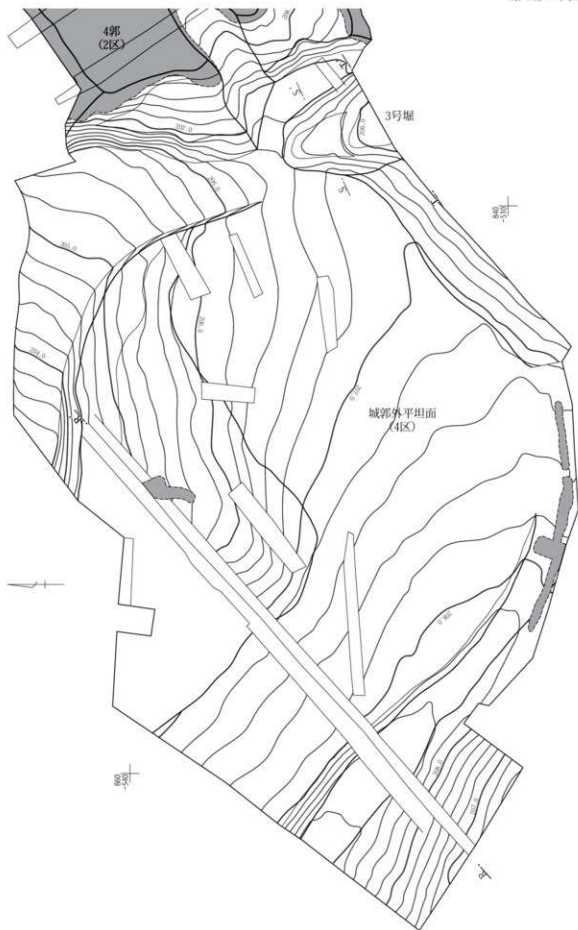
P-P'

- Ⅰ 黒褐色土 表土 As-Aを多く含む。しまり強い。
- a 暗褐色土 凝灰岩礫(φ0.5cm~1cm)を多く含む。しまり、粘性あり。(築城時の整地盛土)
- b 暗褐色土 凝灰岩礫(φ3cm~15cm)を多量に含む。しまり、粘性あり。(築城時の整地盛土)
- Ⅰ 黒色土 やや砂質でAs-Bが混じる。(城跡築城以前の旧地表土)
- Ⅱ 黒褐色土 ややロームが混じる。
- Ⅲ 黄色ローム

Q-Q'

- Ⅰ 黒褐色土 表土 As-Aを多く含む。しまり強い。
- a 暗褐色土 凝灰岩礫(φ3cm~15cm)を多量に含む。しまり、粘性あり。(築城時の整地盛土)
- b 暗褐色土 凝灰岩礫(φ3cm~5cm)をまばらに含む。しまり、粘性あり。(築城時の整地盛土)
- Ⅰ 黒色土 やや砂質でAs-Bが混じる。(城跡築城以前の旧地表土)
- Ⅲ 黄色ローム

0 1:100 5m



第116圖 城外平坦面平面圖

0 1:200 10m

東側から西側への下り勾配となり（Jライン）、1号堀と接続する西端では本溝の方が一段低い。堀の傾斜角もかなり急で、谷側の堀上端部は盛り土により、さらに深さを増している。

この盛り土の状況は第111図に示しているが、盛り土には2郭での整地盛り土と同様に凝灰岩礫が大量に含まれており、築城当初の構築と考えられる。

以上の状況から、本堀は斜面に直行する縦堀と同様な機能を持つ「横堀」と考えられる。

4. 4 郭（第113～115図、PL.46・47）

本郭は調査時に2区として調査した箇所である。郭面は南東隅が最も高く、西傾斜ならびに北傾斜の斜面地となっており、表土およびAs-A混土層で覆われていた。また、調査区の中央を西から東へと延びる現道により、西側と東側で一部が削平されていた。

郭面：As-A混土層を除去した郭の状況は、郭の東側は1号堀で画され、西側は3号堀で画されるが3号堀は短く、現道の存在ならびに削平により、不明瞭な点がある。郭の南側は高田川に面する急斜面となり、北側も谷への急斜面となる。また、郭面の高い部分として、南東隅が最も高く、そこから続く郭の南側が西傾斜して徐々に西側へ下る。さらに、1号堀に面する南西隅から北側への東縁においても、南から北へ傾斜して徐々に北側へ下る。これら両方向の高い部分以外では、北西への緩斜面となり、北西縁は整地盛り土により造成されている。

郭面の詳細な観察では、郭の南側の高い部分の東半は基盤層の凝灰岩岩盤層が路頭し、西半はローム面となり、その幅は2.0m前後を測る。東縁の北傾斜となる高い部分では、南半に凝灰岩岩盤層が路頭し、北半はローム面ないし盛り土がなされている。その幅も2.0m前後を測る。これらのことは第114・115図に示した。土居等が存在した可能性はないものの、記述した南側と東縁の高い帯状の部分が、城郭内の路とする見方もできない。

規模：南北幅13.5m 東西幅21.0m

面積：344.0㎡

東面の比高差：1号堀底面から郭面2.4m

築城時の整地盛り土：トレンチ調査により郭の北西縁一帯に盛り土を確認し、2郭と同様に築城に関わる盛り土構築状況の調査を行った。築城前の旧地形は、凝灰岩

岩盤層が路頭する南東隅を頂部に、北西への狭い緩斜面地で、直くに谷への急斜面となる。この北西への緩斜面に対し、郭の平坦面を維持するため、盛り土による造成がなされたと考えられる。第115図に示したように、盛り土の厚さはNラインの北端で40cm、Oラインの北端で70cm、Qラインの北端で75cmを測る。盛り土は斜面寄りから進められる箇所もある。また、盛り土には基盤層の凝灰岩礫を多く含んだ混土が用いられ、硬く締まっている。

5. 3号堀（第116・117図、PL.46）

トレンチ調査で確認された堀で、縄張り図には記されていない。丘陵の尾根が最も狭くなる箇所、4郭西側に位置し、3号堀として調査した。高田川に面する南急斜面にも、堀の続きとなる縦堀状の痕跡が匏気に残っていた。

本堀は4郭の西側を画する堀で、丘陵の尾根を南側から北方向に掘り込んだ掘り、尾根の途中で立ち上がる。堀の埋没土はAs-A堆積層下に凝灰岩礫を多く含む暗褐色土を主体としている。

堀の規模は、調査範囲内では長さ5.6m、上幅4.6m、底面幅2.5m、深さ0.7mを測る。底面は概ね平坦ではあるが、南急斜面方向へ下り勾配となり、そのまま縦堀へと続くと思われる。堀の立ち上がり部は、尾根のほぼ中央付近となり、対する北側は削平されていると共に現道により調査できなかったが、同様な堀が存在していた可能性は高く、中央部が土橋状となる堀であった可能性もある。

6. 城郭外平坦面（第116・117図、PL.47）

4郭および3号堀の西側に位置する平坦面で、尾根の最も狭くなった3号堀部分よりやや広がる。平坦面の南縁は屈曲するように曲がり、高田川に面する南急斜面となる。この南縁の一段高くなった部分が西からの現道となっており、本平坦面を回り込むように北側の谷部へ下り込む道となっていた。そのため北端一帯は削り込まれ、西側についても工事が進められていたことから、平坦面の全容は明らかではない。

トレンチ確認の結果、現道となっていた平坦面南縁の一段高い部分は、基盤層の凝灰岩岩盤層が露出している

R, 1-209.0m



R-R'

- 1 黒褐色土 表土 As-Aを多く含む。しまり弱い。
- 2 褐色土 As-Aを含む。凝灰岩礫を含む。しまり弱く、粘性あり。(現代の耕作土)
- 3 暗褐色土 As-A、凝灰岩礫を含む。褐色土上にロームが混じる。しまり弱く、粘性あり。(As-A降下以後)
- 4 褐色土 As-Aを含む。凝灰岩礫を含む。しまり弱く、粘性あり。(As-A降下以後)
- 5 暗褐色土 As-Aを含む。凝灰岩礫を含む。しまり弱く、粘性あり。(As-A降下以後)
- 6 褐色土 As-Aを含む。凝灰岩礫を含む。しまり弱く、粘性あり。(As-A降下以後)
- 7 褐色土 As-Aを含む。ロームが微量混じる。凝灰岩礫を含む。しまり弱く、粘性あり。(As-A降下以後)
- 8 褐色土 As-Aを含む。凝灰岩礫を含む。しまり弱く、粘性あり。(As-A降下以後)
- 9 As-Aが主体。(二次堆積か)
- I 黒色土 やや砂質でAs-Bが混じる。(城郭築城以前の旧地表土)
- II 黄色ローム
- III 暗褐色ローム、やや砂質、マープル状に里が入る。
- IV 灰黄色砂質ローム
- V 暗褐色ローム
- VI 褐色軽石(As-AP)
- VII 黄褐色軽石(As-BP)
- VIII 灰黄褐色粘土(暗色部か)
- IX 凝灰岩礫

S, 1-207.00m



S-S'

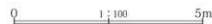
- 1 砕石混じり土 舗装下の客土
- 2 暗褐色土 As-Aを多量に含む。凝灰岩礫(φ 5cm)をまばらに含む。しまり強い、粘性あり。(As-A降下以後)
- 3 暗褐色土 As-A、凝灰岩礫(φ 0.5cm~1cm)を多量に含む。しまり強い、粘性あり。(As-A降下以後)
- 4 暗褐色土 凝灰岩礫(φ 0.5cm~3cm)を多量に含む。しまり強い、粘性あり。
- 5 黒褐色土 凝灰岩礫(φ 0.5cm~1cm)をまばらに含む。しまり強い、粘性あり。
- 6 暗褐色土 凝灰岩礫(φ 0.5cm~1cm)を多量に含む。しまり強い、粘性あり。

T, 1-208.00m



T-T'

- 1 砕石混じり土 舗装下の客土
- 2 暗褐色土 As-Aを多量に含む。凝灰岩礫(φ 2cm~3cm)をまばらに含む。しまり弱い、粘性あり。(As-A降下以後)
- 3 暗褐色土 As-Aを含む。しまり強い、粘性あり。(As-A降下以後)
- 4 黒褐色土 As-Aを多量に。凝灰岩礫はまばらに含む。しまり弱い、粘性あり。(As-A降下以後)
- 5 暗褐色土 As-Aを多量に含む。しまり弱い、粘性あり。(As-A降下以後)
- 6 黒褐色土 As-Aを多量に。凝灰岩礫(φ 0.5cm~1.5cm)をまばらに含む。しまり弱い、粘性あり。(As-A降下以後)
- 7 As-Aが主体。(二次堆積か)
- 8 暗褐色土 凝灰岩礫(φ 0.5cm~1cm)を多量に含む。しまり弱い、粘性あり。
- 9 暗褐色土 凝灰岩礫(φ 0.5cm~1cm)を少量含む。しまり弱い、粘性あり。



第117図 整地面断面図

状態で、平坦面はローンを削り込んで平坦にした面であり、平坦面の北側においては面の下位層にAs-A堆積層やAs-B混土層を確認したことから北斜面地であることが明らかとなった(Rライン)。以上の状況を踏まえて調査を行ったところ、平坦面は10～13m前後の幅で帯状に屈曲するように続くことがわかった。また、平坦面は城郭に伴う面であり、併せて現道となっていた一段高い部は土居の可能性をもち、城郭の西側へ速なる施設と考えることができる。

2 城郭北東部の調査

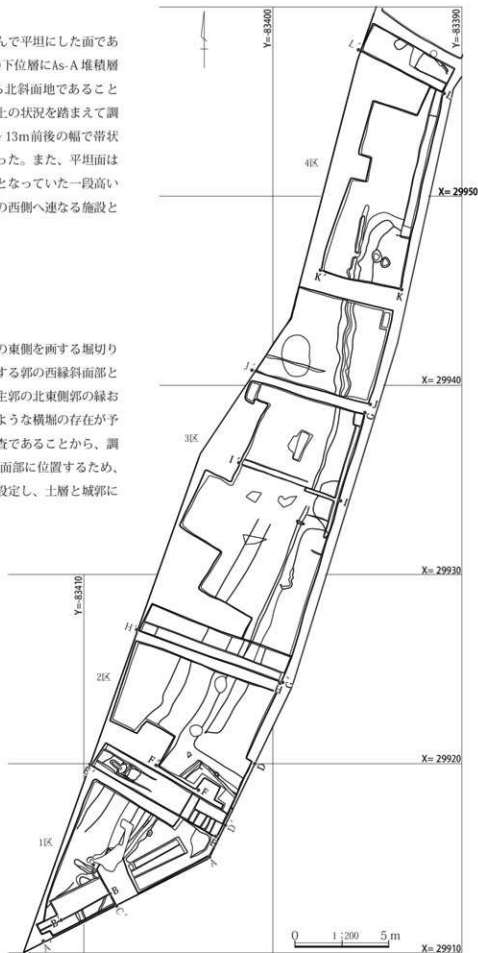
城郭北東部の調査範囲は、主郭の東側を画する堀切りの北端付近から主郭の北東に位置する郭の西縁斜面部と想定され、主郭東側の堀の一部、主郭の北東側郭の縁および平成22年度調査で検出されたような横堀の存在が予測されていた。機能保証道路の調査であることから、調査地の幅が狭く、併せて城郭の斜面部に位置するため、調査地全体に10箇所のトレンチを設定し、土層と城郭に関わる遺構の確認を行った。その結果を踏まえ、各トレンチ間を拡張する形で1区から5区までを設定し、城郭面の調査終了後、築城時の盛り土の状況を確認すると共に、築城前の旧表土の残存状況を確認した。

以下、検出された郭と堀について記載する。

1. 主郭と3郭の間の堀

(第118・120図、PL.48)

本堀は主郭の東側と、主郭の東側に位置する3郭の西側を画する堀で、丘陵の尾根を東西に分断するように南北に走向する。この堀の北端部付近の一部が調査範囲内に含まれ、1・2号トレンチとして確認し、その後1区および2区の南半で堀の



第118図 城郭北東部1～4区平面図

調査を行った。

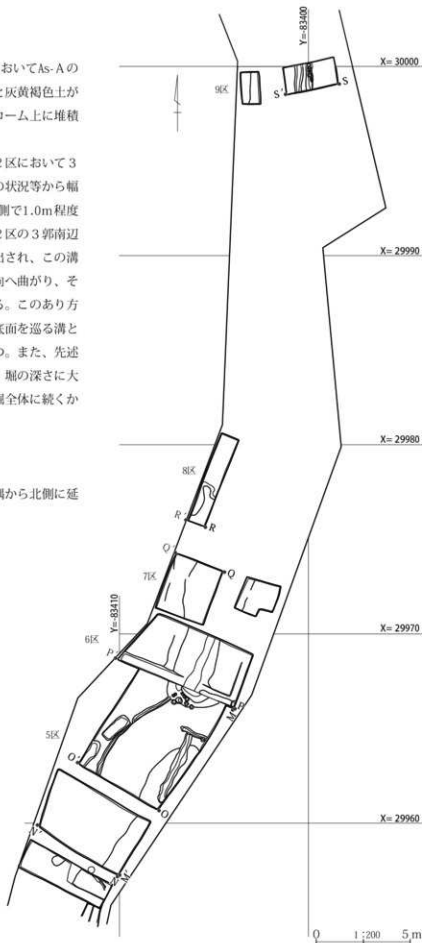
堀の埋没土は、第120図A～EラインにおいてAs-Aの一次ないし二次堆積層下に鈍い黄褐色土と灰黄褐色土が主体となり、ローンを掘り込む、或いはローン上に堆積していることがわかる。

調査範囲が狭く堀の規模は不明だが、2区において3郭の南辺が検出されていることや、底面の状況等から幅11.0m以上の堀と考えられ、深さは3郭側で1.0m程度と浅い。調査範囲内での底面は平坦で、2区の3郭南辺際に幅30cm前後、深さ25cmを測る溝が検出され、この溝が3郭の南西隅下部付近で直角に南西方向へ曲がり、その続きが1区の中央部でも検出されている。このあり方からすると、この溝は堀に伴って、堀の底面を巡る溝とも考えられ、何らかの施設の可能性をもつ。また、先述した城郭南西部での1号堀と比較すると、堀の深さに大きな差があり、この底面の深さの状態が堀全体に続くかは明らかにしえない。

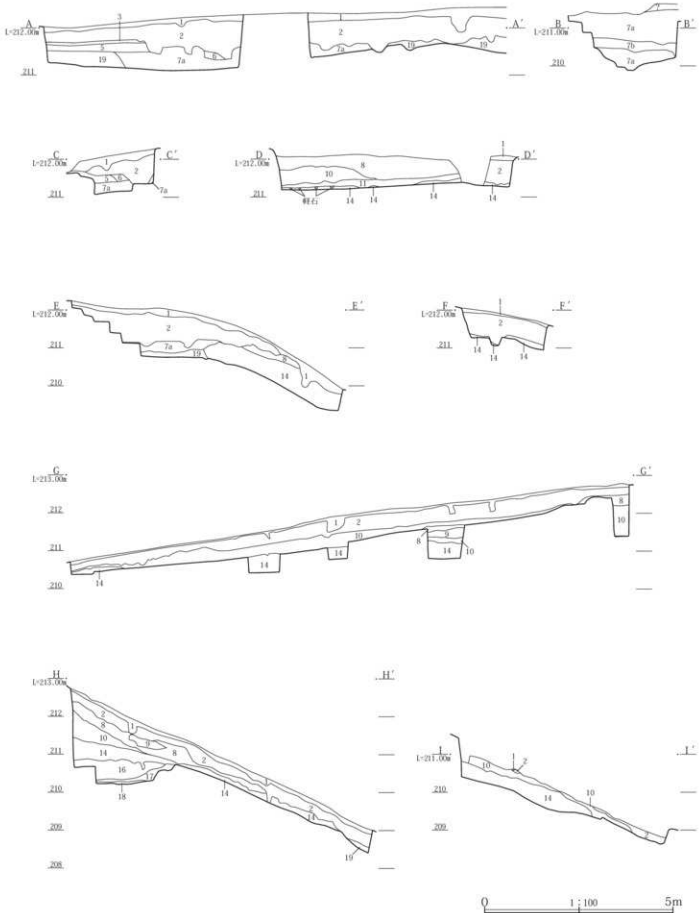
2. 3郭（第118～121図、PL.48～50）

郭の西斜面が調査地となり、郭の南西隅から北側に延びる西縁ないし西斜面を確認すべく、斜面に直行するように3～5号トレンチを設定して確認した。その結果、当初予測していた横堀は確認できなかった。その後、拡張した2～5区の調査を行った。

確認された3郭は、2区で郭の南辺下部と南西隅下部から西辺下部の一部、2区から続く西辺下部が3区の南端に検出したが、この位部分で一段低くなって、さらに緩やかな傾斜をもちつつ北側へ続く。検出できたのは郭の斜面部のみであることから、郭面の状況は不明。斜面部の土層を見ると、Hラインでは8～9層中に岩盤礫を多量に含むことから、先の2郭等でみられた城郭築城時の整地盛り土の状況と同様であることが理解できる。この整地盛り土は、3区

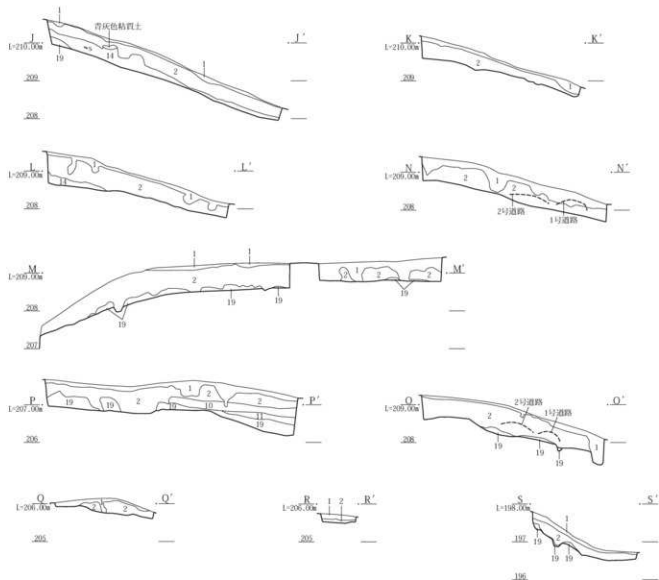


第119図 城郭北東部5～7区、8・9号トレンチ平面図



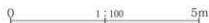
第120図 城郭北東部A~Iライン土層断面図

第4章 富岡城跡の調査



城郭北東部の土層注記

- 1 灰黄褐色土 表土。
- 2 灰黄褐色土 As-Aを含む。(天明三年以降)
- 3 As-A軽石層(天明三年降下軽石)
- 4 深い黄褐色土 白色軽石、細かな岩盤砕石を少量含む。やや粘質。(As-A降下前)
- 5 深い黄褐色土 白色軽石、黄褐色粒を多く含む。直上にAs-A軽石層が堆積する。
- 6 深い黄褐色土 白色軽石、黄褐色粒を多く含む。締まりなし。(土塁盛上内側の溝のフク上)
- 7a 深い黄褐色土 白色軽石、黄褐色粒を多く含む。締まっている。(整地盛上)
- 7b 灰黄褐色土 黄褐色軽石を多く含む。やや軟質。
- 8 浅黄褐色土 基盤岩盤の大型破砕礫(人頭大)を含む岩盤砕石と深い黄褐色粘質土との混土。硬く締まっている。(整地盛上)
- 9 黒褐色土 岩盤砕石を含む。やや粘質。(整地盛上)
- 10 深い黄褐色土 岩盤砕石をかなり多量に、白色軽石、黄褐色軽石、灰色粘質土ブロックを含む。硬く締まっている。(整地盛上)
- 11 黄褐色土 白色軽石、黄褐色軽石を含む。
- 12 深い黄褐色土 岩盤砕石を多く、白色軽石、黄褐色軽石を含む。(溝埋没土)
- 13 深い黄褐色土 白色軽石、黄褐色軽石、黄色土ブロックを含む。
- 14 黒褐色土 白色軽石、黄褐色軽石を含む。土器片が出土する。(城郭築城以前の旧地表土)
- 15 深い黄褐色土 白色軽石、黄褐色軽石を少量、ローム粒を多く含む。(土坑の埋没土)
- 16 深い黄褐色土 白色軽石、ロームブロックを含む。締まっている。(3区2号住居の埋没土)
- 17 深い黄褐色土 白色軽石を含む。締まっている。(3区2号住居の埋没土)
- 18 赤褐色土 焼土。(3区2号住居の炉)
- 19 明黄褐色土 黄褐色軽石を含むローム土。



第121図 城郭北東部J～Sライン土層断面図

のGラインおよびIラインで確認することができ、Gラインの北端付近ではかなり薄くなる。4区以北には、盛り土はみられない。4区および5区の確認面からは、段差を検出したが城郭に伴うものかは不明で、併せてN・Oラインでの1・2号道路とした帯状に延びる2条の硬化面を確認している。また、5区では溝状に延びる落ち込みを検出したが、共に城郭に伴うものではない。さらに、5区の北端部にある段差は、城郭北端部の一部とも考えられるが、詳細は不明である。

3. 城郭北端部の状況 (第119・121図、PL.50)

5区の北端部にある段差以北について、6・7区、8～10号トレンチとして調査した。

6・7区では、北側から上り上げる現道下が、5区の北壁中央付近を起点に北北東方向に延びる幅広い溝状となっていることを確認したが、その埋没土にAs-Aを混在させていることから、城郭に伴う遺構ではないことが明らかとなった。また、8・9号トレンチにおいても、地山にAs-A混土を堆積させるのみで、城郭に伴う痕跡は確認できなかった。さらに、10号トレンチにおいても同様で、後述した古墳の周溝の一部が検出されただけであった。

3 遺構外出土遺物

城郭に伴う出土遺物はなく、遺構外出土遺物も少ない状況であるが、城郭の南西部と北東部のからは、中・近世の陶磁器類、金属製品、石製品が出土している。

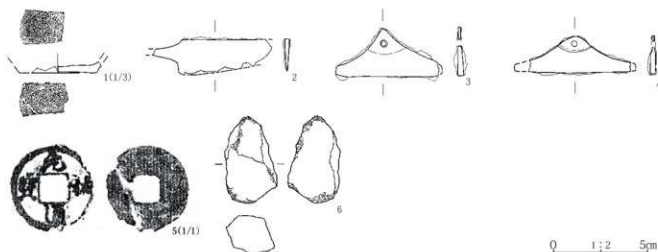
1. 城郭南西部の遺構外出土遺物 (第122図、第66表)

1は中世在地系土器の皿の底部片で、1号堀底面付近から出土した。2は鉄製の刀子。3・4は携帯用山形火打金で、3は幅に比して高さのある富士山形を呈する。5は古銭で「元祐通寶」(北宋、1086年初鑄)。6は石英の火打ち石で、周囲に敲打痕が認められる。

2. 城郭城北東部の遺構外出土遺物 (第123図、第67表)

1は龍泉窯系の青磁碗片で、13世紀。2は古瀬戸の緑釉小皿片。3～8は釘ないし不明な鉄製品。9は鉛製の円弾。10は煙管の雁首で、11・12は「寛永通寶」である。13は砥沢石製の切り砥石である。

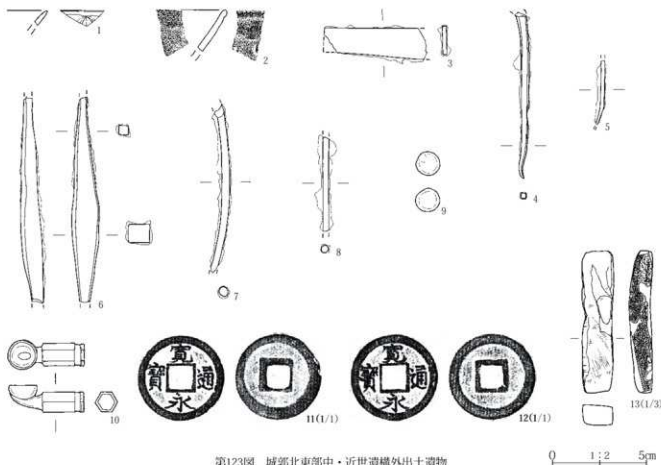
第4章 富岡城跡の調査



第122図 城郭南西部中・近世遺構外出土遺物

第66表 城郭南西部 中世以降遺構外出土遺物観察表

陶磁器類								成形・整形の特徴	備考
神田番号 図取番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調		
第122図 PL-	1	在地系土器 皿	底部片	-	5.9	-		底部左回転糸切無調整。	中世
金属製品								特徴・状態	備考
神田番号 図取番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ(g)		
第122図 PL-	2	鉄製品 刀子	区部	-	-	-	(7.81)	刃区、棟区と考えられる段差が認められるが、茎幅が狭い。刃部は錆による欠損が多く、形状は不明瞭。棟区部の厚さは2.1mm。	
第122図 PL-	3	鉄製品 火打金	一部欠	-	-	-	(11.9)	残存幅54.5mm、高さ25.9mmの携帯用山形火打金。刃部中央の厚さは4.4mm、端部は3.5mm、背側端部の厚さは2.9mm、内孔部は1.9mm。形状・厚さ共に火打金の特徴を有する。幅に比して高さがあり、富士山形を呈する。刃部に使用による抉れや角の削れ認められない。	
第122図 PL-	4	鉄製品 火打金	一部欠	-	21.1	4.0	(8.81)	器高の高い携帯用山形火打金で両端は欠損。頂部付近は幅で明いた段差が僅かに確認できる。また、錆で塞がるが、頂部には内孔の痕跡が確認できる。刃部中央の厚さは4.0mm、端部は3.0mm。背部の厚さは2.4mm、頂部は1.0mmと厚さも火打金の特徴を有している。使用による刃部の抉れや角の削れは認められない。	
第122図 PL-	5	銭貨 元祐通寶	周縁1/3欠	-	-	0.13 ~ 0.12	(2.08)	行書。北宋、1086年初鑄。	
石器								製作・使用状況	石材
神田番号 図取番号	No.	器 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)		
第122図 PL-	6	火打石 礮片	床直	4.5	2.8	2.0	26.2	背面側中央の稜部・下端エッジ・両側縁に敲打痕。	石英



第123図 城郭北東部中・近世遺構外出土遺物

第67表 城郭北東部 中世以降遺構外出土遺物観察表

陶器類											
神岡番号 図取番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	成形・整形の特徴	備考		
第123図 PL-	1	龍泉窯系 青磁碗	口縁部小片	-	-	-	-	外面に筋蓮文。	13世紀		
第123図 PL-	2	古瀬戸 緑釉小皿	口縁部片	-	-	-	-	口縁部に灰緑。器高はやや高い。	古瀬戸後1・ II期か		
金属製品											
神岡番号 図取番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ(g)	特徴・状態	備考		
第123図 PL-	3	鉄製品 不明	端部片	-	-	0.26	(8.35)	厚さ2.6mmの板状製品。残存する端部側の幅は14.3mmで欠損する側に向かうに従い幅を増す。部位による厚さの違いは認められない。			
第123図 PL-	4	鉄製品 釘	頭部欠	-	-	-	(7.23)	残存する上端が4.6mm×5.6mmの角形。下端は曲がるが、先端は尖る。上端欠損部に湾曲部が残っており、頭部直下で欠損した可能性が高い。頭部形状は不明。			
第123図 PL-	5	鉄製品 破片	破片	-	-	-	(1.26)	上部に比して下部が幅広い。断面形状は不明瞭。			
第123図 PL-	6	鉄製品 不明	3/4か	-	-	-	(51.16)	断面長方形から方形で、両端が鋭くなる鉄製品。中央部は14.3mm×12.3mm、最も幅広い端部は4.1mm×4.8mm。			
第123図 PL-	7	鉄製品 不明	破片	-	-	-	(9.22)	弧状に面がった棒状製品。断面円形の可能性が高い。			
第123図 PL-	8	鉄製品 不明	破片	-	-	-	(5.03)	棒状製品で断面円形の可能性が高い。7と接合する可能性が高い。			
第123図 PL-	9	鉛製品か 鉛弾	完形	1.27	1.21	-	9.53	遺存状態が悪く、表面は白色に腐食して凹みが多い。凹みなどは観察できない。			
第123図 PL-	10	銅製品 煙管 煙首	完形	4.05	0.15	0.11	(11.0)	銅は少なく遺存状態は良好。挿入部と小口は六角形で小口付近のみ円形を呈する。筒は明瞭で断面は断面円形。火口は湾曲するが鋭い。火口、断面は、挿入各部の接合は認められるが、板を丸めたような接合部は観察されない。			
第123図 PL-	11	銅銭 寛永通寶	完形	2.32・ 2.32	-	0.10 0.11	~2.47	新寛永。銅はほとんどなく、遺存状態は良好。			
第123図 PL-	12	銅銭 寛永通寶	完形	2.32・ 2.32	-	0.10 0.11	~2.47	新寛永。銅はほとんどなく、遺存状態は良好。			
石器											
神岡番号 図取番号	No.	器 形態・素材	出土位置	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	製作・使用状況	石材		
第123図 PL-	13	砥石 切り砥石		11.2	2.5	1.8	79.2	三面使用?左側面は分割した後、研磨整形。小口部両端は刀子状工具による整形。	砥石石		

第5章 調査の成果(総括)

第1節 富岡清水遺跡の朱について

はじめに

富岡清水遺跡は群馬県西部、富岡市富岡字清水に所在する縄文時代、平安時代を主とする集落遺跡である。平安時代の9世紀代には小規模な集落が形成され、谷地や低地の開発が進み水田耕作が行われている。竪穴住居の様相はA区2号竪穴住居のような7世紀後半代のもも1軒存在しているが、隣接する富岡市教育委員会での発掘調査成果⁽¹⁾も含めてみても9世紀後半から10世紀、11世紀前半代にかけて継続的に営まれていたようである。11世紀後半以降も集落確認面の上面ではAS-Bで埋没した水田が検出されている。当然、水田耕作にかかわる人々が存在し、周囲に集落が営まれていたとみられる。

朱墨痕の残る灰軸陶器段皿

富岡清水遺跡の平安時代集落から出土している遺物は土師器、須恵器を主に若干の灰軸陶器を見ることができ。こうした出土状況は他の集落と同様であるが、富岡清水遺跡A区1号竪穴住居から出土した灰軸陶器段皿は内面底部が顕著に擦り磨かれ、朱墨の痕跡が残っていることから朱墨を擦るための硯に転用されたものと考えられる。灰軸陶器に残された朱については残存状態などから科学分析を実施していないため朱墨の原材料同定には至らないが、古代に使用された朱の現材料としては「辰砂として産出し、人工的に水銀と硫黄を化合させることによって得ることが可能な「水銀朱」・「人工的に鉄鉱石を加熱して得ることが可能な酸化鉄である『ベンガラ』・「鉛を誘拐・酸化させて製造する『鉛丹』がある⁽²⁾とされ、灰軸陶器に残る朱墨の痕跡もこれらの材料のどれかと膠を練り混ぜて作られたものとみられる。

群馬県内では硯や転用硯に残る朱墨としては前橋市下東西遺跡溝SD59から出土した円面硯(溝SD59-391)の裏面を利用した事例⁽³⁾が知られているだけである。下東西遺跡溝SD59から出土した例は朱墨の痕跡は残存が少なく一時的な使用であったとみられる。しかし、富岡清

水遺跡A区1号竪穴住居から出土した灰軸陶器段皿に残る朱墨を擦った痕跡は底面の広い範囲に及んでおり、一時的な使用ではなく長期的に使用されていたことが窺える。こうした朱墨用の硯や転用硯の使用例は群馬県内だけでなく全国的にみても事例が少ない状況である。

朱墨を擦った痕跡が残る灰軸陶器を出土したA区1号竪穴住居は今回調査した範囲の南側に位置するA区中ほどの東寄りに位置する。他遺構とはA区3号竪穴住居との重複が確認されているが、1号竪穴住居が3号竪穴住居を壊す状態で占地しているため3号竪穴住居の残存状態は不良で土器などの遺物は見られない。そのため3号竪穴住居の年代観は1号竪穴住居より古い時期であること以外は判然としていない。1号竪穴住居からは灰軸陶器以外に煮沸具や貯蔵具としての土師器甕、須恵器羽釜、供膳具としての須恵器杯、椀、黒色土器椀が出土している。これらの土器群は隣接する富岡市教育委員会が実施した発掘調査区での報告書内で考察されている出土土器の編年作業⁽⁴⁾で段階設定されたIV期とほぼ同様な時期であり、11世紀前半代に比定できる。

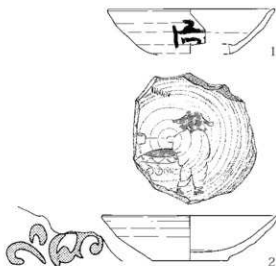
灰軸陶器段皿は口縁部を約1/2強ほど欠損しているが、全体がわかる状態である。出土状態は底部全体と口縁部が1/4が残る比較的残りの良好な破片が1点と口縁部の1/4ほどが3点の小片に割れた状態で出土している。出土位置は底部から口縁部片と口縁部小片の2点が「覆土」、残る口縁部小片が「カマド」からである。このよう



第124図 富岡清水遺跡出土の朱墨痕残る灰軸陶器皿
(トーンは朱墨痕の範囲)

に大半は覆土中ではあるが、カマド内からの出土した破片が存在することからほぼA区1号竈穴住居に伴うものとするができる。この灰軸陶器は底部から口縁部にかけて比較的直線的に開き、高台はわずかに稜が残り、内面の段はわずかな差しか有しない形態である。なお、施軸方法は漬け掛けとみられることから、この灰軸陶器段皿の窯式期は虎渓山1号窯式前半代に比定できる。

こうした状況から灰軸陶器と1号竈穴住居の間には若干の年代的な差がみられるが、灰軸陶器の口縁部が1/2ほど欠損した状態であることから、口縁部が一部欠損したのちに甕に転用されたとみれば問題がない。



第125図 群馬県内出土の朱書・朱彩色土器

朱の使用例

富岡清水遺跡での課題は朱墨がどのように使用されたかであるが、この課題について解明できる材料は発掘調査の範囲ではみることはいえない。そこで、古代における一般的な朱の使用例や出土資料から可能性を探ることとする。

平安時代における朱の使用は印の捺印の際につけられる朱肉、寺院や官衙などの建物の柱や梁などに塗られていることが知られている。文書では正倉院文書などに残る各種帳簿に合点をつけたり、注釈など限られた範囲での使用⁽⁵⁾である。捺印のための朱肉、建物への塗装、文書での使用例は官衙や寺院、ごく限られた一部の富豪層に限定されるものである。また、出土遺物の中にも朱書された土器(以下、朱書土器と略す)を見ることができ

る。朱書土器の群馬県内の事例は少なく、渋川市半田薬師遺跡E区1号竈穴住居から出土している須恵器高台付椀の体部外面に朱書されたもの(125図-1)⁽⁶⁾だけである。なお、この朱書については文字部分の残存状態が一部であることなどから判読できない状態である。この竈穴住居からの出土遺物は朱書土器の他に須恵器杯が1点出土しているだけであるが、朱書土器、須恵器杯の年代観は9世紀後半代に比定される。この他では伊勢崎市伊勢崎・東流通団地遺跡6号井戸から出土した須恵器椀の内面に墨で線画を描き、朱で彩色された人物絵、外面に朱書による花卉状の文様が描かれているもの(125図-2)⁽⁷⁾を見ることができ

る。なお、群馬県内では朱書土器の出土例は上記の2点と非常に少ないが、周辺の地域や関東地方の例を見ると埼玉県では若葉台遺跡から15点、将監塚・古井戸遺跡から2点の他など8遺跡35点⁽⁸⁾、東京都では武蔵国府関連遺跡群から2点⁽⁹⁾、千葉県では花前1・II遺跡から26点、江原台遺11点、村上込の内遺跡6点など14遺跡76点⁽⁹⁾が出土している。埼玉県や千葉県では墨書土器に比べれば少ない量であるがある一定量の朱書土器が出土例を見ることができ

これらの朱書は8世紀中葉から10世紀前半代にかけての土器に書かれているもので、書かれている文字も1字ないしは2字である。また、書かれている文字も埼玉県若葉台遺跡では「時山」、「山」、「山」、「時□」などが12点、千葉県江原台遺跡では「由」4点、「中人」3点、「中」、「子中」各1点など比較的同一遺跡内同一の文字が出土している。こうした朱書土器の出土については平川南氏⁽¹⁰⁾や高島英之氏⁽¹¹⁾など分析によると、集落遺跡から出土する墨書土器のかなりの部分が、古代集落に生活する人々の信仰にかかわったものであるとされるものである。ただし、墨書土器については平川南氏によると「10世紀半ば以降、新たに流行した浄土教の阿彌陀仏を信仰することにより来世における極楽浄土に往来するという教えをはじめ、そののちの鎌倉仏教にみられるようなひとすらすら念仏や題目を唱えるだけで救われるという教え」がそれまでの「道教的な呪術性の高い信仰や招福除災や延命への願いを土器に文字を記すという信仰形態」をしだいに消滅させた⁽¹²⁾と、見通している。この状態は朱書土器の存続した年代が10世紀前半代である状態か

らすれば一致する。また、県内で出土している墨書土器の年代観とも齟齬のない状態である。しかし、伊勢崎市伊勢崎・東流通団地遺跡から出土して絵が描かれた土器の事例や文献史料のなかには呪術などで「かわらけ」に墨書、朱書された事例⁽¹⁾を見ることができ、必ずしも10世紀後半以降に土器への墨書行為は減少している状態であるが、消滅したとはみられない。

富岡清水遺跡の朱の使用について

こうした朱書の事例を見ると富岡清水遺跡1号竪穴住居から出土した朱墨痕の残る転用硯は富岡清水遺跡で官衙の様相や荘家などの耕作地管理施設などを窺い知る出土遺物が出土しておらず、ごく一般的な農耕にかかわる集落様相しか見ることができない。こうした集落様相からは文書への朱書が行われたとは想定できず、土器への朱書、絵画への彩色とみるのが妥当と考える。また、朱墨の残存状態を考慮すると単発的な土器への朱書を想定するより、やや広い部分への朱塗りなどの絵画への彩色行為を想定した方が妥当とみられる。

しかし、今日の発掘調査事例からみて朱墨の痕跡が残る硯や朱書の例は非常に少数であることは事実であり、一般化したものではないことも事実である。今回、出土した富岡清水遺跡のような一般集落から出土した事例が何を示しているかについては、より検討を重ねる必要がある。

注

- (1)富岡市教育委員会 2010「富岡清水遺跡」富岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第30集
- (2)市毛 勲 1998「新版 朱の考古学」鎌山園
- (3)財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987「下東西遺跡」財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第58集
- (4)永井尚寿 2010「V調査成果 1平安時代の土器の分類と編年」富岡清水遺跡」富岡市教育委員会
- (5)宮藤文二 2002「朱書土器に関する覚書」古代文字資料のデータベース構築と地域社会の研究」
- (6)渋川市教育委員会1993「第1章市内遺跡発掘調査報告書Ⅴ半田薬師遺跡」『市内遺跡Ⅴ』渋川市発掘調査報告書33集、半田薬師遺跡は渋川市半田に所在する集落遺跡。牧とみられる遺構や8世紀から10世紀にかけての集落が検出されている半田中原・南原遺跡の西側に位置する。1988年、1992年、2000年にかけて個人住宅などを対象として11カ所を発掘調査しており、8世紀から10世紀代の集落を検出している。
- (7)群馬県企業局開発課 1982「伊勢崎・東流通団地遺跡、伊勢崎市日乃出町に所在する。谷地を挟んで2カ所の台地上に4世紀から6世紀代の集落、平安時代の製鉄炉、鍛冶工房などの遺構が検出されている。
- (8)吉村武彦他 2002「武蔵国墨書土器集成」古代文字資料のデータベース構築と地域社会の研究」より

- (9)財団法人 千葉県史料研究財団 1996「出土文字資料集成」『千葉県の歴史 資料編古代』千葉県の遺跡一覧表より
- (10)平川 南2000「墨書土器の研究」吉田弘文館
- (11)高島英之 2000「古代出土文字資料の研究」東京堂出版
- (12) (10)と同じ
- (13)藤原良章 1998「中世の食器・考(かわらけ)ノート」『列島の文化史』5 日本ディタースクール出版部に「宇治拾遺物語」巻14に「御堂関白ノ御犬晴明等奇特ノ事」と題し、藤原道長を呪詛するために「かわらけ」の底部に朱書されたものが理められたと記している。この出来事は藤原道長、安倍晴明の生存年代から10世紀末の年代が想定できる。

第2節 富岡清水遺跡周辺の古代水田と用水系統について

(1) 検出した水田と洪水層

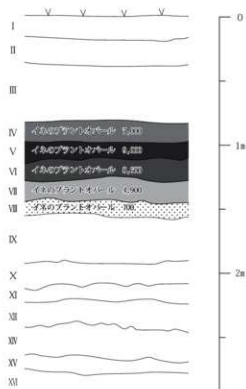
水田遺構と洪水堆積物を起源とする水田耕作土

この遺跡で遺構として確認した水田は、B区の浅間B軽石(As-B)を含むいわゆる浅間B混土(IV層)下面で検出した水田のみである(「第3章3節7水田」107頁参照)。この水田は、畦の南北軸の方向がN-1~3°-Eでほぼ現在の真北に近く、古代の土地区画制度である条里地割の可能性も考えられる。水田の詳細な年代は不明だが、浅間B軽石の降下年代に近接した12世紀代と推定される。但し、次に述べるようにその下層のV層が水田耕作土であることから、おそらくこの水田は少なくともV層から継続していた可能性が高い。

遺構として確認した水田はこの水田のみであるが、B区における植物珪酸体分析の結果、V層が9,000個/g、VI層が8,600個/g、VII層が4,900個/gのイネのプラント・オパールが検出されたことから、これらのV・VI・VII層は水田耕作土であることが確実と考えられる(126図)。なお、IX層は洪水に由来する堆積物ではないが、700個/gのプラント・オパールが検出されていることから、この層が水田耕作土ではないものの、周辺では水田耕作が行われていた可能性がある(「自然科学分析」130頁参照)。

これらのV・VI・VII層はいずれも洪水に由来する堆積物で、その給源は流路と遺跡との位置的な関係から、現高田川の可能性が高い。高田川は遺跡の下流約2kmで鏡川と合流するが、そのほぼ中間点に大きく蛇行する部分があり、洪水時には鏡川との合流点あるいはこの蛇行部で呑みきれない水が、遺跡の一带に滞水するものと考えられる(図2)。これは、別保あたりから下流がたびたび冠水したという、江戸時代の記録である貝沢日記からも伺い知ることができる(甘楽多野土地改良区2004、富岡史編纂委員会1955)。

なお、現鏡川、富岡清水遺跡段丘礫層、同C区2号用水路内洪水礫、現高田川の4地点における礫組成の比較からは、用水路内の洪水礫が現高田川に由来するとの明確な認定はできなかったが、これは鏡川と高田川の礫組成が近似していることに起因するものと考えられる。



第126図 基本土層柱状図

洪水層の年代

V・VI・VII層の洪水層の年代は全体として、IX層に3世紀後半の浅間C軽石(As-C)を含むこと、IV層に天仁元年(1108)のAs-Bを含むことから、3世紀後半以降で、12世紀初頭以前の年代幅に収まる(「自然科学分析」128頁参照)。

各洪水層の詳細な年代を判定する明確な資料は欠くが、V層は浅間B軽石降下の直前であることから概ね11世紀代で、下層のVI層との関係から、9~11世紀代と推定できる。次にVI層はC区1面2a・6号用水路を直接被覆する洪水層の可能性があり、同層中から出土した須恵器破片から8世紀中葉と推定できる。さらにVII層はC区2b・3号用水路を直接被覆する洪水層の可能性があり、同層中から出土した土師器破片から8世紀前半と推定できよう。

なお、VIII層にも少量のイネのプラント・オパールが検出されたことから、この層は水田耕作土ではないものの、この遺跡の周辺地域での水田耕作は古墳時代まで遡る可能性が高いものと考えられる。

洪水層と竪穴住居の層位的な位置関係

この遺跡で検出した竪穴住居の確認面は、微高地部にあたるB区がローム層(Ⅺ層)上面、低地部にあたるC・D区がⅨ層上面で、いずれも各洪水層より下位に相当する。しかし、C・D区の竪穴住居はいずれも洪水に由来する堆積物で埋没し、9世紀以降という竪穴住居の年代観からも、8世紀前半と推定されるⅨ層洪水より上位から掘り込まれていたことになる。

したがって、少なくともC区では耕作土化したⅥ・Ⅶ層の洪水層の上位に竪穴住居が造られ、この上位のⅥ層が再び水田耕作土化している。つまり、この地点では8世紀代の水田域→9・10世紀代の居住域→11・12世紀代の水田域という、土地利用の変遷が重層的に確認できることになる。

(2) 用水路

用水路の概要

この遺跡のB～D区では、Ⅸ層以上を掘込み面とし、いずれも微高地の緑辺部を西から東の方向に走行する14条の用水路を確認した。これらは伴出遺物がほとんどなくその多くは詳細な年代が不明であるが、層位からその大勢は概ね古代の範疇に収まる。また、この遺跡は旧高田川と思われるいく筋かの河道が西から東へ走行することから、南北方向に微高地と低地を繰り返す地形を示すが、確認した用水路は基本的に微高地と低地の緑辺部に立地し、これは微高地の緑辺部に用水路を通し、それより下側(低地部側)が水田域となる一般的な用水路の立地を示す(「(6)用水路」93頁参照)。

この段階における用水路の取水は、おそらく遺跡の西側約150mを北流する現高田川からと考えられる。高田川は遺跡の西側で北側へ大きく屈曲するが、この屈曲した攻撃面から取水した可能性が高い(127図)。但し、河道は移動しており、確認した用水路の年代の河道の位置は不明である(129図)。

一方、B区で検出した浅間B軽石降下以降の水田は、これに伴う用水路は確認できなかったが、遺跡西側の高田川の屈曲部よりB区南端部の標高が高いことから、高田川屈曲部からの取水では給水が不可能となり(127図)、南から北へ傾斜する地形を考慮すると遺跡の南側から配水されていた可能性が高い。したがって、B区で検出し

た浅間B軽石降下以降の水田には、遺跡の南方からの給水が必要で、遺跡の南方約50mに位置する現在の一番堰用水付近がその候補として浮上することになる。

現在の用水路からの検討

現在の富岡市北部地域には、黒川及び別保付近の高田川から取水する一番堰用水、二番堰用水、三番堰(君川堰)用水の3条の用水路が存在している(図2)。このうち一番堰用水は最も上流の黒川付近から取水し、東流して高田川が大きく北側へ蛇行する東西900m、南北600mの範囲を主たる受益地とし、本遺跡地もこの受益地内に含まれている。この終末点は高田川に落ちる一方で、富岡清水遺跡の南側で分岐して、鎌川方面へ南東流している。

この一番堰用水は、これらの用水のうち最も上流からの取水であることと、その「一番」という名称から、おそらくこの地域で最も重要な用水路と考えられる。この開削年代は弘化2年(1845)以前の詳細は不明だが(甘楽多野土地改良区 2004)、整備された用水路網の状況から現在は畑作地帯のこの受益地一帯は、かつて主要な水田域であったものと想定できる。

換言すると、微高地上に立地するこの地域の水田経営は、用水路の整備によってのみそれが可能となり、これは遺跡で確認した多数の古代の用水路がその証左となる。つまり、この水系の受益地内における水田は、浅間B軽石降下前後の水田域を基盤として造られている可能性が高く、さらにこの基盤は古代にまで遡るものとの想定が可能である。

また、富岡市域は南部の鎌川段丘面上に多くの古墳が立地するが、今のところこの地域で水田遺構の発見例はなく、広範囲な沖積低地も存在しない。一方、富岡清水遺跡では、プラント・オブール分析から水田開発は古墳時代まで遡ることが判明していることから、この地域がこれらの古墳群を支えた主たる生産域であった可能性も考えられる。

(3) 条里地割と思われる区画

現在の土地区画

昭和43年測量の富岡市都市計画図に109m間隔のグリッドを当てると、一番堰用水の受益地である富岡清水遺跡周辺から、三番堰(君川)用水の受益地である君川の

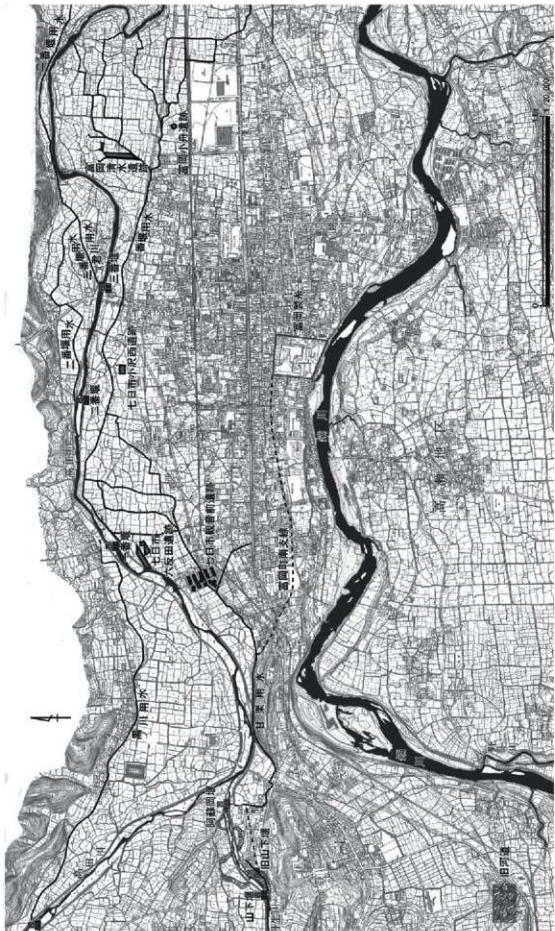


図127 富岡清水道跡周辺の用水系統(富岡市七日市八区田遺跡調査会2008より転載)

地域にかけて(富岡地区)、主として南北軸がその線上に一致する現在の土地区画がしばしば見受けられる(128図)。このグリッドの傾きは約 $N-2^{\circ}-E$ で、鑛川を挟んで東側に展開する甘菜条里の軸線の傾きとほぼ一致している。

但し、富岡地区は東西方向が一致する区画が少なく、軸線の傾きは甘菜条里に近似するものの、甘菜条里からのグリッドは東西、南北両方向ともにずれる。したがって、富岡地区の土地区画が条里地制であるとの断言はできないが、南北軸がしばしば一致する区画の状況は、単なる偶然の所産とも思えない。

B区浅間B混土下面水田の区画

この水田は、前述のように畦の南北軸の方向が $N-1^{\circ}$ ～ $3^{\circ}-E$ で、ほぼ現在の真北に近い。また、この地区の北端部では、水田面と微高地の境を僅かな段差として確認したが、この段差が現状の土地区画に残る条里地制の可能性のある線上にほぼ一致することを確認した。また、遺跡の西方約2kmに位置する七日市六反田遺跡でもB混土下面水田が検出されているが、この南北方向の畦畔も $N-2^{\circ}$ ～ $4^{\circ}-E$ で、富岡清水遺跡と近似した軸線の傾きを呈している(富岡市七日市六反田遺跡調査会2008)。

いずれも調査範囲の狭いこのB混土下面水田のみで確定することはできないが、甘菜条里及び富岡地区の土地区画の傾きが約 $N-2^{\circ}-E$ 前後であることも考慮すると、この水田は条里地制の可能性が考えられる。これが確実であるとすれば、現在の富岡地区の土地区画も、条里地制の可能性が高いことになる。

但し、これらが仮に条里地制であったとしても、その年代が12世紀代であることから、律令期の条里地制か否かは不明であり、同時に甘菜条里の施行年代についても検討を要する。いずれにしても、浅間B軽石降下の前後における水田遺構の土地区画を広範囲に調べることによって、この地域における条里制の区画に基づいた土地区画の状況は明らかになるものと考えられる。

(4)まとめ

富岡清水遺跡周辺の土地区画の状況を列記してきたが、これらの事実から富岡清水遺跡周辺の土地利用状況

は、以下のような変遷を辿るものと推定できる。

①古墳時代において、富岡清水遺跡内あるいはその周辺において水田耕作が開始される。但し、その詳細な年代と範囲は、現段階では不明である。

②その後8世紀代には、低地部を中心に洪水層を耕作土とする水田域となり、微高地部には下流域のための用水路が設置される。なお、この年代の用水路の位置は、条里地制の可能性のある土地区画に一致していない。

③9～10世紀代には、②の水田域の上位に竪穴住居が立地して一時的に集落域となるが、おそらくこの年代にもいずれかの用水路は存在したものと推定される。

④天仁元年(1108)の浅間B軽石降下の11世紀代(V層段階)に、それ以前の集落域を含めたほぼ全域が水田化される。おそらくこの段階こそが、この一帯に条里地制が施行される時期である可能性が高く、これが12世紀代の擬似畦畔に継承される可能性が高い。

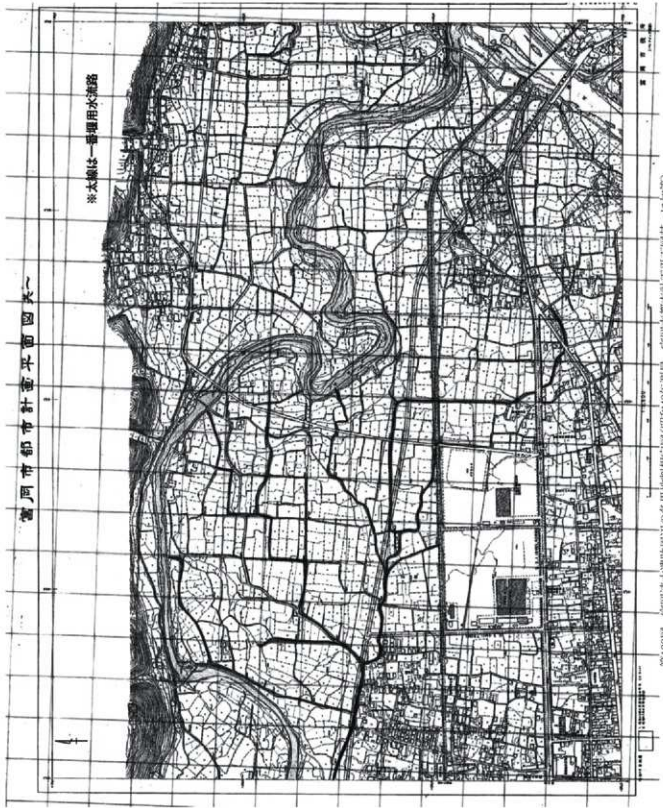
以上、この遺跡及び周辺地域は、火山灰及び高田川の洪水層を鍵層として水田、用水路、竪穴住居から土地利用の変遷過程を追うことのできる希有な地域である。但し、前述のようにこれらの時空系列を詳細に分析することが必要であるが、いずれにしても現在は高台で畑作地帯のこの遺跡の周辺には、奈良時代から平安時代にかけて広範囲に水田化が図られるという地域構造の一端が明らかとなった。

この背景には用水路に代表される水利技術があったものと想定でき、この遺跡で検出した多くの用水路がその傍証となる。また、現在の用水路系統は、しばしば条里地制と想定される線上に一致することから(128図)、条里地制に基づいた土地区画の施行を経て、この延長線上に存在している可能性も考えられる。さらに、この用水路による水田開発は古墳時代まで遡る可能性が高く、鑛川沿いに立地する古墳群との関係が、集落の分布域も含めて大いに注目されよう。

本稿の作成にあたっては、井上太・日沖剛史・浅間岡・小高哲茂各氏から有益なご助言を賜った。文末ながら、記して感謝の意を表す次第である。

引用・参考文献

- 甘菜多野土地改良区 2004 『甘菜多野用水誌』
- 富岡史編纂委員会 1955 『富岡史』
- 富岡市教育委員会 1994 『七日市観音前遺跡』
- 富岡市七日市六反田遺跡調査会 2008 『七日市六反田遺跡Ⅱ』





第129図 高田川の流路変遷(江戸～明治時代)

第3節 富岡城の縄張りについて

1 地理的な条件

富岡城は高田川左岸に並走する山稜を利用しており、南面は高田川へ向かって比高差50mを越える急斜面となっている。対して北斜面は緩やかであり、現在も耕作道が設けられている。ただし、北面は複雑に谷地地形が展開しており、現在は埋め立ても進み高燥化しているが、随所に沼地が残り、本来は湿潤な地形であったことが判明する。したがって、登城路として最も安定しているのは西方尾根筋であり、こちらを大手方向と考えることができる。

2 縄張り上の問題

(1) 堀堀

今回調査された2号堀は横堀(第130図①)であり、これまで、その存在は知られていなかった。調査された部分は東西約27mで、更に東へ延びている。ただし、これが掘り込まれている平場は東方20m程で終わるため、最長の場合でも東端で一度立ち上がるものと考えられる。また、西側は堀切である1号堀(第130図②)と合流して終わるが、この底面は80cm程高いため、付設時期に違いを持つ可能性がある。

ところで、全体的な縄張りを見ると、今回調査された第Ⅱ郭周辺は、堀割が特に嚴重であることが判明する。つまり、第Ⅰ郭の東側では、今回一部調査された第Ⅰ郭東堀切(第130図③)を最後に、東方では堀切が現況で認められず、東側の発掘調査によっても、堀切は発見できなかった。したがって、調査成果により、この城は第Ⅰ郭東堀切、第Ⅱ郭西堀切(1号堀)と南へ続く堀堀、北斜面の横堀(2号堀)、第Ⅳ郭西の堀切(3号堀)で区画されていることが判明する。また、第Ⅰ郭の南東斜面には小規模な堀堀(第130図④)があり、ここから南斜面へ向かうことを防いでいる。なお、その東脇には尾根が南東方向へ下っており、高田川方面へ向かう通路として利用されるため、堀切などは造られていない。

以上からわかるとおり、この城の堀割はバランスを欠いており、大手方向だけが非常に嚴重となっている。し

たがって、時期は不明ながら、ある段階で改修が加えられたことも推測される。

横堀が設けられた場合、谷側には土塁状に掘り残り部分が生じて、この部分も防御機能を持つこととなる。本遺跡の場合は、これに50cm程度の盛り土をすることにより、横堀との高低差を加え機能を高めている。また、この土塁状部分の幅は狭くなっているが、第Ⅰ郭へ向かう通路として機能し、東端で第Ⅱ郭北東隅に入っていた可能性も指摘されている^(註1)。周辺における横堀の類例については後述する。

(2) 第Ⅰ郭東堀切

この堀切は非常に浅く、南北両端とも腰郭へつながっている。北端部分は今回調査され、腰郭は掘りきれられていないことが確認され、平坦に整形されていたことがわかっている。この部分は、小規模な溝で仕切られていることから、何らかの施設があった可能性も想定できる。

堀切とは、本来尾根筋を横断方向に掘りきることで、尾根上の通行を遮断する施設となる。しかし、ここでは浅く幅広に造ることで、腰郭としての機能を加味し、あわせて堀内道として南北両面の連絡を図っている。周辺における類例は後述する。

なお、第Ⅰ郭北面は腰郭が二段造られ、嚴重となっている。特に下段の腰郭は、第Ⅱ郭北面の横堀(第130図①)の延長方向に近いことから、高低差はあるものの、同様な横堀が埋没している可能性も残っている。

3 周辺の類例との比較検討

(1) 横堀

本遺跡の西方約7kmに位置する丹生東城^(註2)は、平成16年に富岡市教育委員会によって、主要部分が全面的に発掘調査されている(第131図)。遺構の構成は、東西長約90mで、南北長は東端で約65m、西端で約50mの台形をなす主郭と、内堀を挟んで北面は段差を持ち、東・南面は平坦なまま帯郭が設けられる。更に外側の北面から東面にかけて横堀がめぐりに、底面に陸壁を伴う障子堀となっている。また、その外側には幅約5mの帯郭が北面から東面をめぐっている。北面中央には横堀によって掘り残された幅約6mの土橋があり、出入口口となっている。この通路に対応して、上段の帯郭にも掘り残された土橋が造られ、西方へややずれることで、「食い違い

虎口」となっている。こうした状況から、この城の大手は北方と推定される。

主郭の内部には、コの字型に掘立柱建物が配置され、重複が無く短期間に使用された城と考えられる。また、北西端の土坑では、輪宝墨書が施された在地系土器皿が多く出土しており、その年代観から16世紀中頃の城と位置づけられている。

南面は、調査範囲で東西長約111mまで確認された堀切によって、遮断されている。堀切の底面や壁面に橋脚となる柱穴は見つかって折らず、東端で帯郭へわたるのが、唯一の通路として確認できる。この部分の南側には並行して塹堀が設けられ、通路を狭めるとともに、堀切の南壁を一部土塁状に掘り残す工夫もなされている。帯郭を通路として使用する状況は、富岡城を理解する参考となる。

さて、帯郭の造成に関して、報告では模式的な考察がなされている(第131図)。それによれば、横堀の掘削と並行して帯郭を造成していく過程が、土層の分析によって解明されている。一方、富岡城も盛り土によって高さを加えているが、幅は広げられていない。切り土によって幅を広げることも可能と思われるが、地山の黒色土が残っており、それも選択されていない。おそらく、当初から帯郭とする意識はなく、堀の掘削土は郭面の造成に回されたものと考えられる。

横堀の事例としては、富岡城の北西約2kmに位置する高林城も重要である。この城は、城主など明確な城史は不明ながら、高土塁や堀削を駆使した技巧的な縄張りとなっている。特に東面は直線距離で約80mに及ぶ横堀を設けており、外側には断続的に土塁を伴っている。ただし、土塁が設けられた横堀部分は堀内道となるとみられ、遮断意識の強い横堀は、南半部に限られる。

(2)浅い堀切

浅い形態の堀切に関しては、同様な例は多く存在すると思われるが、全体的な縄張りが類似している点からも、富岡根小屋城(第132図)は参考となる。この城は、富岡城の東方約3.5kmに位置している。立地する尾根の幅は、60m前後であり、富岡城よりも広い。堀切は3か所設けられ、尾根の基部方向にある堀切が最も深く、第Ⅱ郭を尾根から切り離している。中央に位置する第Ⅰ郭の面積は第Ⅱ郭より狭いが、標高はやや高くなっている。東西

の斜面に一段から二段の腰郭が設けられており、主郭と見なすことができる。

問題となるのは、第Ⅰ・Ⅱ郭の間に位置する堀切(第132図①)である。深さは浅く第Ⅰ郭側の斜面は緩やかである。この堀切の東西両端は、わずかな段差を伴って腰郭とつながり、堀内道となっている。尾根の幅が広いこともあり、腰郭は第Ⅰ郭を全周し、西面には低土塁が残っている。第Ⅲ郭は腰郭と同じ高さのままで、西半部が土壇状に1m弱高まり、第Ⅰ郭との間に非常に浅い堀切を設けている。また、第Ⅲ郭の南下には幅広の腰郭が東に傾斜しながら回っており、おそらくこの方向が大手となり、南斜面へ降りていくものと想定される。なお、南東部は畑地の造成のため大きく削平され、南斜面も社が造られ、地形が大きく変更され、旧時をうかがうことは難しい。中央の堀切の西斜面には、一部塹堀状の凹みがみられるが、自然の谷地地形であり、意図的なものか判断としない。

4 まとめ

本稿では富岡城の特徴的な縄張りを抽出し、その比較資料となる周辺の類例を示した。富岡根小屋城は、全体的な縄張りや堀切が浅い点で富岡城と共通点があり、遮断する意識が弱い点が注目される。その意味では、横堀を伴う富岡城よりも一貫している。また、横堀が障子堀として、防衛上の重点を占める丹生東城は、丘城として立地は異なるが、16世紀中頃の城郭として、指標となる。高林城は山城としては技巧的であり、戦国末期の実戦的な城郭を思わせる。ここでも、効果的に横堀が取り入れられており、横堀を観点として、富岡根小屋城と高林城の折衷的な様相を富岡城が示しているようにみえる。こうした点からも、富岡城の横堀は、改修などにより後発的に付加された遮断施設と見なしたい。

註

- 1 東京都江戸東京博物館学芸員齋藤慎一氏ご教示による。
- 2 永井尚寿ほか2009『丹生地区遺跡群』富岡市教育委員会



第130図 富岡城縄張り図

第4節 総括

〈富岡清水道跡〉

縄文時代：検出された縄文時代の遺構は、その多くがE区に集中し、高田川右岸台地上に形成された後期初頭の称名寺式期の集落であった。出土土器には前期の有尾式土器や諸磯式土器もあることから、それらの時代の器高も周囲に点在する可能性は高い。

弥生時代：遺構は検出されていないが、中期の壺形土器等が出土しており、周囲に集落が存在する可能性が大きくなった。

奈良・平安時代：竪穴住居や掘立柱建物からなる集落、用水路、水田および高等の各種遺構、さらには高田川の洪水層が検出され、この地域での土地利用の変遷過程を追うことのできる希少な遺跡であり、今後の研究に繋ぐことのできる資料となった。また、出土した朱墨痕の残る転用瓦は非常に少数な資料であり、一般集落から出土したことをも含め、今後の検討を重ねる必要がある。

中世以降：近世の大型建物や道路状遺構等が検出され、

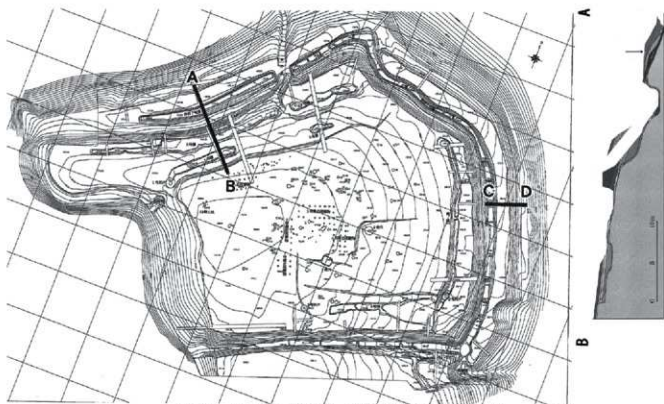
文献等にみられない新たな視点でこの地域の地域史を語る資料となることに期待したい。

〈富岡城跡〉

弥生時代：丘陵頂部に点在する後期の住居であり、中高瀬観音山遺跡と共に今後の弥生研究の良好な資料を得た。また、中期の土器も出土している点では、周辺地での状況をも注視する必要が出てきた。

古墳：丘陵の頂部に6世紀前半の円墳、さらに7世紀前半の円墳が検出され、さらに周辺域にも古墳が点在する可能性が出てきた。

富岡城跡：城郭の全容は明らかとはならなかったが、特徴的な縄張りを抽出して周辺城郭と比較すると、全体的な縄張りや堀切が浅い点で富岡根小屋城と、山城としては技巧的で効果的に横堀を取り入れた高林城との、折衷的な様相を示しているように富岡城がみえる。また、横堀が障子堀となる丹生東城は、16世紀中頃の城郭として指標とされている点でも、本城郭が戦国期に在城していたと考えることは妥当と言える。



第131図 丹生東城遺跡全体図・模式断面図(註2文献より転載)



第132図 富岡根小屋城縄張り図

写真図版



富岡清水遺跡全景 空中写真 南から



富岡清水遺跡全景 空中写真 北から



平成22年度調査 A区 全景 空中写真 上から



A区第1面(G近世) 全景 南から



A区 1号建物 全景 西から



A区 2号建物 全景 南から



A区 2号建物西半 南から



A区 2号建物東半 南から



A区 1号道路状遺構 南東から



A区 1号道路状遺構 南西から



A区 1号道路状遺構 西から



A区 1号道路状遺構 東から



A区 2号道路状遺構 西から



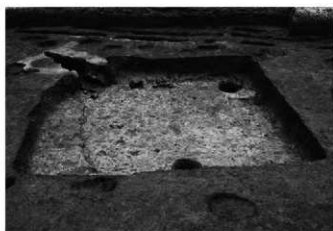
A区 2号道路状遺構 南から



A区 1号溝南側 南から



A区 11~14号溝 北から



A区 1・3号住居 全景 西から



A区 1・3号住居 全景 南西から



A区 1号住居 カマフ 南西から



A区 2号住居 全景 南から



A区 2号住居 遺物出土状況 北から



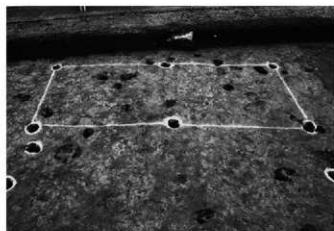
A区 2号住居 カマド周辺遺物出土状況 南から



A区 2号住居 カマド 南から



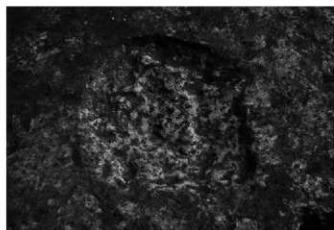
A区 2号住居 遺物(簡編み石)出土状況



A区 1号掘立柱建物 全景 西から



A区 1号土坑 西から



A区 2号土坑 西から



A区 3号土坑 西から



平成19年度調査 B区 全景 北から



B区 1号住居 全景 西から



B区 1号住居 カマド 西から



B区 1号住居 遺物出土状況 南から



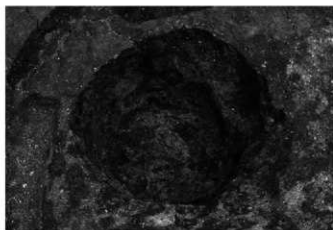
B区 2号住居 全景 北西から



B区 3号住居 全景 北西から



B区 3号住居 カマド 北から



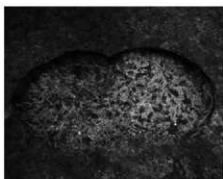
B区 3号住居 貯蔵穴 西から



B区 4号住居 全景 東から



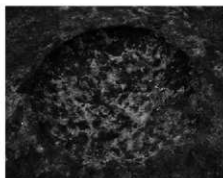
B区 1号土坑 南から



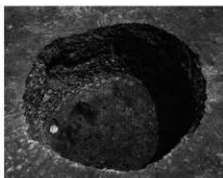
B区 2・3号土坑 南から



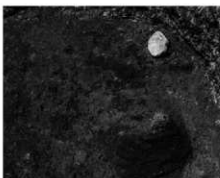
B区 4号土坑 南から



B区 5号土坑 南から



B区 6号土坑 南から



B区 6号土坑 炭化物出土状況



B区 1号溝 北西から



B区 1号用水路 西から



B区 古代水田 全景 南から



B区 古代水田 南半 西から



B区 古代水田 全景 北から



平成19年度調査 C区 全景 南から



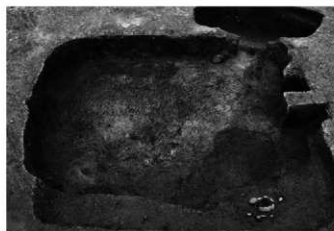
C区 1号住居 全景 西から



C区 1号住居 カマド 西から



C区 1号住居 遺物出土状況 西から



C区 2号住居 全景 西から



C区 2号住居 カマド 北西から



C区 2号住居 遺物出土状況 西から



C区 3・4・5号住居 全景 西から



C区 3号住居 カマド 北西から



C区 6号住居 全景 西から



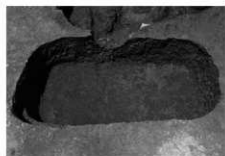
C区 6号住居 カマド 西から



C区 7号住居 全景 上から



C区 7号住居 カマド 西から



C区 1号土坑 南東から



C区 2号土坑 東から



C区 3号土坑 東から



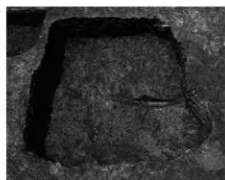
C区 4号土坑 東から



C区 5号土坑 東から



C区 6号土坑 北東から



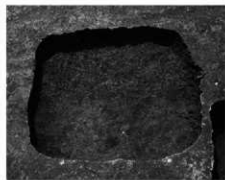
C区 7号土坑 東から



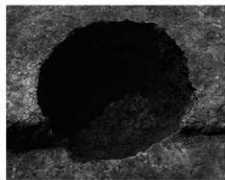
C区 8号土坑 西から



C区 9号土坑 東から



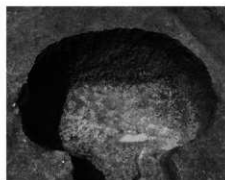
C区 10号土坑 東から



C区 11号土坑 東から



C区 12号土坑 東から



C区 13号土坑 東から



C区 14号土坑 西から



C区 15号土坑 遺物出土状況 南東から



C区 1号用水路 東から



C区 2～6号用水路 東から



C区 2号用水路 1号集水堰 南から



C区 7号用水路 北西から



平成19年度調査 D区 全景 西から



D区 1号住居 全景 西から



D区 1号住居 カマド 西から



D区 2号住居 全景 南から



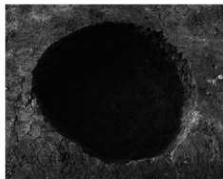
D区 3号住居 全景 西から



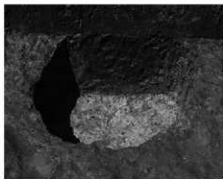
D区 4号住居 全景 南から



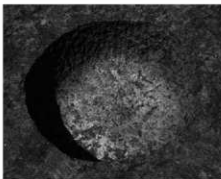
D区 4号住居 全景 西から



D区 1号土坑 北から



D区 2号土坑 南東から



D区 3号土坑 南東から



平成21年度調査 E区(第1・2面) 全景 北から



平成21年度調査 E区(第3面) 全景 北東から



E区 1号住居 全景 北西から



E区 1号住居 カマド1 北西から



E区 1号住居 カマド2 北西から



E区 2号住居 全景 西から



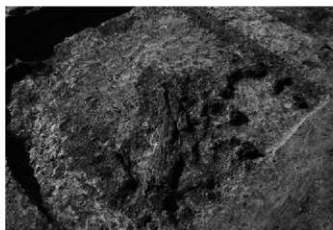
E区 2号住居 カマド 西から



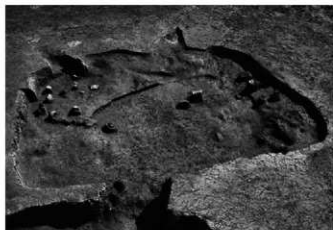
E区 3号住居 遺物出土状況 西から



E区 3号住居 カマド 北西から



E区 3号住居 北東角木炭材出土状況 北東から



E区 4号住居 全景 西から



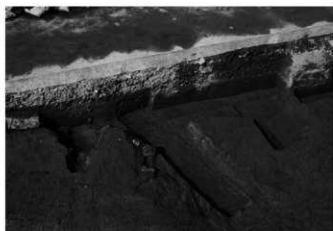
E区 4号住居 カマド1 南西から



E区 5号住居 全景 西から



E区 6号住居 全景 西から



E区 7号住居 全景 南東から



E区 7号住居 カマド 北西から



E区 8号住居 全景 東から



E区 8号住居 カマド 西から



E区 9号住居 全景 東から



E区 10号住居 全景 西から



E区 11号住居 全景 西から



E区 12号住居 全景 東から



E区 12号住居 埋焼炉 土器出土状況 南東から



E区 13号住居 全景 北から



E区 13号住居 遺物出土状況 西から



E区 13号住居 埋焼炉 土器出土状況 西から



E区 13号住居 埋喪炉 土器出土状況 西から



E区 13号住居 埋喪炉 掘り方 西から



E区 14号住居 柄部配石状況 南西から



E区 14号住居 北西部散石残存状況 西から



E区 1号土坑 南東から



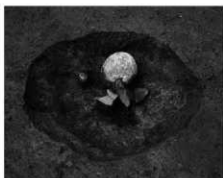
E区 2号土坑 南から



E区 3号土坑 北から



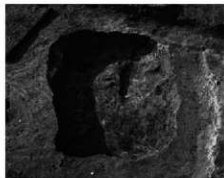
E区 4号土坑 東から



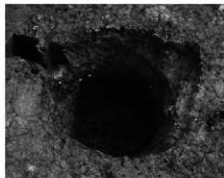
E区 7号土坑 東から



E区 8号土坑 南から



E区 9号土坑 南東から



E区 10号土坑 北から



E区 10号土坑埋裏出土状況 南西から



E区 10号土坑埋裏出土状況 南西から



E区 11号土坑 西から



E区 1・2号畝 東から



E区 3号畝 北東から



E区 4号畝 西から



E区 4号畝 高上面に堆積するAs-A 西壁土層断面



F区南 1・2面全景 北から



F区 1号土坑 北から



F区 3号溝 北から



F区北 1・2面全景(1・2号溝) 南から



F区北 北壁土層断面 南から



F区 1号住居 全景 東から



F区 1号住居 カマド 西から



F区 4・5号溝 南東から

富岡清水遺跡

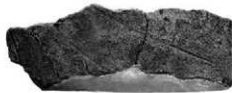
E区12号住居



1



9



11



19



20



25



26



32



33



1



2



3



4



5



6



7



8



10



12



13



14



15



16



17



18



21



22



23



24



27



28



30



31



29



34



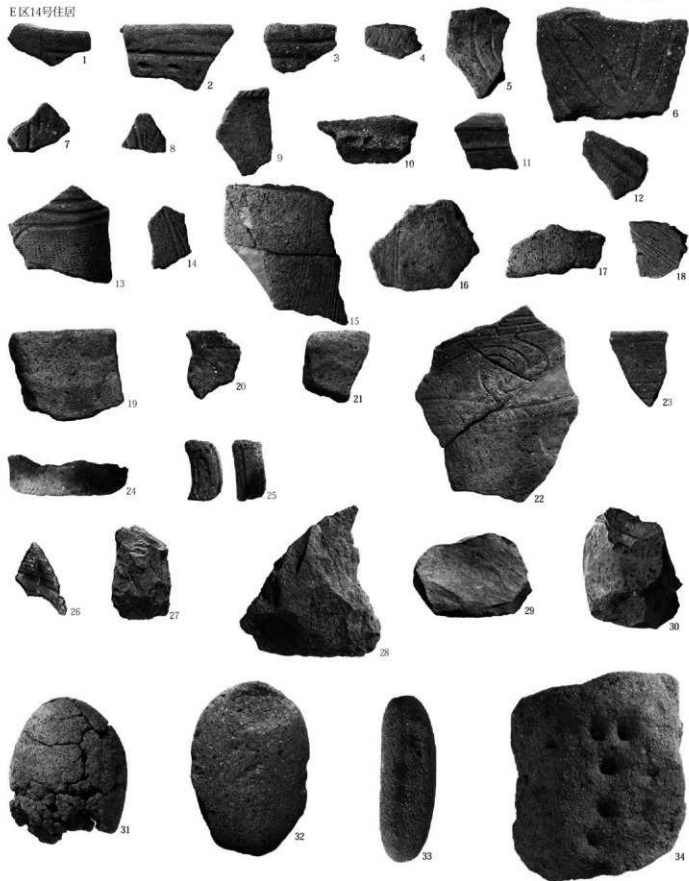
35



36

E区13号住居

E区14号住居



E区15号住居



富岡清水遺跡



6



7



8



9



10

C区15号土坑



1

E区4号土坑



9

E区7号土坑



10



11



12



13



6



8

E区8号土坑



14

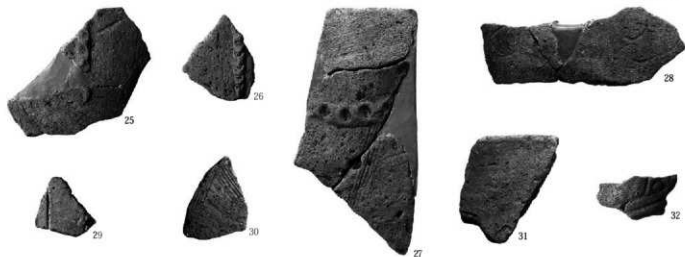
E区10号土坑



24



23



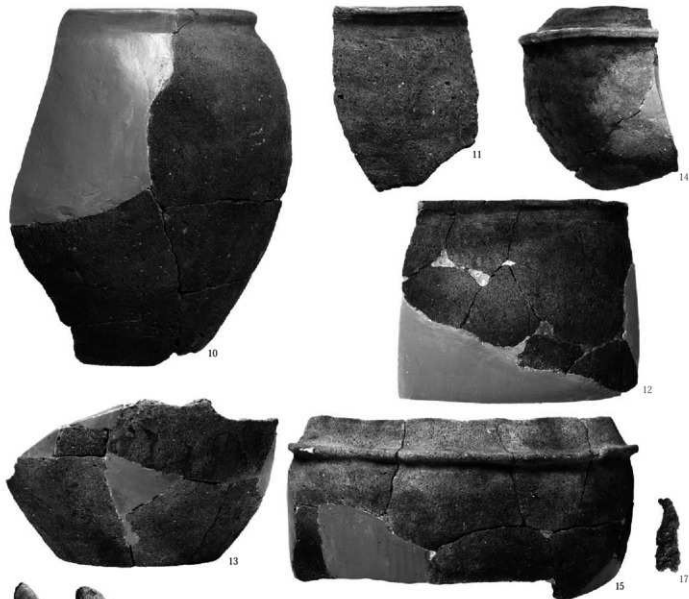
遺構外出土遺物



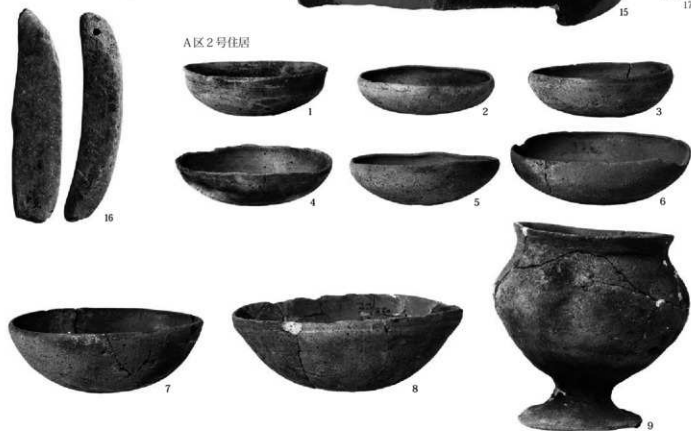


A区1号住居





A区2号住居





10



11



12



13



14

B区1号住居



1



2



3

B区2号住居



1



1



2

B区3号住居

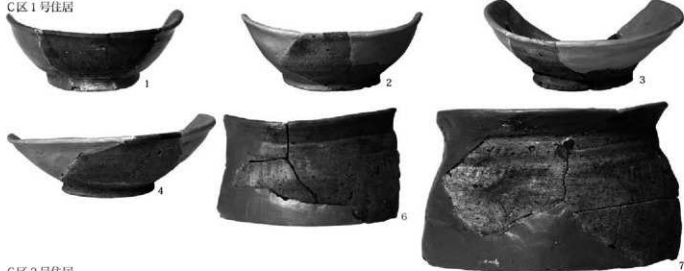


3



4

C区1号住居



C区2号住居



C区3号住居



C区6号住居





C区7号住居



D区1号住居



D区2号住居



D区3号住居



E区1号住居





E区2号住居



E区3号住居



E区4号住居



富岡清水遺跡

E区5号住居



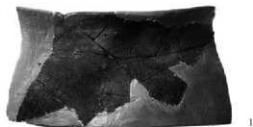
E区6号住居



E区8号住居



E区11号住居



E区9号住居



F区1号住居



C区5号土坑





富岡城全景 空中写真 南から



富岡城全景 空中写真 北から



平成22年度調査 城郭南西部 弥生・古墳時代面全景 空中写真 上から



平成22年度調査 城郭南西部 弥生・古墳時代面全景 空中写真 西から



城郭南西部 1号住居 全景 南から



城郭南西部 1号住居 遺物出土状況



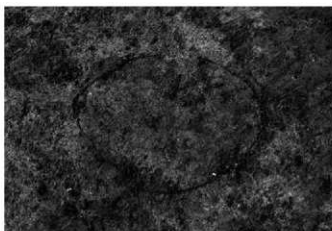
城郭南西部 1号住居 遺物出土状況



城郭南西部 1号住居 遺物出土状況



城郭南西部 2号住居 全景 南から



城郭南西部 2号住居 炉 南から



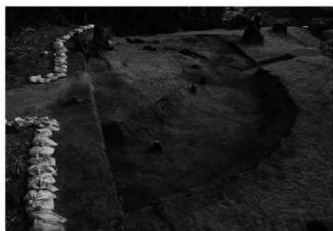
城郭南西部 3号住居 全景 南から



城郭南西部 3号住居 炉 南から



城郭南西部 1号古墳周堀 全景 北西から



城郭南西部 1号古墳周堀 全景 北から



城郭南西部 1号古墳周堀 全景 南西から



城郭南西部 1号古墳周堀 遺物出土状況 南から



城郭南西部 1号古墳周堀 遺物出土状況 西から



城郭北東部 3区1号住居 北半床面 北から



城郭北東部 3区1号住居 南半ピット検出状況 北から



城郭北東部 3区2号住居 南半床面 南から



城郭北東部 3区2号住居 北半床面 北から



城郭北東部 4区1号住居 床面全景 北から



城郭北東部 4区2号住居 全景 南から



城郭北東部 3区1号土坑 全景 南から



城郭北東部 10トレンチ古墳周堀 遺物出土状況 南から



富岡城 城郭全景 北東から(富岡市街地・一ノ宮方面を望む)



富岡城 城郭全景 北西から(甘栗町・旧吉井町方面を望む)



富岡城 城郭全景 南東から(高田川と城郭の西側を望む)



富岡城 城郭全景 南から(富岡清水道跡から城郭を望む)



城郭西側(2・4郭) 全景 空中写真



城郭西側(2・4郭) 全景 空中写真 南西から



城郭西側(2・4郭) 空中写真 西から



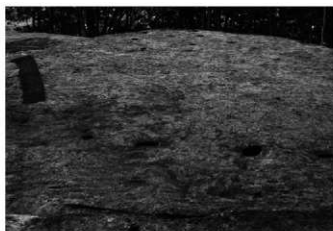
城郭西側(2・4郭) 全景 西から



2郭 全景 空中写真



2郭 南半 東から



2郭 北半 東から



2郭 土塁痕跡南側 北から



2郭 土塁痕跡北側 西から



1号堀と2郭西側面 全景 南から



1号堀 南から



1号堀 北から



1号堀 盛り上がる中央部底面 南から



1号堀 土層断面 南から



2号堀と2郭北側面 西から



2号堀 改修後の底面 西から



1号堀と2号堀の交点 南から



2号堀 西半と端部 東から



2号堀 土層断面 東から



2郭北側面にみる盛り土の状況 北西から



2郭北縁 築城時の盛り土状況(Aライン) 東から



2郭北縁 築城時の盛り土状況(Dライン) 南西から



2郭南半 築城時の盛り土状況(Eライン) 北東から



2郭北半 築城時の盛り土状況(Eライン) 南東から

富岡城跡



2号南縁 築城時の盛り土状況(Eライン) 東から



2号北縁 築城時の盛り土状況(Eライン) 東から



2号堀北壁上端 築城時の盛り土(Aライン) 東から



2号堀北壁上端 築城時の盛り土(Aライン) 南東から



2号堀北壁上端 築城時の盛り土(Dライン) 北西から



4郭 南側に残る高まり 東から



4郭 南側に残る高まり 西から



4郭北縁 西から



3号堀 全景 北東から



4郭南縁 築城時の盛り土状況(Kライン) 南から



4郭北縁 築城時の盛り土状況(Kライン) 南東から



4郭北縁 築城時の盛り土状況(Jライン) 南東から



4郭 築城時の盛り土状況(Fライン西側) 南東から



4郭 築城時の盛り土状況(Fライン西端) 東から



4郭北縁 築城時の盛り土状況(Cライン) 南東から



城郭外平坦面 全景 東(4郭)から



城郭外平坦面 土塁の残存部 東から



城郭外平坦面 土塁の土層断面 北西から



城郭北東部 1区南側 全景 北から



城郭北東部 1区北側 全景 北から



城郭北東部 2区 全景 南から



城郭北東部 2区 区画 東から



城郭北東部 2区 区画断面(南壁) 北から



城郭北東部 2区 3郭南西角盛り土上面 西から



城郭北東部 2区 3郭南西角盛り土断面 西から



城郭北東部 2区 盛り土下面(築城前表面) 南西から



城郭北東部 3区 全景 南から



城郭北東部 3区 全景 北から



城郭北東部 3区 盛り土下面(築城前表土面) 北から



城郭北東部 3区 盛り土層断面(東壁) 南西から



城郭北東部 3区 盛り土層断面(3号トレンチ) 北西から



城郭北東部 3区 盛り土層断面(確認トレンチ1) 北から



城郭北東部 4区 全景 南から



城郭北東部 4区 全景 北から



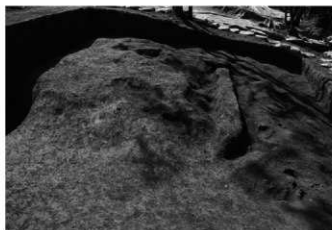
城郭北東部 5区 全景 南から



城郭北東部 5区 全景 北から



城郭北東部 5区 3郭北西角 南から



城郭北東部 5区 段差部分 北西から



城郭北東部 5区 6号トレンチ付近 西から



城郭北東部 5区 1・2号土坑 北から



城郭北東部 7号トレンチ 全景 南西から



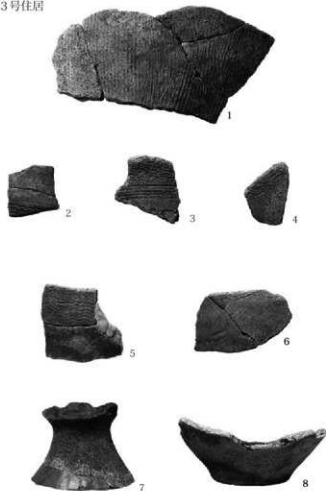
城郭北東部 9号トレンチ 全景 南西から



2号住居



3号住居



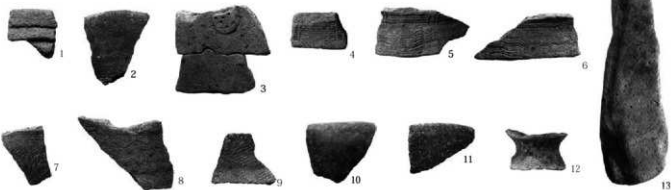
1号古墳







3区1号住居



3区2号住居

4区1号住居



報告書抄録

書名ふりがな	とみおかしみずいせき・とみおかじょうあと
書名	富岡清水遺跡・富岡城跡
副書名	社会資本整備総合交付金事業(活力創出基盤整備) (主)前橋安中富岡線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第552集
編著者名	宮下 寛 麻生敏隆 大西雅広 谷藤保彦 唐澤至朗 坂口 一 神谷佳明 関 晴彦 飯田陽一 飯森康広 須田正久
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20121225
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	とみおかしみずいせき
遺跡名	富岡清水遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんともおかしとみおか
遺跡所在地	群馬県富岡市富岡
市町村コード	10210
遺跡番号	T228
北緯(世界測地系)	361550
東経(世界測地系)	1385358
調査期間	20070601-20070831 20100201-20100331 20100701-20100930
調査面積	6,930.38㎡
調査原因	道路建設
種別	集落 生産
主な時代	縄文/弥生/奈良・平安/中近世
遺跡概要	集落-縄文-竪穴住居2+敷石住居2+土坑7+ピット28-縄文土器+石器/集落-奈良・平安-竪穴住居29+掘立柱建物1+土坑20+溝/生産-水田+畠+用水路/中近世-建物2+土坑10+道路状遺構+溝/その他-縄文・弥生-遺構外-縄文・弥生土器+石器
特記事項	10世紀後半代の竪穴住居から朱墨痕の残る灰軸陶器段皿が出土した。また、火山灰および高田川の洪水層を層別に、水田・用水路・竪穴住居等から古代の土地利用の変遷を追うことのできる遺跡である。
遺跡名ふりがな	とみおかじょうあと
遺跡名	富岡城跡
所在地ふりがな	ぐんまけんともおかしかみたかお
遺跡所在地	群馬県富岡市上高尾
市町村コード	10210
遺跡番号	T025
北緯(世界測地系)	361608
東経(世界測地系)	1385405
調査期間	20100701-20100930 20110701-20110930
調査面積	2,791㎡
調査原因	道路建設
種別	集落 古墳 中世城郭
主な時代	弥生/古墳/中近世
遺跡概要	集落-弥生-竪穴住居7+土坑3-弥生土器+石器/墳墓-古墳-円墳2/城郭-戦国-城1/その他-縄文・弥生-遺構外-縄文・弥生土器+石器
特記事項	高田川左岸の丘陵頂部に弥生時代後期の集落、古墳を検出した。また、城郭は丘陵頂部の斜面を盛り土造成して築城され、堀壕以外にも横堀が配された戦国期の城郭である。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第552集

富岡清水遺跡 富岡城跡

社会資本整備総合交付金事業（活力創出基盤整備）
（主）前橋公立富岡線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24(2012)年12月12日 印刷

平成24(2012)年12月25日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下菊田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／株式会社大塚カラー 群馬事業所
